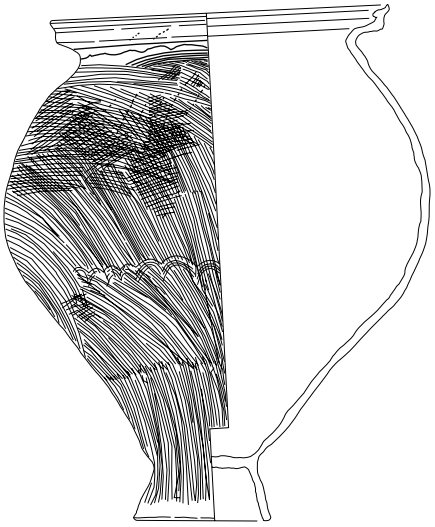
鈴鹿川中流域河曲低地遺跡群

十宮古里遺跡発掘調査報告

（旧 神戸中学校遺跡）



2010

鈴鹿市考古博物館

巻頭 1

大溝 (SD1) 出土　土器全体

大溝 (SD1) 出土　壺形土器

大溝 (SD1) 出土　甕形土器

大溝 (SD1) 出土　叩き甕形土器

巻頭２

大溝 (SD1) 出土　高杯形土器

大溝 (SD1) 出土　小型土器

大溝 (SD1) 出土 鳥足文土器

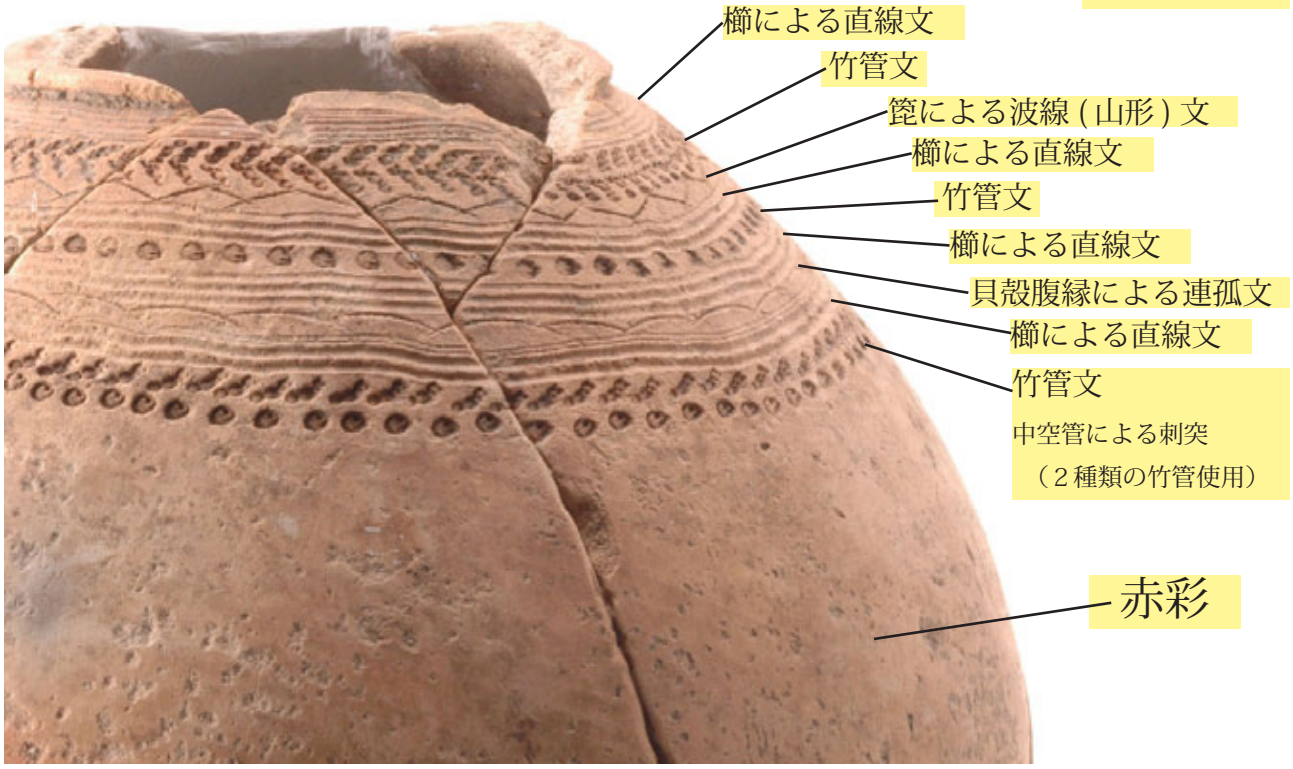
方形周溝墓 (SX01,SX02）出土土器

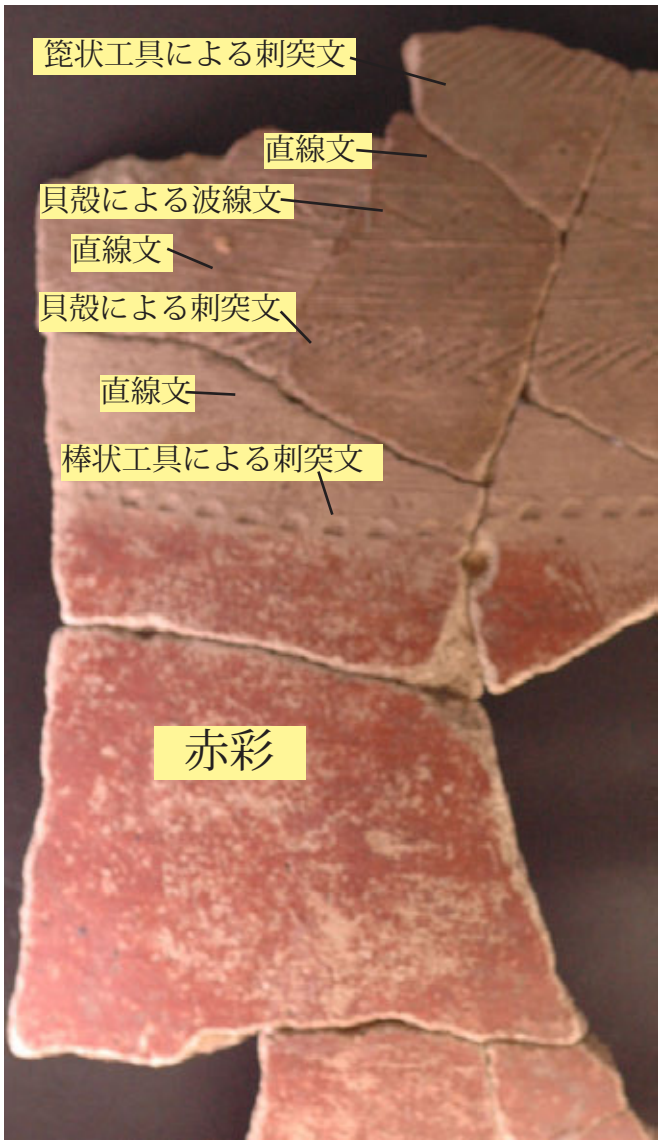
土坑 (SK107) 出土土器

大溝 (SD1) 出土 「人面文」土器

赤彩土器

巻頭４





パレススタイル壺の文様

序　文

鈴鹿市は古来から鈴鹿川の流れに育まれ，東側の海岸平野の低地部には縄文晩期から始まる拠点集落の上箕田遺跡と弥生前期から始まる大木ノ輪遺跡が，北から西の台地上には中尾山，沖ノ坂，扇広，境谷，磐城山等の弥生中期から後期に至る遺跡が広がり，海と山の恵みを受けてきた。

その間に位置する十宮古里遺跡（旧名 神戸中学校遺跡）は，古代河曲郡の中心にあり，八重垣神社遺跡，宮ノ前遺跡，萱町遺跡，須賀遺跡と共に遺跡群を形成すると共に，これらの地域は現在も十宮・須賀・矢橋の各町内が鈴鹿市の中心地の一翼を担っている。

こうした遺跡は先達の教えを受け継ぎ，今後とも貴重な文化財として変わることなく保存されていくと思われます。最後になりましたが，調査にご協力頂きました方々に深く御礼申し上げます。

平成 22 年３月

鈴鹿市考古博物館
館長　東口　元

例　言

1．本書は三重県鈴鹿市十宮四丁目１- １字古里（1098-2･3･5，1099-2･3，1100，1101，1105，1106，1107，1108）に所在する神戸中学校遺跡の第１次発掘調査報告書である。この遺跡は『鈴鹿市遺跡地図（昭和 62 年３月発行）』では「神戸中学校遺跡遺跡 No.168」として登録され，現在も神戸中学校として使用されているが，約 1km 北の八重垣遺跡への移転が決まっており移転準備が進められている。遺跡名から将来，混乱が予想される可能性があり，今回の報告書を機に字名である「十宮古里遺跡」に変更する。

2．鈴鹿市内には「古里遺跡（石薬師町～上野町）遺跡 No.739」「高岡古里遺跡 (高岡町) 遺跡 No.852」があり，本報告の古里遺跡を加えると３ヶ所になる。そこで，それぞれを区分する為に，古里遺跡の前に町名を付け，「十宮古里遺跡」とする。正式には「鈴鹿川中流域　河曲低地遺跡群十宮古里遺跡（旧神戸中学校遺跡）」と呼称する。尚，本文中の名称は「古里遺跡」に省略する。

3．調査はグラウンド排水改良事業に伴う緊急発掘調査として，鈴鹿市から委託を受けた鈴鹿市遺跡調査会が実施した。

4．調査にかかる費用は鈴鹿市が負担した。

5．調査は平成５（1993）年８月 23 日から 12 月 15 日にかけて実施した。

6．調査面積は 1,600㎡である。

7．調査の体制（当時）は下記のとおりである。

調査主体　　鈴鹿市遺跡調査会　代表　市川年夫（鈴鹿市教育委員会教育長）
調査事務局　鈴鹿市教育委員会文化財保護課　石井　平・中森成行
調査担当　　鈴鹿市教育委員会文化財保護課　松井　豪・藤原秀樹・新田　剛・清山　健
遺物整理　　鈴鹿市埋蔵文化財整理室　浅野和歌子・石谷誉代子・加城陽子・杉本恭子

8．現地調査は松井・清山が担当し，藤原・新田がこれを補佐した。

9．本報告書の作成は，平成 19 年 10 月～平成 21 年３月にかけて実施した。

10．報告書刊行時の体制は下記のとおりである。

鈴鹿市文化振興部考古博物館
館長　東口　元
埋蔵文化財グループ　新田　剛・村木修・服部真住・田部剛士・吉田隆史・吉田真由美・伊藤　洋・永戸久美子・加藤利恵・横内江里

11．報告書作成にかかる遺物の実測・写真撮影・図面のトレースは伊藤が行った。

12．本書の執筆は，Ⅰ．位置と環境，Ⅱ．調査に至る経緯と経過を藤原が，その他を伊藤が担当した。

13．調査記録および出土遺物は、鈴鹿市国分町 224 番地所在の鈴鹿市考古博物館にて保管している。

14．調査に使用したレベルはグラウンド整備用に準備されていた KBM1=11.380 mを利用して求めている。

15．使用した座標は日本測地系第Ⅵ系である。基準点測量は株式会社イビソクに委託して行った。

16．報告に利用した記号は SB：掘立柱建物　SH：竪穴住居　SD：溝　SK：土坑　SE：井戸
SX：方形周溝墓　P：柱穴・小土坑である。

17．発掘調査に際しては，三重県教育委員会文化振興課文化財保護室・三重県埋蔵文化財センター・鈴鹿市立神戸中学校・鈴鹿市教育委員会事務局教育施設課・鈴鹿市下水道部下水建設課および地元関係者・調査参加者各位の協力を得た。三重大学人文学部教授　八賀　晋氏・三重県埋蔵文化財センター主幹兼調査第二課長　伊藤克之氏には現地に足を運んでいただき直接指導を得た。また，三重大学人文学部からは早野浩二・蔭山誠一・大西貴夫・若山晴彦氏ら学生陣に急きょ調査補助員として参加していただき，彼らの活躍により無事調査を終えることができた。記して感謝の意を表したい。

18．報告書作成にあたり次の方々にご教示・ご協力を賜った。記して，謝意を述べたい。
松宮昌樹（奈良県桜井市教育委員会），相場さやか（奈良女子大学大学院），豆谷和之（奈良県田原本町文化財保存課），穂積裕昌（三重県教育委員会　社会教育・文化財保護室），川崎志乃（名古屋大学大学院），伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査会委員），和氣清章（松阪市教育委員会），木野本和之（松阪市教育委員会），奥義次（日本考古学協会員），亀山隆（亀山市教育委員会）

本文目次

Ⅰ．位置と環境 ……1

Ⅱ．調査の経緯と経過 ……2

Ⅲ．調査の方法・基本層序・遺物取り上げ ……4

Ⅳ．遺　構 ……5

1．弥生時代後期末～古墳時代初期の遺構 …… 5
2．古墳時代後期の遺構 ……10
3．中世から近世初頭の遺構 ……10

Ⅴ．遺　物 ……17

1．弥生時代後期末～古墳時代初期の遺物 ……17
1）出土土器の分類 ……17
2）遺構別出土土器の器種構成 ……24
3）大溝 (SD1) の土器出土地点 ……25
4）方形周溝墓の土器出土地点 (SX01 ～ SX05) ……32
5）土坑 (SK107) の土器出土地点 ……32
2．古墳時代後期の遺物 ……34
3．奈良～中世～近世初期の遺物 ……34

Ⅵ．個別土器の解析 ……35

1．高杯
1）高杯解析による大溝 (SD1) の時期比定 ……35
2）高杯による他遺跡との比較 ……36
3）高杯の編年 ……37
2．パレススタイル壺の出土状態と土器の破砕について ……40
3．叩き甕 ……40
4．受口口縁甕 ……45
5．甕の底部について ……45
6．小型土器群 ……47
7．絵画・記号土器 ……47
①人面文土器
②鳥足文状の記号
8．楕円形土器（甕形限定） ……49
9．関東系の土器 ……49

Ⅶ．考　察 ……50

1．主要遺構の変遷 ……50
2．大溝 (SD1) の役割 ……53
3．大溝 (SD1) と方形周溝墓，SK107 の関係 ……55

Ⅷ．十宮古里遺跡の歴史的意義 ……55

報告書抄録

挿図目次

図　1　十宮古里遺跡の位置と周辺の遺跡 ……1
図　2　十宮古里遺跡発掘調査区配置図 ……2
図　3　空から見た十宮古里遺跡周辺の地形 ……3
図　4　発掘調査グリッドの設定 ……4
図　5　独立棟持柱建物 (SB1)……5
図　6　大溝 (SD1) 及び土層断面図 ……6
図　7　方形周溝墓 (SX01 ～ SX05) ……8
図　8　弥生時代後期末～古墳時代初期の土坑 ……9
図　9　古墳時代後期の遺構 (SD5,SK11,SH1,SK18,SK31) ……11
図 10　中世の遺構 (SK82,SK102,SK248,P99)……12
図 11　中世の遺構 (SK77,SK79)……13
図 12　中世の遺構 (井戸遺構の分布) ……14
図 13　遺構の全体図 (弥生時代後期～近世初期) ……15 ～ 16
図 14　十宮古里遺跡出土土器分類図 (1) ……19
図 15　十宮古里遺跡出土土器分類図 (2) ……20
図 16　十宮古里遺跡出土土器分類図 (3) ……21
図 17　十宮古里遺跡出土土器分類図 (4) ……22
図 18　十宮古里遺跡出土土器分類図 (5) ……23
図 19　大溝 (SD1) 1，2 区上層土器出土地点 ……26
図 20　大溝 (SD1) 1，2 区下層土器出土地点 ……27
図 21　大溝 (SD1) 3，4 区上層土器出土地点 ……28
図 22　大溝 (SD1) 3，4 区下層土器出土地点 ……29
図 23　大溝 (SD1) の器種別出土地点 ……30
図 24　大溝 (SD1)4 区上層の土器出土状態 ……31
図 25　方形周溝墓の土器出土地点 ……33
図 26　甕口縁部の形状比較 (大溝，方形周溝墓) ……34
図 27　高杯の計測ポイント ……35
図 28　正規分布曲線 (3 つのパターン) ……36
図 29　高杯の数値化による変化 ……37
図 30　高杯の編年 (型式変化) ……39
図 31　パレススタイル型壺及び赤彩土器 ……41
図 32　パレススタイル壺の散乱状態 ……42
図 33　十宮古里遺跡出土叩き甕の拓本 (1 : 3) ……44
図 34　各種受口甕の分類 (1 : 4) ……46
図 35　甕底部の形状割合 ……47
図 36　土器の器種別組成 (小型土器，通常土器) ……47
図 37　小型土器の集成 ……48
図 38 「人面文土器」の写真，実測，拓本 (1:2)……49
図 39 「鳥足文」状の写真，拓本 (1:2)……49
図 40　遺構の変遷図 (1)　(1:1000)……51
図 41　遺構の変遷図 (2)　(1:1000)……52

表目次

表　1　　大溝 (SD1) の遺物取り上げ日程 ……4
表　2　　弥生時代後期末～古墳時代初期の出土遺構別器種分類 ……24
表　3　　住居址出土土器と古里大溝出土土器の比較 ……25
表　4　　十宮古里遺跡出土高杯の統計解析（１）……35
表　5　　他遺跡との高杯「径稜比率」比較 ……37
表　6　　十宮古里遺跡出土高杯の統計解析（２）……38
表　7　　十宮古里遺跡出土叩き甕の特徴 ……44

図版目次

図版 1　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１）　大溝 (SD1) 出土　壺形土器 1
図版 2　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（２）　大溝 (SD1) 出土　壺形土器 2
図版 3　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（３）　大溝 (SD1) 出土　壺形土器 3
図版 4　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（４）　大溝 (SD1) 出土　甕形土器 1
図版 5　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（５）　大溝 (SD1) 出土　甕形土器 2
図版 6　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（６）　大溝 (SD1) 出土　甕形土器 3
図版 7　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（７）　大溝 (SD1) 出土　甕形土器 4
図版 8　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（８）　大溝 (SD1) 出土　高杯形土器 1
図版 9　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（９）　大溝 (SD1) 出土　高杯形土器 2
図版 10　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（10）　大溝 (SD1) 出土　高杯形土器 3
図版 11　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（11）　大溝 (SD1) 出土　小型土器 1
図版 12　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（12）　大溝 (SD1) 出土　小型土器 2　ピット・土坑出土土器
図版 13　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（13）　包含層出土土器
図版 14　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（14）　方形周溝墓出土土器 1
図版 15　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（15）　方形周溝墓出土土器 2
図版 16　十宮古里遺跡方形周溝墓の土器出土地点
図版 17　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（16）　土坑 (SK107) 出土土器
図版 18　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（17）　溝 (SD5) 出土を主とする古墳時代後期の土器 1
図版 19　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（18）　溝 (SD5) 出土を主とする古墳時代後期の土器 2
図版 20　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（19）　中世～近世の土器 1
図版 21　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（20）　中世～近世の土器 2
図版 22　大溝 (SD1) 土器出土状態　１，２区上層
図版 23　大溝 (SD1) 土器出土状態　１，２区下層
図版 24　大溝 (SD1) 土器出土状態　３，４区上層
図版 25　大溝 (SD1) 土器出土状態　３，４区下層
図版 26　大溝 (SD1)1 区上層の土器出土状態
図版 27　大溝 (SD1)1 区下層の土器出土状態
図版 28　大溝 (SD1)2 区上層の土器出土状態
図版 29　大溝 (SD1)2 区下層の土器出土状態
図版 30　大溝 (SD1)3 区上層の土器出土状態
図版 31　大溝 (SD1)3 区下層の土器出土状態
図版 32　大溝 (SD1)4 区上層の土器出土状態
図版 33　大溝 (SD1)4 区下層の土器出土状態

遺構一覧表

第 1 表　主な遺構一覧表
第 2 表　報告外遺構一覧表 (1)
第 3 表　報告外遺構一覧表 (2)
第 4 表　報告外遺構一覧表 (3)
第 5 表　報告外遺構一覧表 (4)
第 6 表　報告外遺構一覧表 (5)
第 7 表　報告外遺構一覧表 (6)
第 8 表　報告外遺構一覧表 (7)

出土遺物観察表

第 9 表　出土遺物観察表 (1)
第 10 表　出土遺物観察表 (2)
第 11 表　出土遺物観察表 (3)
第 12 表　出土遺物観察表 (4)
第 13 表　出土遺物観察表 (5)
第 14 表　出土遺物観察表 (6)
第 15 表　出土遺物観察表 (7)
第 16 表　出土遺物観察表 (8)
第 17 表　出土遺物観察表 (9)
第 18 表　出土遺物観察表 (10)　パレススタイル壺
第 19 表　出土遺物観察表 (11)　高杯
第 20 表　出土遺物観察表 (12)　叩き甕
第 21 表　出土遺物観察表 (13)　受口甕

巻頭写真

巻頭 1　大溝 (SD1) 出土　器種毎の出土土器
巻頭 2　大溝 (SD1)，方形周溝墓出土土器
巻頭 3　赤彩土器
巻頭 4　パレススタイル壺の文様詳細

写真図版

写真図版 1　発掘調査後の航空写真と遺構図
写真図版 2　発掘調査後の全体図 (1)
写真図版 3　弥生時代後期末～古墳時代初期の主な遺構
写真図版 4　大溝 (SD1)　1 区から 4 区，4 区から 1 区を望む
写真図版 5　大溝 (SD1)　全体及び 3 区，4 区
写真図版 6　大溝 (SD1)　3 区及び 4 区の土器出土状況
写真図版 7　大溝 (SD1)　4 区，包含層，SK118 の土器出土状況
写真図版 8　土坑 (SK107)　土器出土状況
写真図版 9　古墳時代後期，中・近世土器の遺構及び出土状況
写真図版 10　大溝 (SD1) 出土土器 (1)
写真図版 11　大溝 (SD1) 出土土器 (2)
写真図版 12　大溝 (SD1) 出土土器 (3)
写真図版 13　大溝 (SD1) 出土土器 (4)
写真図版 14　大溝 (SD1) 出土土器 (5)
写真図版 15　大溝 (SD1) 出土土器 (6)
写真図版 16　大溝 (SD1) 出土土器 (7)
写真図版 17　大溝 (SD1) 出土土器 (8)
写真図版 18　大溝 (SD1) 出土土器 (9)
写真図版 19　大溝 (SD1) 出土土器 (10)
写真図版 20　大溝 (SD1) 出土土器 (11)
写真図版 21　方形周溝墓出土土器
写真図版 22　土坑 (SK107) 出土土器
写真図版 23　包含層出土土器
写真図版 24　溝 (SD5) 等出土土器 (1)
写真図版 25　溝 (SD5) 等出土土器 (2)
写真図版 26　溝 (SD5) 等出土土器 (3)
写真図版 27　中・近世出土土器 (1)
写真図版 28　中・近世出土土器 (2)
写真図版 29　中・近世出土土器 (3)
写真図版 30　文様：パレス壺，高杯脚，壺口縁部端の文様
写真図版 31　文様：各種の刺突文
写真図版 32　甕の調整方法
写真図版 33　叩き甕のいろいろ
写真図版 34　土器の破砕，打撃痕

Ⅰ. 位置と環境

十宮古里遺跡①（以下，古里遺跡と略する）は，鈴鹿市十宮四丁目字古里 1-1，近畿日本鉄道鈴鹿線鈴鹿市駅の北西 0.4km に位置する。

鈴鹿川の右（南）岸には旧鈴鹿川の扇状地からなる，中・低位段丘が広がっている。古里遺跡が立地する段丘面は，鈴鹿川の氾濫による流路（現在の六郷川）によって南側を切断され東西約 1,000 m，南北 400 mの独立した島状の微高地となっている。西端の十宮一丁目付近では標高約 10 m，東端の須賀一丁目あたりでは約 9 mである。この独立した低位段丘を覆うように，東から須賀遺跡③，萱町遺跡②，古里遺跡が立地している。

須賀遺跡は，阿自賀神社の社殿が建つ高まりが古墳とされているが，墳丘から弥生土器が採集されている。これまでに 4 次の調査が行われており，第 2 次調査では弥生時代中期前葉の環濠が，第 3 次調査では中期から後期の包含層が，第 4 次調査では中期前葉から中葉にかけての溝等が検出されている。試掘調査ではあるが，阿自賀神社古墳⑦の周溝内から 8 世紀後半の完形に近い現高 4.3cm，最大径 6.4cm，底径 3.8cm の緑白二彩小壺が検出されている。

萱町遺跡は，戦時中に防火用水を掘っている際に赤彩で文様を施した弥生土器が出土したことで知られる。近年ようやく発掘調査が実施され，第 1 次調査では古墳 1 基のほか，奈良時代の土坑群が検出され，円面硯も出土している。第 2 次調査では，奈良～平安時代前半の竪穴建物・土坑が検出され，黒色土器・暗文の施された土師器などがまとまって出土している。第 1 次調査の成果と合わせ古代河曲郡神戸郷の中心的な集落であった可能性を示している。

古里遺跡については，戦後すぐの校庭造成時から弥生土器の出土が知られていたが，本調査が最初の発掘調査である。その後，遺跡の北東部で第 2 次調査が実施され室町時代の井戸・土坑が検出され，井戸からは漆器椀が出土している。

神戸中学校遺跡の北方には鈴鹿川の谷底平野が広がっている。近年までは，条里制の地割をよくとどめていたが，近年圃場整備事業が完了し，のどかな景観も失われてしまった。

圃場整備に伴う発掘調査では，河田宮ノ北遺跡⑥から，古墳時代前期後半～後期の流路から大量の須恵器・土師器のほかに木器や建築部材が出土した。頭椎大刀把頭，刀・船・鏃形の木製模造品，有孔円盤・石製紡錘車などの祭祀具が多く見られ，付近に居館を構える豪族の水辺の祭祀の場ではないかとされている。

宮ノ前遺跡④からは古墳時代前期の竪穴住居群・溝や古墳時代後期の土坑群が検出されている。馬の頭部を埋納したとみられる土坑も確認されている。

八重垣神社遺跡⑤ 第 1 ～ 3 次調査では古墳時代前期の竪穴住居群・土坑・溝のほか奈良時代の掘立柱建物も検出されている。

さらに，八重垣神社遺跡では，道路改良に伴う第 5 次調査で古墳時代後期の竪穴状土坑，掘立柱建物，溝が検出された。また，最近の神戸中学校移転予定地で行われた第 6 次調査では弥生時代前期の溝が検出され，北陸系とされる沈線文系土器が出土している。また，弥生時代中期から後期の方形周溝墓・土器棺墓・溝・流路が検出された。弥生時代後期の流路のうち一つはかっての鈴鹿川の一支流であったとみられる大規模なものである。その他に古墳時代前期の竪穴住居，古墳時代後期の溝が検出されている。

これまでは，鈴鹿川右岸の代表的な遺跡としては海岸平野の自然堤防上に立地する上箕田遺跡があげられていた。埋蔵文化財行政の黎明期に緊急調査が実施され，環濠・溝・土坑・方形周溝墓等が検出され，弥生時代前期から後期まで通じて営まれた拠点的集落として知られている。第 5 次調査では，流路から縄文晩期の突帯文土器群も出土している。

右岸低位段丘の内部では，起 A 遺跡から縄文時代の土坑 1 基と，弥生時代中期の竪穴住居 11 棟・掘立柱建物 1 棟が検出され，近江系の土器の出土が注目された。

左岸中・高位段丘上に弥生中期の住居及び方形周溝墓を検出した中尾山遺跡，後期の環濠を有する磐城山遺跡，その東に弥生中期～後期の境谷遺跡，扇広遺跡等が丘陵毎に並ぶ。1 km 南には金箔瓦を用いた神戸信孝の居城・神戸城跡⑧がある。

参考文献

仲見秀雄「鈴鹿市の弥生式文化」『神戸史談第 2 号』 1961

仲見秀雄「神戸城から金箔瓦」『神戸史談第 5 号』 1965

仲見秀雄「古代の神戸」『神戸史談第 6 号』1967

仲見秀雄「鈴鹿市須賀の弥生式土器」『神戸史談 第 7 号』1968

新田剛「須賀遺跡・須賀遺跡（阿自賀神社）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』1994

新田剛「須賀遺跡」『鈴鹿市埋蔵文化財調査報告Ⅳ』 1996

伊藤朋之「神戸中学校遺跡（2 次）」『鈴鹿市考古博物館年報第 1 号』2000

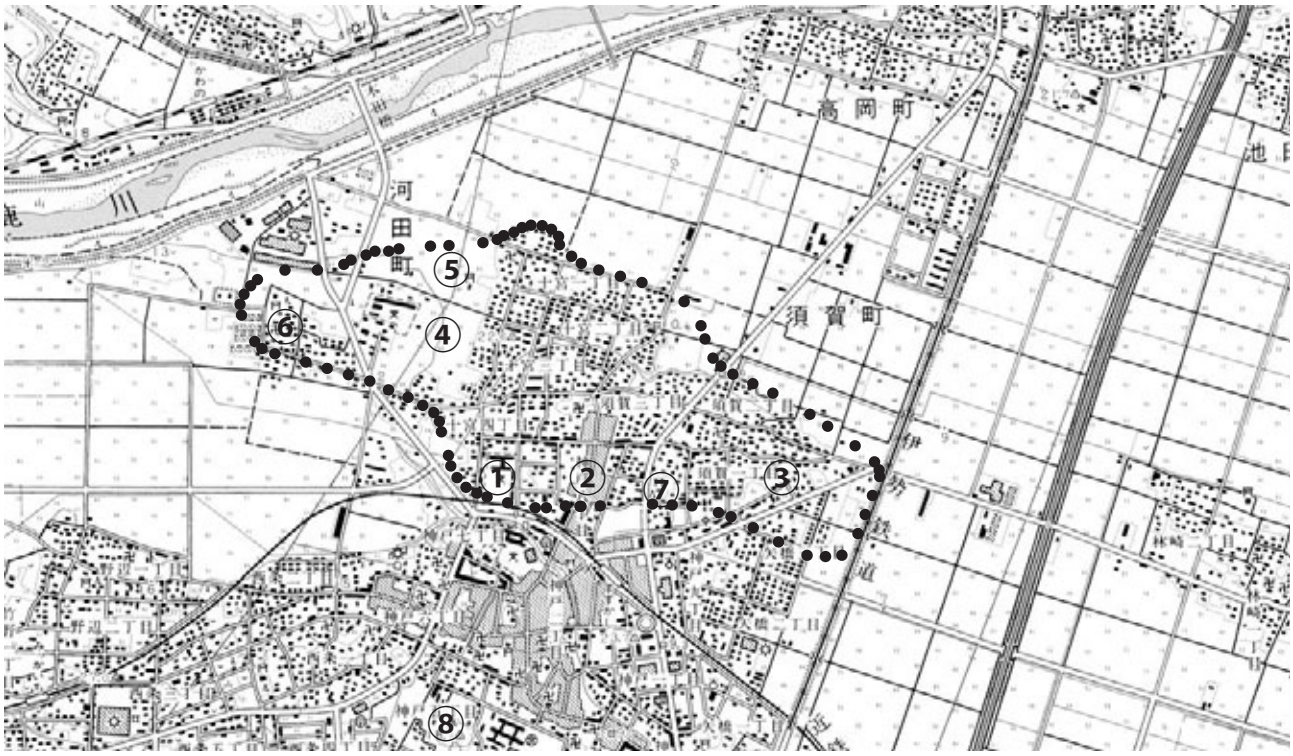


図１　十宮古里遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）

①. 十宮古里遺跡　②. 萱町遺跡　③. 須賀遺跡　④. 宮ノ前遺跡　⑤. 八重垣神社遺跡　⑥. 河田宮ノ北遺跡
⑦. 阿自賀神社古墳　⑧. 本多町遺跡・神戸城跡　（点線内は「鈴鹿川中流域　河曲低地遺跡群」の推定範囲）
近隣の弥生時代遺跡：上箕田遺跡，起Ａ遺跡，中尾山遺跡，磐城山遺跡，境谷遺跡，沖ノ坂遺跡，扇広遺跡

Ⅱ. 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

本調査は，鈴鹿市立神戸中学校のグラウンド改修に伴い実施されたものである。神戸中学校のグラウンドは戦後まもなく造成が行われたもので，畑地を削平して川砂を薄く敷いただけのものであった。そのためか，南東側の野球用バックネット前および内野部分は特に排水が悪く，降雨毎に水が溜まり，利用に支障が生じる状態であった。その為，内野部分の土を入れ替え，暗渠排水管を設置する事業が計画された。

神戸中学校の敷地からは昭和初期の校庭造成の際に弥生後期の土器が多数出土し，神戸中学校遺跡として周知された遺跡である。平成５年度予算編成の過程でこの事業の情報を得た文化財保護課は，事業担当である教育施設課と保護の協議を進めたが，現状保存は学校や父兄からの整備に対する要望が強いことから困難で，かつ発掘調査を実施するとしても学校グラウンドの利用が制限される期間が伸びることを危惧する学校と住民の声もあり調整は難航した。

その過程で，まず試掘調査を実施し本調査の可否を判断することになった。試掘調査は平成５年１月４日～６日の３日間にかけて，３本の南北トレンチを設定して実施した。その結果，グラウンドの整地砂約 0.1 m，旧耕作土 0.05 ～ 0.2 mを除去すると直ちに黄褐色礫混じり粘質土の基盤層が現れ，いずれのトレンチからも多数の土坑・ピット・溝とみられる落ち込みが検出され，須恵器・弥生土器等が出土した。遺構面が極めて浅いためどのような工法をとっても遺構面の掘削は避けられず，最終的に土壌改良範囲全面の本発掘調査を実施し記録保存することで決着し，平成５年度に本調査を実施することで発掘調査事業費が計上された。

平成５年度は，グラウンドが夏休みのクラブの試合や地元行事の活用計画がすでに定まっていたため，それら行事の終了を待ち８月下旬から着手した。

2. 調査の経過

調査の経過については下記日記抄を参考にされたい。

調査日誌抄　　平成５年（1993 年）

8 月 23 日　調査着手。重機による表土除去，フェンス設置。

8 月 27 日　台風 11 号の強風でフェンスが倒れ，復旧。

8 月 28 日　重機掘削終了。遺構検出状況を平板測量。

8 月 31 日　調査区東半の上層遺構検出終了。

9 月　1 日　検出遺構の掘削に取り掛かる。

9月　2日　南東の部分を重機で拡張。
9月　3日　台風13号接近により雨天中止（九州に甚大な被害）。
9月　7日　また台風接近，雨天により発掘作業中止。排水作業。
9月　9日　排水作業ようやく完了。
9月10日　重機で西南に調査区を拡張。
9月17日　三重県埋蔵文化財センター伊藤克幸氏調査指導。
9月18日　調査遅れのため土曜日も作業。SD1～3検出。
9月20日　遺構掘削続行。SD1から西側を中心に。
9月23日　またも雨天。
9月24日　㈱イビソクにより5mグリッド設定，北からA-J，東から1-13とする。
9月25日　SD1から西側で遺構検出・掘削
10月　5日　遺構掘削続行。SD1から東側へ進行。
10月10日　現地説明会
10月12日　遺構番号を調整，Pit1～83
10月15日　SB2検出・掘削（再整理で削除）
10月16日　午後雨のため作業中止
10月18日　遺構掘削が南東隅まで到達，井戸・近世土坑掘削。
10月19日　調査区東半遺構平面図・断面図実測。
10月20日　調査区東半中・近世遺構掘削。
10月26日　調査区東半土層観察用ベルト取り壊し
10月28日　調査区東半の包含層を掘削。
10月30日　当初の調査期限となったため，工事を担当する下水建設課に12月15日までの調査期間延長を申し入れる。
11月　1日　引き続き東半包含層掘削。
11月　2日　三重大学八賀晋教授調査指導。
11月　3日　SD3・SD5掘削。
11月　5日　SD1掘削開始・神戸中学校祭郷土史部展に資料貸出。
11月　6日　調査区東半包含層掘削完了。
11月18日　記者発表
11月19日　調査区東半中世遺構残り掘削。
12月　4日　遺構平面図実測開始。
12月　6日　遺構平面図に高さ入れ開始。
12月　9日　SD1掘削ようやく完了。
12月15日　高さ入れ完了。現地調査本日にて終了。
12月16日　機材撤収。

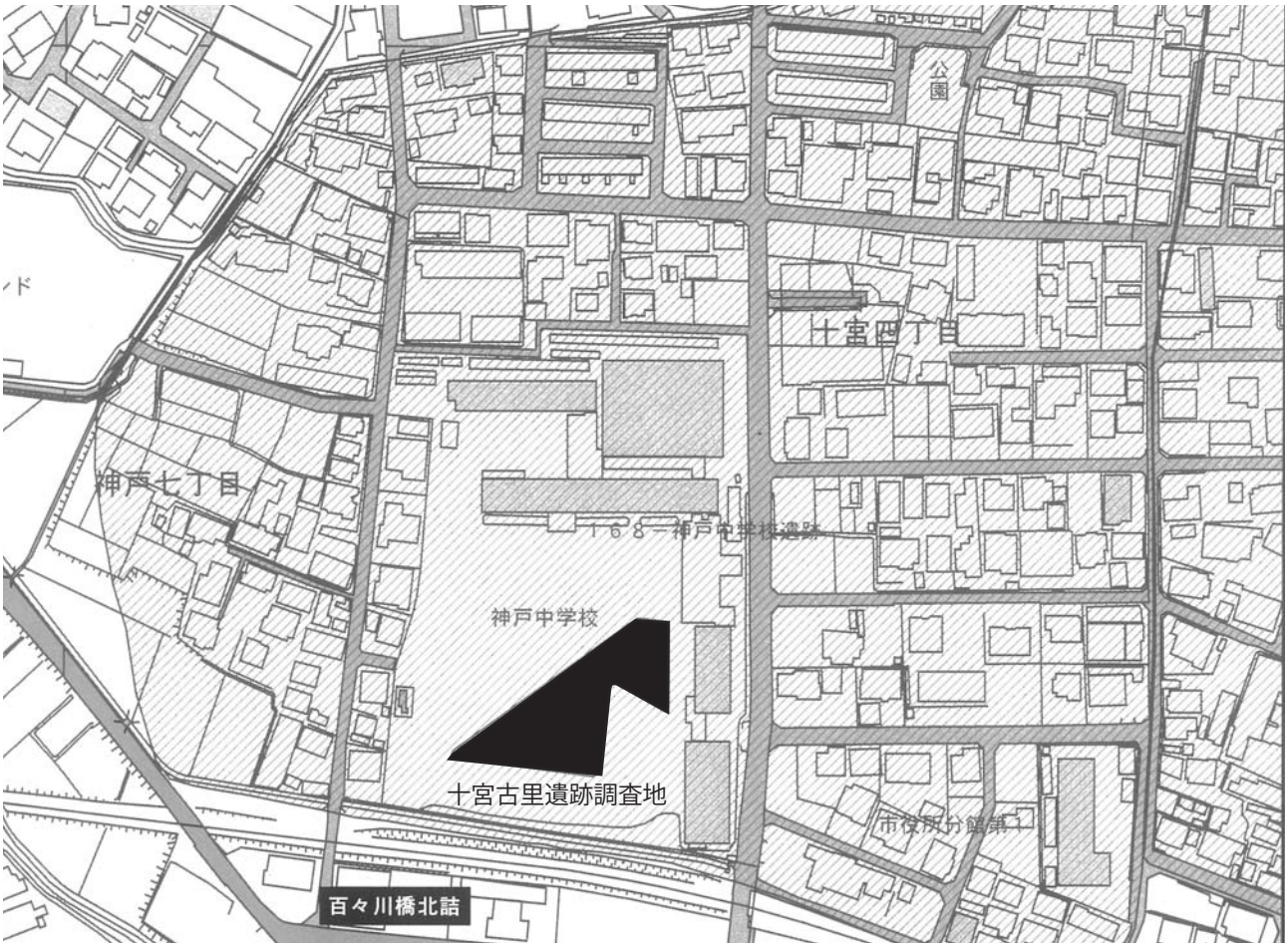


図2．十宮古里遺跡発掘調査区配置図 (1/2500)

図３　空から見た十宮古里遺跡周辺の地形 (国土地理院)

Ⅲ．調査の方法・基本層序・遺物取り上げ

標高約 10 mに位置する古里遺跡は，終戦後の学校建設に伴い，既に表層が削られており校庭直下，淡黄褐色～黄褐色の砂質や粘質層が 10 ～ 20cm で地山か遺構面に至り極めて薄い文化層である。従って，辛うじて溝や深い土坑等が残されていたに過ぎない。

このような地形での調査として，5m 四方のグリッドを設定し，北から南へＡ～Ｊ，東から西へ１～ 13 とし，それぞれのグリッドをＡ１，Ａ２・・・・・とした。出土遺物はこのグリッド名を用いて出土場所を記録した。

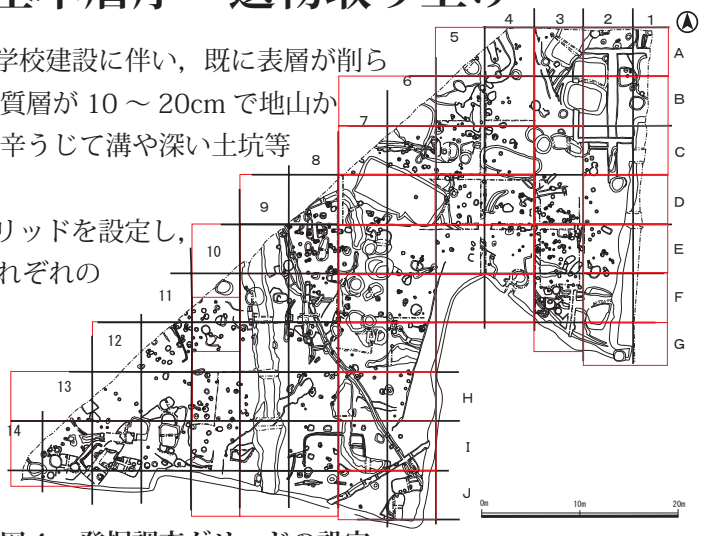


図４　発掘調査グリッドの設定

次に，大溝 (SD1) の出土遺物取り上げ状況を記録しておく。

調査は大溝 (SD1) の中でも，1，2 区から始まり 11 月末頃には殆どの遺物が取り上げられている。他方，3，4 区の本格的な取り上げは 11 月末から始まり調査終了直前の 12 月 12 日に最終取り上げが終った。

いずれの区域も 2 回に分けて図面取りと遺物取上げを行っており，この点が層位発掘と同じ結果をもたらした。

表の見方　数値：土器の取り上げ個体数

☆　：第一回出土記録の日

●　：第二回出土記録の日

出土地区	包含層	1 区	2 区	3 区	4 区	小計
遺物取上げ日						
不明	21	17	0	3	17	58
8/23 ～ 30	6					6
9/1 ～ 10	1					1
9/11 ～ 20	5					5
9/21 ～ 30	14					14
10/1 ～ 10						
10/11 ～ 20						
10/21 ～ 31						
11/1 ～ 10		14 ☆	2		1	17
11/11 ～ 20		11 ●	37 ☆	3	2	53
11/21 ～ 30				3 ☆	7 ☆	10
12/1 ～ 10		2	6	5 ●	36	49
12/11 ～ 16					21 ●	21
小計	47	44	45	14	84	234

表１　大溝（SD1) の遺物取り上げ日程

Ⅳ．遺　　構

１．弥生時代後期末～古墳時代初期の遺構

弥生時代後期末～古墳時代初期の遺構は大溝 (SD1)，方形周溝墓５基と少数の土坑が確認されている。

１）大溝 (SD1)

発掘調査時に大溝と称してきた SD1 が調査地区の西側にほぼ南北に流れる。本報告書でも同様に大溝 (SD1) の名称を用いる。大溝 (SD1) は南北に４等分し，５ｍ毎のグリッドに沿って北から１区，２区，３区，４区とした。大溝は発掘域での全長は２５ｍ余で更に南北の未調査区に延びる。幅は１～４区間で大きな差はないが，最も広い４区で 3.3m。狭い３区で 2.0m。深さは 50 ～ 76cm で各区の差はあまりない。

１～２区の間と３～４区の間に西側から溝中へテラス状の張り出しがある。

溝の高低差は 25m の流れに対し 10 ～ 15cm の変化であり極めて緩やかな流れと言える。大溝 (SD1) の層序は，上から暗褐色シルト，淡褐色シルトが 20cm 程の厚さにレンズ状に広がり，その下に最も遺物と礫を多く含む褐色シルトが 20 ～ 40cm の厚さで堆積する。更に下層の遺物を多く含んだ黄褐色土を含む黒色土が 15cm 程続く。最下層は下から砂礫層，黒色シルト粘質土，灰褐色土，粗砂，極粗砂が 10 ～ 15cm 続き溝底に至り，60 ～ 75cm 程の深さになる。溝内は全体的に砂，砂礫と有機物を多く含む褐色系のシルトで，地山の黄色～黄褐色と対照的で水の流れを示すものである。遺物の大半は，この大溝 (SD1) から出土した。

２）独立棟持柱建物

調査地の東北隅に３本の柱痕が検出されている。３本柱をそれぞれ Pit A，Pit B，Pit C とすると，Pit A は柱掘方 52 × 50cm，柱痕 27 ～ 22cm，柱深さ 38cm，Pit B は柱堀方 59 × 72cm，柱痕 36 × 32cm，柱深さ 35cm，Pit C(棟持柱) は柱堀方 82 × 62cm，柱痕 36 × 28cm，柱深さ 60cm，東西の柱間 (梁間)2.65m，方位は E12° N。桁行は未発掘地域であり不明であるが，建物跡としては柱痕等規模の大きなものである。他の遺構も相当削平されており，この建物も削平されているとしたら堀方や柱痕跡はもっと深くなるであろう。搬出遺物がなく時期の決め手を欠くが，大溝 (SD1) の主軸 NS ～ N10° W と掘立柱の南北柱 N11° W がほぼ南北軸で一致しており，大溝と同時期と推定される。三重県四日市市・菟上遺跡や三重県津市・長遺跡から検出された独立棟持柱建物と同様の建物と考えられ，梁間から推測すると長遺跡の SB142 とほぼ同規模の大きさになる。

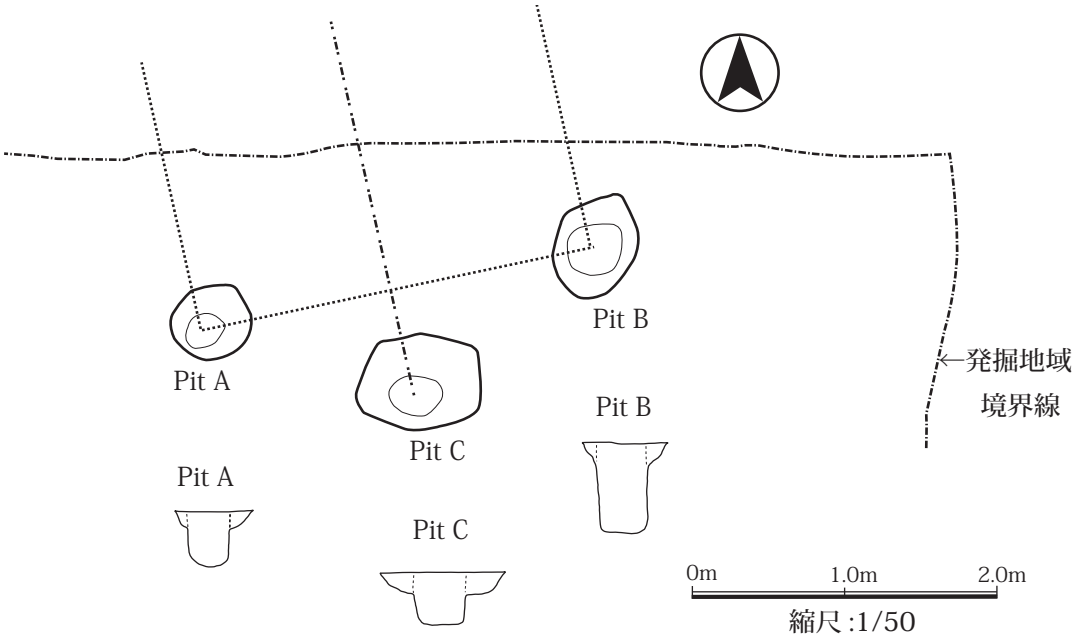
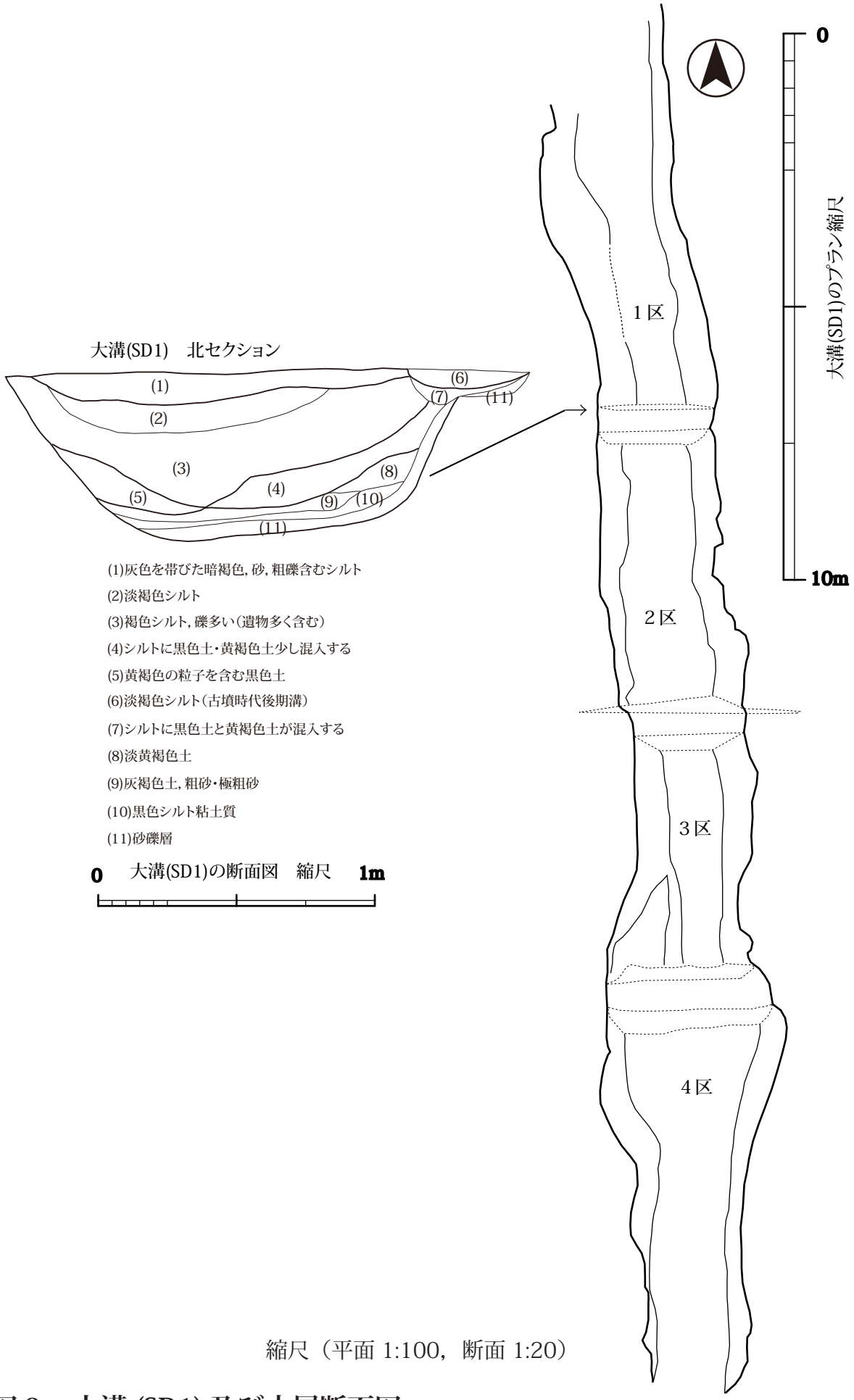


図５　独立棟持柱建物 (SB1)



縮尺（平面 1:100，断面 1:20）

図６　大溝 (SD1) 及び土層断面図

3）方形周溝墓

大溝 (SD1) の東側に方形周溝墓 (SX01 ～ SX05) が 5 基検出された。

いずれも方形周溝の溝は共有せず，各方形周溝墓の溝の深さが 10 ～ 20cm，深くても 40cm 程度であり，数十 cm 削平されていると考えてもよいだろう。この点を考慮して方形周溝墓の形式を判断していく。SX01,SX02 は，溝が途中で切れた二隅切れや四隅切れのように見えるが，本来，1 隅だけが切れていたＡ型であろう。SX03 ～ SX05 は中央に陸橋を有するＢ型であろう。

尚，Ａ型とＢ型の違いは，築造時期の違いでもあり出土土器からＡ型の築造が早く，続いてＢ型が築造されている。又，古い SX01,SX02 は大溝 (SD1) に接するように西側に選地している。SX03 ～ SX05 は SX01 の東側に南北に並ぶ。

方形周溝墓（SX01）

大溝 (SD1) に接するように 1m を隔て南北線を揃えた方形周溝墓 (SX01) が検出された。南西側端に入口を 1 ヶ所開く A1 型 (未調査区にも開くとすれば A2 型) と考えられ，規模は溝内側で 6.5 × 7.0m，溝外側で 9.5 × 8.5m，溝の幅は 0.6 ～ 1.9m，溝の深さは 9 ～ 40cm で浅い。出入口に相当する陸橋東で完形の広口壺，高杯が検出されている (401 ～ 403)。

方形周溝墓（SX02）

小形の方形周溝墓で，溝内側で 4.6 × 4.4m，溝外側で 5.4 × 6.0m，溝幅 0.5 ～ 0.6m，溝の深さ 8 ～ 16cm。一見四隅切れのように判断されるが削平を考慮すると SX01 同様，A1 型と考えられる。出入口に相当する東側の陸橋南にて胴下半を赤彩した完形のパレススタイル壺が検出されている (412)。

方形周溝墓（SX03）

5 基の中では最も大きい方形周溝墓である。東半を欠くが溝内側で 12m 程度，溝外側で 15m 程であろう。溝の幅は 1.0 ～ 2.1m，溝の深さは 10 ～ 40cm。出入口は南側の陸橋西にて広口壺 (413) が検出されていることから，この部分を考えられる。しかし，北西コーナー部の溝形状も出入り口にふさわしい胴膨れ状で，且つ，後に述べる土坑 (SK107) のすぐ横でもあり 2 つの出入口があったとも考えられる。

方形周溝墓（SX04）

遺物の検出もなく溝も 10 ～ 15cm で極めて浅く全体像はわからないが西に開くＢ型と考えられる。おそらく 7 ～ 8 mの規模であろう。

方形周溝墓（SX05）

一番東の端に位置するＢ型方形周溝墓で，北側部分の多くが未調査部分であり詳細不明だが，南の陸橋西から壺胴部 (418) を検出しており，ここが出入口になるＢ型であろう。推定規模は，8 ～ 10 m，溝の幅は 0.5 ～ 1.5m，溝の深さ 6 ～ 12cm。東には棟持柱建物があったが，両遺構は時間差があり同時には存在していない。土器の比較から 5 基の方形周溝墓の中では最後に作られている。

4）土器集積土坑 (SK107)

SX01 ～ SX04 の間に，2.1 × 2.1m の円形で深さ 30cm 程の浅い土坑 (SK107) がある。中世の井戸に一部を切られているが，この浅い土坑から 11 個のパレス壺，瓢，甕，高杯等を検出した (501 ～ 514)。土器は方形周溝墓 SX01 や SX02 よりやや新しく土坑の中で据え置かれたような状態で，西側には方形周溝墓 SX01 と SX02 の出入口，東側に SX04 の出入口の間にあり (SX03 の出入口も？) 位置的にも，状態からも方形周溝墓との関係が推察される。同様の遺構は，愛知県豊田市・川原遺跡の SX03 や SX101 にも見られ土器集積遺構とし，祭場で使用した土器を一括処理した場所と考えられている。

古里遺跡の土坑 (SK107) は出土土器との時間差から方形周溝墓 SX01,SX02 の墓前祭後の一括処理と考えられる。尚。土坑 (SK107) 出土のパレス壺口縁部の一部が大溝 (SD1)4 区南端から出土しており，同時期のパレス壺が同様に破片になって散乱している様は異様であり，後に詳細を述べる。

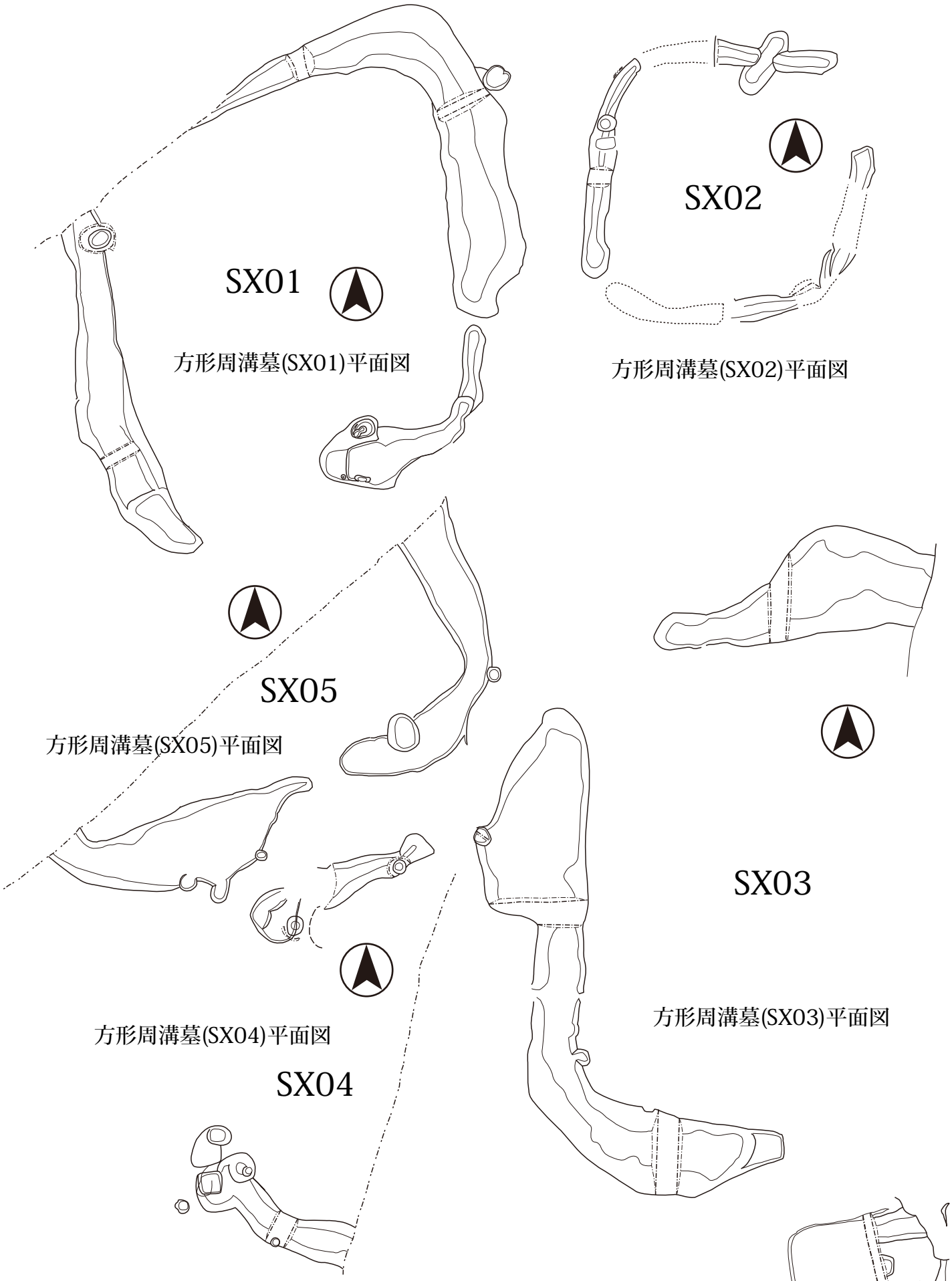


図 7　　方形周溝墓 (SX01 ～ SX05）　　縮尺 1:100

5）その他の遺構

土坑 (SK16)

大溝 (SD1) の西側に用途不明だが 2.1 × 2.1m の方形で深さ 67cm の土坑 (SK16) がある。完形の高杯 (305) が出土している。

土坑 (SK118)

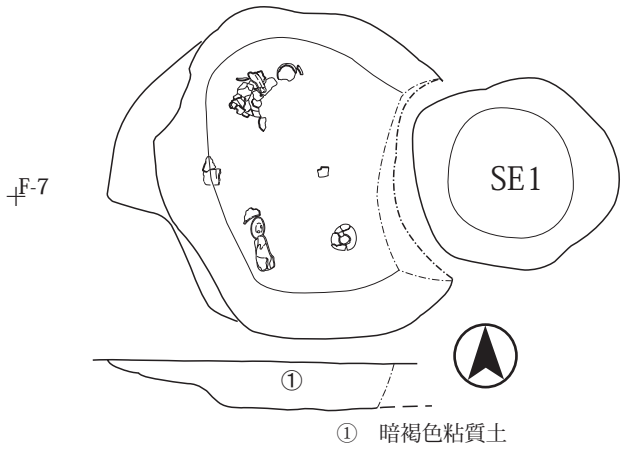
方形周溝墓 (SX04) の南出入口の西から 1.5 × 0.8m, 深さ 15cm の浅い土坑 (SK118) が検出されており，脚付短頸壺 (306) が出土している。

土坑 (SK142)

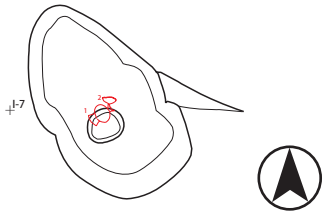
発掘地東よりの SK82 と SK102 の間に 1.1 × 0.7m の楕円形で深さが 10cm の土坑 (SK142) から小型鉢 (308) が出土している。

土坑 (SK198)

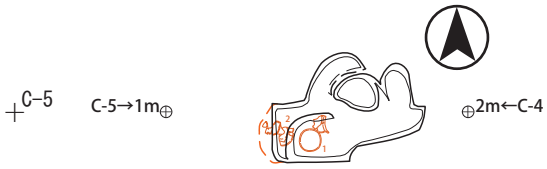
西の端に近い小さな土坑 (0.5 × 0.5m の円形で深さ 13cm) から小型壺 (307) が出土している。



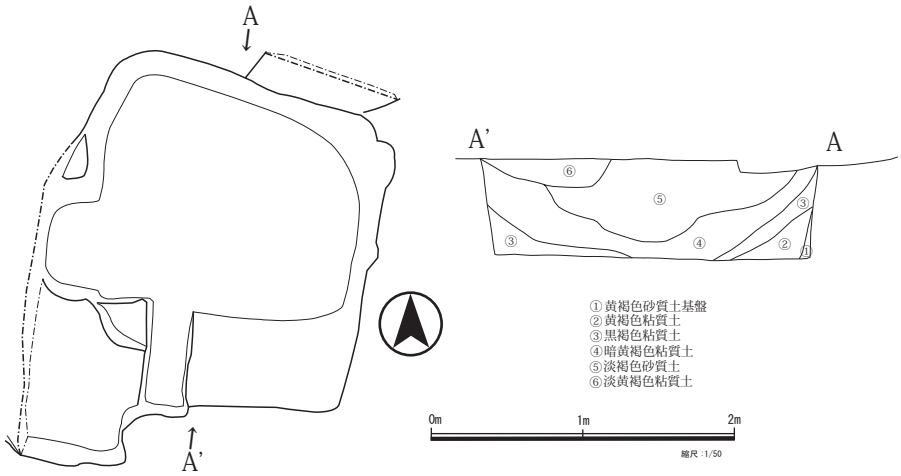
SK107 遺物出土状況　1/50



SK118遺物出土状況　1/50



SK142 遺物出土状況　1/50



SK16 の遺構　1/50

図８　弥生時代後期末～古墳時代初期の土坑　　縮尺 1:50

２．古墳時代後期の遺構

古墳時代のまとまった遺構は少ないが，溝 (SD5)，竪穴住居 (SH1) と少数の土坑 (SK11，SK18，SK31）がある。

溝 (SD5)，土坑 (SK11)

方形周溝墓 SX01 の西溝に平行するように南北に，長さ 8.5m，幅 55 ～ 65cm，深さ 16 ～ 41cm の浅い溝 (出入口がなく，土坑と呼ぶべきかもしれない) が検出されたが，溝から須恵器，土師器が多数重なって出土した (601 ～ 626)。南寄りで土坑 (SK11) が溝 (SD5) を切っており, 土坑 (SK11) は長辺 1.0m, 短辺 0.8 mの円形，深さは 46cm を測り，SD5 よりやや深い程度である。出土遺物は須恵器杯身 (633) と少片の須恵器, 土師器と鉄釘等中世遺物も含まれている。溝 (SD5) 及び土坑 (SK11) の性格は全くわかっていない。

竪穴住居 (SH1)

調査区域の南端に近い大溝 (SD1) と方形周溝墓 (SX03) の間で竪穴住居が 1 棟のみ確認されている。平面形は，長辺 5.8 ×短辺 4.7m の隅丸長方形で床面積は 27 m ^{2}。南側の周溝は明確でないが，周溝幅 20 ～ 32cm，周溝深さ 9 ～ 12cm。柱穴，カマド・炉跡など不明。

土坑 (SK18,SK31)

大溝 (SD1) の西，調査区域の西端に近い地区から古墳時代後期の２つの土坑が検出された。SK18 は長辺 2.5m 以上，短辺 1.0 m，深さ 15cm の楕円形状。少量の須恵器，土師器が出土している。SK31 は SK18 の 2m 西に位置し，長辺 1.2m，短辺 0.8m，深さ 13cm の楕円形。須恵器の杯身 (635) が出土している。

３．中世～近世初頭の遺構

井戸 (SK77,SK79)

調査区域の中央部に井戸が集中する。代表的な SK77 及び SK79 を記す。SK77 は長辺 2.95m，短辺 2.45m，深さ 1.52 ～ 1.60m で概ね円形である。井戸内部から多数の土師皿・鉢 (720 ～ 730・733 ～ 736) が確認されている。

SK79 は SK77 の西 1m に位置する長辺 2.50m, 短辺 2.15 m, 深さ 140 ～ 154cm の円形である。SK77 同様，土師皿 (731) が確認されている。尚，最も深い SK77 や SK79 でも深さ 2m 弱で水が出ており，その他の浅い井戸を考慮すると地下水脈が相当高い位置にあったものと思われる。

詳細時期は不明だが，中世の井戸が多数確認されている。地下水脈は豊富だったのであろう。

SK117，SK102，SK82，P99，SK248

調査地の東に寄った地域に SK117，SK102，SK82，Pit 99 等大形土坑が検出されている。

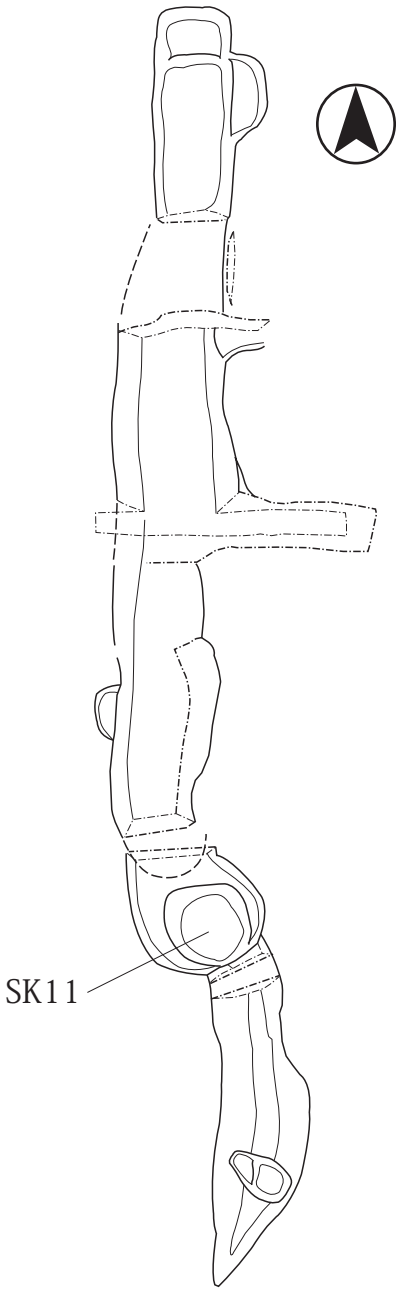
SK117 は長辺 5.5 m，短辺 2.8 m，深さ 35cm の長方形で小型鉢 (737)，瀬戸，常滑焼，山茶碗などが出土している。

SK102 は長辺 6.4 m，短辺 2.8 m，深さ 30cm の楕円形で羽釜 (703)，羽釜，瀬戸，常滑焼，灰釉陶器などが出土している。

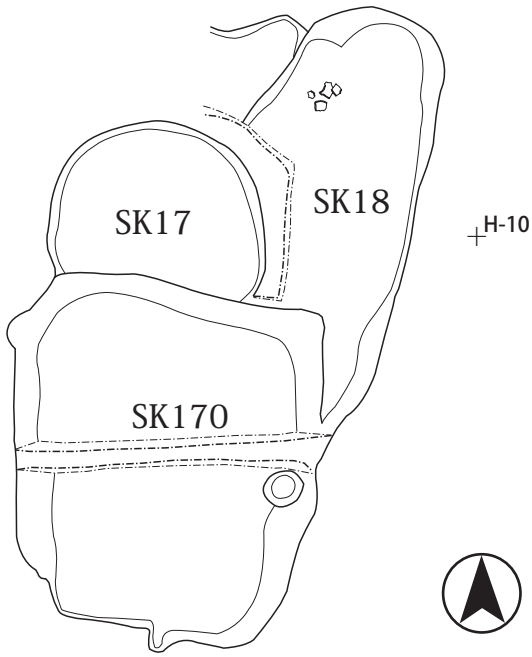
SK82 は長辺 9.4 m，短辺 4.8 m，深さ 20cm の長方形で土師器，須恵器，常滑焼，天目茶碗，羽釜など多数が出土している。

P99 は長辺 1.8 m，短辺 1.6 m，深さ 30cm の土師器と中近世の小片が出土している。いずれも 30cm 程度の浅い土坑で用途，性格はわからない。

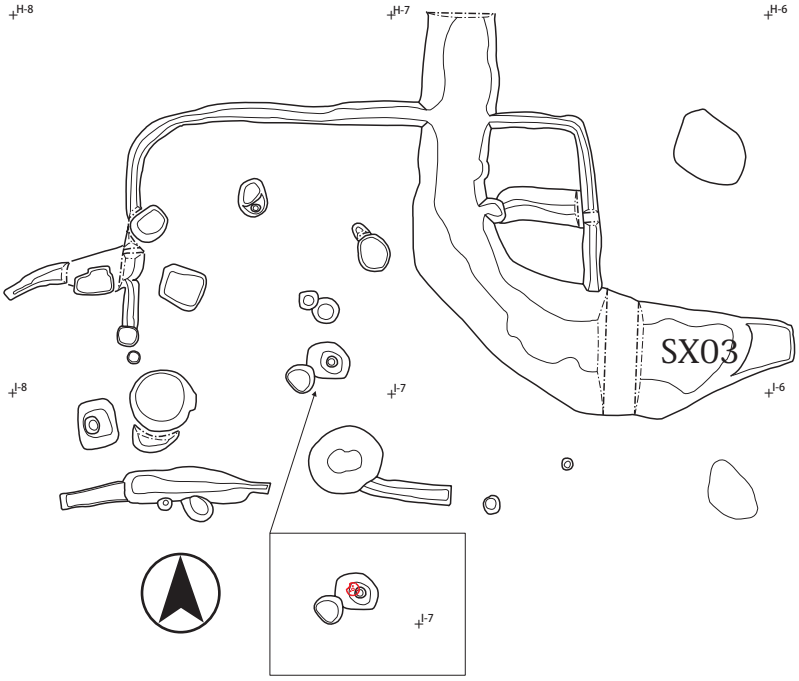
調査区域の東南端の SK248 は長辺 1.0 m，短辺 1.0 m，深さ 50cm の方形で高さ，胴径共に 70cm を越す常滑大甕 (739) が出土している。



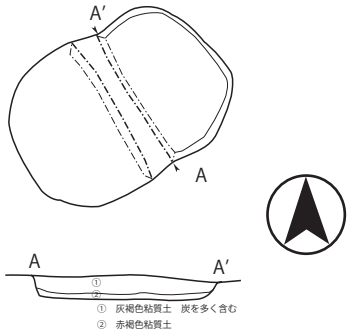
大溝 SD5　(1/50)



SK18 遺物出土状況 (1/50)

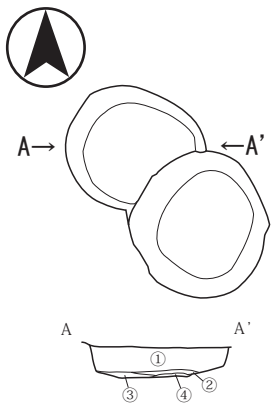


竪穴住居跡　SH1
(1/100)



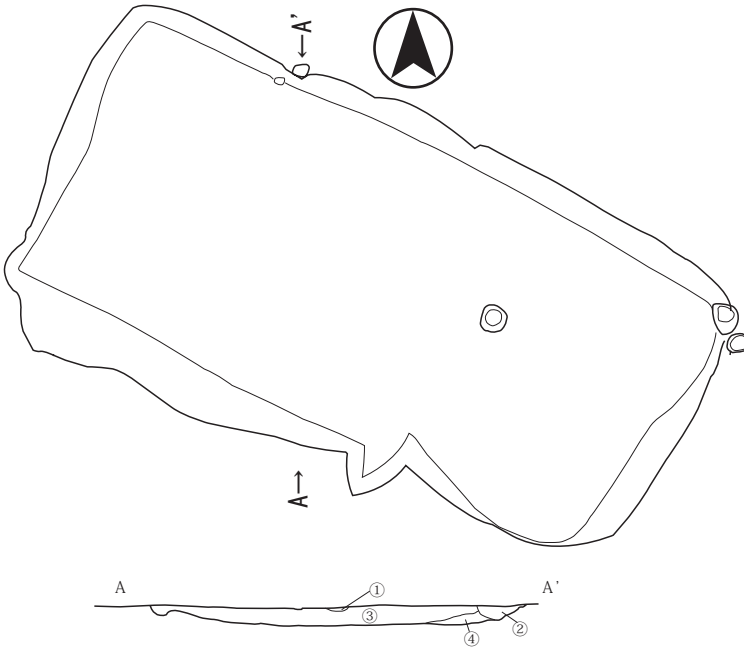
SK31 平面・断面図　(1/50)

図９　古墳時代後期の遺構（SD5,SK11,SH1,SK18,SK31）



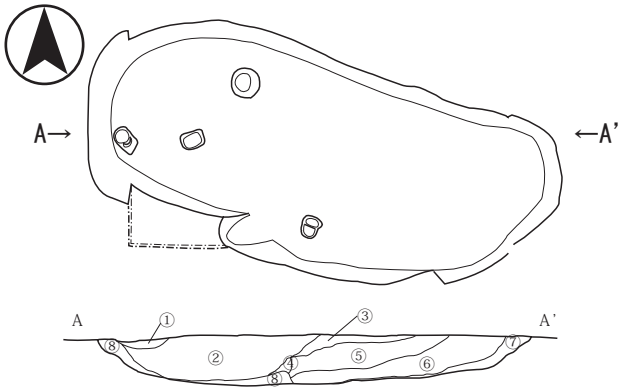
① 褐色砂礫混じりシルト
② 灰褐色砂質シルト
③ 灰褐色シルト・灰色シルト混
④ 褐色シルト

P99 遺構図　1/100



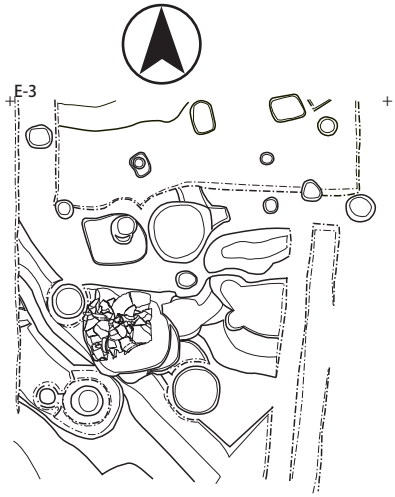
① 淡黄褐色砂礫土
② 淡黄褐色粘質土
③ 淡褐色粘質土
④ 灰褐色粘質土

SK82 断面図（西向き）　1/100



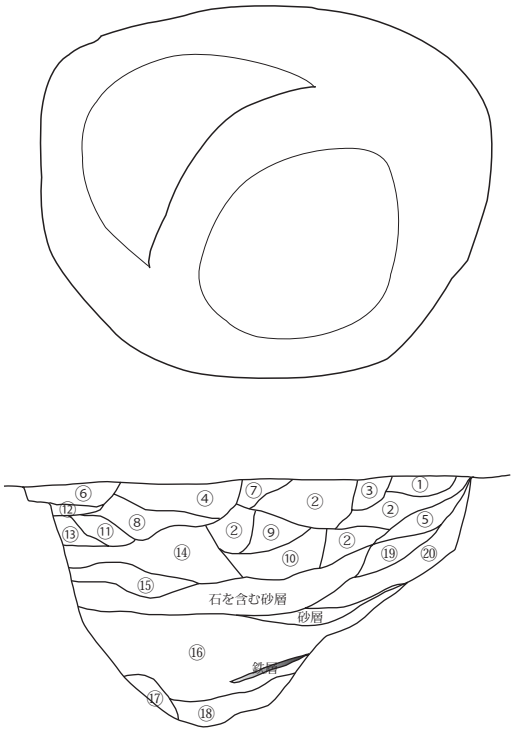
① 淡黄色砂質土
② 淡褐色粘質土
③ 淡黄褐色粘質土
④ 淡茶褐色粘質土
⑤ 暗褐色粘質土，灰色・橙色粘土塊含む
⑥ 淡灰褐色粘質土（鉄分含む）
⑦ 灰褐色粘質土
⑧ 灰褐色粘質土

SK102 遺構図　1/100



SK248(常滑出土状態) 遺構図　1/100

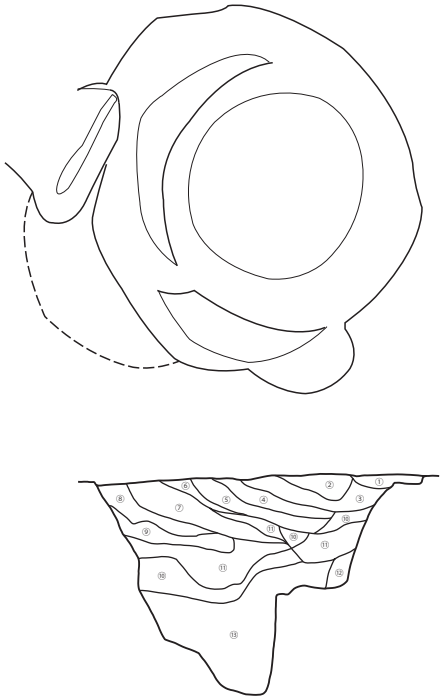
図 10　中世の遺構（土坑：SK82,SK102,SK248,P99)　　縮尺 1:100



①淡褐色粘質土
②灰褐色砂質土
③淡褐色粘質土石粒多く含む
④灰褐色粘質土
⑤暗褐色砂質土
⑥淡褐色粘質土
⑦灰褐色粘質土
⑧暗灰褐色粘質土
⑨淡褐色砂質土　粘質ブロック含む
⑩淡褐色粘質土砂混じり
⑪淡灰褐色粘質土
⑫淡褐色粘質土・鉄分
⑬暗灰褐色粘質土
⑭灰褐色砂質土　石含む
⑮灰褐色粘質土
⑯青灰色粘質土
⑰淡褐色粘質層
⑱灰褐色粘質土
⑲黄褐色粘質土
⑳暗褐色粘質土

SK77 の遺構（平面図及び断面図）

0m　1m　2m
縮尺：1/50



①暗褐色粘質土
②暗褐色粘質土(中世遺物含む)
③淡黄褐色土粘質土
④淡褐色砂質土（～10cmの小石含む
⑤赤褐色砂質土（～3cmの小石含む）
⑥赤褐色砂質土にｸﾛﾎﾞｸ混ざる
⑦淡褐色砂質土
⑧淡灰褐色粘質土
⑨淡黄褐色粘質土（中世遺物）
⑩暗褐色粘質土（遺物多く含む）
⑪灰褐色粘質土[酸化鉄分含む]（遺物多く含
⑫暗黄褐色粘質土（粘り強い）
⑬青灰褐色粘質土（鉄分多く含む）

SK79 の遺構（平面図及び断面図）

図 11　中世の遺構（SK77,SK79）　**縮尺 1:50**

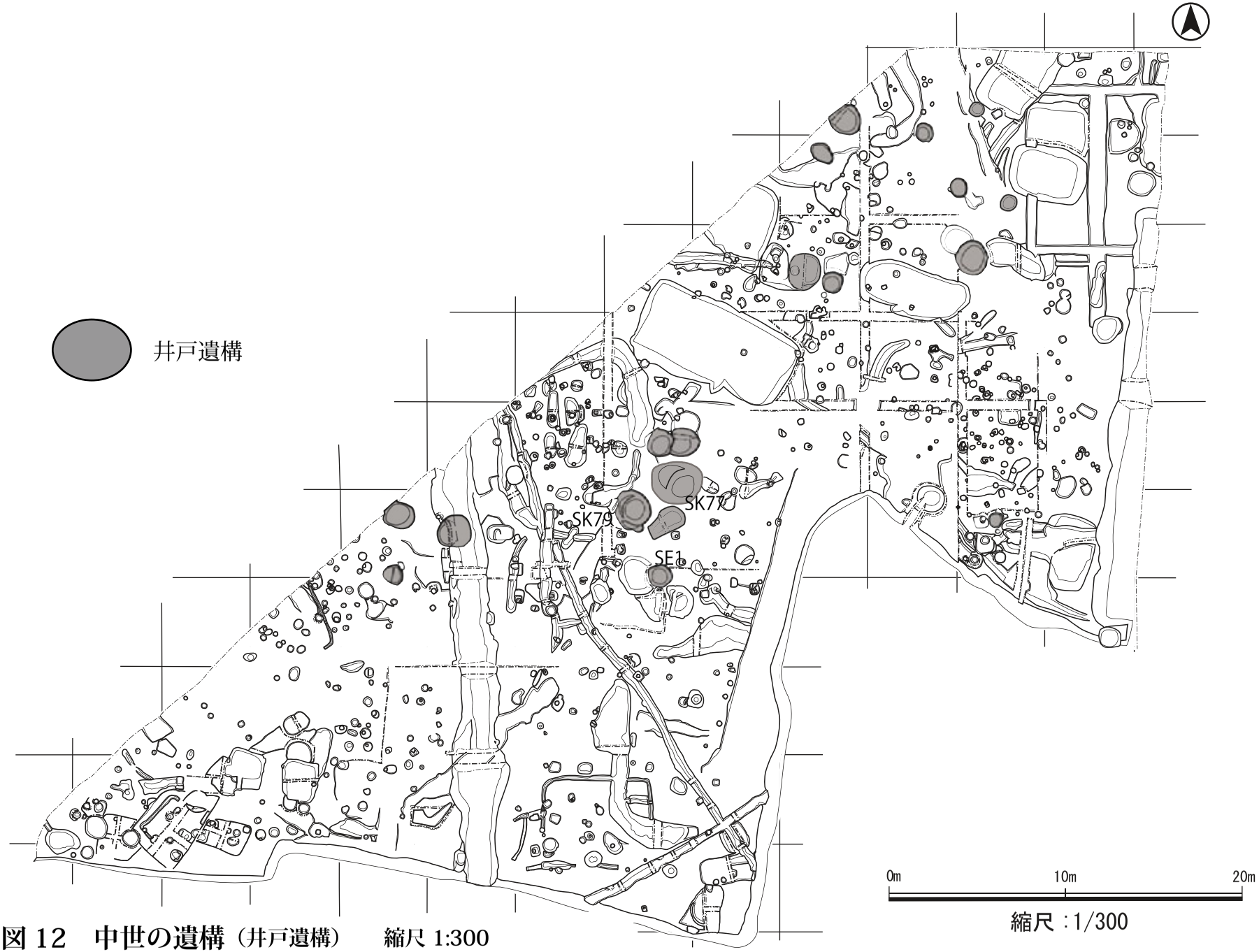
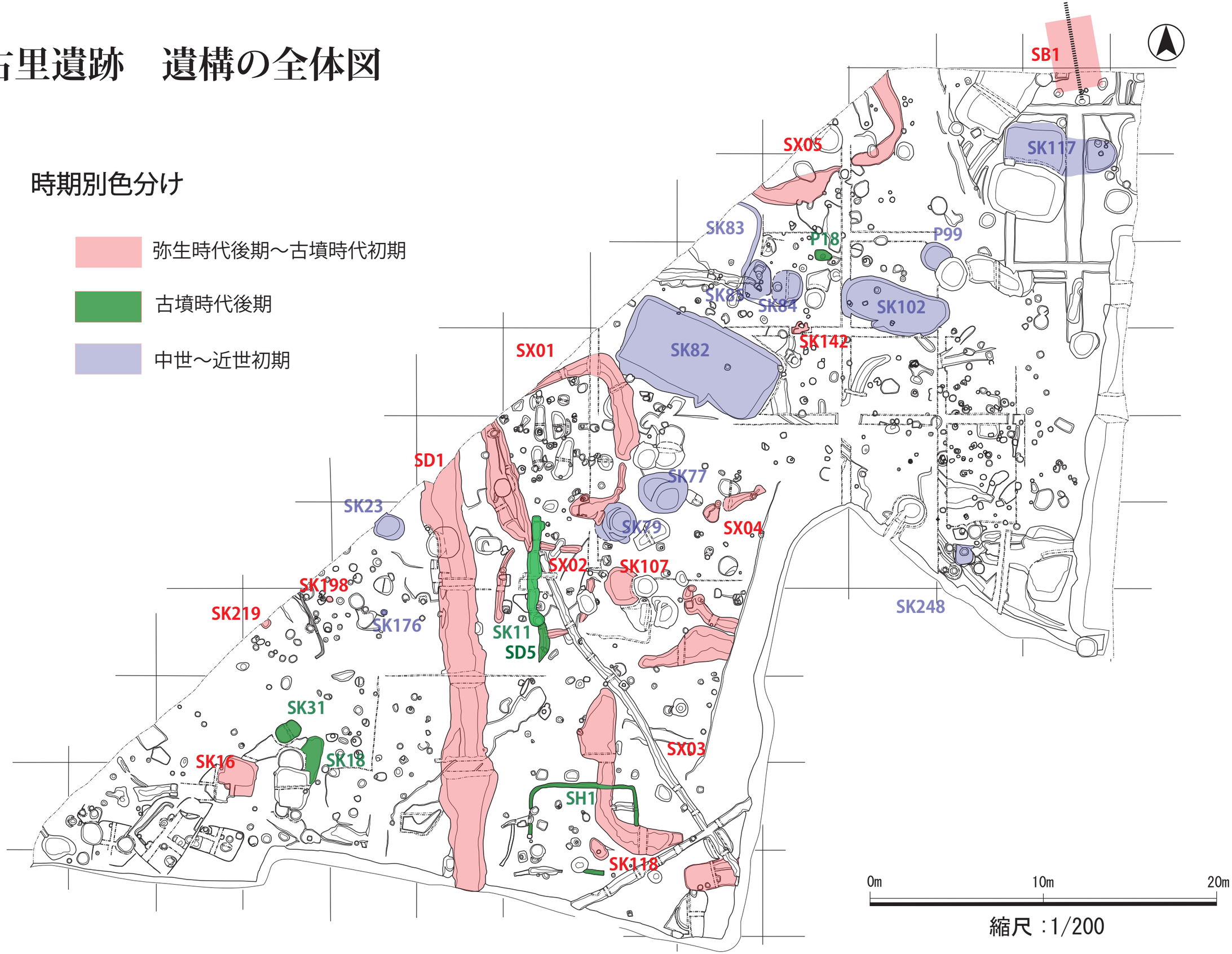


図 12　中世の遺構（井戸遺構）　縮尺 1:300

古里遺跡　遺構の全体図

時期別色分け

- 弥生時代後期～古墳時代初期
- 古墳時代後期
- 中世～近世初期



Ⅴ．遺　　物

古里遺跡から出土した遺物は殆どが土器といっても良い。大部分が弥生時代後期末～古墳時代初期に属し、中でも大溝 (SD1) から最も多く出土している。大溝 (SD1) 以外の出土は、５基の方形周溝墓、方形周溝墓横の土坑 (SK107)、SD5 を中心とした古墳時代中～後期の土器、遺跡全体から散布・出土した奈良時代から江戸初期の古代～近世土器がある。

これらの遺物は整理箱に約１５０個程度で、実測図の報告Ｎｏ．は

大溝 (SD1) 出土　：　　１～３００
土坑・ピット出土：３０１～３５０
包含層出土　　：３５１～４００
方形周溝墓　　：４０１～５００
土坑　　：５０１～６００
古墳時代中～後期：６０１～７００
奈良～近世　　：７０１～８００　に区分し整理した。

１．弥生時代後期末～古墳時代初期の遺物

１）出土土器の分類

古里遺跡から出土した弥生時代後期末～古墳時代初期の土器は完形又は、ほぼ完形に近い土器が多い。これらの土器を主に口縁部形態から分類した。但し、煤の付着した壺や分類が難しい特殊な小型土器も多く、一部、恣意的な分類もある。

出土土器の分類は，

壺形土器　：広口壺、加飾壺、受口壺、短頸壺、内彎壺の５種
甕形土器　：くの字甕、受口甕、Ｓ字甕、叩き甕、平底系甕の５種
高杯形土器：有稜高杯、椀形高杯、ワイングラス形高杯の３種
小型土器　：壺形、鉢形、高杯形、甕形，その他の５種に分類した。

尚、小型土器は大凡 15cm 以下を目安とし、所謂、ミニチュア形土器もこの類に含めた。

詳細は分類図１～図５に示す。以下，簡単に土器の特徴を記す。

壺形土器

広口壺：球形の胴部に直線的にあるいは外反する口縁部をもつ壺で，頸部に凸帯の有無，口頸部への文様の有無によって細分化する。今回検出した遺構別に広口壺の特徴を見ると，大溝 (SD1) 検出の広口壺は頸部凸帯を持つものや文様を持つものは殆どなく，無文で丁寧な縦の篦磨きで仕上げるものが多い。この時期の土器は特殊な加飾壺を除き無文化が進むが，極端に文様が少ないと言える。しかし，方形周溝墓など特定の場所から出土している広口壺は，口唇部から胴部上半の狭い範囲に櫛描施文や刺突文を施す飾られた壺であり対照的。

加飾壺：前記の飾られた壺は施文範囲が狭いのに対し，ここで言う加飾壺とはパレススタイルの壺を含む土器の内外面を施文や赤彩で華やかに飾る一群である。墓からの出土と周辺に広く散乱した赤彩土器である。伊勢地域でのパレススタイル壺の出土は，珍しくないが，決して多くはなく，主体とは言えない。

受口壺：外反する口縁端を上方に持ち上げ受口状に仕上げた一群である。口縁端面を凹線文で飾る弥生中・後期からの系譜を引く一群と考え受口壺とした。事例は少ない。

短頸壺：球形に近い胴部に短く直口状またはやや外反する口縁部を付加した一群。脚台を付加した脚付短頸壺もこの類に含む。尚，脚付短頸壺と脚付内彎壺の違いは口縁部が外開きになるか内彎するかの違いである。

内彎壺：瓢壺と同類の一群であるが，大溝 (SD1) 出土の一群は外広がりの長い頸部に口縁部下で内彎する。脚台を有する脚付内彎壺を含む。これらの一群とはやや形を変え下膨れの胴部に直立に近い短い口縁部を付けた一群は形式変化した瓢壺である。

甕形土器

くの字口縁台付甕：口縁部が単純に「くの字」形に開く一群で，数量が最も多い。口縁部が大きく広がるものと直立に近い一群がある。

受口状口縁台付甕：口縁部を外側にくの字状に開き，端部を持ち上げ受口状に仕上げた甕で口唇部から上胴部を刺突文, 直線文で飾る。胴部は単斜方向の刷毛目で調整する。

Ｓ字状口縁台付甕：所謂，Ｓ字甕だが，通有のＳ字甕でなくＳ字甕の祖系と言えるものが少数存在する。口縁端部は上方に立ち上げ口縁端部や頸部下には刺突文，直線文などＳ字の形式は踏んでいるが，単斜方向の刷毛目や胴下半の波状文は前代の名残りである。同例は小片が遺構上部包含層から出ている。通常のＳ字甕も少量ある。

平底甕：上記は台付甕であるが，極少量平底の甕がある。くの字口縁甕だが，底部は平底。

高杯形土器

最も多数の完形土器を出土した器種で３種に分類した。

有稜高杯：稜を有する深い杯部に直線的な或いは内彎する脚部を持つ高杯である。従来，伊勢では高松式 (欠山期) と編年されてきた杯部が深い大形の高杯である。
赤塚氏の杯部稜径を口縁部径で除し 100 を乗じた「径稜比率」によって時期細分が可能。今回の調査結果で, 大溝 (SD1) の上・下層による時間的変化と「径稜比率」の関係が確認できた。又，小破片も含め「山中期から廻間期」併行の変化が追えることが確認できた。

椀形高杯：稜を持たない彎曲する小さめの杯部に，内彎する又は大きく広がる脚部を付ける高杯。よく磨かれている。

ワイングラス型高杯：1 例だが確認できた。前代の山中期の系統をひく高杯である。

小型土器

小型土器の厳密な定義はしていないが, 高さ 15cm を越えない小型の土器群を総称して「小型土器」とした。この類には壺，鉢，甕，高杯など大型土器と分類上は同じだが，壺や鉢でも大型とは器形が異なるものが多い。形状は甕形であるが磨いたものや非常に器壁の薄い鉢？などがあり，器種分類に迷うものも多い。

壺・鉢：小型土器の７割を占め，口縁部径が胴部径を上回らない壺形，口縁部径が胴部径とほぼ同じか上回る鉢形で，共に良く磨かれた一群。多くは内彎する口縁部を持つが，一部外開きの口縁を持つ一群もある。

短頸壺：上方に立ち上がるやや長めの口頸部を持ち，胴部中位に最大径を持つ一群。刷毛仕上げが多いが，中には磨くものもある。

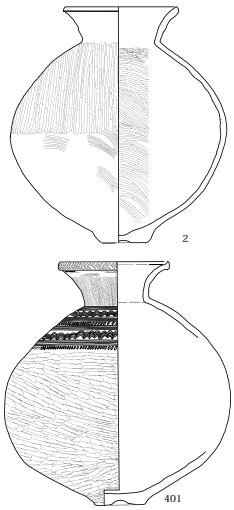
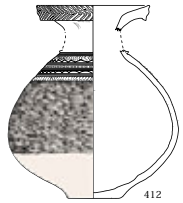
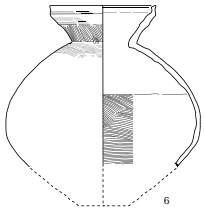
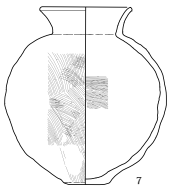
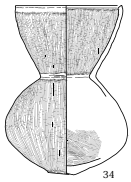
器種	器形	特徴	形態	特徴	器形細分	備考事例
壺	A 広口壺	口縁部が大きく開く壺で，頸部に凸帯を持つものと持たないものがある		頸部に凸帯がなく口縁～頸胴部への飾りがない　又は飾りが少ない壺 頸部に凸帯がなく口縁～頸胴部に飾りを持つ壺 頸部に凸帯があり飾りがない　又は飾りが少ない壺	Aa Ab Ac	
	B 加飾壺	貝殻や櫛描による文様と赤彩を頸胴部に多用した飾られた壺		頸部に凸帯をもつ飾られた壺 頸部に凸帯がない飾られた壺	Ba Bb	ﾊﾟﾚｽｽﾀｲﾙ型の壺
	C 受口壺	広口壺の口縁端に上方又は外開き状の受け部を持ち，端部を平坦に仕上げる壺		口縁端を上方に持ち上げ，受口状に仕上げる 口縁端を外開き状に持ち上げ，受口に仕上げる	Ca Cb	
	D 短頸壺	短い口縁部を直口又は斜外方に開き，球形に近い胴部を有する壺		口縁部が短く開きながら斜め上方又は直口に短く立ち上がる 短頸壺に脚部を備えたもの 形状は内彎口縁壺に似ているが，口縁部は外反	D1 D2	脚　付 短頸壺
	E 内彎壺	球形状の胴部に丸底に近い底部を持ち，口縁部は長く外反後，口縁下は内彎する特徴的な中小形の壺 一般的に，よく磨かれた精製品である		口頸部は大きく広がり，口縁部下で内彎する Ea1と同様の形態であるが，大きく広がる脚部を持つ 口頸部の広がりは小さいが口縁下で短く内彎する やや下膨れの胴部を有する	Ea 1 Eb Ea2	内彎壺 脚　付 内彎壺

図 14　十宮古里遺跡出土土器分類図（1）　1:10

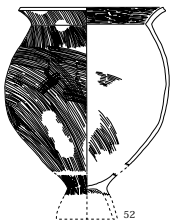
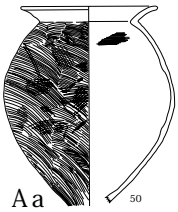
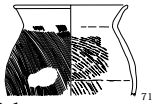
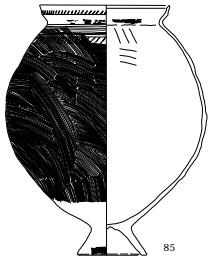
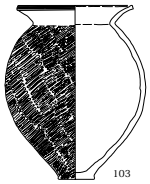
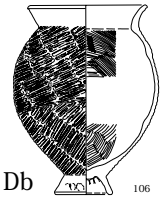
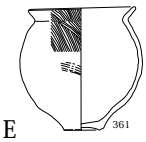
器種	器形	特徴	形態	特徴	器形細分	備考・事例
甕	台付系 くの字 甕 A	口縁部が「くの字」状に外側に開く 頸胴部より下はハケメで調整する	 52	「くの字」状に強い角度で屈折する 胴部は右斜位のハケメで全面調整 「くの字」状に屈折するが，角度は緩く直立または緩斜位 胴部は右下がりのハケメ調整	 Aa 50  Ab 71	
	受口 甕 B	口縁部は緩く外開きに立ち上がり，更に直立し，受口口縁を形成する 胴部はいずれもハケメ調整する 底部は台部を持つ 口頸部は刺突文を施すものと無文のものがある	 85	口頸部から上胴部にかけ，刺突や直線文を施すもの　胴部はハケメ調整する 文様を持たない一群で，胴部はハケメ調整	 Ba 87 Bb 93	
	S字 甕 C	S字祖形は口縁端部の上方持ち上げ，口頸部の刺突，頸部の横線等はS字の基本形が見られるが，胴下部の波文は前代の「近江系甕」を踏襲している	 C1 95	受口甕同様，口縁に受け部を持つが，頸部からの外反，更に立上がり部共に鋭く変化する 事例はS字祖形以降も含め，僅かの事例のみ	 363 C2	S字状口縁台付甕
	D 叩き 甕	胴部を右上がりの叩きで調整する甕で，底部は平底と台付の二種がある 口縁部はナデで仕上げる	 103	平底の叩き甕 総体的に叩きの密度は細かく，胎土も明らかに異なる 台部を持つ台付甕である。一部，叩きとハケを混用した甕もある総体的に叩きの密度は粗く，胎土も在地系に近い	 Da 102  Db 106	
	平底系 くの字 甕	口縁部が「くの字」状に屈折する平底の甕で胴部はハケメ調整 平底の事例は少ない	 E 361			

図 15　十宮古里遺跡出土土器分類図（2）　1:10

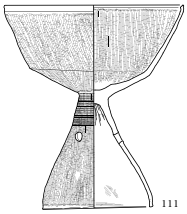
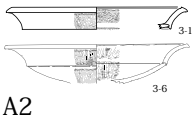
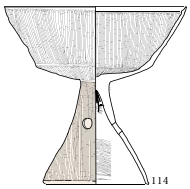
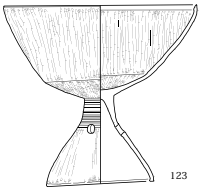
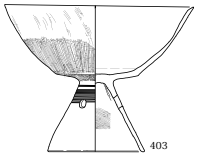
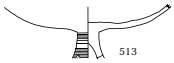
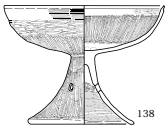
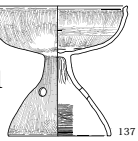
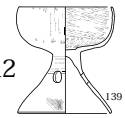
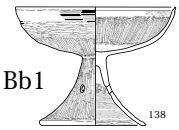
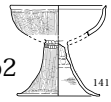
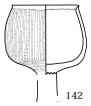
器種	器形	特徴	形態	特徴	器形細分	備考・事例
高杯	有稜形高　杯 A	杯部に稜を持ち，脚部は大きく外反するか，大きく開きながら内彎する大型の高杯		杯部が浅く，外反する脚部を有する 稜径/口径比75％以上 杯部がやや深くなる 外反する脚部を有するが裾端でやや内彎する 稜径/口径比はA1とあまり変わらない 杯部は深く，脚部は直線状かやや内彎する 稜径/口径比65～70％程度　比率が60％に近くなると脚部の内彎の程度も大きくなる この遺跡から出土した高杯の殆どがこの器形になる 杯部は深く，脚部は高さを減じ，更に内彎する　稜径/口径比60％前後 深い杯部は稜が不明瞭になるが残る。脚部は内彎化がなくなり，直線的に開く 稜径/口径比50％以下 杯部の稜がなくなり，丸くなる　脚部は外反しておさまる	A1  A2 A3  A4  A5  A6 	有稜形高杯
	椀形高杯 B	稜を持たない杯部に内彎する　又は外反する脚部を持つ 中・小型の高杯		稜のない椀形の杯に大きく内彎する脚部をもつ 稜のない椀形の杯に外反する脚部をもつ	Ba1  Ba2  Bb1  Bb2 	椀形高杯
	ﾜｲﾝｸﾞﾗｽ形高杯 C	ワイングラス形の深い杯部に，外反する小さな脚部を持つ小型の高杯	C1 	一事例だが，ワイングラス形高杯が出土している　山中期からの残存であろう		ワイングラス形高　杯

図 16　十宮古里遺跡出土土器分類図（3）　　1:10

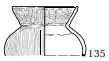
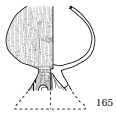
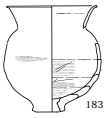
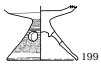
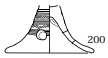
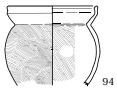
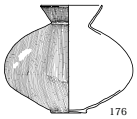
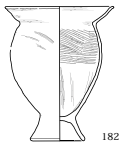
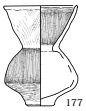
器種	器形	特徴	形態	特徴	器形細分	備考・事例
小型土器	小型土器は形態のﾊﾞﾘｴｰｼｮﾝが広く，個性的な種類も多い　基本は広口壺，短頸壺，鉢だが，いずれも良く磨かれた精製品である　但し，甕の中に一部，粗製品も含まれる					
	広口壺 A	球形に近い胴部に，短い外開きの口縁部が付く広口壺である 同じ広口ではあるが，通常の広口壺とは形態がやや異なる		外開きの短い口縁部に最大胴径が胴中位より下にある広口壺 上記，A1の壺に，バリエーションとして，脚台部を持つもの	A1 A2 	
	鉢 A			外開きの短い口縁部に最大胴径が胴中位にある広口壺		
	鉢 B			口縁部径が胴部径とほぼ等しく，よく磨かれた壺　口縁部が内彎化する		
	短頸壺			やや口頸部が長く，最大胴径が中央部にある短頸壺　やはり，脚台を持つものがあり，丁寧に磨くものもある	A1 A2	脚付 短頸壺
	高杯	小型高杯であるが，形態的には大形の高杯と同様で稜を持つ精製土を用いている		脚部はやや内彎するもの大きく開き文様で飾るものなどがある 事例は多くない	 	
	甕	胴部を右上がりの叩きで調整する甕で，底部は平底と台付の二種がある 口縁部はナデで仕上げる		大型の甕同様，「くの字甕」と「受口甕」がある 台部を失っており，確認できないが台部を持つ甕であろう	 	
	特殊器形	精製された特殊な一群である	極めて個性的な土器群である　いずれもよく磨かれており特殊な用途を想定させる　単純に壺や鉢，甕の区分は難しい　器壁が薄く，硬い （壺状）  （甕状）  （短頸状）  （鉢状）		

図 17　十宮古里遺跡出土土器分類図（４）　　1:10

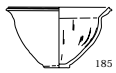
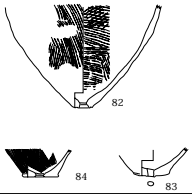
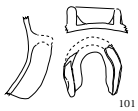
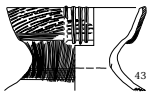
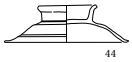
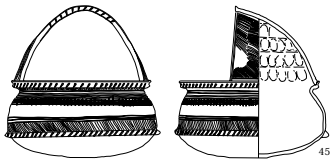
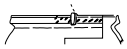
器種	器形	特徴	形態	特徴	器形細分	備考・事例
鉢	A	各種の鉢形土器を一括して分類した 無頸鉢や有孔鉢の用途は不明だが特殊な用途を想定したい		開きぎみの胴部に外開きの短い口縁部をつけた鉢		有頸鉢
	B			頸部を持たない鉢 いずれも粗製品である		無頸鉢
	C			有孔鉢の孔はいずれも焼成前の穿孔である　刷毛を多用した粗製品		有孔鉢
	D			把手付有頸鉢は鉢の部分が未検出で把手部分のみ検出 同例は嶋抜，六大Ａなど廻間期の遺構から検出されている		把手付有頸鉢
外来系壺		遠江～関東にかけてよく見られる複合口縁壺である １点のみ検出である				複合口縁壺
蓋		大きく開く蓋の部分に，やや開き気味のつかみ部分を付けた蓋。この時期の蓋の事例は少ない				
手焙形土器	A	所謂，手焙形土器である 鉢部の口縁が「くの字状」と「受口状」の２種がある 		鉢部の口縁が「くの字状」のものに　覆部をつける 鉢部の口縁が「受口」状のものに　覆部をつける	 Aa  Ab	

図 18　十宮古里遺跡出土土器分類図（５）　1:10

高　杯：有稜高杯の小型品である。椀形高杯か壺の脚台らしき丁寧に磨いたものもある。
甕　　：小型の甕で口縁部は「受口状」と「くの字」の２種がある。いずれも雑な作りの粗製品である。ミニチュアに属する鉢・甕は手捏ねで製作されている。

鉢形土器

開き気味の胴部に頸部を持ち短い口縁部を付加させた有頸鉢や頸部を持たない無頸鉢，底部に焼成前の穿孔を施した有孔鉢。大きな把手を付けた鉢（把手のみの出土）等がある。無頸鉢や有孔鉢は崩れそうな粗製品。

蓋形土器

１点のみの出土。

外来系複合口縁壺

関東地方で多く見られる口縁部を上方に持ち上げ拡張する壺で，拡張した口縁部に縦の紐状貼り付けを４条施している。１点のみの出土である。

手焙形土器

大溝 (SD1) の４区から５点出土している。「受口状」の口縁に覆いを付けるものと「くの字」状口縁に覆いを付ける２種があるが，受口３個体，くの字１個体である。

２）遺構別出土土器の器種構成

この時期の出土土器は３つの時期に大別出来る。最も多くの土器を出土した大溝 (SD1) は遺構の北側から１区，２区，３区，４区に分けて器種をまとめた。出土土器の中で図化できたものを出土遺構毎にまとめると[①]、

	壺	高杯	小型土器	甕	その他	計
１区	12	11	10	20	1	54
２区	3	2	12	14	2	33
３区	5	3	2	2	0	12
４区	16	19	23	15	5	78
SD1 小計	36	35	47	51	8	177
方形周溝墓	6	3	1	4	0	14
土坑 (SK107)	5	2	0	4	0	11
その他小計	11	5	1	8	0	25
総計	47	40	48	59	8	202

表２　弥生時代後期末～古墳時代初期の出土遺構別器種分類

上記以外に、土坑やピットからも少量の土器が単発で出土している。又、これらの遺構の上に広がる包含層から小破片が比較的多数出土している。これらの小破片は大溝や方形周溝墓より前の時期又は，同時期は比較的多く含むが、古墳時代前期以降の時期の土器は殆ど含んでいない。

遺構毎の器種構成の特徴をみると、大溝 (SD1) 全体の器種構成は，概ね壺，甕，高杯，小型土器が４分するが、やや小型土器と甕が多い。地区別では半分程度が南端の４区から出土しており、器種も高杯、小型土器の比率が高く、又、特殊土器の手焙形土器５個体が総て４区から出土している。２区は壺，高杯が極端に少なく小型土器，甕が主体である。器種別では小型土器の中で平底ではあるが胴部に最大径を持ち，外開きの小さい口縁部を持つ小型丸底壺に類似した壺と口縁

部径が胴部径と同等か幅広い鉢が多数を占め，他に形状は甕だが丁寧な作り方は甕とは言い切れないものや胴部が極端に広がる扁平球状の器壁２～3mm に仕上げた鉢状の土器等，特異な形状の土器も含まれる。

全体の器種構成から，通常の集落でよく見られる器台や鉢が殆どない点は特筆される。

古里遺跡の土器組成の特徴は，小型土器が多いことだが，通常の生活において出土する土器組成との比較を大阪府の久宝寺遺跡，城山遺跡，鬼塚遺跡と行った。３遺跡は，洪水による家屋埋没か火災により家屋焼失に伴って廃絶しており，当時の生活のままである。

遺跡名	場　所	住居址	時　期	壺	甕	高杯	小型	その他	合計
久宝寺	大阪八尾市	SB07056	弥生Ⅴ	14	8	10	12	4	48
城山	大阪八尾市	SB0901	弥生Ⅴ～庄内	6	6	4	2	3	21
鬼塚	大阪東大阪市	竪穴住居	弥生Ⅴ	4	7	2			13
古里	三重鈴鹿市	大溝 (SD1)	弥生末～古墳初	36	51	35	47	8	177

表３　住居址出土土器と古里大溝出土土器の比較

久宝寺遺跡 SB07056 は，約 25%を小型土器が占める。城山遺跡も約 10%を占める。鬼塚遺跡では小型土器は含まれていない。しかし，久宝寺遺跡や城山遺跡の住居址から出土した小型土器は，壺，甕，鉢など大型土器と同形状であり単に大・小の関係に過ぎず，今回提示する特殊な小型土器ではない。このように比較の上で見ると，古里遺跡の小型土器は通常の生活から廃棄される器形とは異なり，何らかの特殊な用途を考えておく必要がある。

３）大溝 (SD1) の土器出土地点

大溝 (SD1) の土器取り上げは２回に分けて行った。１回目の上層の出土状況実測図を取った後，遺物を取り上げ，下層を掘り下げ，再度，出土状況を実測している。従って，遺物は上層と下層の２層に分別されている。上層と下層は 30 ～ 40cm 離れているが層位に基づいて掘り下げたわけでなく，あくまでも土器を取り上げた日程差である。しかし，上下層の土器に型式差が見られる高杯もあり，必ずしも上から下まで同時に廃棄されたとは言い切れない。以上を前提に，大溝 (SD1) の土器出土状態を見ていく。１～４区の下層取り上げ土器の中で完形又は完形に近い土器は圧倒的に高杯が多い。この高杯は No111~116,134,137 のように古い様相を示すものが多い。やはり，上下層の差は時間差を示しているのであろう。詳細は後ほど検討する。

次に，出土場所別の器種構成を見ていくと，極めて興味深い現象が見られる。２区は小型土器が集中する地域で，他の器種をあまり含まない。壺は３区から４区の北半に集中し，甕は４区南の東縁に集中，高杯は西縁に集中し，器種によって置き場所が定められたような企画性がある。同じ企画性が上，下層に見られ，同じ場所に同じ器種を配置している。又，大溝北端にも高杯と甕が集中する地域があり，１～４区の北側にも同様の配置を行っている可能性がある。しかし，１区より北は未調査であり，確認出来ていない。

このように，同一器種がまとまって集中することは単なる溝への廃棄とは考えられず，意識的に配置したと考えるほうが妥当であろう。前記の大溝の中の器種構成が通常の生活で発生したものと異なる組み合わせであることとあわせ，大溝の中で置く場所が規定されていることは益々，大溝の役割と出土土器が特別な用途に用いられたことを示すことになるだろう。

尚，大溝 (SD1) の土器群は下層が廻間Ⅰ式前半の古い時期に併行する。上層は廻間Ⅰ式前半の新しい時期で両者の差は小さい[②]。

1，2区上層出土土器

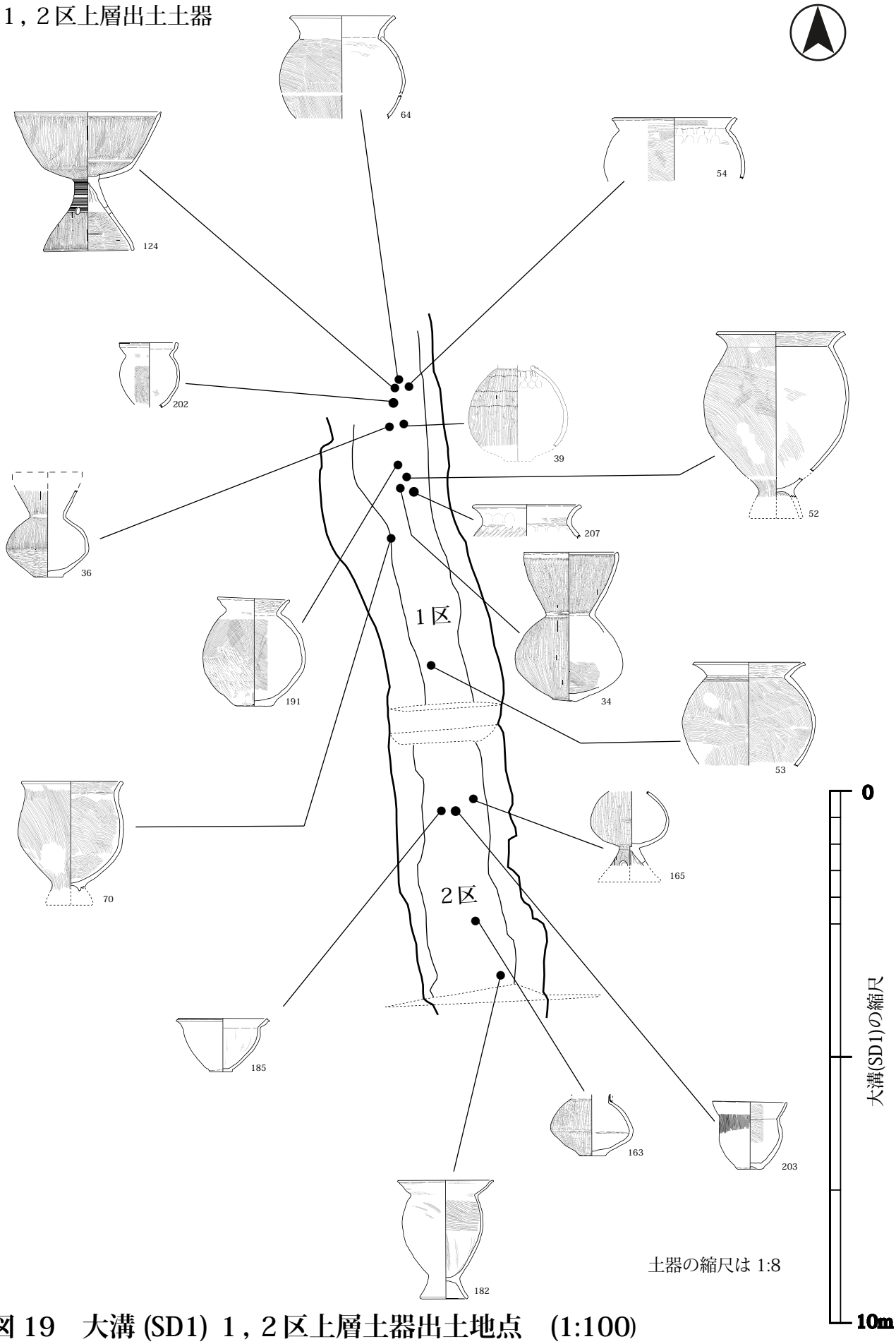


図 19　大溝 (SD1) 1，2区上層土器出土地点　(1:100)

1，2区下層出土土器

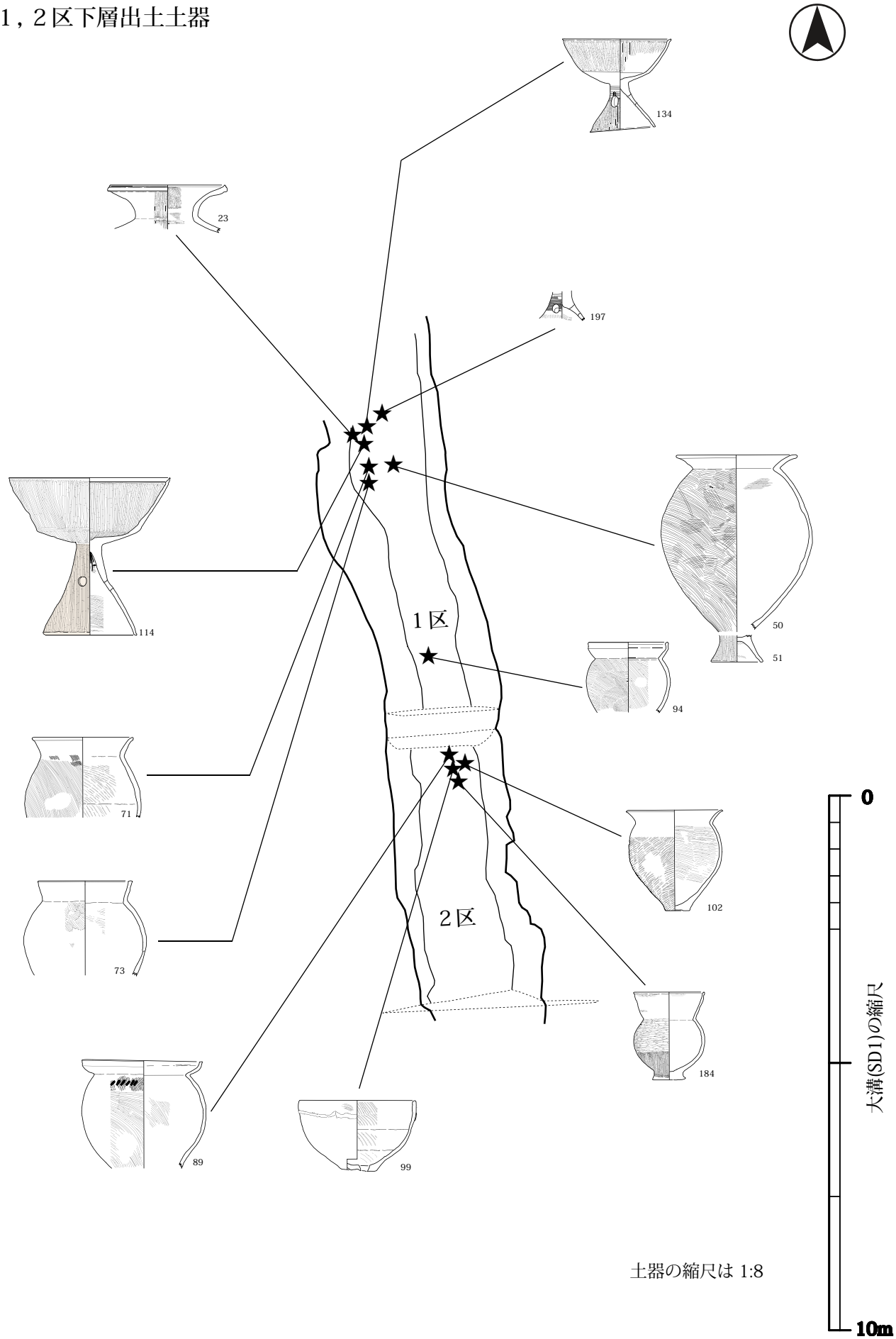


図 20　大溝 (SD1) 1，2区下層土器出土地点　(1:100)

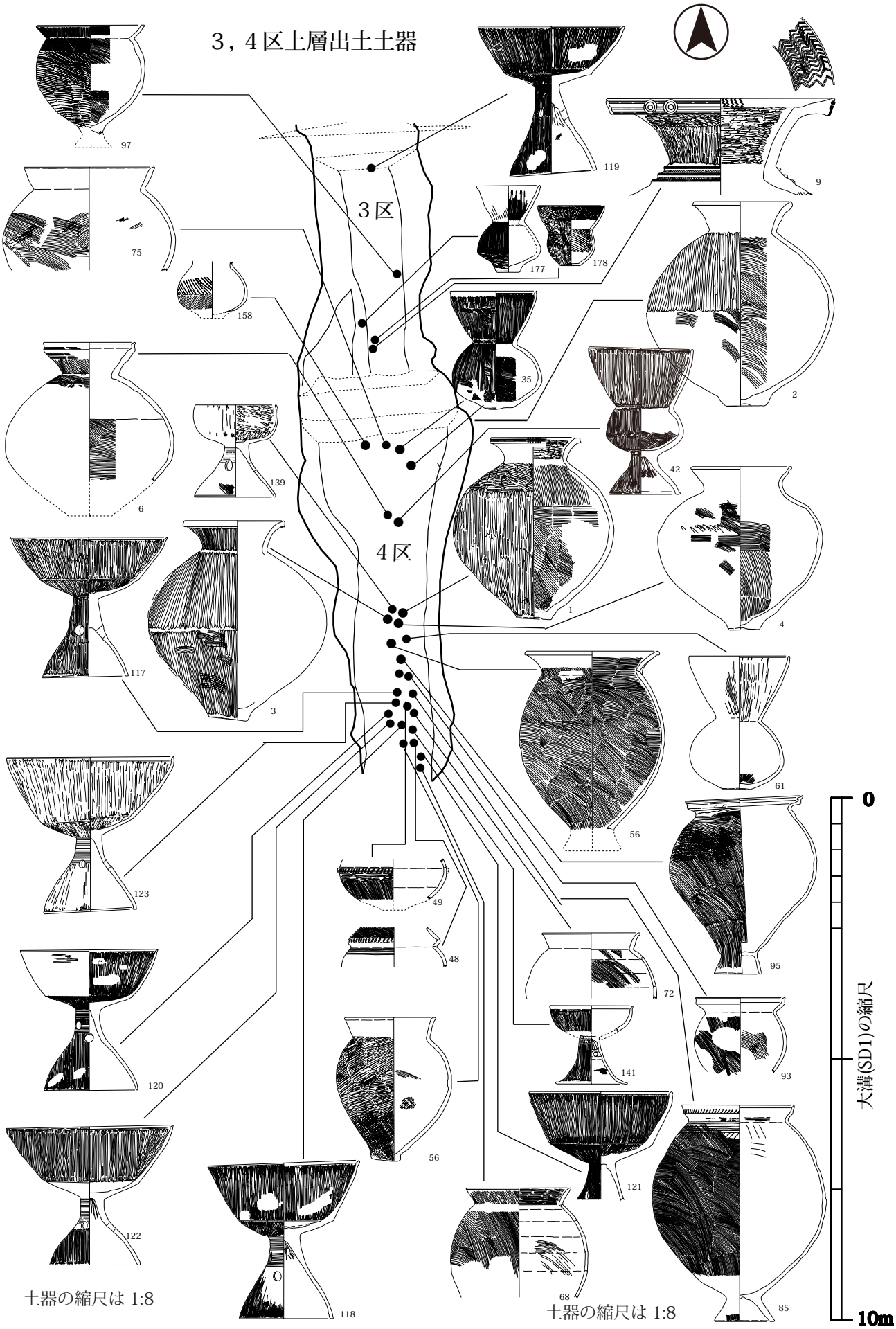


図 21　大溝 (SD1) 3，4 区上層土器出土地点　(1:100)

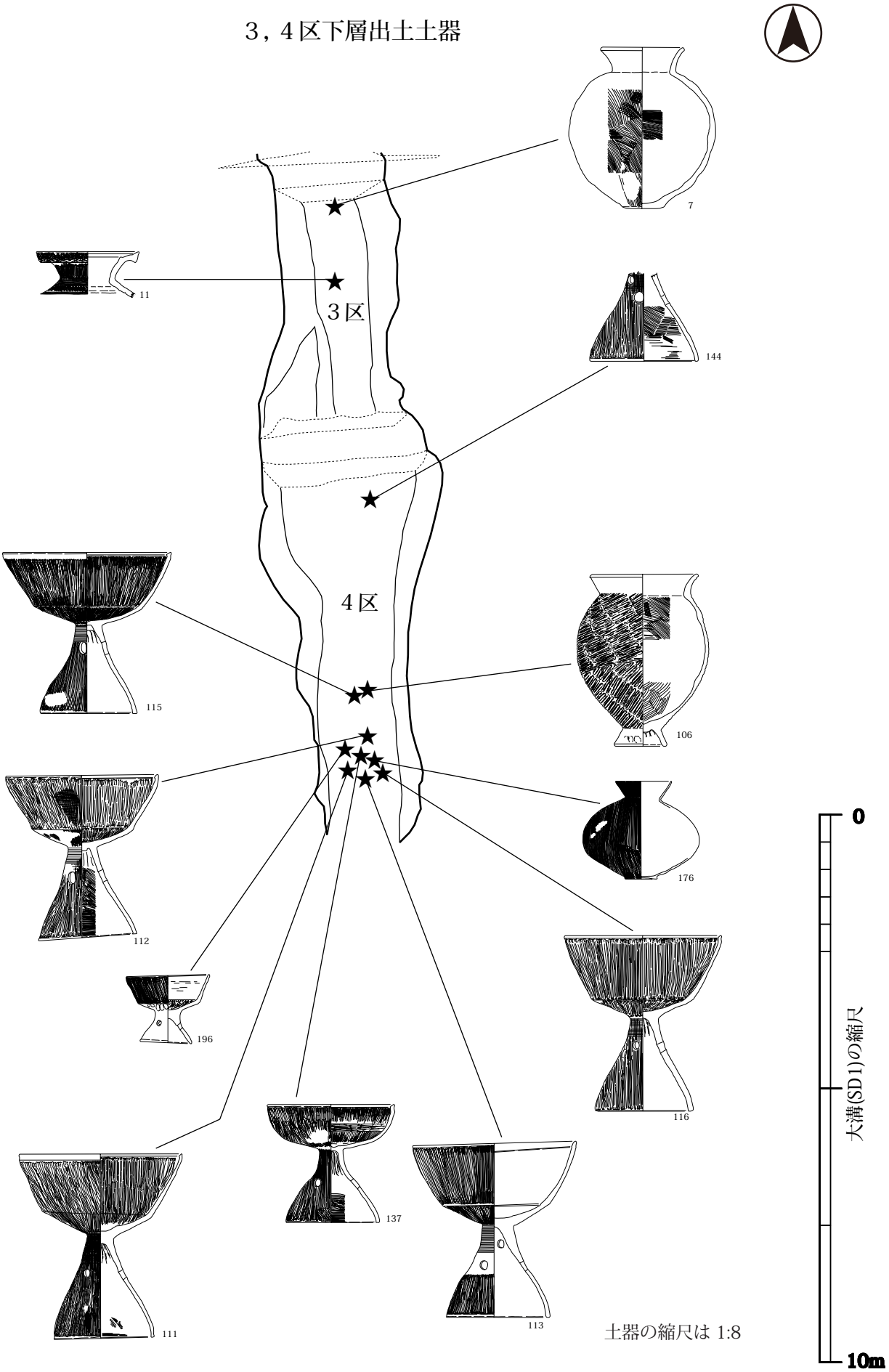


図 22　大溝 (SD1) 3，4 区下層土器出土地点　(1:100)

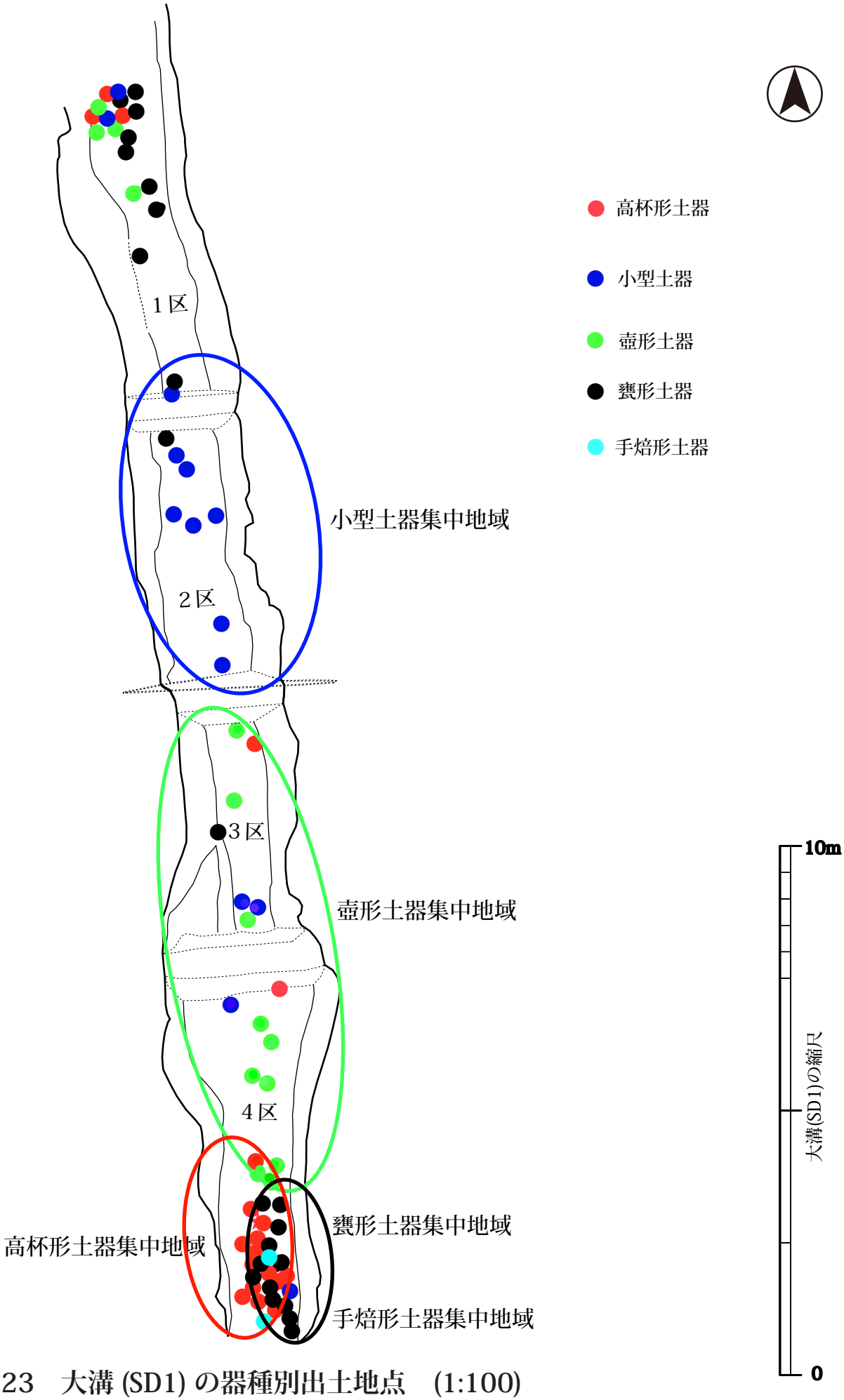


図 23　大溝 (SD1) の器種別出土地点　(1:100)

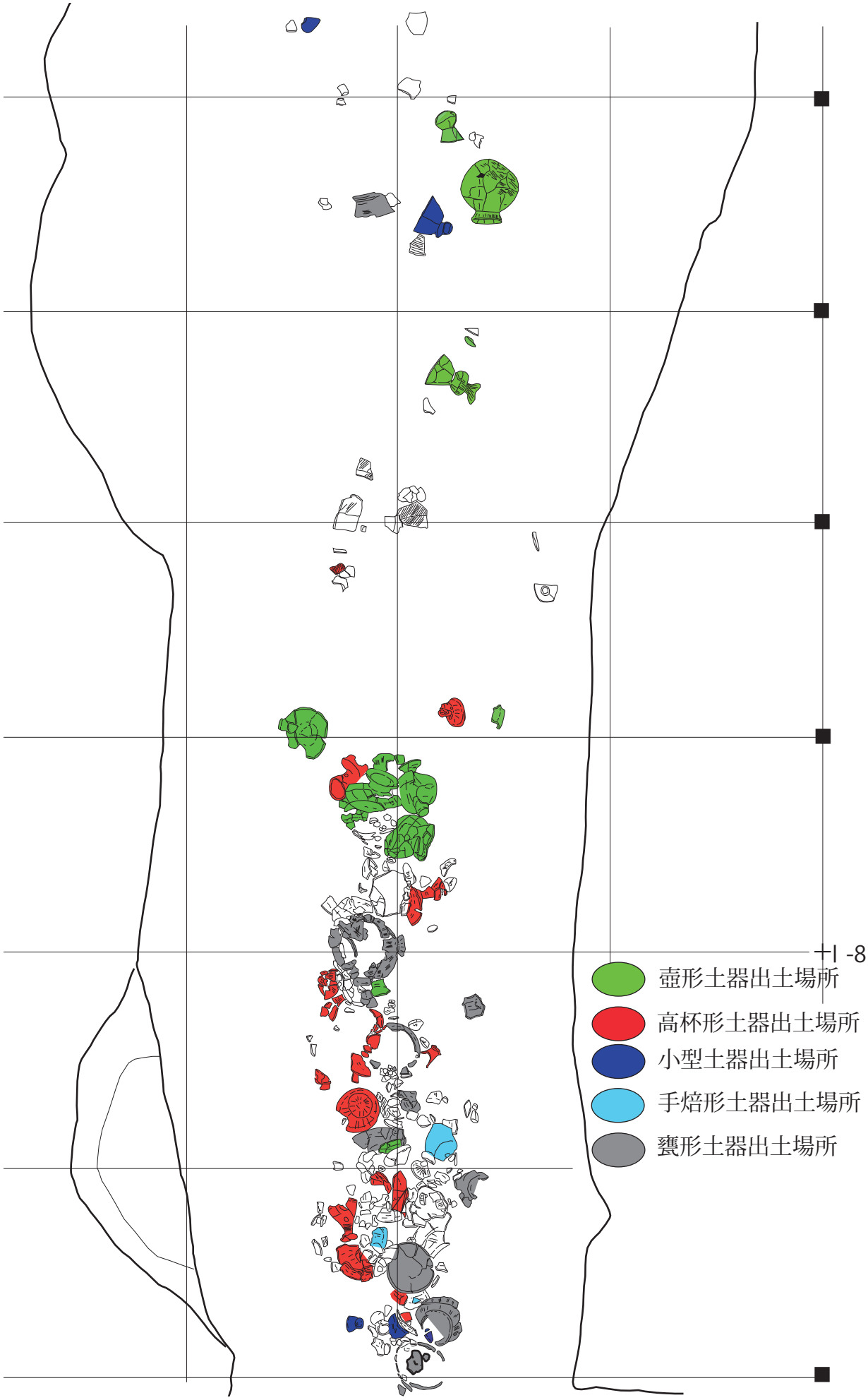


図 24　大溝 (SD1)4 区上層の土器出土状態　(1:25)

4）方形周溝墓の土器出土地点 (SX01 ～ SX05)

方形周溝墓は SX01 ～ SX05 の 5 基検出された。SX01,SX02 の 2 基の形態は，周溝の 1 箇所あるいは 2 箇所が途切れ陸橋を持つ A 1 か A 2 型。SX03 ～ SX05 は，周溝の中央部に陸橋を持つ B 型で，3 基が南北に並ぶが，SX05 は 20m 程東側に離れている。方形周溝墓の出土土器は，周溝の出入り口に相当する陸橋横のやや幅を広げた溝下底から出土した。SX01,SX02 から出土した壺形土器は，古里遺跡では珍しく飾られた壺で，大溝 (SD1) 出土の壺形土器が殆ど飾られることがないだけに方形周溝墓の壺形土器は対照的である。401 は，口縁部から上胴部にかけ櫛描文や刺突文を施している。胴部を斜めから横方向に丁寧な篦磨きで仕上げている。すべての墳丘部は既に削平されており土器の検出はなかった。

但し，351 は包含層としたが，SX01 の上面から検出しており SX01 に付随するものかもしれない。403 の高杯は，杯下半を篦磨きで仕上げるが，杯上半は刷毛痕跡が残り大溝 (SD1) 出土の高杯に比べると雑な仕上げである。脚部は直線的に広がり端面も丸く終わる。脚上部に櫛描直線文を残す[③]。因みに，「径稜比率」は 44.0(口径 :24.8cm　稜径 :10.9cm　杯深 :9.0cm) で，大溝 (SD1) 出土の高杯とは時間差がある。SX02 の 412 は，貝殻を用いた連弧文や大小 2 種の工具で中空の竹管文を描く。胴下半は赤彩を施している。よく飾られた土器だが器壁が厚く，重い土器である。

SX03 出土の口縁が内彎気味の 413 は全面刷毛目で仕上げた短頸壺が 1 点出ている。SX05 からは胴下半部の一部を篦研きしているが，刷毛痕を多く残す壺が出土している。方形周溝墓 SX01，SX02 は廻間 I 式後半に併行し，SX03 ～ SX05 は廻間 II 式中頃に併行する。

5）土坑 (SK107) の土器出土地点

方形周溝墓 (SX01 ～ SX04) のほぼ中央部に径 2 ～ 2.5m，深さ 30cm 程の浅い落ち込みがある。この中で 11 点の土器が置かれたような状態で検出されている。破砕され，半分ほどが欠失したパレススタイル壺 501 は，口縁端に篦による波形文を描き，その篦沈線上に赤彩を施す。口縁内面及び胴部外面も赤彩を施す。頸部は凸帯を持ち，頸部から胴部にかけ櫛描直線文と刺突文を施す。胴部は斜めから横位の篦磨きで仕上げる。華麗に飾った土器であるが，底部も含めバラバラに砕かれている。破片の一部は大溝 (SD1) の 4 区南端付近でも検出されており意図的な破砕を思わせるが，この点は後に述べる。

他に，503 もパレス壺だが小片である。瓢壺も 2 個検出されているが，504 は完形に近い。高杯は，方形周溝墓 (SX01) 出土より更に後出し，513,514 共に脚部が細くなり，稜を無くしていく段階のものである。土坑 (SK107) は瓢やパレス壺，高杯等から方形周溝墓 (SX03 ～ SX05) とほぼ同時期の廻間 II 式中頃併行と考えられる。

大溝 (SD1) と方形周溝墓・土坑 (SK107) の土器を対比させると図 25 のように明瞭な差がある。方形周溝墓・土坑は飾られた土器を主体とし，小型土器は含まない (414 はﾐﾆｭﾁｱ)。器種構成では，大溝 (SD1) 出土土器は壺 / 高杯 / 甕 / 小型が 4 分するが，方形周溝墓・土坑は壺 / 甕が主体になる。

又，甕の口縁形状は，大溝 (SD1) が「くの字甕」主体に対し，方形周溝墓・土坑 (SK107) は「受口甕」が主体になる。この変化は遺構の性格の違いもあるが，『廻間[④]』の報告でも述べられているように時間的変化と見られ，廻間 I 式から II 式の過程で「くの字甕」から「受口甕，S 字甕」に変化していく状況を反映していると考えられる。但し，北伊勢は「S 字甕」よりも「受口甕」が主体である。尚，大溝 (SD1) の中に叩き甕を含めているが，叩き甕はイレギュラーな混入であり対象から除くと，「くの字甕」比率が 66.7％になる。従って，この間の変化は，「くの字甕」／「受口甕」≒ 2 ／ 1 が 1 ／ 3 へと逆転する。

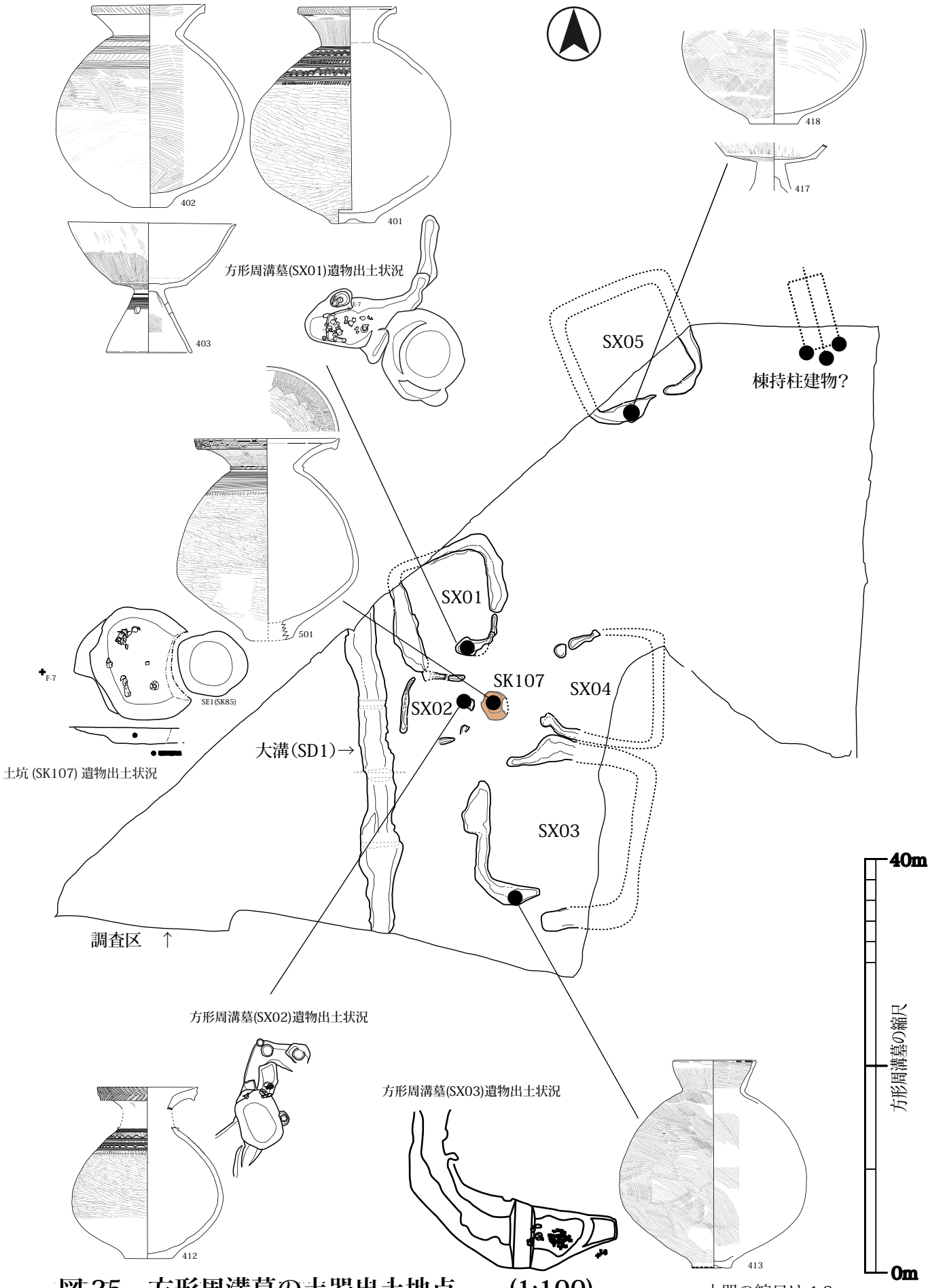


図 25　方形周溝墓の土器出土地点　　(1:100)

土器の縮尺は 1:8

	大溝 (SD1)		方形周溝墓等	
	個数	割合（%）	個数	割合（%）
くの字甕	24	54.5	2.0	25.0
受口甕	12	27.3	6.0	75.0
叩き甕	8	18.2	0.0	0.0
計	44	100.0	8.0	100.0
大溝 (SD1) 出土甕の口縁部形態				

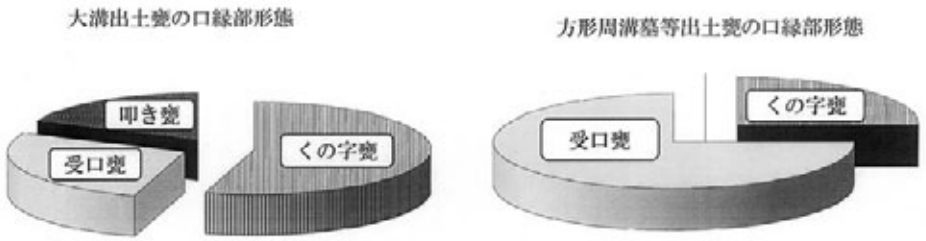


図 26　V口縁部の形状比較（大溝，方形周溝墓）

2．古墳時代後期の遺物

古墳時代後期の遺物は殆どが SD5 から出土し，その他の土坑も少量の遺物が出土しているが，この時代の全体像は窺うべくもないが SD5 の出土物を中心に述べる。

須恵器：杯蓋 (601 ～ 605)，杯身 (606 ～ 607)，高杯 (609)，ﾊｿｳ (608)，鉢 (610)

6 世紀初頭～前半を中心とする時期である。一部，混ざりがある。

土師器：椀 (611,612)，高杯 (613 ～ 617)，甕 (618 ～ 626)

須恵器とほぼ同時期の土師器類で椀 (611) は関東系の土師椀である。甕は S 字状口縁台付甕の系統をひく宇田型甕である。口縁部を平坦近くに肥厚させ独特の刷毛目を施す。台部内側下端は折り曲げて仕上げる。鉢 (610) は体外面下半に叩きを施す。

SD5 出土以外の土器に，脚部を欠失するが大形の器台 (636) がある。又，扁平な把手を付け底部中央に板状の桟を持つ甑がある。土錘 (640 ～ 643) が SK127，SK175 などから出土しているが所属時期の決め手を欠く。おそらく古墳時代と想定しておきたい。又，包含層から水晶製の大型勾玉 (644) が出土している。長 4.2cm，幅 2.1cm，穴径 1 ～ 2mm で黄色味かかって，やや透明性が劣る。やはり，この時期と判断しておきたい。

3．奈良～中世～近世初期の遺物

調査地区の各遺構や包含層から奈良時代から近世初期の遺物が出土している。

奈良時代から平安時代の遺物は，山茶碗 (717)。

中世～近世初期の遺物は，羽釜 (701 ～ 706)，茶釜（707)，常滑練鉢 (708 ～ 710)，瓦質火鉢 (711)，天目茶碗 (712 ～ 716)，土師皿 (720 ～ 735)，土師鉢 (736,737)，金箔瓦 (738)，常滑大甕 (739) 練鉢としたが，捏鉢の可能性もある。金箔瓦は織田信長の３男 信孝の居城・神戸城が 1 km 南にある。そこから運ばれたものか，廃棄されたかであろう。天目茶碗 (716) は志野風である。土師皿は SK77，SK79 等の井戸から出土したものである。多くが煤を付着させており目的が注視される。

Ⅵ．個別土器の解析

1．高　杯

1）高杯解析による大溝 (SD1) の時期比定

高杯は壺や甕などに比べると，型式変化が大きく，時間変化が見易い器種で，これまで赤塚氏は『廻間遺跡』の中で径稜比率（口稜比＝稜径／口径× 100）から廻間式の細分を図っている。又,『山中遺跡』では，山中様式の高杯の細分は径深比率 A（杯部の深さ／杯部口径× 100）が変化を見易く，廻間様式の高杯は径稜比率（稜径／杯部口径× 100）が時間的変化を捉えやすいと述べられ，型式の違いによって用いる手法を変えている。他方，川崎氏は『嶋抜Ⅲ』の中で脚高／杯高比を求めている。

上村氏は『弥生土器の編年と様式』の中で第Ⅴ様式は径深比率 B(稜までの深さ× 2 ／口径× 100), 第Ⅵ様式は赤塚氏の径稜比率を用いている。古里遺跡の大溝 (SD1) についても同様の手法で数値情報化し，客観的判断を行っておく。
又，併せて，統計的手法による平均値や標準偏差を求めておく。用いる数値情報は，古里遺跡の大溝 (SD1) から 35 個体の高杯が出ているが，杯から脚までほぼ完全にわかる 13 個体のみを検討の対象とした。尚，廻間式の高杯の変化は，口縁部径に対する稜幅の縮小 (径稜比率) と全高に対する杯部の深さ (高深比率) 拡大であり，三法の変化をみていく。

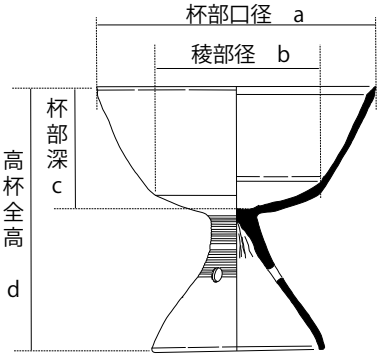


図 27　高杯の計測ポイント

報告書番号	口縁部径 a	稜径 b	杯の深さ c	全高 d	大溝内の出土場所・層位	径稜比率 b/a × 100	径深比率 A c/a × 100	高深比率 c/d × 100
111	23.7	16.0	11.2	27.0	4 区・下層	67.5	47.3	41.5
112	22.2	14.6	9.9	23.6	4 区・下層	65.8	44.6	41.9
113	23.8	15.4	10.8	25.2	4 区・下層	64.7	45.4	42.9
114	24.0	15.5	8.9	23.2	1 区・下層	64.6	37.1	38.4
115	24.5	15.8	10.0	23.2	4 区・下層	64.5	40.8	43.1
116	22.8	14.7	11.0	25.3	4 区・下層	64.5	48.2	43.5
117	24.0	15.1	9.3	21.2	4 区・上層	62.9	38.8	43.9
118	23.1	14.5	9.6	23.6	4 区・上層	62.8	41.6	40.7
120	21.0	13.1	8.0	21.4	4 区・上層	62.4	38.1	37.4
124	22.0	13.0	9.6	20.6	1 区・上層	59.1	43.6	46.6
119	22.4	13.1	7.5	22.6	3 区・上層	58.5	33.5	33.2
122	25.5	14.1	10.0	20.9	4 区・上層	55.3	39.2	47.8
123	25.5	13.8	11.2	23.4	4 区・上層	54.1	43.9	47.9
				径稜比率	径稜比率	径稜比率	径深比率 A	高深比率
				b/a × 100	b/a × 100	b/a × 100	c/a × 100	c/d × 100
		対象土器 No.		111 ～ 116 (下層)	117 ～ 124 (上層)	111 ～ 124 (全体)	111 ～ 124	111 ～ 124
		ﾃﾞｰﾀ数	(n)	6	7	13	13	13
		平均値	(μ)	65.3	59.3	62.0	41.7	42.2
		標準偏差	(σ n-1)	1.2	3.6	4.1	4.3	4.2
		最大値	(Max)	67.5	62.9	67.5	48.2	47.9
		最小値	(Min)	64.5	54.1	54.1	33.5	33.2

表 4　十宮古里遺跡出土高杯の統計解析（1）

13 個の高杯を径稜比率でみると，径稜比率が大きい 111~116 の高杯は大溝 (SD1) の下層から出土しており，明確な層位による調査とは言えないが時間差を想定してもよいだろう。この点から見ても径稜比率は廻間期の細分に適した方法と言え，「尾張」での編年だけでなく「北伊勢」にも適用できる

と考えられる。この結果から，大溝 (SD1) は 111 ～ 116 の高杯の時期と 117 ～ 124 の高杯の時期の 2 時期にわたり継続利用された遺構であると考えてよい。

時間幅をもう少し厳密に規定しておきたい。モノのまとまり度（バラツキ）を判断する方法に統計的手法⑤でいう標準偏差 (σ) がある。標準偏差は，今，土器という素材を取り上げた場合，２つの利用が考えられる。１つは土器が量産化される過程で人と製作技術，焼き方，使用粘土や混和剤等が固定されるとバラツキの少ない製品が生み出され，個別の家内生産から量産化し，集中生産の過程を土器のバラツキから検討しようとするもので，最近，長友氏が畿内・庄内式甕～布留式甕について検討を加えている⑥。

もう一つは，家内生産であれ，集中生産であれ，ある指標を取り上げ，層位との関係から限られた土器の抽出が可能になり，型式変化を時間差の長短の推定に利用出来るのではないかと考える。ここでは後者を「径稜比率」を用いて検討してみる。

まず，統計的手法であるが，無限個数のデータ (例えば，径稜比率) を用いて分布をグラフ化すると左右が均等な鐘状の正規分布を示す。この分布を求めるには平均値 (μ) と標準偏差 (σ) が必要である。下に分布と平均値，標準偏差の関係を図示する。ここで，分布が広いとはいろんな種類の「径稜比率」を持つ高杯が混在していることを示しており，ａパターンのように分布が狭いとは「径稜比率」がよく揃った高杯ばかりということになり，作られた時間差が殆どないことを示している。従って，標準偏差が小さいことは極めて限られた時間内に作られた均一な土器群と言え，標準偏差が大きいとは，長い時間の土器群が混在していると言える。具体的に古里遺跡の事例で見ると，13 個の高杯は「径稜比率」の平均値：62.0，標準偏差：4.1 であるが，上層と下層に分けて再計算すると，下層は平均値：65.3　標準偏差：1.2 ，上層は，平均値：59.3　標準偏差：3.6 で標準偏差がやや大きく，更に細分化が出来る可能性がある。このように，統計的手法によって時間差を数値で判断できる可能性を示している。

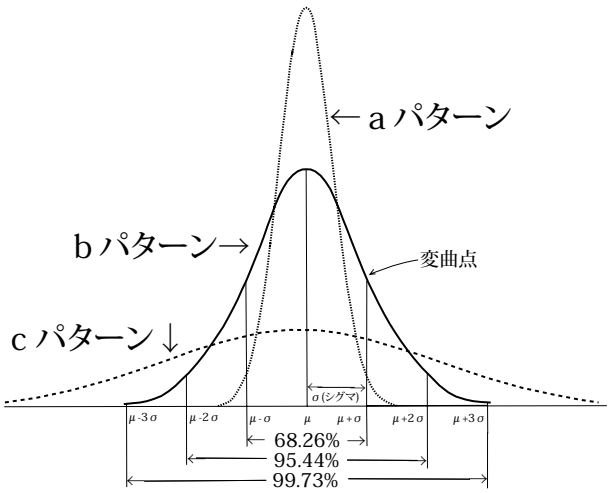


図 28　正規分布曲線（３つのパターン）

ａパターン：限られた時期に，限られた人によって作成されたﾊﾞﾗﾂｷの少ない 1 群
ｂパターン：時間誤差や個人誤差が含まれた 1 群で比較的まとまりがある
ｃパターン：長い期間に作成された 1 群で混入などもある

２）高杯による他遺跡との比較

古里遺跡の高杯を他の遺跡の高杯と比較し，時間差を厳密に捉えておきたい。
同様の方法で，他の遺跡出土の完形に近い高杯を報告書から「径稜比率」を計測，計算を行い，表５に結果を示す。

八王子，草山 (SB38,SX114)，印田・織糸，古里遺跡は標準偏差が小さく，極めて均質な短期間に限定生産された高杯群と言える。しかし，草山 (全遺構)，阿形，六大Ａ遺跡は各種の高杯が含まれており標準偏差，最大値－最小値も大きくなりバラツキが大きく，土器製作時期が異なる高杯を含んでいることを示している。言い換えると，長期にわたり遺跡が営まれたと言える。このように見てくると，統計的手法も条件さえ整えば，土器の解析に用いることができると考えられる。

遺跡名	所在地	遺構名	ﾃﾞｰﾀ数	平均値	標準偏差	最大値	最小値	最大値-最小値	高深比率（参考）
			n	x	σ n-1	Max	Min	Max-Min	c/d × 100
八王子	愛知・一宮市	SK73	6	76.9	2.7	80.3	73.4	6.9	35.7
草山	三重・松阪市	全遺構	61	68.1	11.9	88.5	37.3	51.2	38.3
草山	三重・松阪市	SB38,SX114	17	68.6	5.2	45.8	29.1	16.7	37.3
阿形	三重・松阪市	全遺構	17	64.4	15.8	85.1	38.5	46.6	38.6
嶋抜	三重・津市	全遺構	8	60.2	9.6	80.0	48.7	31.3	40.0
織糸	三重・明和町	全遺構	5	58.4	5.6	63.6	50.4	13.2	43.7
印田	三重・明和町	全遺構	3	58.3	2.3	60.8	56.6	4.2	47.0
織糸・印田	三重・明和町	全遺構	8	58.4	4.4	63.6	50.4	13.2	44.6
六大A	三重・津市	全遺構	51	58.7	17.6	97.4	34.6	62.8	42.4
古里	三重・鈴鹿市	SD1 全体	13	62.0	4.1	67.5	54.1	13.4	43.9
古里	三重・鈴鹿市	SD1 上層	7	59.3	3.6	62.9	54.1	8.8	42.5
古里	三重・鈴鹿市	SD1 下層	6	65.3	1.2	67.5	64.5	3.0	41.9

表５　他遺跡との高杯「径稜比率」比較

尚, この手法を用いて「径稜比率」から時間差を考えると, 八王子→草山 (SB38,SX114) →古里 (下層) →印田・古里 (上層) 遺跡と推移し，阿形，嶋抜，六大Ａ遺跡はこれらを含む全時期を通じて遺跡が営まれていたことになる。尚，織糸・印田・古里 (上層) 遺跡はほぼ同時期で廻間Ｉ式前半併行と考える。

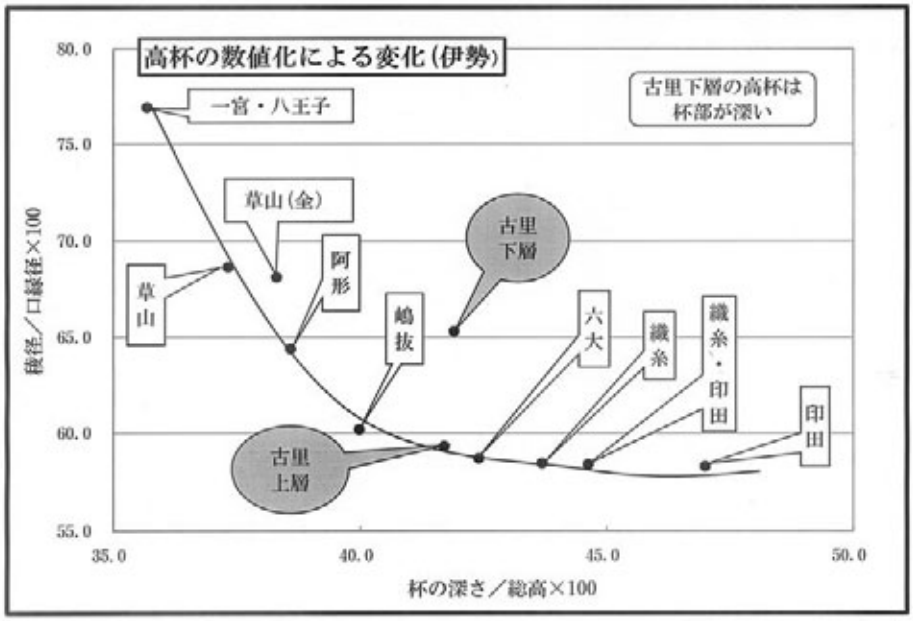


図 29　高杯の数値化による変化

３）高杯の編年

表６は包含層等から出土した高杯を時間軸で整理し直した[7]。3-1 ～ 3-8 はいずれも小片で杯の下部までないが，弥生時代後期 (山中期) から古墳時代初期 (廻間期) に至る変化が窺える。小破片の為，正確さを欠くが「径稜比率」「径深比率」を確認しておく。

3-1 ～ 3-8 は径稜比率が，概ね 80 より大きくなるが，114,116 は 60 台に，124 は 50 台に，403 は 40 台へと変化する。径深比率も 3-1 ～ 3-8 の中では次第に大きくなるが，114,116 以降，最大になって再び小さくなる。赤塚氏が述べてきたように，径深比率は山中期と廻間期で傾向が変わり，この時期が，径稜比率／径深比率ともに変化が見られ，高杯の画期と言える[8]。

実測 No.	口縁部径	稜部径	杯の深さ A	杯の深さ B	出土場所	径稜比率	径深比率 A	径深比率 B
	a	b	c	d		b/a × 100	c/a × 100	d × 2/a × 100
3-1	22.0	19.4	4.8	2.9	SD1　1 区	88.2	21.8	26.2
3-2	27.0	23.6	5.2	2.7	SD1 上面包含	87.4	19.3	20.1
3-3	29.2	24.6	5.6	3.8	SD1　4 区	84.2	19.2	26.0
3-4	26.4	22.6	6.0	3.8	SD1　3 区	85.6	22.7	28.8
3-5	27.4	22.8	6.2	3.6	SD1　4 区	83.2	22.6	26.3
3-6	23.6	18.4	5.8	2.8	SD1　2 区	78.0	24.6	23.7
3-7	23.2	19.2	8.2	5.2	SD1　2 区	82.8	35.3	44.8
3-8	26.8	22.6	9.6	5.7	SD1　1 区	84.3	35.8	42.7
114	24.0	15.5	8.9	7.6	SD1 1 区下層	64.6	37.1	63.3
116	22.8	14.7	11.0	9.3	SD1 4 区下層	64.5	48.2	81.6
124	22.0	13.0	9.6	8.4	SD1 1 区上層	59.1	43.6	76.4

表６　十宮古里遺跡出土高杯の統計解析（２）

杯部以外の変化は , 既に述べたが再度，まとめておく。
山中期以降，杯部は深さを増していくが，脚部も直線的に広がるもの (114) から次第に内彎する形態 (116 → 124) へと変化する。更に，杯部は深くなり，脚部は高さを減じながら直線的に開く形態 (403) に変わる。脚端部もそれまで面を形成したが，丸くおさまるようになる。以後，高杯の小型化が進むが，過渡的様相を示す段階では杯部は大きさを減じ，稜も不鮮明になる。脚部が細く，大きく広がる形態に変わる。尚，403 のように径深比率が 40 程度になっても脚上端に櫛描直線文を施す (305 も同例)。

古里遺跡の高杯から検討した大溝 (SD1) の時期は，下層と上層に分かれるがいずれも廻間Ⅰ式前半の中におさまる。方形周溝墓 SX01,SX02 は廻間Ⅰ式後半併行。SX03 ～ 05 は出土土器が少なく決め手を欠く。しかし，方形周溝墓の並び方，形式から土坑 (SK107) と同じ頃の廻間Ⅱ式中頃併行と考えられる。

高杯の編年

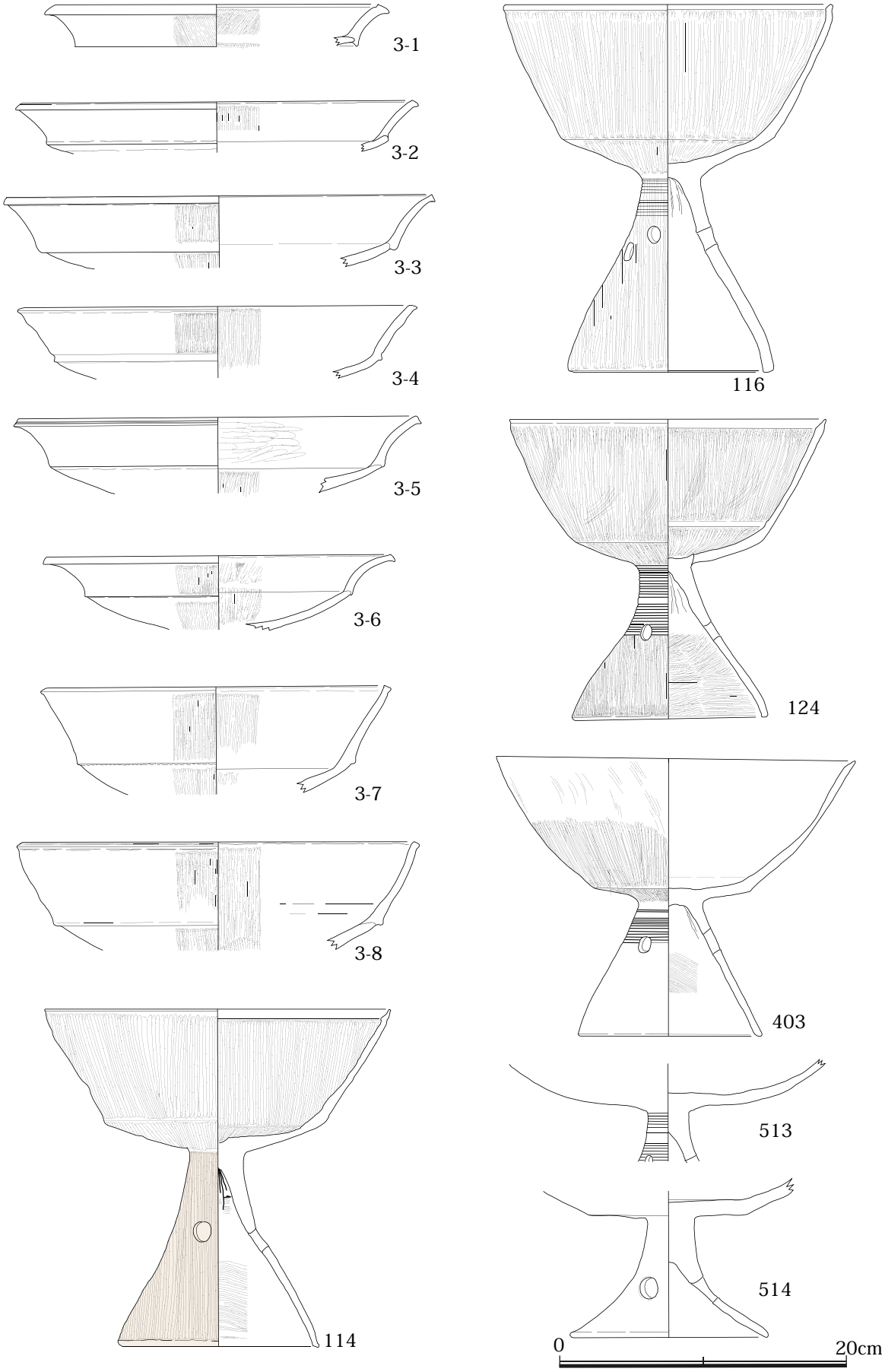


図 30　高杯の編年（型式変化）　（1：4）

2．パレススタイル壺の出土状態と土器の破砕について

パレススタイルの壺は古里遺跡の大溝 (SD1) と方形周溝墓周辺で見られたが，破片が多く全体の形状がわかるものは 412 と 501 である。412 は施文に貝殻を多用し時期的に廻間Ⅰ式後半まで遡る。356 も口縁端に凹線をもつ山中期のパレス壺である。この２点を除外すると，殆どが廻間Ⅱ式中頃になる。これらのパレス壺を仔細に見ていくと，501 は実測図が反転で書けるものの口縁部から底部まで約半分が欠けており，欠落が激しい。且つ，出土場所は SK107 の土坑に残部の８割以上が残っていたが，残りの破片の一部は 20m 離れた大溝 (SD1) の南端上部から出ている。1-2，1-7 ～ 1-10 も同様，１箇所からの出土でなく，大溝 (SD1) およびその周辺の遺構から検出している。土器の取り上げ日や出土場所が大溝 (SD1) 遺構を掘り下げる前のグリッド名であったり、大溝 (SD1) 設定直後の日付が殆どである。この事実から見ると、パレス壺が廃棄されたのは大溝 (SD1) が埋没した後であると考えられる。しかし、方形周溝墓及びその上部から廻間Ⅱ式中頃のパレス壺が検出されていないことから方形周溝墓には廃棄されていないことになる。

この特徴あるパレス壺の破片が大溝 (SD1) を中心に広い範囲に広がっている様子を図 31 に示す。同一個体が１か所でなく、２～３ヶ所に広がっており、通常の廃棄に伴う分布とは異なり、極めて特殊な分布を示している。且つ、各個体を集めても全体の１～２割にしかならず、更に、広い範囲に広がっていると推察される。又、分布について強いて言えば、土坑 (SK107) を中心に 15 ～ 20m の距離を持ち、且つ，弧状に広がっている。あたかも、SK107 からほうり投げたようでもある。他遺跡におけるパレス壺廃棄の事例は聞かない。

古里遺跡の他の破砕例として，大溝 (SD1) から出土した土器の中には同様に破砕された事例が見られる。破砕は全ての器種にみられ，特に破砕が顕著な土器の位置は，壺は，口縁部と胴部の接合が行われた頸部に集中し，一部，胴部への打撃痕を残す事例もある。甕は同様に口縁下の頸部と胴下部～台部の接合部分に集中する。高杯は杯部と脚部の繋ぎ部分に多いが，少数は杯部に打撃を加える事例もある。小型土器は形状でやや打撃位置が異なるが，壺同様，頸部と一部胴部への打撃がある。特殊な例として，183 は底部への打撃のみならず，パレス壺同様，完砕している。この土器は，非常に硬い土器でよく磨いている。小型の甕も大形甕同様，頸部と台部で割れている。全体で見ると，破砕を行った部位は，放射状の打撃痕が残り，粘土の接合部分での破砕が多く，頸部，台部，脚部に集中する。しかし，これらの破砕は，破片にはなっていたが復元出来ており，破砕行為は行ったもののパレス壺のようにばら撒かれるような行為は伴っておらず，据え置いた場所での破砕と考えられる。このように，同じ破砕行為でも廻間Ⅰ式前半併行期の破砕は溝中に据え置いた土器を単に割るだけの破砕と廻間Ⅱ式中頃併行期の破砕後，パレス壺のように撒き散らすような行為を伴う２つの種類が時期を違えて存在する。破砕行為が，土器を二度と使えなくする意図は理解できるが，更に撒き散らす理由は何であろうか。破片の多くが当時，遺構の痕跡を残す大溝 (SD1) 周辺から出土していることに祭祀への拘りを感ずる。

3．叩きⅤ

近畿における弥生時代の叩き甕は，羽子板状の叩き板に平行叩き目，格子目等を刻み，叩き板を土器に叩きながら成形する。従って，器面に叩き痕が残るが，通常，「叩き甕」は伊勢地域では殆ど出土せず他の土器に混ざって出土する客体の土器である。今回の調査で器面に叩きの痕跡を残す甕は大溝 (SD1) から８個体分出土している。

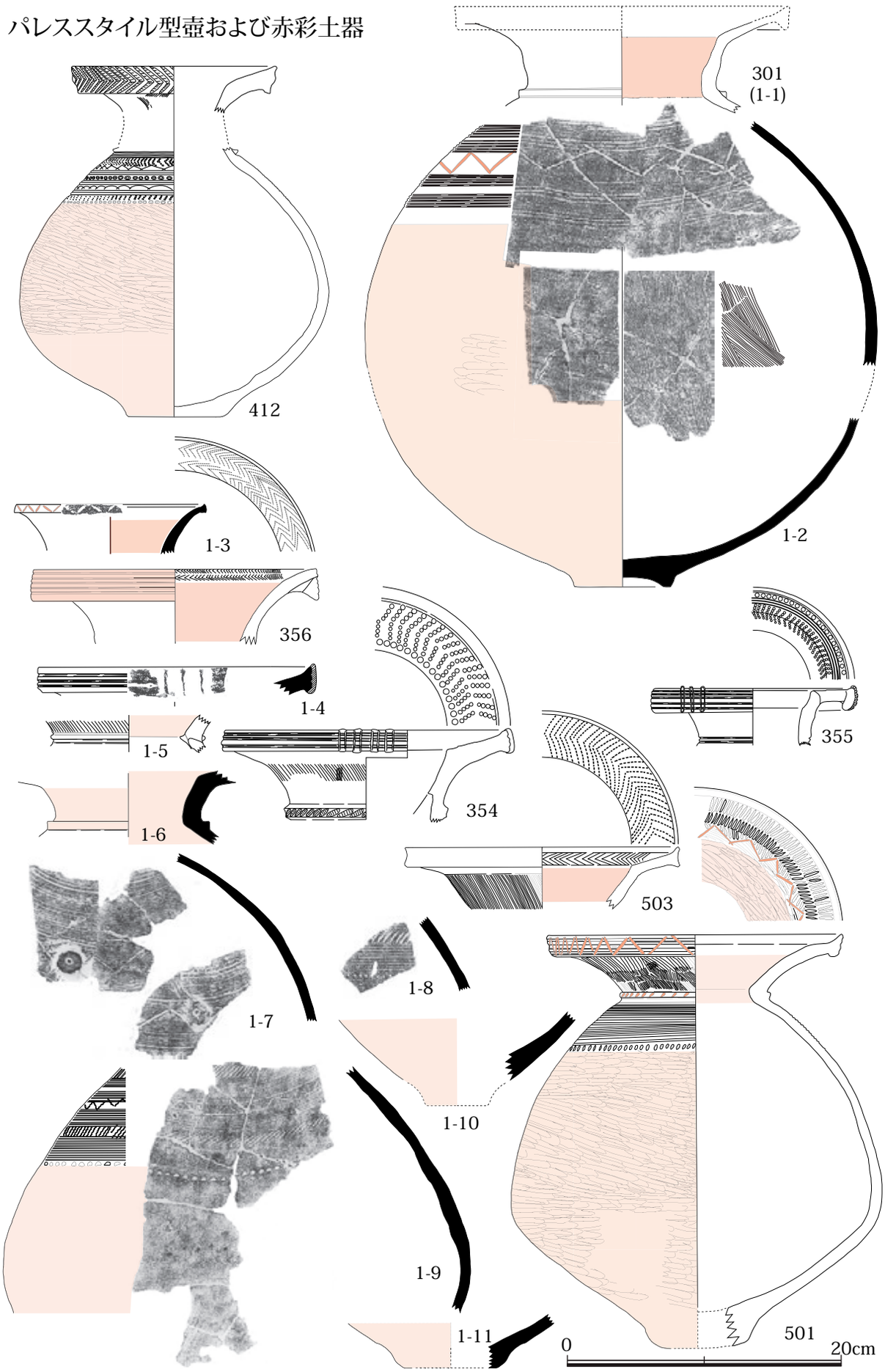


図 31　パレススタイル壺及び赤彩土器　　（1 ： 4）

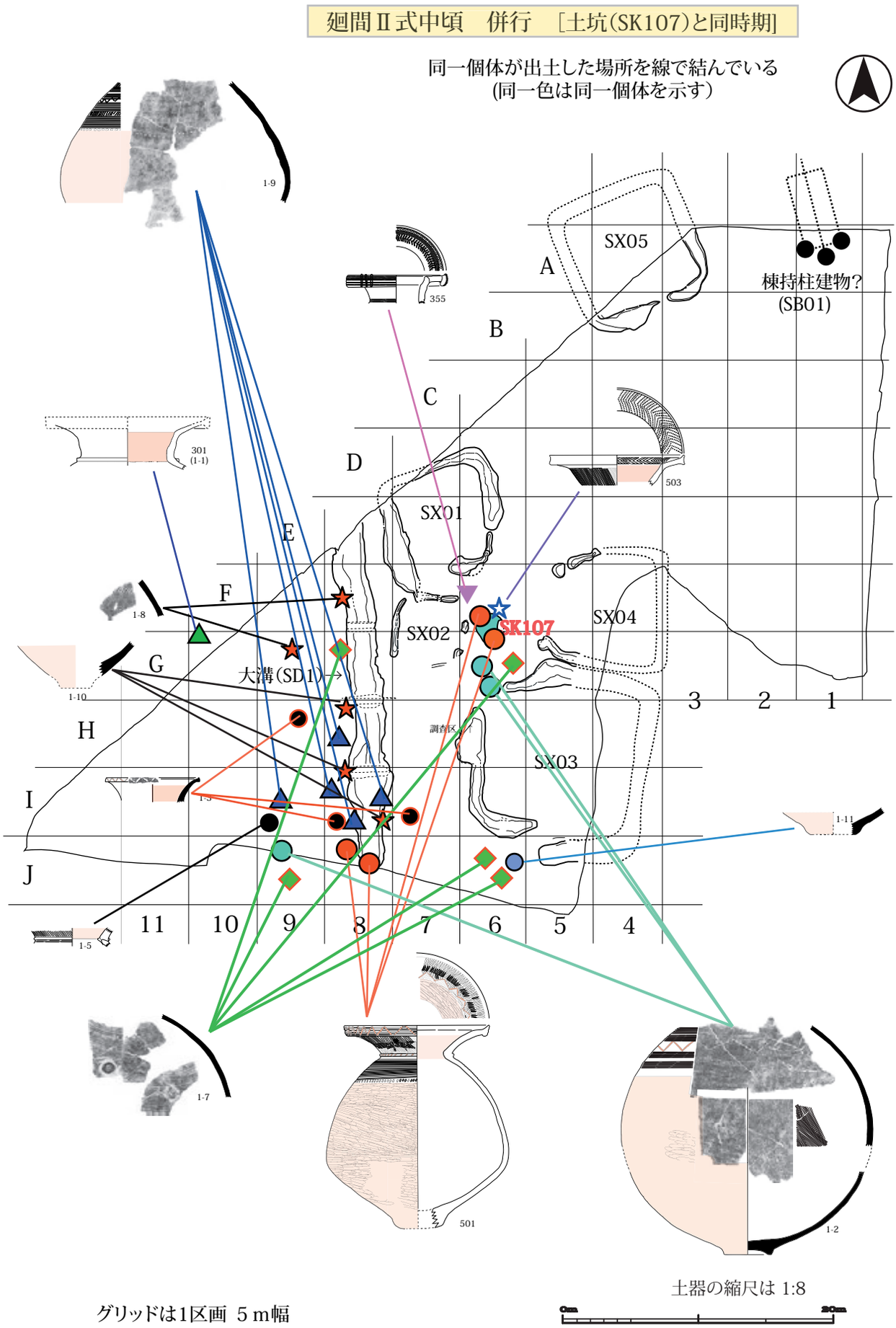


図 32　パレススタイル壺の散乱状態　　(1:400)

更に大溝(SD1)及びSK107から口縁部破片２個体(2-1,2-2)と頸胴部片８片(2-3～2-10)がある。６個体は，ほぼ完形に近く，口縁部は全て「くの字」で球形の胴部に「小さな平底を付けたもの」と「台付甕」に仕上げたものの２種があり，「叩き甕」の中心地である近畿地方の第Ⅴ様式系の甕とは異なる様相を示している[9]。

古里遺跡の叩き甕の特徴について細かく述べる。胎土をみると，102,103,2-1は茶～褐色系で他の甕とは異なり，角閃石も含んでいる。104は明るい茶～黄色系でやはり異なる色相のものである。色相から見ると106～110は黄～赤系統で前記のものとは異なり，色相の差は，底部の形状が平底のものと台付のものとの差と言っても良い。又，「台付叩き甕」の106,107,109,110は頸部や胴部に多くの刷毛目を残している。106はハケ痕を叩き目が消しており，刷毛で調整後，叩きを加えている。しかし，107,109,110は叩き痕を刷毛で消しており，叩きを加えた後，ハケで叩き痕を消している。特に,109．110の外面胴中央で顕著である。内面のハケ仕上げは痕跡の程度の差はあるが，６個すべての土器に見られる。内面のハケ仕上げは近畿の「叩き甕」も同様であり通常の方法であろう[10]。製作技法を見ると，この時期の近畿地方の叩き甕は，胴下半と上胴部を作り分ける「分割成形法」に加え，「口縁部叩き出し技法」で一体成形化が進んでいる。

102~104の土器を仔細に見ると，胴下半と胴上半で叩きの方向が異なり，この部分で接合する「分割成形法」を採用している。しかし，口縁部はその直下に粘土帯を継ぎ足した接合痕のひび割れが残ったり，体部を包み込むように接合した結果，頸部の外面に親指の，内面に中指の圧痕が残り，余分な粘土が内面に細く広がる。更に，102はその下にも接合痕が残り，２帯の粘土紐を継ぎ足していることがわかる。ちょうど体外面の叩き痕がなくなる個所が１帯目の粘土帯貼り付けを行った位置になる。従って，「３分割成形」とも言える手法で成形しており，口縁部叩き出し技法は見られず，絞り目もない。このような製作技法は，奈良県の纒向遺跡では通例の手法で殆どの第Ⅴ様式系甕がこの手法で作られている[11]。

更に，土器底をもう少し詳しく見ておこう。102の底部は平底であるが，中央部がドーナツ状に凹む輪台状である。この手法は近畿の叩き甕で良く見られる手法である。又，叩き痕は102～104ともに底部直近まで行っており据え置いて叩いたのでなく，手に持って叩く近畿の一般法で製作している。尚，104の底部は完全に平らな面をもつ平底である。103は欠失が激しく平底の確認は出来るが，輪台か否かの判断は出来ない。

他方，台付甕の106,108,109はいずれも出臍のように底中央が台部に飛び出ている。このような形状の台部は，当地の「くの字甕」に見られる技法で台部を貼り付ける際，甕内部から粘土塊を指で押しつけながら甕の底と台部の隙間を埋めていく。その際，甕内部底に押さえた時の指頭圧痕が残り，台部外側は押されて余分な粘土が出臍状に飛び出る。更に，甕内部底，外部の接合部に粘土を継ぎ足し補強する[12]。台部が当地域の「くの字甕」と同一手法で作られており，台付叩き甕は在地産と証明できる。更に，106～110の叩き密度は２本/cm程度で粗いが，102,103は３～４本/cmで叩き密度が細かく，やはり差が認められる。104,106は胴下部を右からと左からの交互叩きを行っている。叩きの目的が叩き締めによる気泡抜きや薄甕化でなく装飾的意図を持っており文様にしている可能性もある。

叩き甕の製作地については，102,103はその形状だけでなく，口縁部の作り方，論台を残す底部，角閃石を含む胎土，叩き密度などから近畿からの搬入品と考えられる[13]。106～110の台部を持つ叩き甕は叩きとハケの混用，台部の作り方，叩きの粗さなどから在地産と考える。いずれにしても結論は胎土分析など科学的な方法によって出すべきであろう。叩き甕とは異なるが，97や

98 のように一見叩きを思わせるような粗い刷毛目と細かい刷毛目で調整する「叩き模倣甕」とも言うべき一群がある。これらの「叩き模倣甕」は刷毛目甕製作地における叩き甕の導入を物語るものであろう。尚，その後の伊勢では「叩き甕」は普及せず，急激に「受口甕」へと変化していく。

小破片の叩き甕拓本は，下図のように 10 破片あるが，口縁部 2 片の内，2-2 は SK107 上面から出土したもので時期的にはやや新しく，形状も直口の鉢。2-1 は指頭により口縁下端をへこませている。やはり，口縁部に粘土を継ぎ足す手法である。103,106,107 と同容量の中形の甕であろう。このように見てくると，叩き甕は小，中，大，特大の 4 種に分かれる。但し，平底のものは小と中に限られ，台付の叩き甕は中から特大まであり，大，特大は，刷毛目の使用が顕著である。

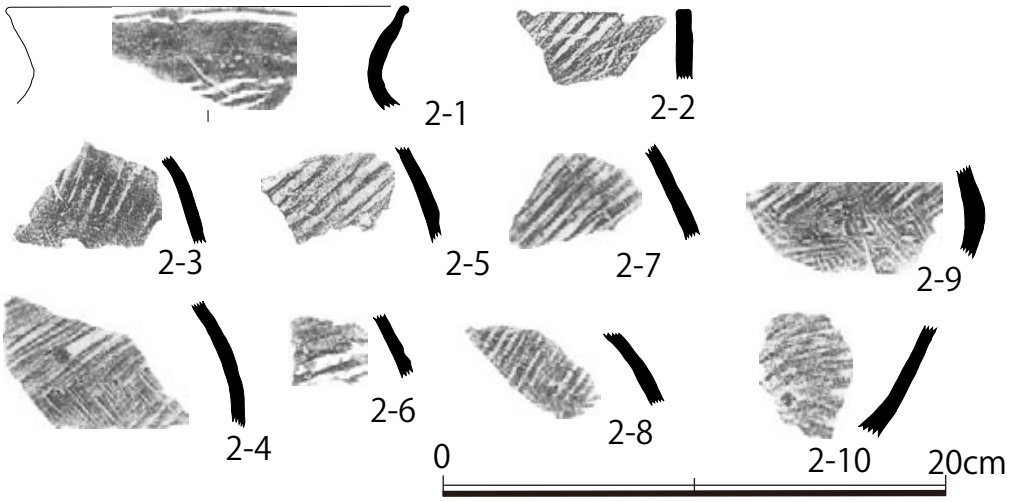


図 33　十宮古里遺跡出土　叩き甕の拓本（1:3）

土器 No.	102	103	104	105	106	107	109	110	2-1
甕の大きさ	小	中	中	中	中	中	大	特大	中
色　相	褐	にぶい褐	にぶい黄	にぶい黄	浅黄橙	浅黄橙	明褐	浅黄橙	にぶい黄褐
標準土色	10YR4/4	7.5YR6/3	10YR6/4	10YR6/4	10YR8/4	7.5YR8/4	7.5YR5/6	10YR8/3	10YR5/3
胎土	角閃石含む	角閃石 含む			角閃石む？				
口縁外	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ＋ﾊｹ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ		ﾅﾃﾞ
口縁端	丸	端部持上げ	丸	丸	端部持上げ	僅かに持上	丸		丸
頸部	ﾀﾀｷなし 一部ﾊｹ	ﾀﾀｷ ＋ 一部ﾊｹ	ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ	細いﾊｹ	ﾊｹ＋ﾀﾀｷ	ﾊｹ＋ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ
胴部	ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ	ﾀﾀｷ		ﾀﾀｷ＋凸帯	ﾀﾀｷ	中位 ﾊｹ	中位 ﾊｹ	
口縁内部	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ		
頸胴部内部	ﾅﾅﾒﾊｹ	一部ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾅﾅﾒﾊｹ		ﾖｺ / ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾖｺ / ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾖｺﾊｹ	ﾖｺﾊｹ	
口縁部作製	粘 土 帯 継ぎ足し	粘 土 帯 継ぎ足し	粘 土 帯 継ぎ足し	粘 土 帯 継ぎ足し					
内部表面状態	中位凸凹	平滑	中位凸凹	指頭圧痕	中位凸凹	中位凸凹	平滑	平滑	
底部形状	平底（輪台）	平底	平底		台付（突出）	台付	台付（突出）		
総高 (cm)	14.8	23	22.0		23	推 21.0	33.2		
口縁部径	14.4	15.5	13.9	16.0	15.8	16.2	21.5		15.6
最大胴径	13.8	18.5	17.5		19.2	19.3	29.0	推 40<	
胴径 / 口縁径	0.96	1.19	1.26		1.22	1.19	1.35		
胴径 / 総高	0.93	0.80	0.80		0.83	0.92	0.87		
叩き密度（本 /cm）	2.8 ～ 4.0	2.6 ～ 3.0	2.0 ～ 2.1		1.3 ～ 1.5	2.4 ～ 2.5	1.6 ～ 2.1	2.0 ～ 2.3	2.0

表 7　十宮古里遺跡出土　叩き甕の特徴

4．受口口縁甕

大溝 (SD1) の上部周縁及び包含層出土の土器片から検討した[⑦]

この時期の甕の殆どが「くの字甕」と既に述べたが，この時期以降，急激に「受口甕」へと変化していく。この変化がどのような形状変化を起こすか古里遺跡の小破片で比較する。

受口の甕は，口縁部の形状から便宜的にａ～ｄの４種に分けた。

ａ形：従来，近江型と呼ばれていた前代の系統を受け継ぐものである。このタイプは口縁上端に内傾する面を形成し，外端面は，端面全体や下端に刺突文を施す。量的には多くないが北伊勢にもよく見られる。尚，津市の六大Ａ，Ｂ遺跡から出土の同類は後期の初め頃に遡るが平底を呈し，近江地方と近似している。尚，これまで便宜的に近江系の甕として呼んで来たが，穂積氏は近江型との分離により「伊勢型」が存在すると提唱している[⑭]。

次に，ａ形の系譜を引くａ’形で口縁上端に面を形成するが，端面が幅狭くなり下端面に刺突文を施す。受口部はａ形のように鋭角的な変化はなく丸みを帯びる。

ｂ形：受口の端面を丸く収めたもので口縁外端面に刺突文および頸部から胴部にかけて直線文と刺突を施す。この系統には他にもバリエーションがある。上箕田遺跡の受口甕の多くはこの類になり，口頸部へ直線文，刺突文などを施す例が多い。

ｃ形：所謂，Ｓ字甕の祖系ともなるべき一群で，口縁端を上方に引き上げるものと外に引き出すものの２種がある。95 は口縁端部を上方に引き上げ，頸部から肩部に直線文と刺突文がまばらに残り，胴下半部には波状文が一部残る。肩部から胴部は左右に交差する刷毛とその下は右下がりの粗い刷毛目で調整する。台端部の折り返しはなく，砂の充填もなく滑らかである。器壁が薄く，極めて軽い甕である。又，他の事例は口縁を直線的に引き上げ，端部をやや外側に広げ，口縁外端面は刺突文又は押し引き文を施す。尚，頸部内面に折り曲げによる太い刷毛目の痕跡を残す 4-32，4-35 がある。この痕跡はＳ字甕Ａ類では通有のものである。Ｓ字祖形の甕の検出例は松阪市の阿形，女牛谷，粥鍋，竹川，津市の嶋抜，天花寺丘陵，納所，印田等伊勢・中勢域を中心に広がっている。今回の事例を加え北伊勢にも広がったが，実数は少ない。それぞれに地域性があるようだ。

ｄ形：Ｓ字甕である。口縁端が上方に開き気味のものと外方に開くものの２種がある。口縁端は，殆どが押し引きで頸部に直線文や刺突文を施す。刷毛目は頸部下で右下がりになる。口縁内面には極端に外方に折り曲げた際の痕跡が残る。

これ以外の受口甕として，刺突文や刷毛目等飾りが殆どなく，口縁部が直線的に立ち上がる中，小型の受口甕が見られる（91 ～ 94）。

この時期，甕の口縁部が「くの字甕」から「受口甕」に変化していくと述べたが，伊勢地域内にも地域差があり，四日市～鈴鹿の北伊勢では，ｃ，ｄ形を少量含むが，ｂ形が主体である。津～松阪の中伊勢ではｄ形が主体になる。但し，中伊勢の中でも差が見られ，厳密な時間軸と空間軸を合わせた議論が必要になるだろう。

5．甕の底部について

弥生後期から古墳初期の甕の口縁部形状は，和氣氏，伊藤氏によって中～南伊勢における受口甕の増加が論じられているが，底部形状については実態がそれ程わかっていない。１つの事例として，古里遺跡の甕の底部を観察した。古里遺跡の甕底部は下表のように圧倒的に台付が多く，９０％に達する[⑮]。叩きの甕を除いた甕は，すべてが台付甕といっても過言ではない。

受口口縁甕の分類

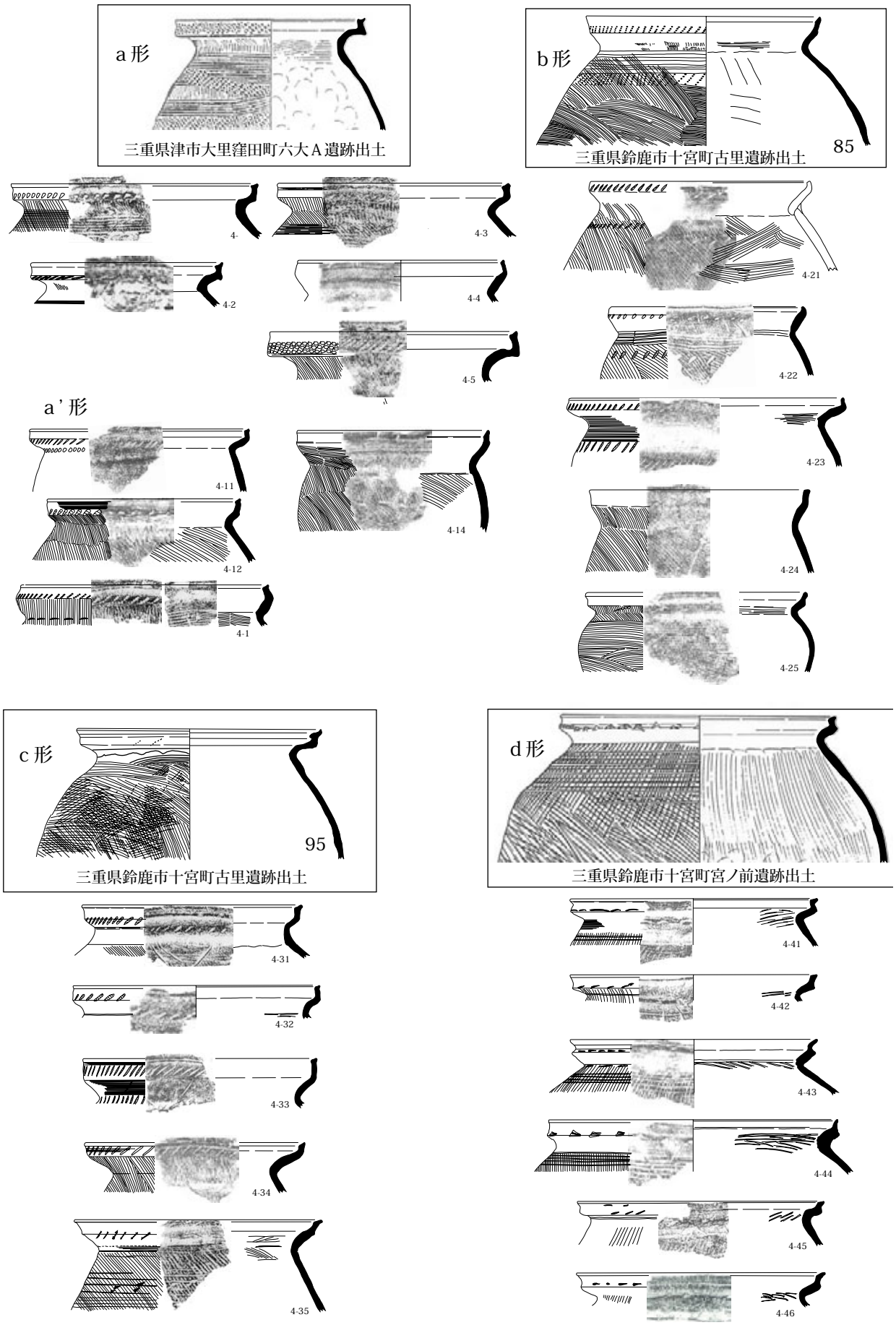


図 34　各種受口甕の分類　(1:4)

県内の他遺跡を見ると，廻間Ⅰ式前半の嶋抜遺跡 (SD572) でも台付甕が 95％を占め[16]，古里遺跡と同傾向である。この傾向は，既に，弥生時代中期後葉 (凹線文期) の甕底部でも確認されており，北伊勢に属する四日市の永井遺跡，上野遺跡の甕では６０％程度が脚部を持つ台付甕である。
中期後葉以降，北伊勢の甕は，尾張を含めた東海系に属し台付甕が急激に増える。更に，この傾向は廻間Ⅰ式期には伊勢全域に広がることが嶋抜と古里の解析からわかった。古里遺跡の叩き甕に台部を取り付け，台付叩き甕を造り出したことも台付甕＝甕の生活感である伊勢の発想であり，「伊勢の甕」の特徴をよくあらわしている。台付甕普及は，いよいよＳ字甕を生み出す素地が出来上がってくる。但し，古里遺跡からはＳ字甕の台部内面に通有の端部折り返しは１点もない。

底部の形状	個数	割合 (％)
台付	106	89.8%
上げ底	1	0.8%
平底	6	5.1%
有孔（平底)	5	4.2%
計	118	100.0%
甕の底部形状		

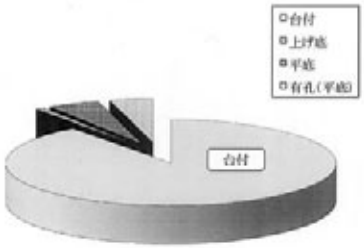


図 35　甕底部の形状割合

６．小型土器群

小型土器は大溝 (SD1) 出土が大部分であるが，特に，２区集中域と４区に多い。器種は最大径が胴部の中位にある壺と胴径と同じか胴部より大きな口縁径を持つ鉢が多く，二者で 70％を占める。通常の大きさの土器では甕，高杯，壺が多数を占めるのに対し，小型土器では壺･鉢の多さが際立っている。中でも壺と鉢は箆で丁寧に磨いており，形状は古墳時代前期の小型丸底壺や丸底鉢に似ている。但し，底部は平底になっている。他に粗製の甕や手捏ねの甕・鉢がある。

小型土器の中には器種分類が困難な形態もあるが，本来の小型土器作成の目的は，壺及び鉢を作ることにあったものと思われる。

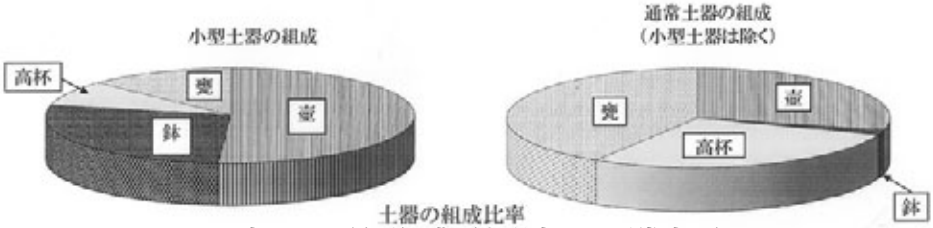


図 36　土器の器種別組成（小型土器，通常土器）

７．絵画・記号土器

①「人面文」土器

人面を線刻で描く小さな破片がある。大溝 (SD1・４区) 出土で大きさ 43 × 41mm。厚さ 0.5cm。縦刷毛後，工具の先が二股に割れた断面W字状になる鋭い箆状工具で人面を描いている。

描き順は，①縦の鼻筋線を描く
②眉毛を描く。この時，縦の鼻筋線の一部切っていく
③左右に開く鼻筋線を描く
④眼を描く（但し，左右の眼のどちらを先に描くか不明）
この時，左の眼を描く時，鼻筋線の一部を切る

人面文を描く土器片や木器片は，尾張･三河･美濃･吉備などに事例は多い。 古里遺跡の「人面文」は「瞳のないレンズ状の眼」「眼元に接する弧線」「鼻・眼・眉を描く」は他遺跡と同様であるが，他遺跡出土例では必ず描く「目の上下の入れ墨」がない。

小型土器

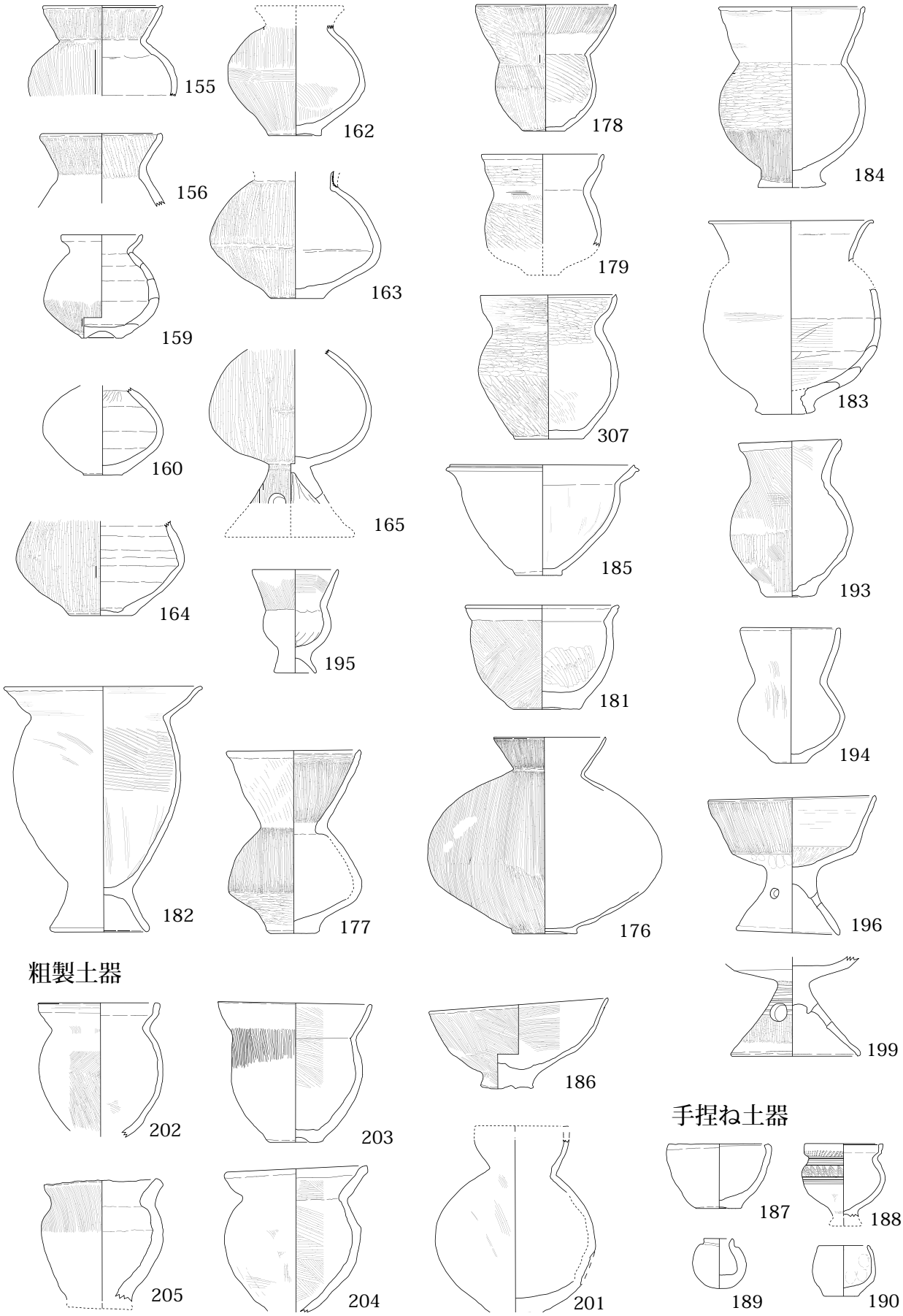


図 37　小型土器の集成　　(1:4)

対象から外れるかもしれないが，先頃，報告された奈良・纒向遺跡の土坑から出土した，鍬を再加工した仮面や京都・森本遺跡の土製仮面にも入れ墨はない。畿内を取り巻く地域の「人面文」は入れ墨を描くのに対し，今回の事例を含め，畿内での発見類似例は，いずれも入れ墨がない。偶然であろうか。

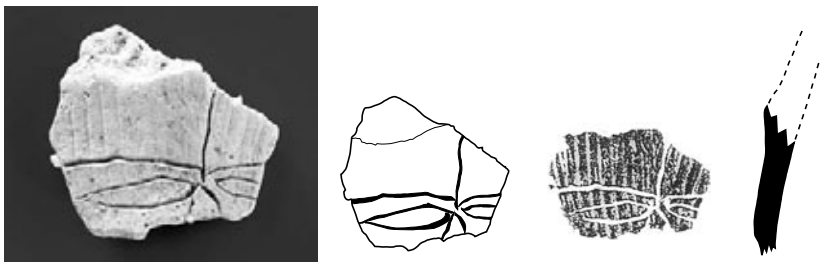


図 38 「人面文土器」の写真，実測図・拓本 (1:2)

②鳥足文状の記号

5cm 程度の頸部下小破片であるが，上向きの矢印状に鳥足文が 2 ～ 3mm 幅の腰の弱い工具で描かれている。鈴鹿市内で上箕田遺跡，境谷遺跡，県内では筋違遺跡，下之庄東方遺跡，六大Ａ遺跡など出土例は多い。近隣県でも多くの事例がある。名称も矢印状と言ったり鳥足文と言ったり三叉状と言ったりだが，上向きの矢印状に描くのが通常である。

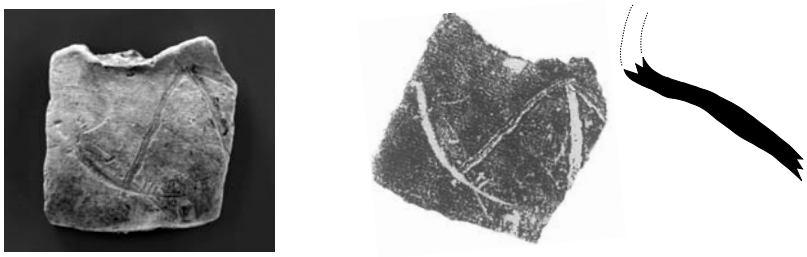


図 39 「鳥足文」状の写真，拓本　(1:2)

8．楕円形土器（甕形限定）

通常，土器を真上から見ると，円形に近いが，極端に楕円形になった一群がある。53,64,66,68 等である。特殊な土器でなく煤が付着した通常の粗製甕形土器であるが，これらの土器はよく似た「くの字」甕である。例えば，64 は胴部の短径 15.2㎝，長径 16.6㎝で 1.5㎝位の差だが，上部から土器を覗くと長径と短径に差があり，見た感じ明らかな違和感がある。

9．関東系の土器

複合口縁を持つ 43 は関東地方でよく見られる形態の壺である。開き気味に持ち上げた複合口縁の端部を粗い刷毛で調整し，縦位の棒状貼り付けを 4 本と頸部は 6 条の櫛描直線文を施す。この複合壺が搬入品か，模倣品か不明だが，胎土は当地域と同様である。複合口縁部が縄文でなく刷毛目であることや頸部が櫛描直線文であることから遠江より東，武蔵・下総より西の相模か，駿河あたりと考えられる。今後，場所の特定をしていきたい。

Ⅶ. 考　察

1．主要遺構の変遷

古里遺跡の変遷を遺構および遺物から検討する。古里遺跡で最も古い土器は縄文晩期の突帯文土器で１片出土している (350)。これまで古里遺跡を含む河曲低地遺跡群では，八重垣遺跡から弥生時代前期の遠賀川系土器と共に縄文晩期の系統をひく沈線文系土器が検出されている[17]。同じ低地部にある上箕田遺跡が縄文晩期から始まることも含め，この地の利用が始まるのはこの頃と考えてよいだろう。次に，古里遺跡が利用されるのは弥生時代後期の山中期で少量の後期土器が混入している。近くに生活の場があったと推察されるが遺構は確認できていない。遺物は，大溝 (SD1) の上部あるいは遺跡全体の包含層から壺や高杯などが少量見つかっているに過ぎない。

本格的に古里遺跡の利用が始まるのは弥生時代後期末～古墳時代初期である。最初の利用は，確認範囲で長さ 25m，幅２～３m，深さ約 1m の大溝 (SD1) で，更に南北に続く。土層は最下層に砂礫層とシルト，粗砂層が 10 ～ 15cm 続き，水が流れたことがわかる。その上部に，下層の黄褐色土を含む黒色土が 15cm 程堆積する。更に上層は，最も多くの遺物を含む礫を多く含んだ褐色シルト層が 30 ～ 40cm 続く。上下層共に有機物と砂礫を多く含み水の流れを示している。大溝 (SD1) は下層と上層に分かれ，下層では高杯･小型土器を主体に少量の甕，壺形土器が見られ，廻間Ⅰ式期前半併行の古い頃である。上層では壺，甕、高杯，小型土器，手焙形土器など各種，多種の土器が見られ，廻間Ⅰ式前半併行の新しい頃で大溝が最も利用された時期でもある。上下の差は僅かで時間差は大きくない。

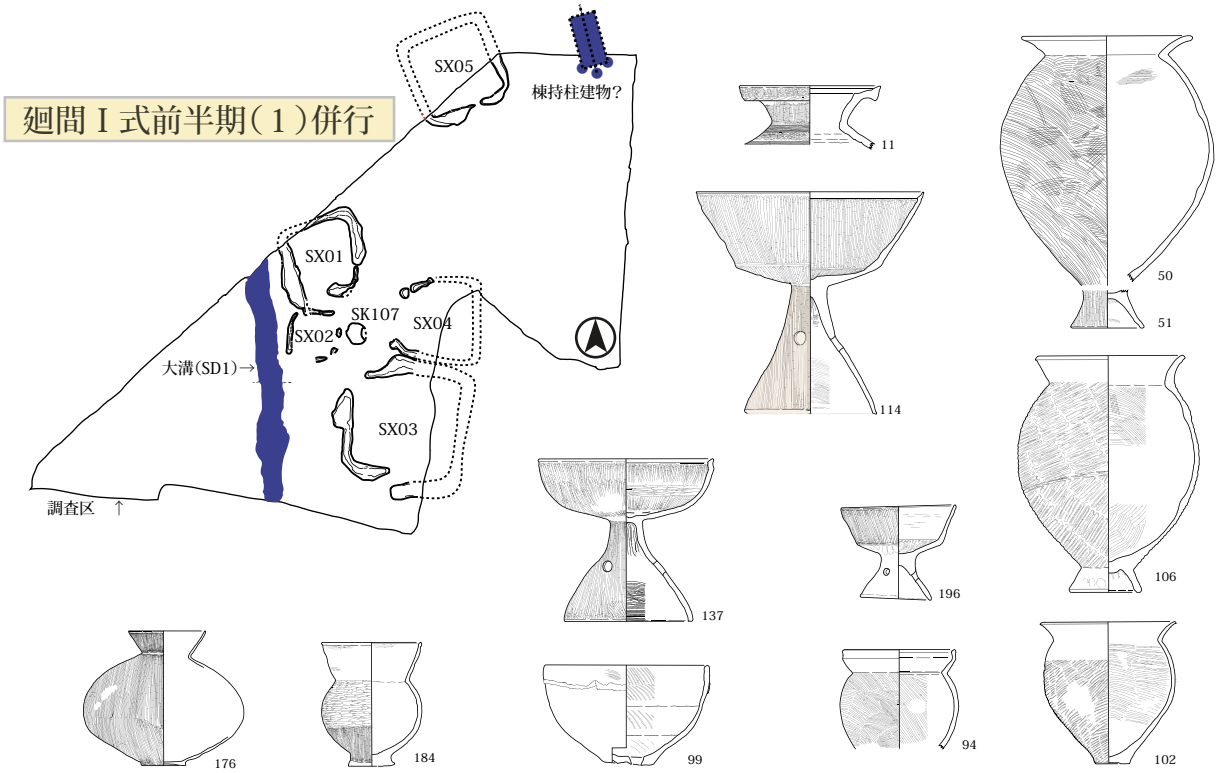
では，この大溝 (SD1) の掘削はどのように行われたのであろう。大溝 (SD1) の最下部から山中期の高杯脚 (146) が検出されている。従って，大溝が掘削された時期は山中期の新しい頃であるが，大溝 (SD1) の周辺及び大溝 (SD1) 上部から山中期の土器片が見られることから廻間Ⅰ式期に再掘削した際，周辺に掘り上げられたものと考えられる。土層断面は，この可能性を推察させる。

大溝 (SD1) の東，50m 程のところに３本の柱穴が検出されている。東西の柱掘方は直径 50 ～ 70cm，柱穴 25 ～ 35cm，南の堀方は直径 60 ～ 80cm。柱間寸法は，東西の柱間は 2.65m になる。柱痕跡は 30cm 程度で規模的には大きなものである。柱の深さは検出面から 35 ～ 60cm あり，既に削平されたであろう当時の地表面からみれば更に深かったものと思われる。柱穴からの遺物出土はなく時期判断が出来ないが，規模的には，古里遺跡では異質の大きさである。この柱穴がどのようなものか推測の域を出ないが，大溝 (SD1) に面した独立棟持柱建物の南端とも考えられ，更に北側に繋がる建物と推察できる。大溝 (SD1) 下層，上層の時期に独立棟持柱建物が建っていたとしたら極めて興味深い構成と言える。

大溝 (SD1) 上層の土器埋没層は，50cm 程の厚さで，且つ，同質の褐色シルトであり短期の内に埋没或いは埋め戻した可能性もある。上層の上に広がる包含層の土器は上層が埋没した後の窪地への流入又は廃棄したものと考えられる。

廻間Ⅰ式後半併行期からⅡ式併行期にかけ，大溝 (SD1) の東には，溝が接するように方向を合わせ５基の方形周溝墓が造られる。方形周溝墓 (SX01，SX02) の型式は１ヶ所又は２ヶ所の陸橋を有するＡ１型かＡ２型であるが，方形周溝墓 (SX03 ～ SX05) はＢ型で周溝の中央に陸橋を付設する。SX03 ～ SX05 は出土土器から時期的にやや新しくなると判断される。

方形周溝墓 SX01 から SX04 のほぼ中央に直径 2m 余，深さ 0.3m 程の土坑 (SK107) がある。この浅い土坑から比較的まとまって廻間Ⅱ式中頃併行の土器が出土した。



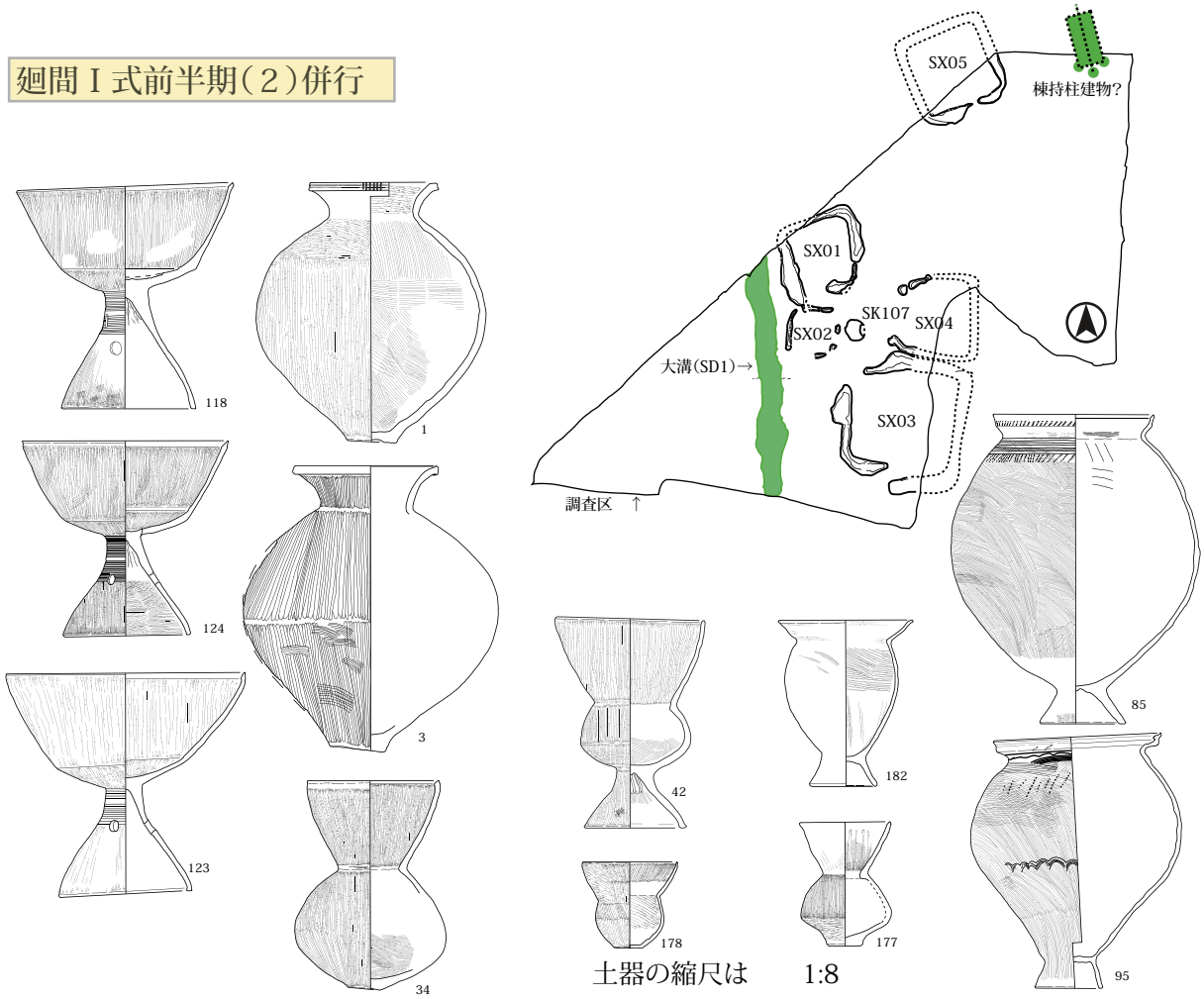
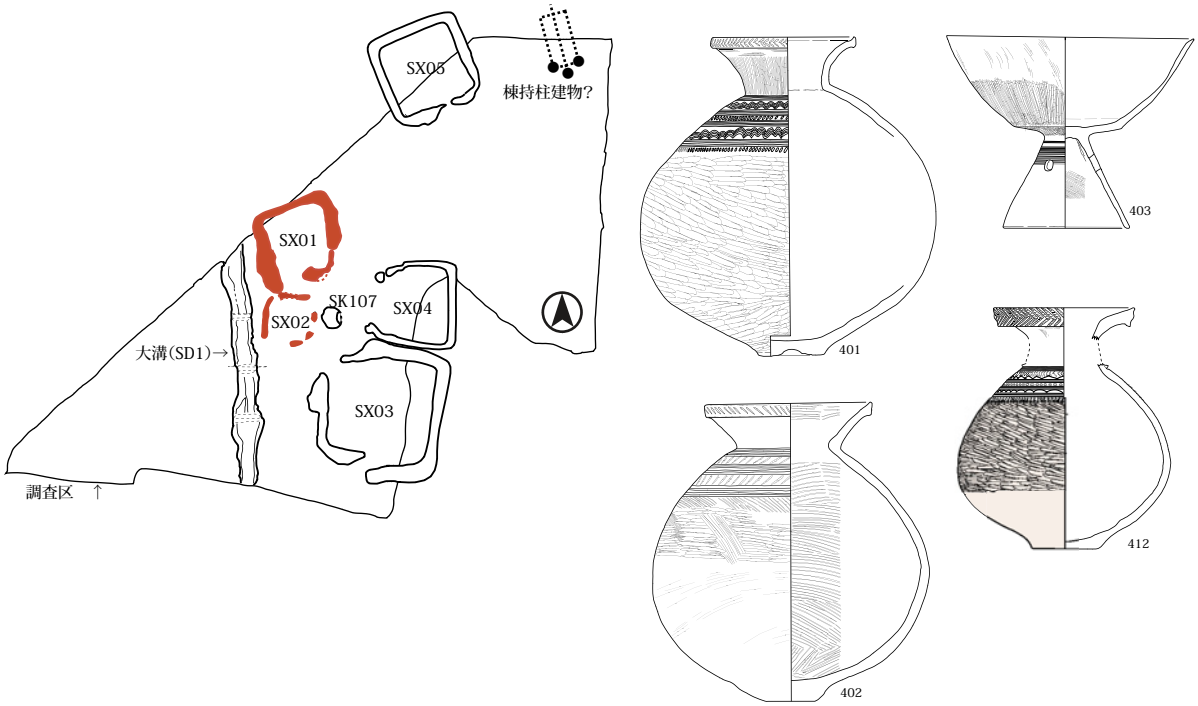
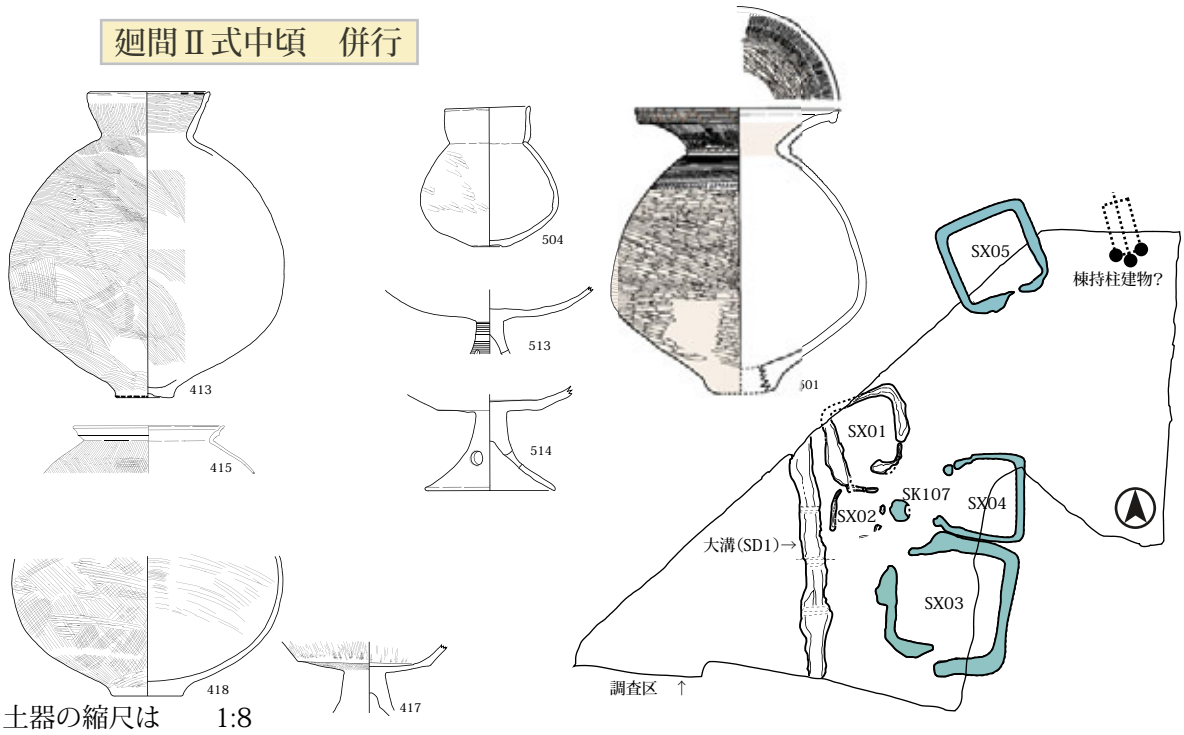


図 40　遺構の変遷図 (1)　(1:1000)

廻間Ⅰ式後半期　併行



廻間Ⅱ式中頃　併行



土器の縮尺は　　1:8

図 41　遺構の変遷図（２）　　(1:1000)

器種はパレススタイル壺，瓢壺，高杯，受口甕などである。方形周溝墓 (SX03 ～ SX05) と同時期であろう。この種の土坑は，愛知県豊田市川原遺跡の土器集積遺構 (SX03,SX101) でも確認されている。この種の遺構を赤塚氏は祭場で使用した土器を一括処理した場所と考えている[18]。

尚，この時期を特徴とする「胴部に箆描波形文を施し，線上を赤彩したパレススタイルの壺」が大溝 (SD1) 遺構の上部周辺から，粉砕し撒き散らされたような状態で数個体分出土している。いずれも大型の破片ではあるが，残存量が少なく器形復元には至っていない。土坑での一括処理と撒き散らす行為を対比させると極めて興味のある事例と言える。この土坑 (SK107) 以降，調査地区では継続する時期の遺構の検出はない。

以上をまとめると，大溝 (SD1) を再掘削し利用が図られる廻間Ⅰ式前半の前後 (上・下層)，その横に方形周溝墓 (SX01，SX02) が廻間Ⅰ式後半に造られる。更に廻間Ⅱ式中頃には方形周溝墓 (SX03 ～ SX05) と土坑 (SK107) が造られ，パレス壺が大溝 (SD1) 跡地に撒かれる。いずれもマツリ (祈り) を意図した遺構群と考えられる。

2．大溝 (SD1) の役割

大溝 (SD1) の土器分布から見ると，廻間Ⅰ式前半の古い頃，下層南部 4 区に高杯が集中し，2 区に小型土器が集中する。甕は 1 ～ 4 区に点在するが壺は少ない。又, 下層は総土器点数も少ない。上層の出土位置の集中はもっと顕著で 2 区で小型土器の集中が， 3 ～ 4 区にかけ壺の集中域が，更にその南 4 区の東岸には甕の集中域と西岸には高杯の集中域があり，高杯と小型土器は上・下層共，同じ場所に集中域があり，時間は違ってもあたかも指定位置であるかのようである。多くの土器は完形に近く，土器の器形によって出土位置が限定し，立て並べたような景観は溝の利用を推測する上で重要である。更に，土器が多量に残る 2 区及び 4 区の溝の西側は 1 段低くテラス状になっており，土器が据え付け易いようしたのであろうか。通常の日常生活で廃棄される土器類は，多くが破片になっていることが多く完全な形での出土は少ない。まして，器種毎に廃棄場所が決まっているとは考えられない。当然，意図的な据え付けを想定せざるを得ない。土器の検出場所は発掘した部分だけで長さ 25 ～ 30m，幅 2 ～ 3m，深さ 60cm 程であり大溝 (SD1) と言ってきたが一般的な川でなく，小川又は導水施設程度である。その程度の幅の狭い小川にぎっしり土器を敷き詰める行為とは何だろう。従来，知られる葛城・南郷遺跡や導水施設型埴輪に見る水の浄化や流量調節を行うようなマツリとは異なるようである。川に並べられた土器は，マツリに使う状態を示しているのか，又は別の場所でマツリが行われた後，移動し川に沈められた状態を示すのか。土器は置かれたのか，投げ込まれたのか，まとめて埋めたのか。整然とした配置を行っていることから投げ込まれたとは言えないが，置かれたのか，埋められたのかはマツリの実態を知る上でも重要である。多くの土器が使用出来ないように破壊を伴っており，一連のマツリの中で破壊がマツリの最後の行為であろう。

日本書紀の神武紀東征の折, まつろわぬ在地宇陀 , 磯城の神との戦に「天香山（あまのかぐやま）の土を取り, 天平瓮八十枚 (あまのひらかやそち), 天手抉八十枚 (あまのたくじりやそち), 嚴瓮 (いつへ) を作って丹生川の川上に上り天神地祇 (あまつかみ　くにつかみ) を祭り，戦勝祈願している」。この説話の重要な点は，特定の場所から土を取り，土器を作り，その土器を川に沈め神の信託を受けることであり，主役は土であり，土器である。

更に，崇神紀七年たくさんの平瓮を祭神の供物とし，大物主大神，大国魂神を祀った。崇神十年 武埴安彦が謀反を企て，妻吾田媛が香具山の土を持ち帰り天皇に取って代わろうとした例の如

く，平瓮は祀りの供物に，香具山の土は霊力を持つ土として登場してくる。

考古学の事例として，少し事例は異なるが纒向遺跡辻土坑４は，湧水点以下まで掘り抜き，舟形，鳥形木製品，籾殻，外来系のＳ字状台付甕を入れ，木製品には片端に火を受けた痕跡を残している。水と火の農耕儀礼と考えられている。石野氏は，この祭りは延喜式・新嘗祭の条の器材と共通するとした。同様の事例は，纒向遺跡で多数検出されているが，橿原市四分遺跡 SE760 などでも見られる。これらの事例は「纒向型祭祀」呼ばれ，マツリの内容がわかってきている[19]。

次の事例は，時間も場所も全く異なるが興味深い事例がある。石川県穴水市の西川島遺跡群・白山橋遺跡，14 世紀前半の集落祭祀遺跡である。この遺跡では，集落南側の溝と井戸の間に６×3m の長方形区画を掘り，舟形木製祭祀模造品を中心に，北に獅子頭，舟形，刀形を，南に矢形，人形，舟形を，北端を人形，刀形，獅子頭，南端に火切臼，陽物，火切臼，東端に鳥形を直線に並べている。更に祭場を斎串状の箸状木製品で区画し覆う。多数の木製遺物からマツリの姿が見えてくるが，舟，鳥，箸状木製品や火切り臼，燃えさしの木片等「纒向型祭祀」の遺物との共通点も多い。やはり，水と火の儀礼であろうか。

４つの事例は古里遺跡の大溝 (SD1) の土器と直接関係がないが参考になる。古里遺跡では木器こそ残存していなかったが，下層は高杯，小型土器が主体で，上層は，更に壺と甕が加わる。そのマツリの実態は全く推測の域を出ないが，煤が付着した多くの甕は調理を行ったことを示し，調理物を共食するなどの姿が想定される。小型土器や高杯と東側の独立棟持柱らしき建物が主役のマツリに始まるものであろう。

規模は古里遺跡よりはるかに大きいが，同様に，川から多量に土器が検出された愛知県一宮市の八王子遺跡がある。時期も廻間Ｉ式のほぼ同時期で径５ｍ程の井泉の周りに多量の中・小型土器と井泉に銅鏃，翡翠製勾玉，ガラス玉，瓢箪等や人面文を描く鳥形の木製品が出土し，又，土器への破砕行為もみられる。50m 程離れた位置に 80 × 40m の方形区画とその中に建物の柱穴を留めている。

奈良県桜井市纒向遺跡では布留期の遺構として，川から引いた水を木製の導管を経て水量の制御を行いながら木槽内で水の浄化をしている。周辺からは火切り臼，武器形木製品，団扇の柄，弧文板などが検出されている。導水施設の横には掘立柱建物がある。溝の下層にはさらに古い溝があり，同様の施設の初源は，更に古く遡る可能性がある。八王子遺跡，纒向遺跡いずれも水を扱いマツリを行う施設と建物であるが微妙に異なる部分もある。

古里遺跡は小型土器の過多や種類，人面文など八王子遺跡との類似点が多い。更に残された部分の調査も含め，マツリの実態は今後の調査を待ちたい。尚，古里遺跡を含む低位段丘は，現在，自然堤防を迂回するように南と北の両側に小河川が流れるが，標高７～12m の自然堤防上には大溝 (SD1) に水を供給する流れはない。唯一，考えられることは湧水であろう。中世遺構に多くの浅井戸が確認されている。地下水は豊富であったのであろう。尚，今回の発掘調査に至った理由は学校グランドの水はけが悪く，改良工事を行うためであった。水の心配のない自然堤防上なら，このような土壌改良は必要がないが，水はけが悪いとなると今も地下水が流れている可能性がある。

３．大溝 (SD1) と方形周溝墓、SK107 の関係

大溝 (SD1) と方形周溝墓，土坑 (SK107) の有機的な繋がりについて考えてみる。３つの遺構は全く繋がりがなく，単に近くの場所に残された遺構とも言える。しかし，それぞれの遺構は切り合うことなく，大溝 (SD1) と方向を合わせる方形周溝墓，更に方形周溝墓の中央，通路にあたる場所に土坑 (SK107) が設置されており，何らかの繋がりがあると考えるほうが自然であろう。

３つの遺構は，廻間Ⅰ式期の前半併行から廻間Ⅱ式中頃の遺構であり恐らく２～３世代の時間変化であり，当然，人の記憶範囲の時間経過である。大溝 (SD1) の土器は，水のマツリを主催した時に製作し，その主催者が方形周溝墓に葬られ，その子か，孫が土坑 (SK107) で追善供養を行う。更に，その人達が新しい形のＢ型方形周溝墓に葬られる程度の時間経過である。

３遺構を結びつける根拠はないが，土坑 (SK107) と同時期のパレススタイル壺が大溝の上部に広がることから考えると土坑 (SK107) の造られた時期には大溝 (SD1) は既に埋没しており，追善供養の一環として土器を散布 (撒き散らす) 行為が行われたと考えられる。方形周溝墓築造時に大溝 (SD1) が埋まっていたかの判断は出来ないが，少なくとも SX01 と溝方向が揃っており，築造当時，完全には埋まり切らず痕跡は残っていたものと推察される。

Ⅷ．古里遺跡の歴史的意義

弥生時代後期から古墳時代初期の古里遺跡は，住居址など生活痕が全く見られず異質な空間領域である。山中期の土器類は，小片として残るが遺構の確認は出来ていない。近くに生活跡があるのだろう。古里遺跡の本格的な利用は，廻間Ⅰ式前半に始まり大溝 (SD 1) に高杯，小型土器に加え，壺・甕等が器種毎に集中し，場所を変えて並べられていた。土器の配置が既に尋常でなくマツリを思わせるが，近くの別の場所でマツリを行ってから土器を器種毎に分けて配置したのか，土器を配置することがマツリの本体であったのか定かでないが，極めて特殊な状況下であった。このようなマツリは少なくとも溝の上下の２回にわたり行われている。50m 程離れた東側に独立棟持柱を持つ建物があり建物と大溝 (SD1) で行われたであろうマツリの有機的繋がりが想定される。マツリの主催者は，「搬入された叩き甕」同様に，刷毛痕を残す「在地の台付き叩き甕」「荒い刷毛で叩きを模倣した甕」「関東系の複合口縁壺」も含め，当時の国際感覚のある人物であったと評価できる。その後，主催者は大溝 (SD1) の横の方形周溝墓に葬られ，次の世代が追善供養（墓前祭）を行い，更に，一族はその地に合計５基の方形周溝墓を造る。言わば，河曲低地遺跡群の中で須賀，八重垣，宮ノ前，宮ノ北，萱町遺跡などは生活の場としての機能を，古里遺跡は，水のマツリ，方形周溝墓の葬儀（マツリ），追善供養としての土坑での一連のマツリなど清浄な場所としての機能を持つマツリ広場であったと考える。

しかし，その後，この地が利用されるのは 200 ～ 300 年後の古墳時代後期 (６世紀) である。SD5 の性格は不明だが，幅 0.8m，長さ 4m 程の浅い溝にぎっしり土器が詰まっており，何らかの意図があったのか単なる土器集積なのか不明である。

中世になると, 羽釜, 茶釜, 火鉢, 燈明皿などの出土品から庶民の生活の姿が見えてくる。しかし，金箔を残す瓦や天目茶碗は，この地に神戸城に関連する人の姿が見え，特に，金箔瓦[20]は，織田信長の三男・織田信孝の居城である約 1km 離れた神戸城から運ばれたものであろう。

このように，古里遺跡はマツリの場から庶民の生活の場に，更に，武士階級の姿が垣間見える。時代は流れ，子供たちの歓声が聞こえる神戸中学校の校庭になり，今後，一般住宅地への変転が見えてきている。歴史の中の一齣である。　　（稿了　2009/3/13）

(注)

①土器の計数化は，データの使い方で問題が出る場合がある。ここでは，数値化により大凡の流れを知るための手段として土器点数を確認した。尚，個体数の確認方法は口縁部を主に用い，1片を1体として計測した。

②三重県内の弥生時代後期から古墳初期の編年は，古くは「高松式」「納所式」「上箕田Ⅳ式」「欠山古 ～新様式」などがあった。新しくは川崎氏の「島貫式」，上村氏の「第Ⅵ様式」等があるが，北伊勢の土器と中南伊勢の土器はやや異なるようで，むしろ尾張の土器との近親性を感じる。但し，東海系器台は欠くようである。本来，北伊勢○○様式を定めたいものだが，今，準備できないので，最も近い赤塚氏の「廻間式」を借用し，○○併行で時期判断をしていく。

③穂積氏は伊勢型高杯として，脚部の内彎度が乏しく直線的になった段階にも拘わらず，脚上部に櫛描直線文を施す例を挙げている。403,305はこの例である（『研究紀要　第14号』三重県埋蔵文化財センター 2005）。

④『廻間』P.90　但し，尾張では「くの字甕」から「S字状甕」への急激な変化であり，北伊勢では「くの字甕」から「受口甕」への変化である。「受口甕」か，「S字状甕」への変化か　は伊勢の中でも地域によって異なる。

⑤『QC 7つ道具』(財) 日本科学技術連盟　2008

品質管理で用いる基礎的な統計処理法を簡便に指導した概説書で，戦後，モノ造りの現場で活用された4 M (Man: 人 ,Machine: 機械 ,Method: 方法 ,Material: 原材料) の切り口からバラツキを小さくする為の解析法。

⑥統計的手法は最近，長友氏が「土器造りの専業化」の判断基準に用い始めている。

長友朋子「弥生時代における土器生産の展開」『考古学研究 55-2　218　2008 Autumn』

長友朋子「土器の規格度　－弥生時代の土器生産体制の復元に向けて－」『日本考古学 (投稿中)』

専業化の有無を判断する手法として，土器を作る過程でのバラツキを見ようとするもので専業化すれば人，材料，方法等が固定化しバラツキは小さくなり，民俗例と共に専業化が数値で判断出来るとしている。

⑦遺構検出前の大溝 (SD1) 上部周縁及び包含層から出土したパレス壺，高杯，受口口縁甕の小破片を集め，分類・整理した。時期は大溝 (SD1) と同時期も含まれるが，前後の時期も含まれる。対象となる遺構が明確でなく包含層出土として一括した。但し，何分にも小破片であり，有効な結果が得られているとは言い難い。

⑧山中期は径深比率A又はBが高杯の変遷とよく一致するが，廻間期は径稜比率がよく一致する。この理由は，山中期から廻間期にかけて杯部の深さが深くなることから深さを基準に取れば型式変遷が捉えられることになる。しかし，廻間期の変遷は初期，杯の深さで変化が追えたが，杯の深さが極大になると稜径が小さくなる傾向が見られ，径稜比率が変遷と一致してくる。従って，この間の変化を1つの方法で数値変化を追いかけることは難しくなる。但し，径稜比率は，山中期から廻間期まで時期の把握が比較的行える手法である。

⑨奈良県の叩き甕は殆どが平底であるが，極く一部台付叩き甕が存在する。この台付叩き甕は東海からの搬入品でないとしている。（『奈良県の弥生土器集成　本文編』P.166　2003）

⑩内面の調整として刷毛痕を残す。都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究 80　20-4』1974

⑪豊岡卓之「『纒向』土器資料の基礎的研究」『纒向　第5版（補遺篇）』平成11年10月　P.78~79，P117~118

「纒向にみる奈良盆地東南部産・・・の第Ⅴ様式系の甕は・・・底部・体部・口縁部の3工程による成形過程が一般的で，体部外面のタタキ調整後，粘土帯を1帯貼り足して口縁部を形成すると述べ，都出氏の解析した河内の土器作りと異なる」としている。

⑫『廻間』P.61 ～ 62　技法と形状の台部製作技法a法に相当する。尚，古里遺跡の例はa法が多いが，中にはa法とc法の折衷型もある。県内では，『嶋抜Ⅲ』のP92　SD572　260，262，263，264にも同様の事例がある。古里遺跡の例は65,69,76,78がある。尚，台部側への突出する程度はいろいろ。極端な突出も平坦に近い僅かな突出もある。

⑬古里遺跡から出土した叩き甕を桜井市埋蔵文化財センターの松宮氏，奈良女子大・大学院 相場氏に見て頂いたところ，102，103は形状・手法や纒向の角閃石を含んでいる等から纒向で生産したものと思われるとご教示頂いた。又，別の機会に，田原本町教育委員会豆谷氏，三重県埋蔵文化財センター穂積氏に見て頂いたが，同様に搬入品とのご教示を頂いた。

⑭穂積裕昌「東海系土器に占める伊勢系土器の位相」『研究紀要 第14号』三重県埋蔵文化財センター　2005

⑮土器底部の個数が口縁部に対し多い。台部が外彎状に広がり，底部端面が丁寧な作りで面取りを行ったように丸くおさめる古い山中期の台部が24個体含んでいる。大溝(SD1)上部の包含層には山中期の高杯があるように甕の台部も混入しているのであろう。

⑯嶋抜遺跡の土器点数は残存率1/12 ＝ 1個体として計数している。古里遺跡は，1片を1個体として扱っており結果は異なる可能性があるが，両遺跡のSD572,SD1の台付甕比率が共に90%以上を占め，大部分が台付甕との結果は変わらないであろう。

⑰昨年実施した河曲低地遺跡群の八重垣神社遺跡の調査にて縄文系の沈線文系の土器が出土している。

現地説明資料　新田剛『八重垣神社遺跡 (第6次)』平成20年6月28日

⑱『川原遺跡　第二分冊』P.23　愛知県埋蔵文化財センター　2001

⑲豊岡卓之『平成11年度秋季特別展　古墳のための年代学　近畿の古式土師器と初期埴輪』橿原考古学研究所 付属博物館 1999）　平成12年度　秋季特別展『三輪山周辺の考古学』桜井市埋蔵文化財センター　平成12年

石野博信「三輪山麓の祭祀の系譜」『古墳文化出現期の研究』1985

⑳金箔瓦については亀山市教育委員会の亀山氏からご教示頂いた。

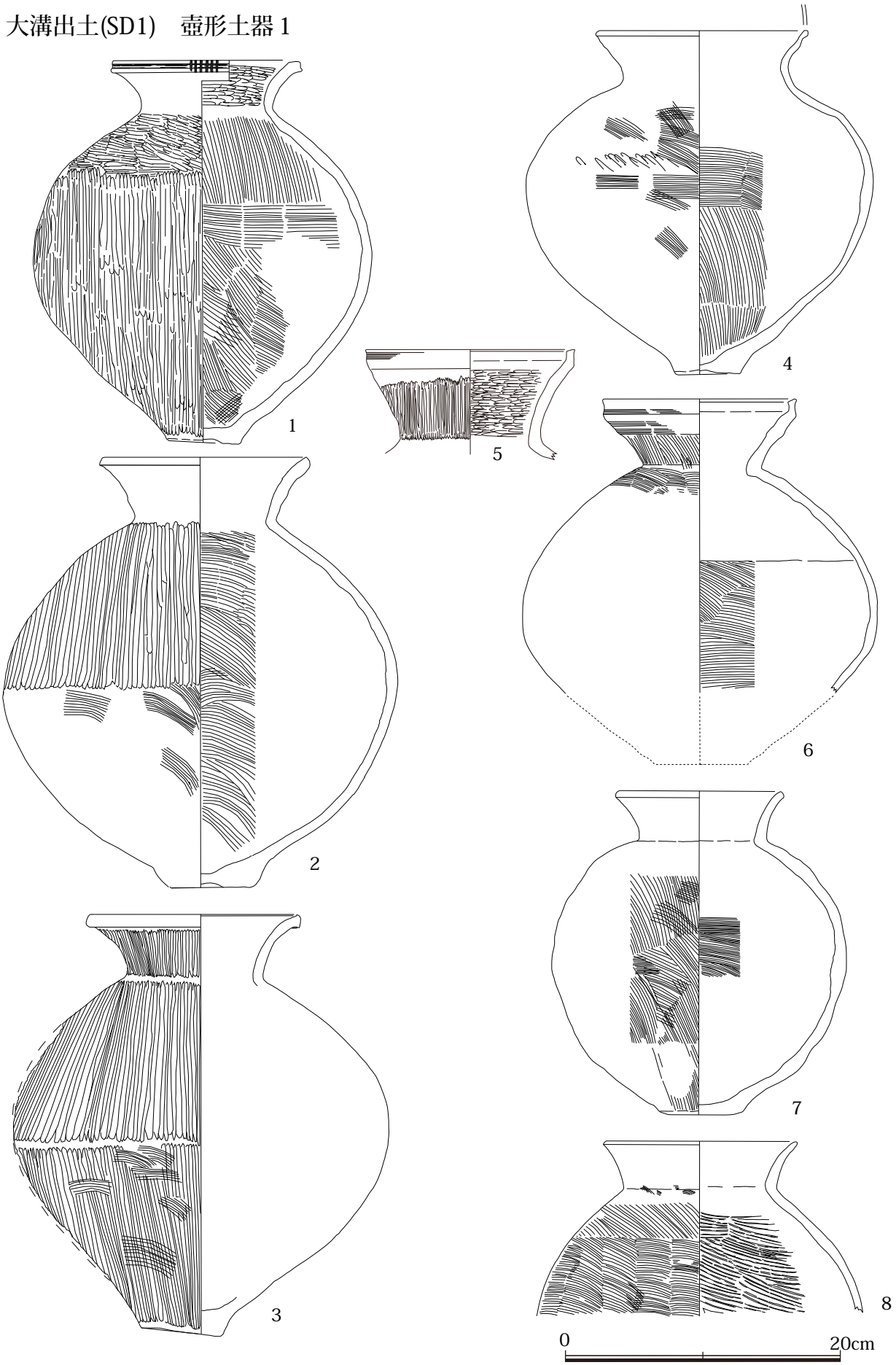
参考文献

伊藤裕偉，川崎志乃　『嶋抜Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター　1998
伊藤裕偉，川崎志乃　『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001
伊藤裕偉，豊田祥三　『川曲の遺跡』三重県埋蔵文化財センター　2004
伊藤裕偉　『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』1996
伊藤裕偉ら『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1992
穂積裕昌ら『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1992
穂積裕昌，小林俊之　『六大Ａ遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター　2002
穂積裕昌　『橋垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997
穂積裕昌　『長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2000
穂積裕昌　『菟上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2005
穂積裕昌　「東海系土器に占める伊勢系土器の位相」『研究紀要第　14 号』 三重県埋蔵文化財センター　2005
川崎志乃ら『筋違遺跡発掘調査報告　－第一分冊－』三重県埋蔵文化財センター　2004
赤塚次郎　『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1990
赤塚次郎ら『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1992
赤塚次郎ら『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1997
赤塚次郎ら『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　2001
赤塚次郎ら『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　2001
川崎みどりら『本神遺跡』安城市教育委員会　1998
和氣清章ら「考古編」『嬉野史』松阪市嬉野史編纂室　2006
米山弘之　『印田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999
松坂市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報（No.1 ～ No.10 合冊）』平成 18 年
松坂市教育委員会『草山遺跡発掘調査報告書』昭和 61 年
都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究 80』考古学研究会　1974
泉雄二ら　『織糸遺跡』三重県埋蔵文化財センター　2006
大場範久・真田幸成　『上箕田遺跡　弥生式遺跡第二次調査報告』鈴鹿市教育委員会　昭和 45 年
林和範　「須賀遺跡」『鈴鹿市考古博物館年報　第５号』鈴鹿市考古博物館　2004
下津菜な子ら『境谷遺跡発掘調査報告』鈴鹿市考古博物館　2009
赤塚次郎，早野浩二，和氣清章ら『S 字甕を考える』考古学フォーラム　2000
橋本輝彦，村上薫史「纒向遺跡巻野内地区遺跡群の特殊性と韓式系土器」
『古代学研究 141』古代学研究会　1998
青柳泰介ら『南郷遺跡Ⅲ』橿原考古学研究所　2003
石野博信，関川尚功　『纒向』橿原考古学研究所　1980
石野博信，豊岡卓之　『纒向　第５版　補遺篇』橿原考古学研究所　平成 11 年
清水政宏　『山奥遺跡Ⅱ　一般国道１号線北勢バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
四日市市教育委員会　2004
小玉道明・伊藤洋ら『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会　1973
春日井恒　『上野遺跡』四日市市遺跡調査会　1991
大和弥生文化の会『奈良県の弥生土器集成』2003
四柳嘉章「北陸の農村信仰」『古代史復元 10　古代から中世へ』1990
福辻　淳　「纒向遺跡　第 49 次発掘調査概要」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
年報 平成 19 年度』桜井市教育委員会　2008
『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』大阪府文化財センター　2007
財団法人 大阪府文化財センター『シンポジウム 弥生人の住まいを探る』2007

図　　版

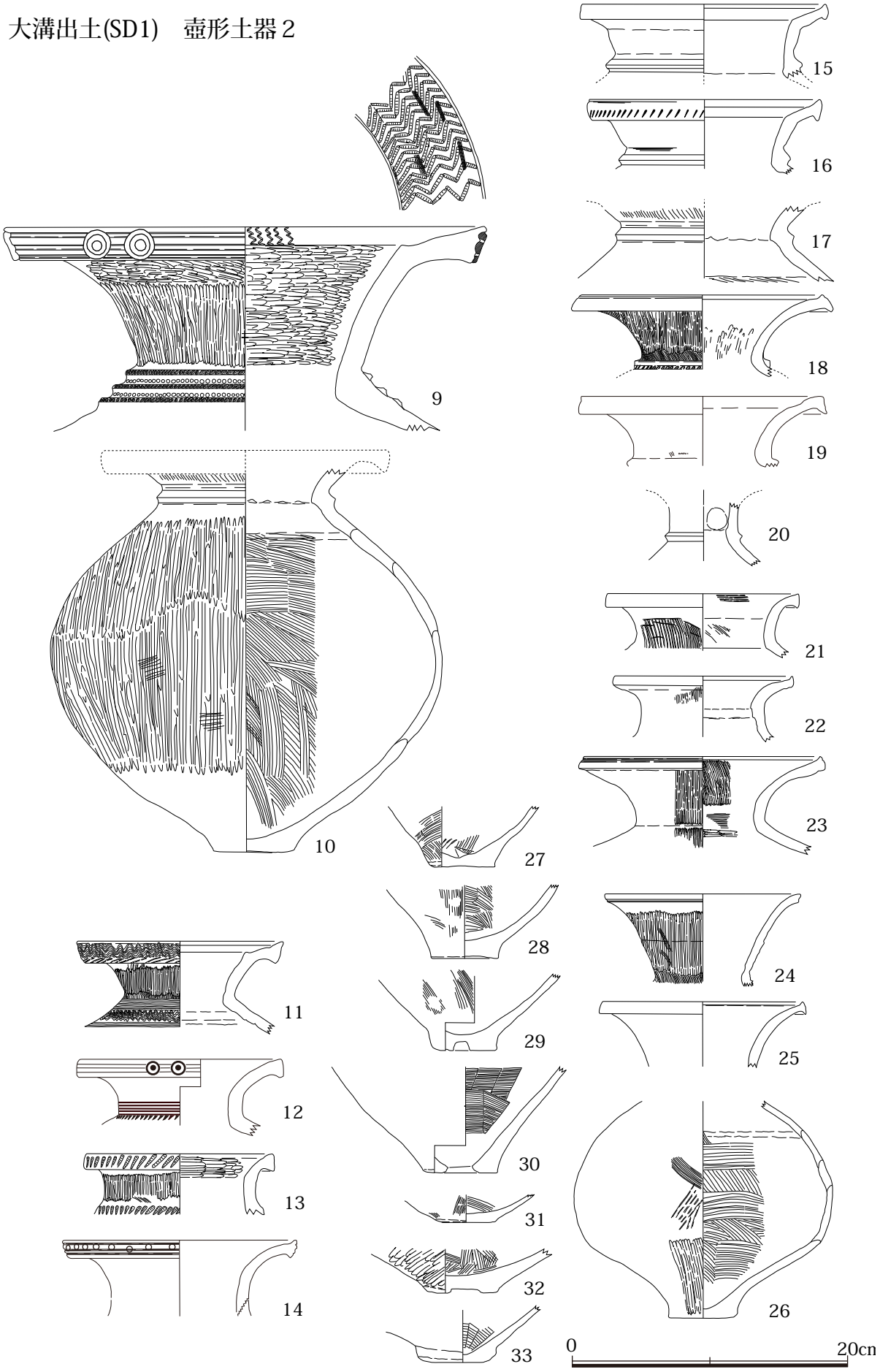
出土遺物実測図
大溝 (SD1) の土器出土状態
主な遺構一覧表
出土遺物観察表

大溝出土(SD1)　壺形土器１



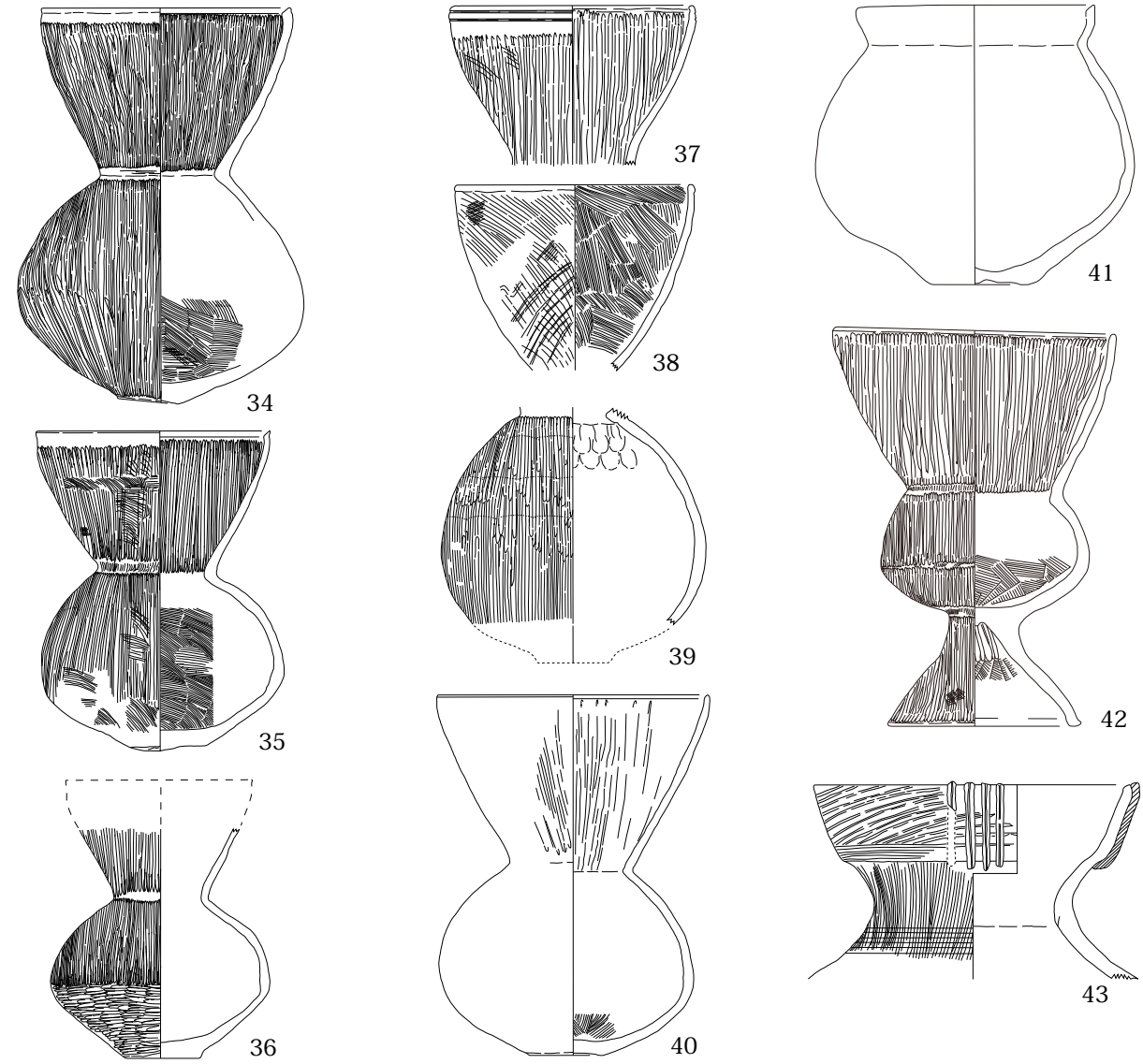
図版１　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１）　1:4

大溝出土(SD1)　壺形土器２

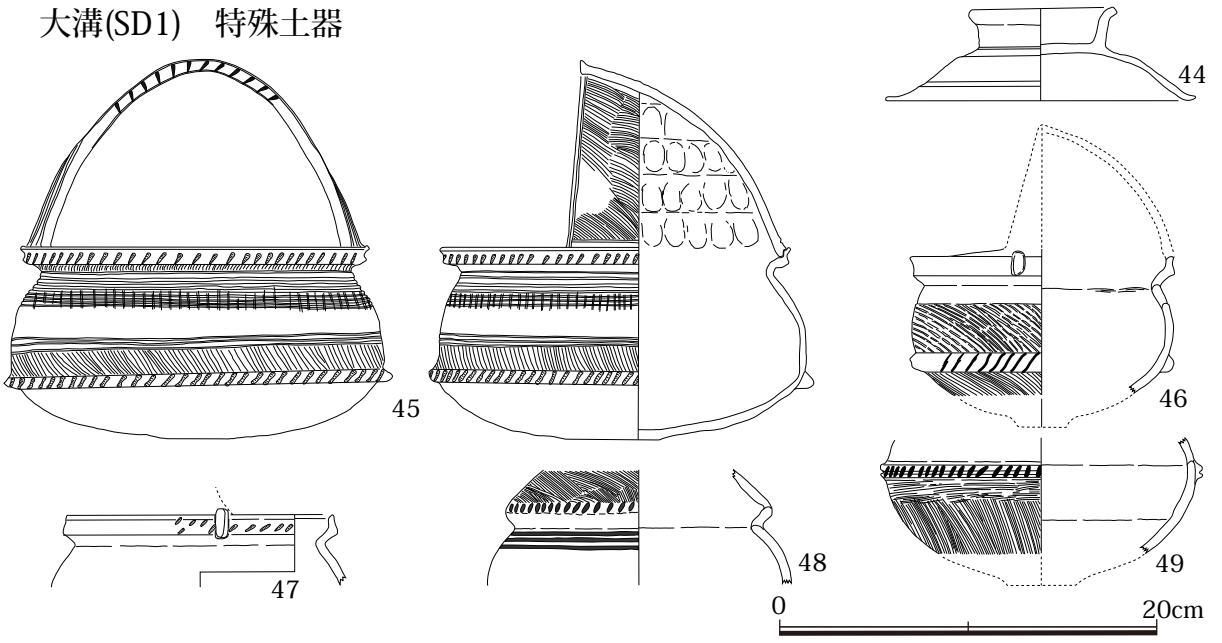


図版２　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（２）　1:4

大溝出土(SD1)　壺形土器３

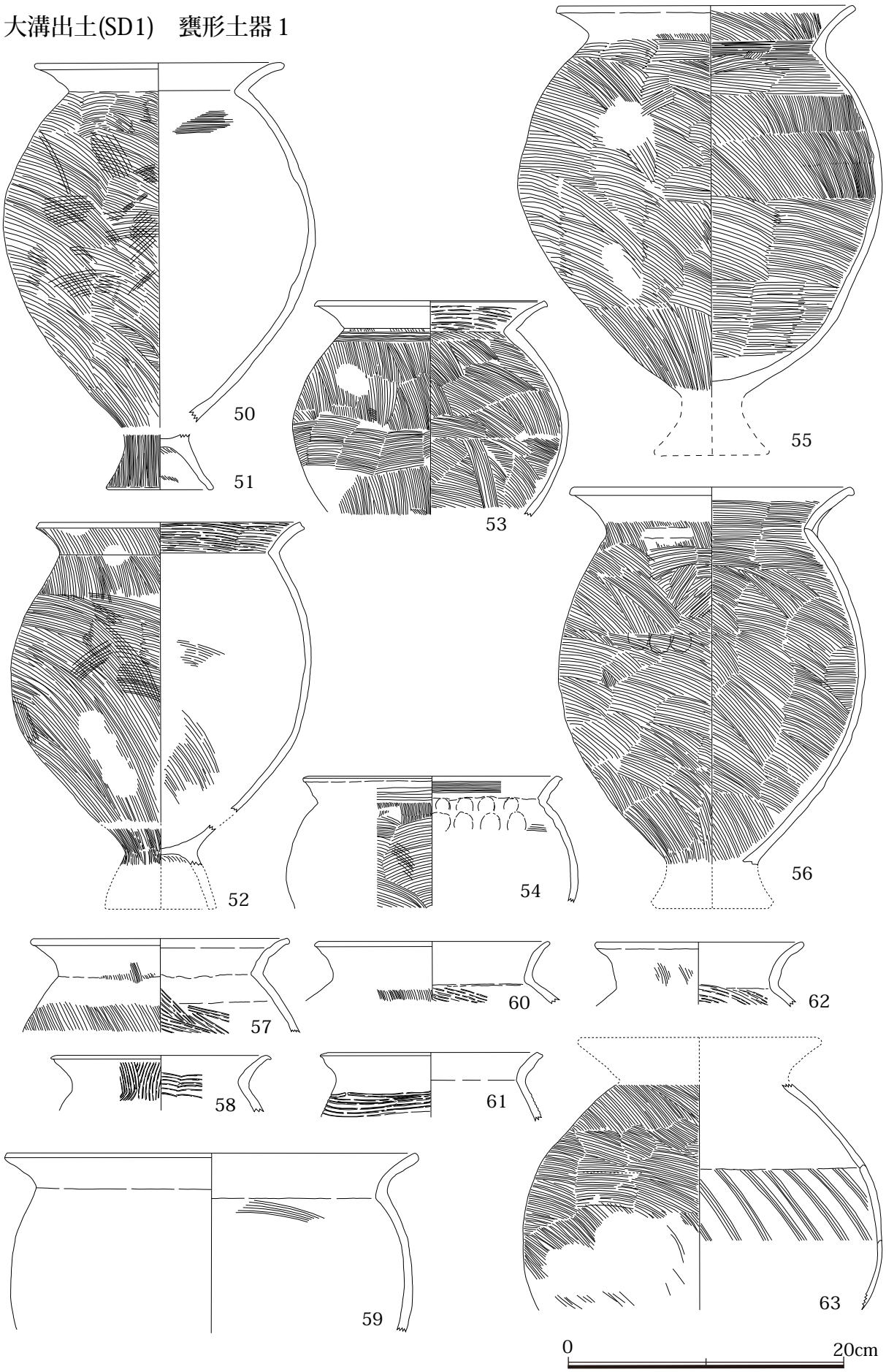


大溝(SD1)　特殊土器



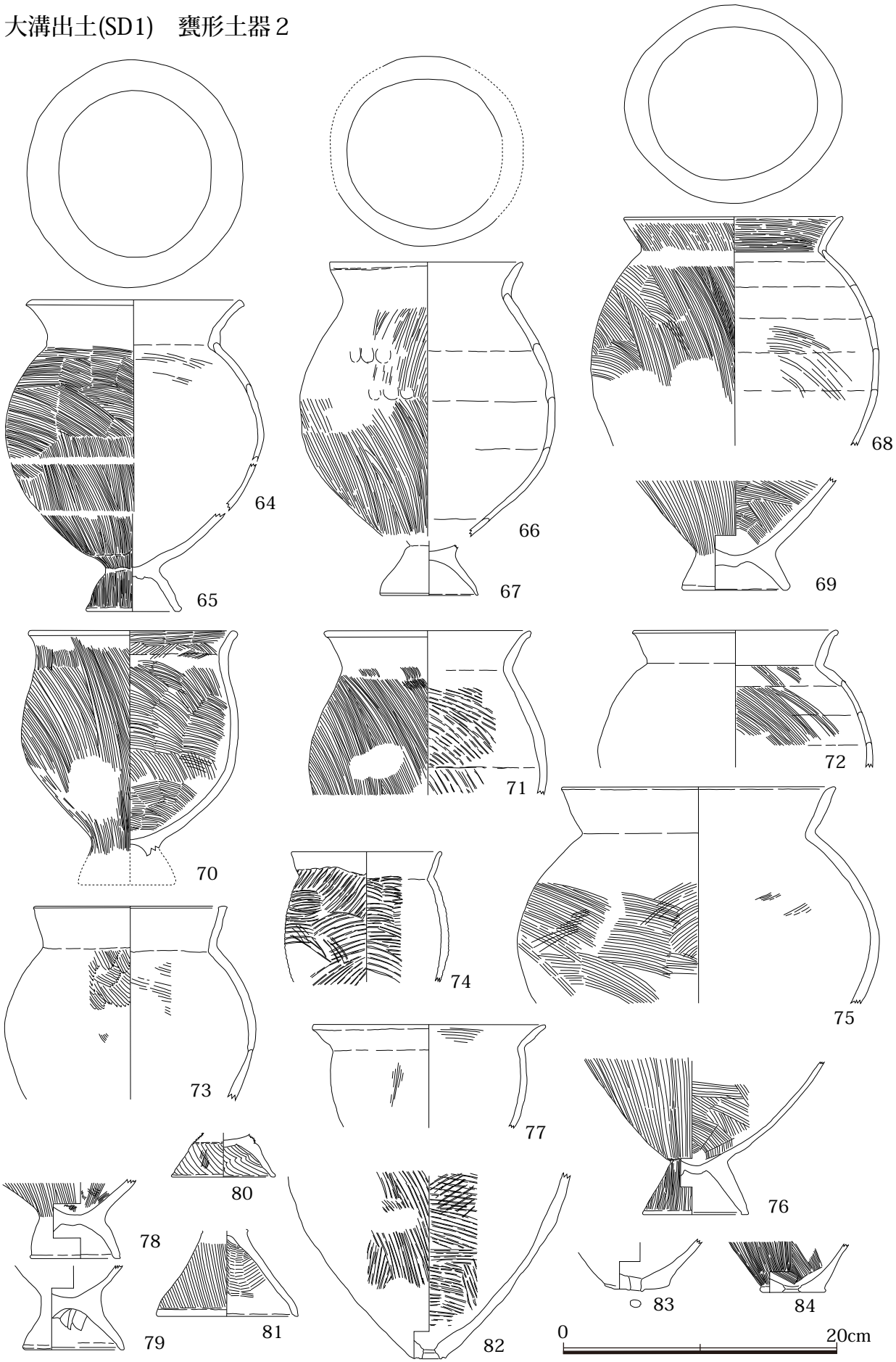
図版３　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（３）　1:4

大溝出土(SD1)　甕形土器１



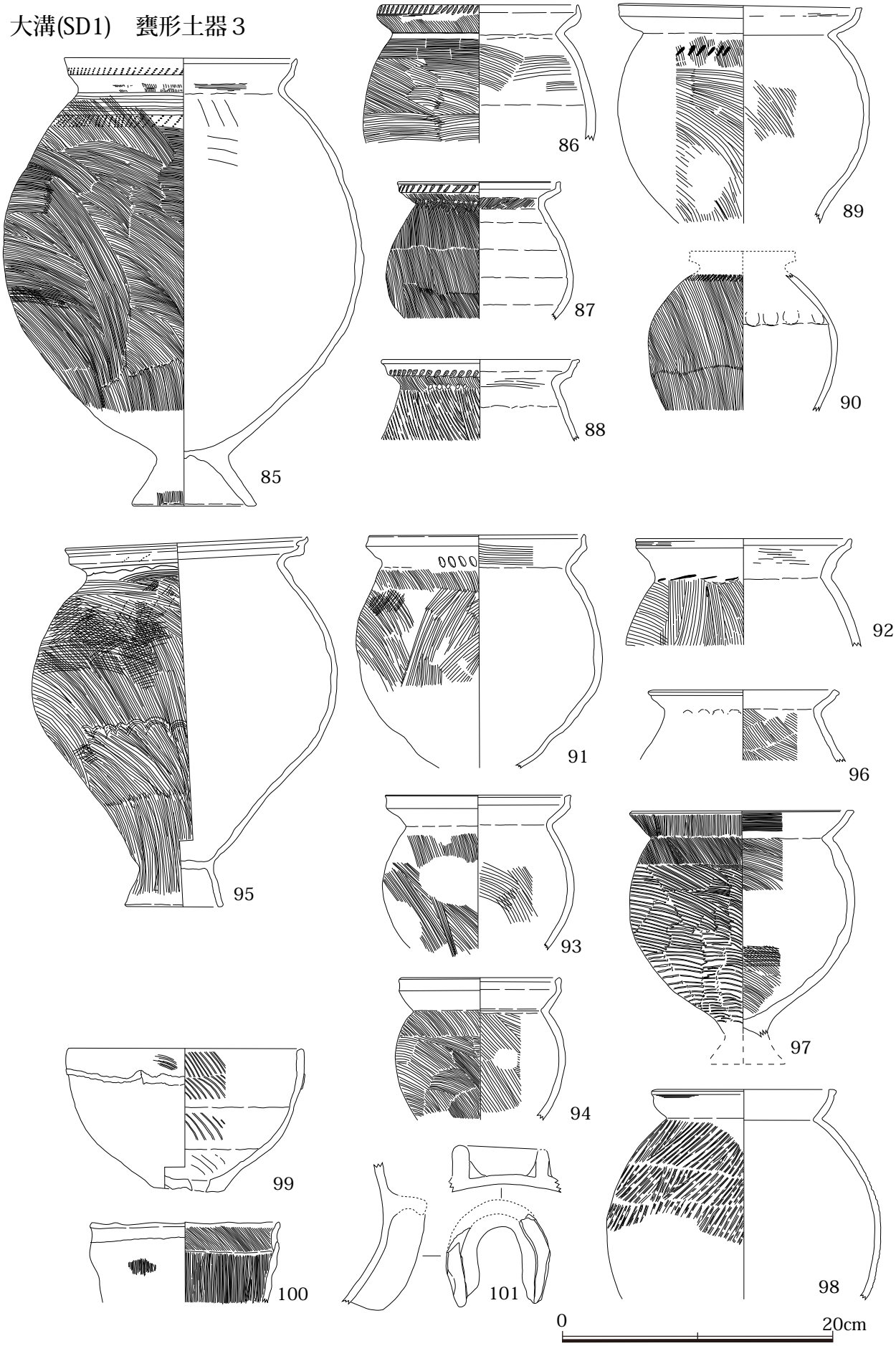
図版４　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（４）　1:4

大溝出土(SD1)　甕形土器２



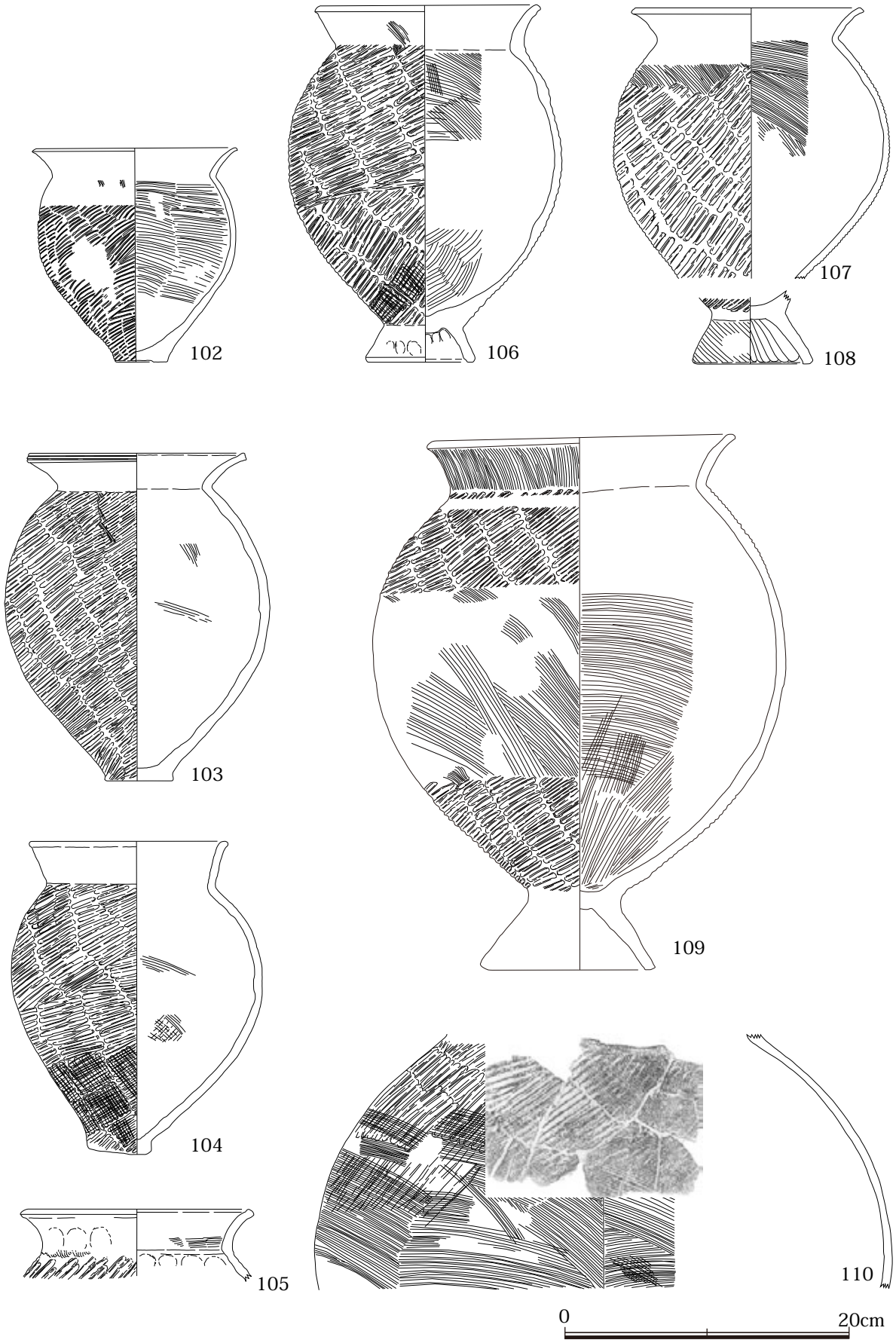
図版５　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（５）　1:4

大溝(SD1)　甕形土器３



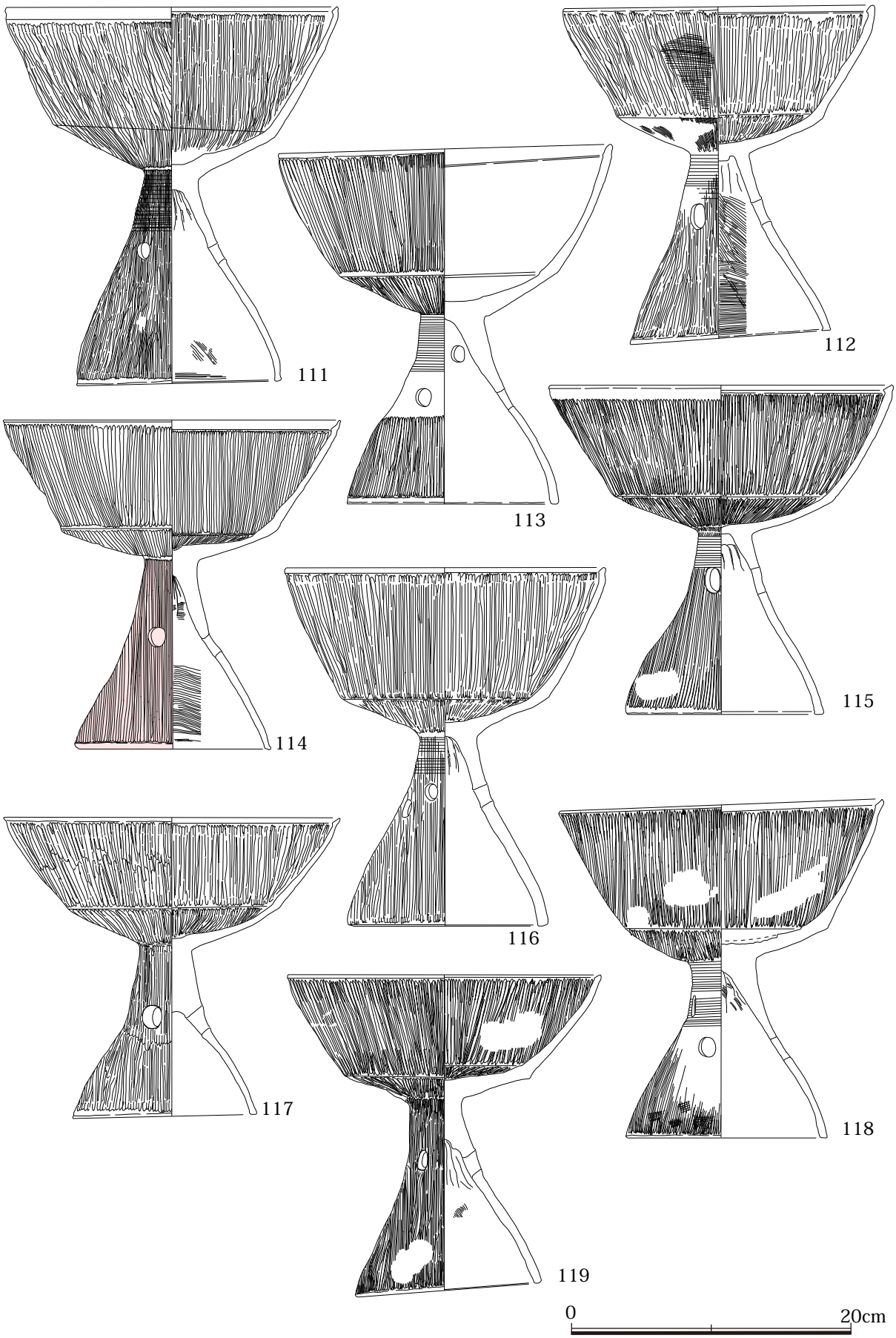
図版６　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（６）　1:4

大溝出土(SD1)　甕形土器４



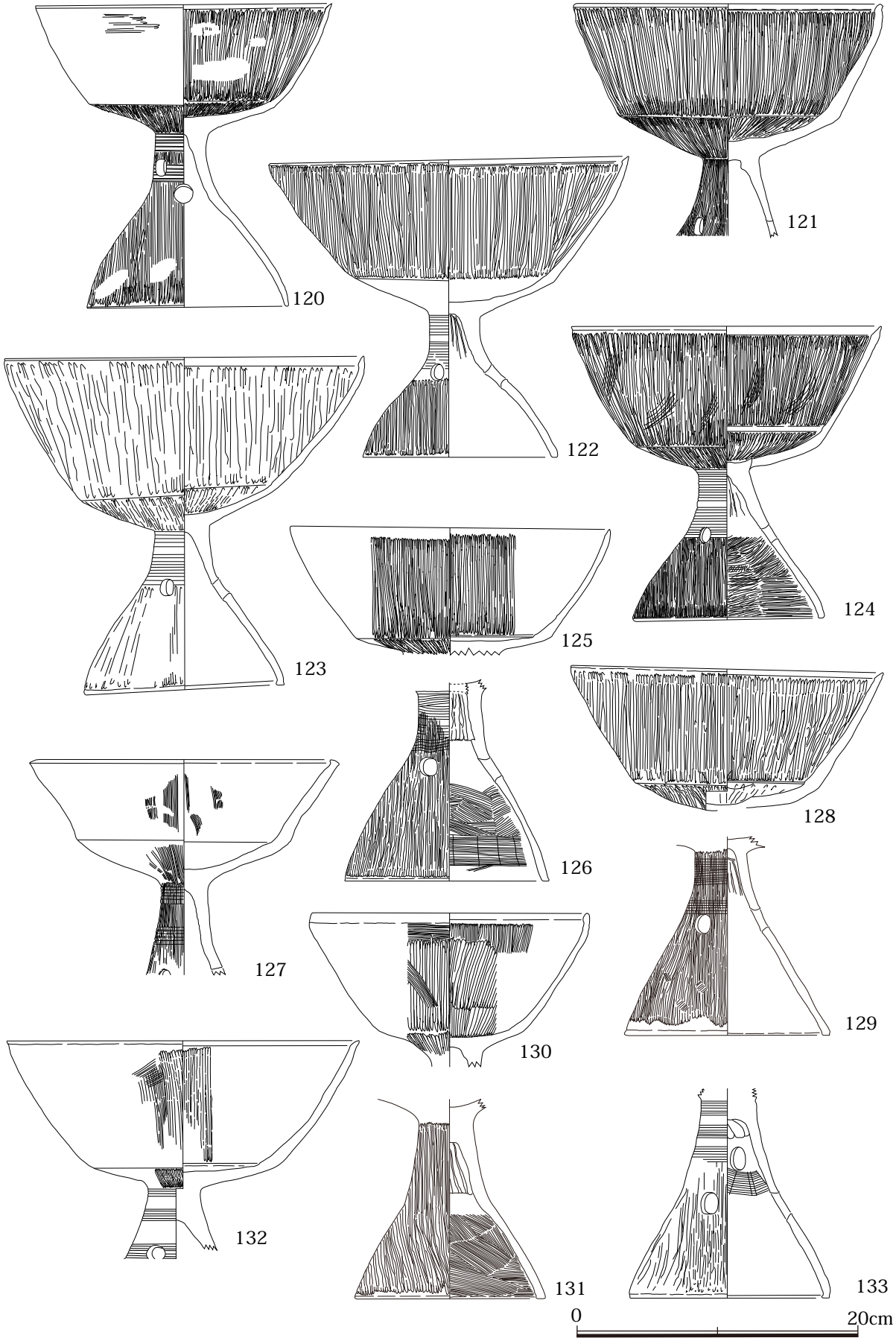
図版７　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（７）　1:4

大溝出土(SD1)　高杯形土器１



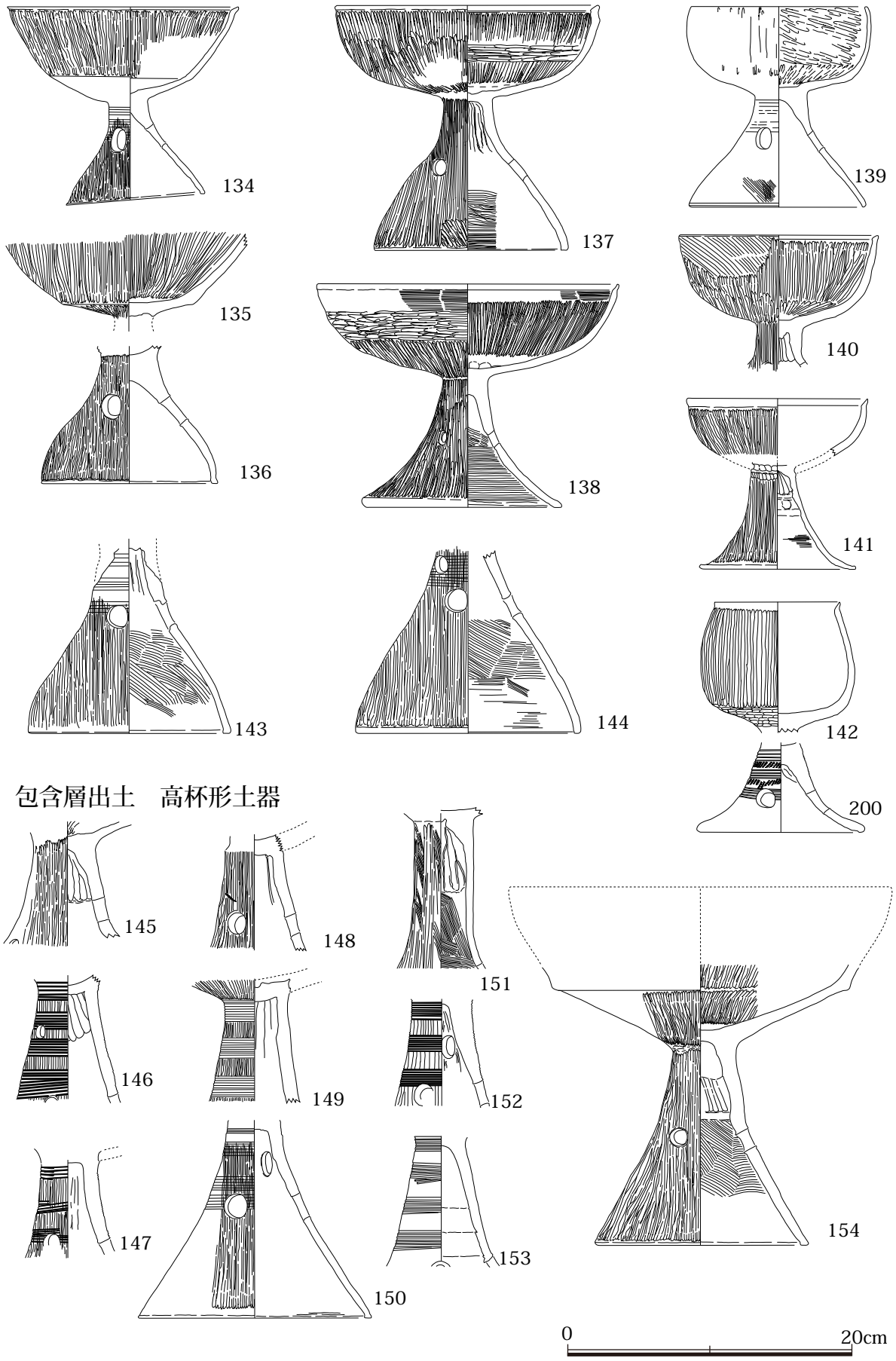
図版８　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（８）　1:4

大溝出土(SD1)　高杯形土器２



図版９　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（９）　1:4

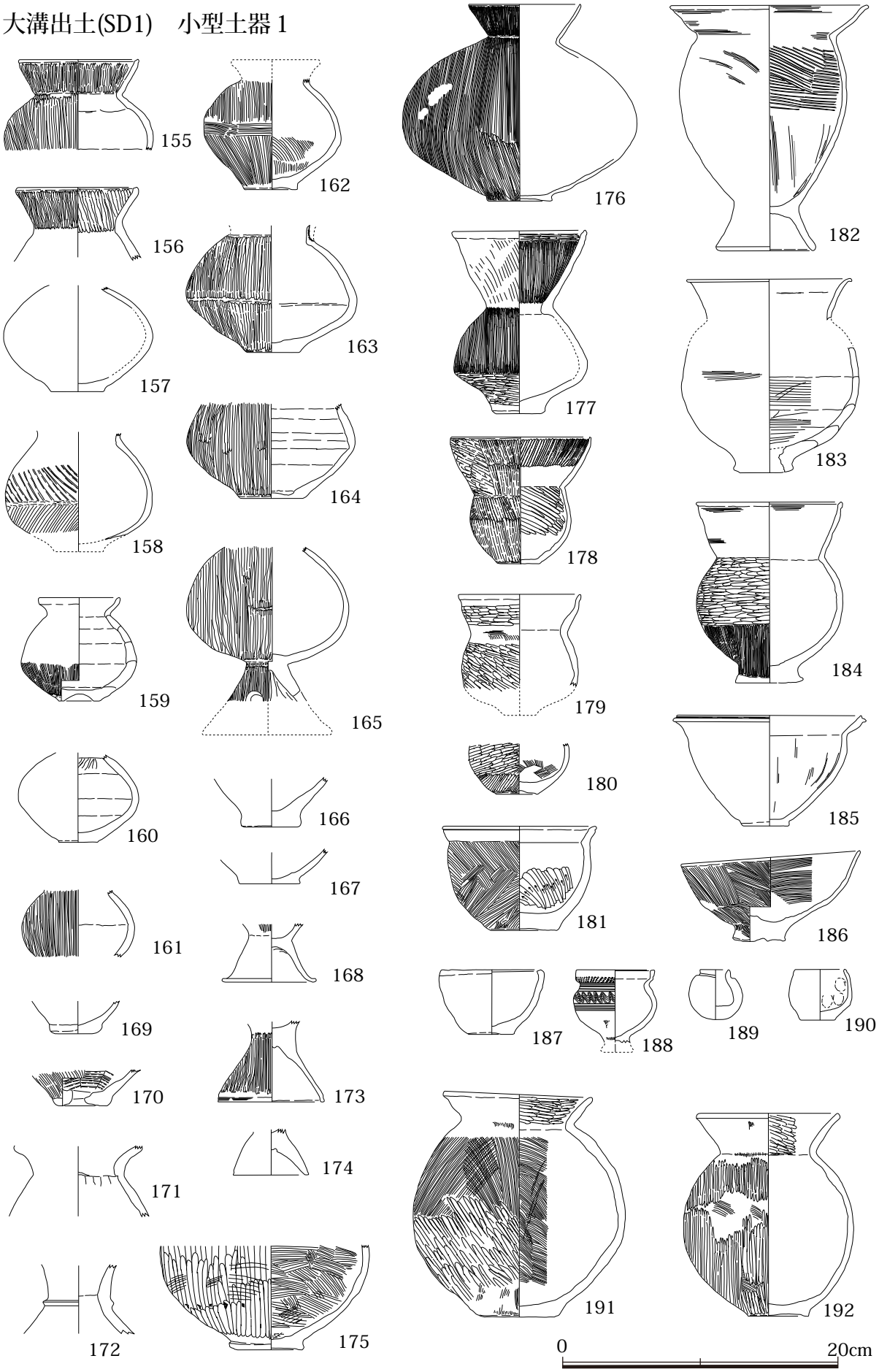
大溝出土(SD1)　高杯形土器３



包含層出土　高杯形土器

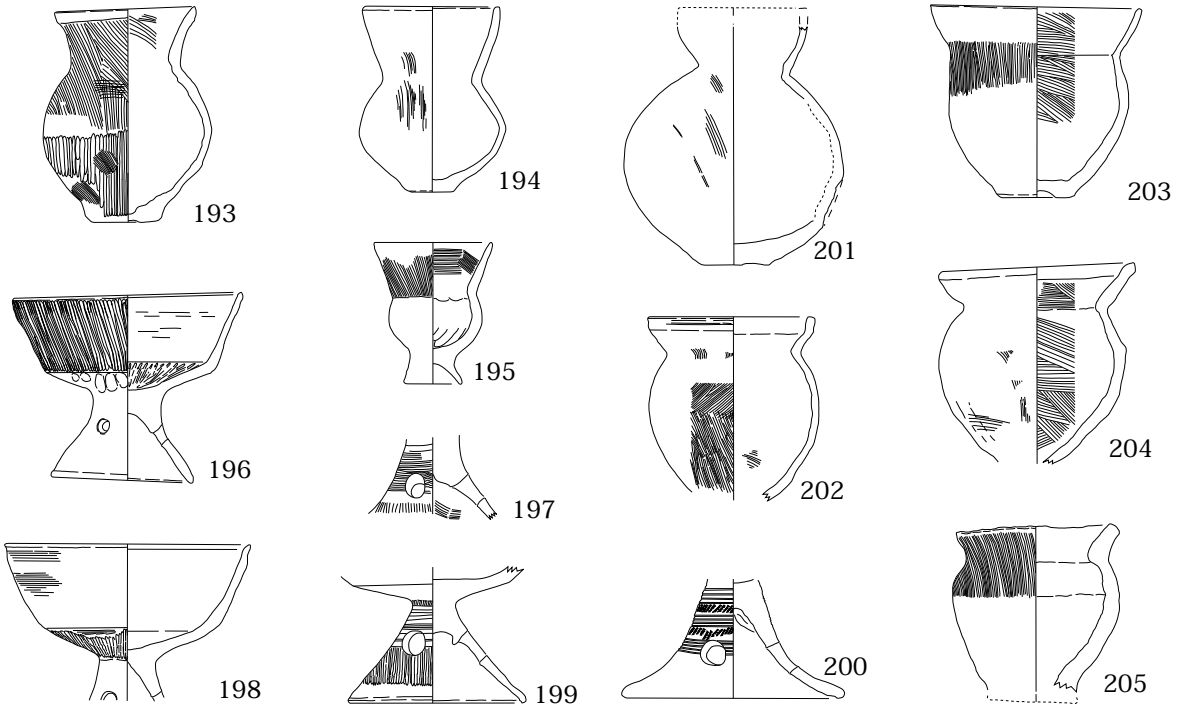
図版１０　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１０）　1:4

大溝出土(SD1)　小型土器１

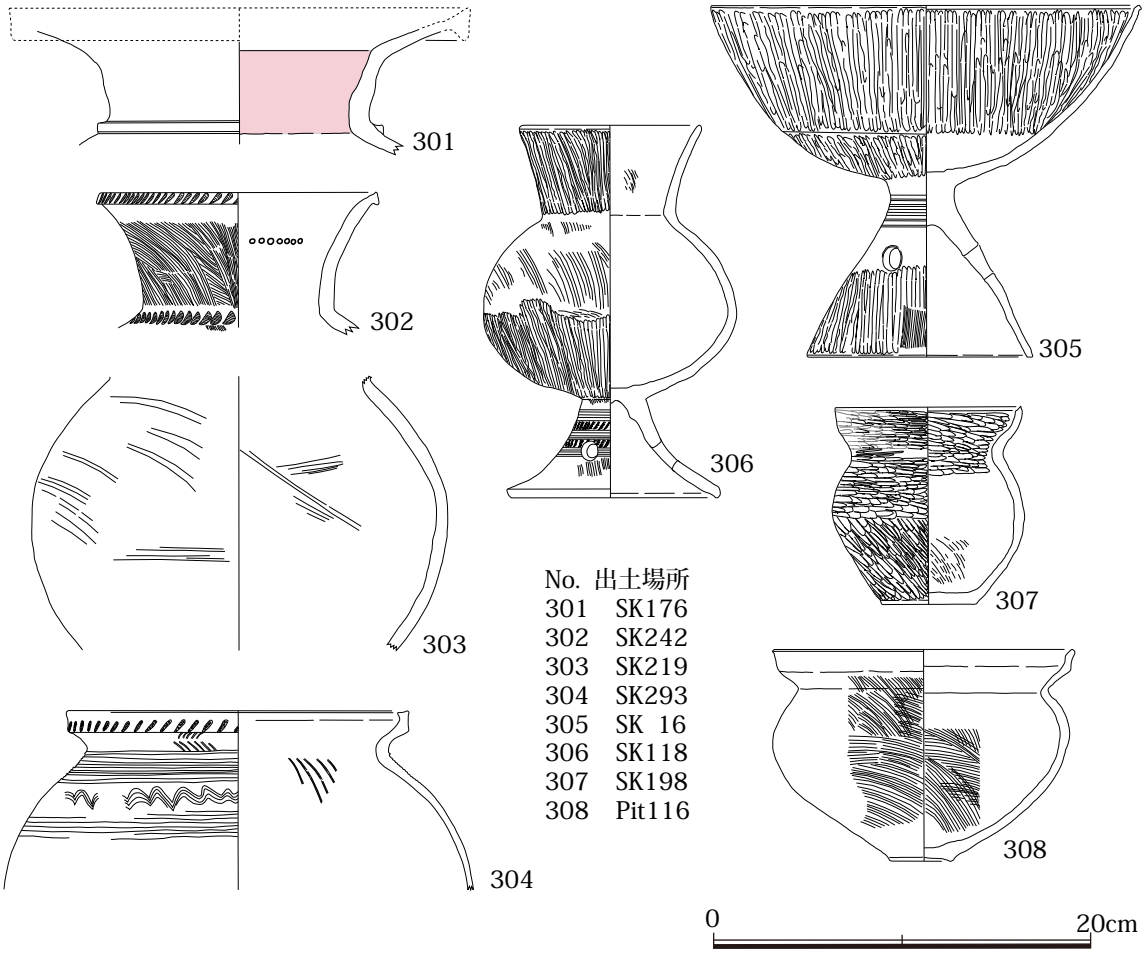


図版１１　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１１）　1:4

大溝出土(SD1)　小型土器２

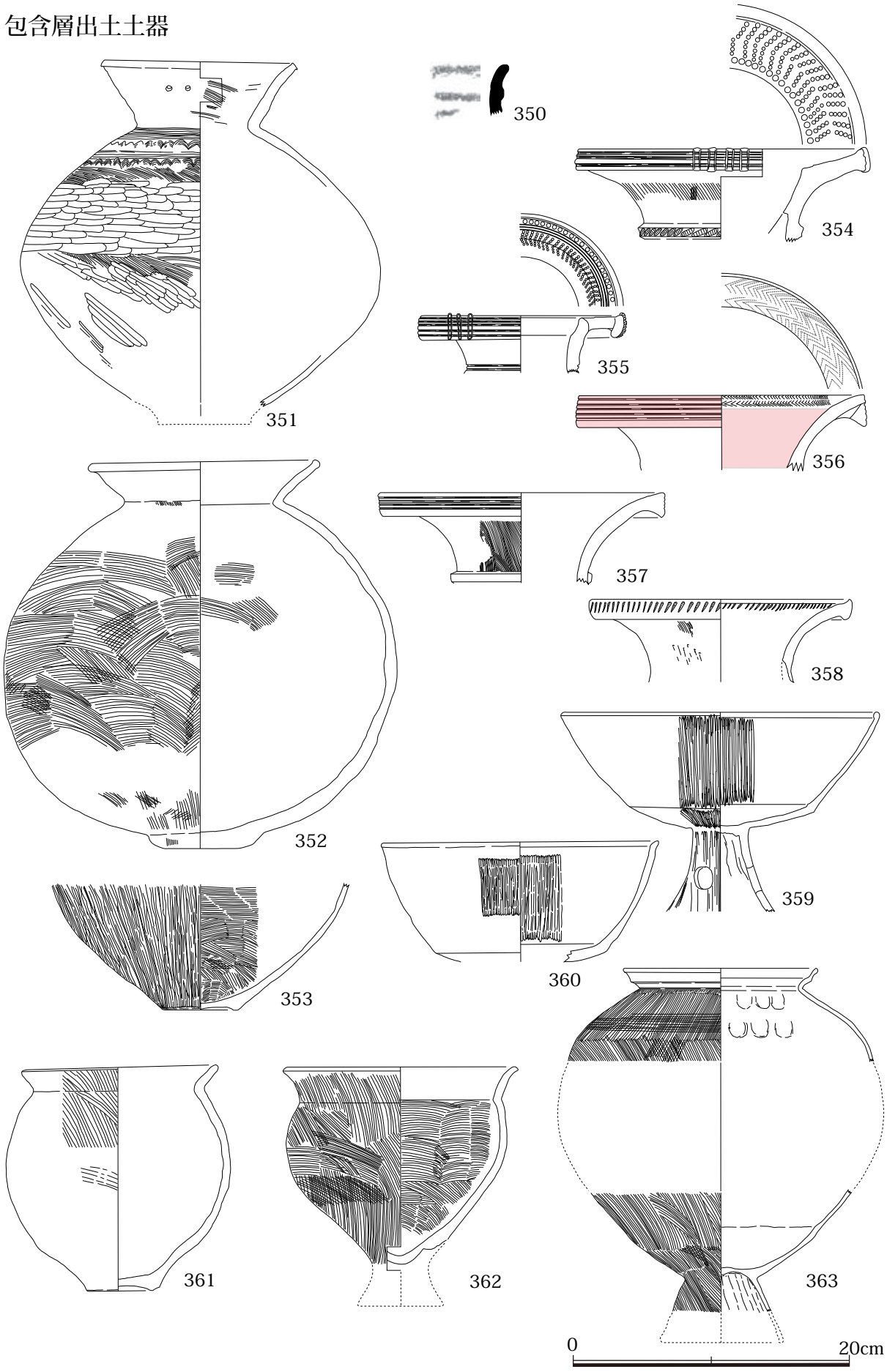


ピット・土坑出土土器



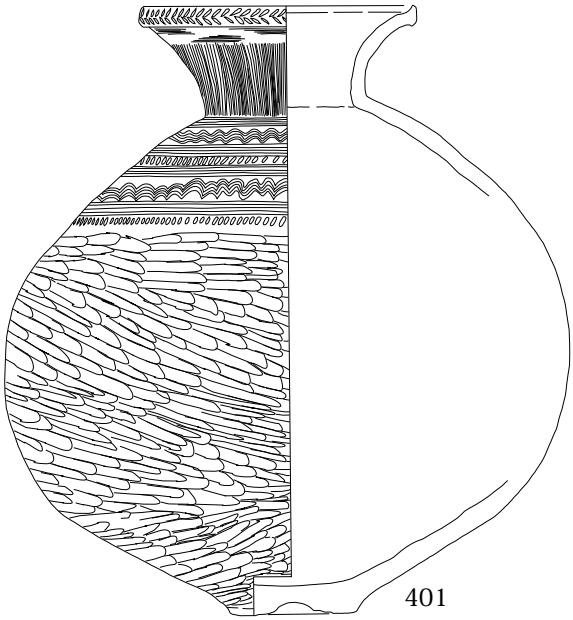
図版１２　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１２）　1:4

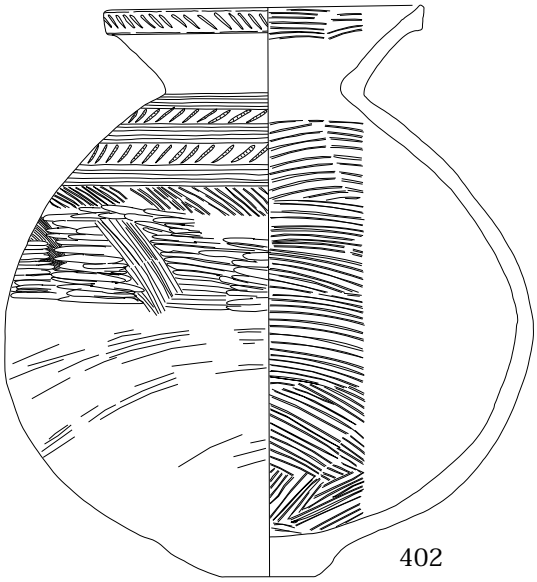
包含層出土土器

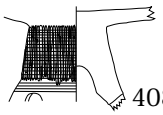


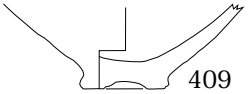
図版１３　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１３）　1:4

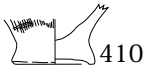
方形周溝墓　SX01

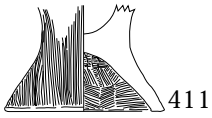


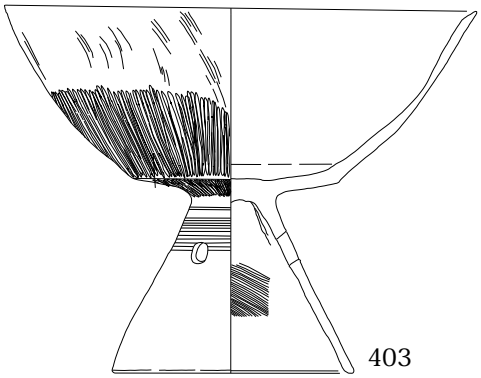


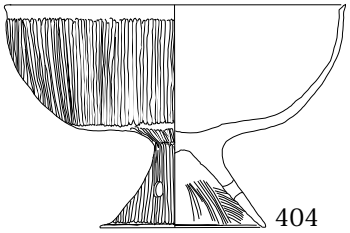


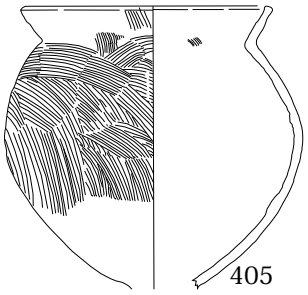


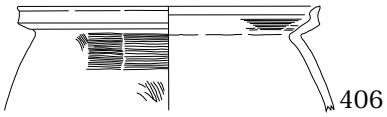


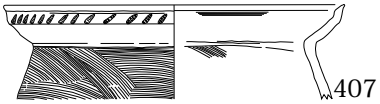




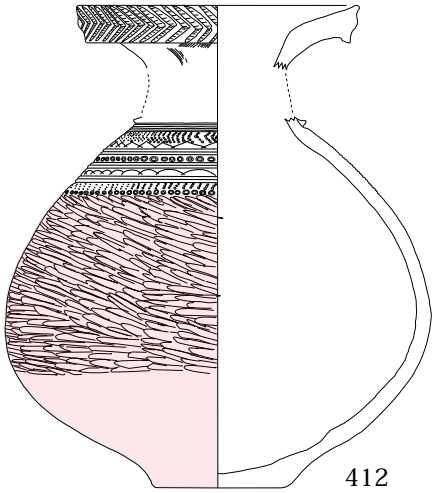








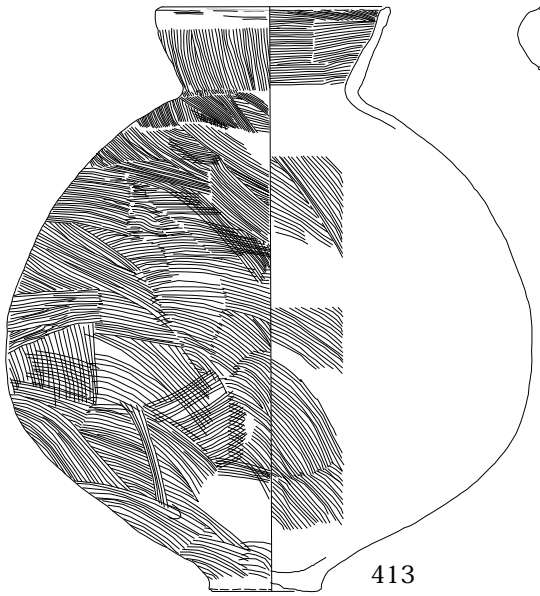
方形周溝墓　SX02

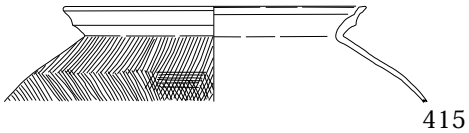


0　20cm

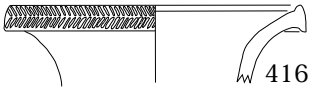
図版１４　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１４）　1:4

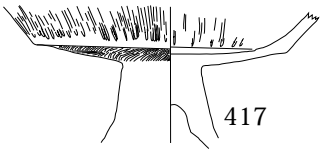
方形周溝墓　SX03

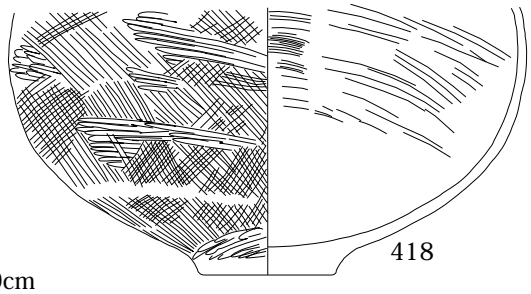




方形周溝墓　SX05

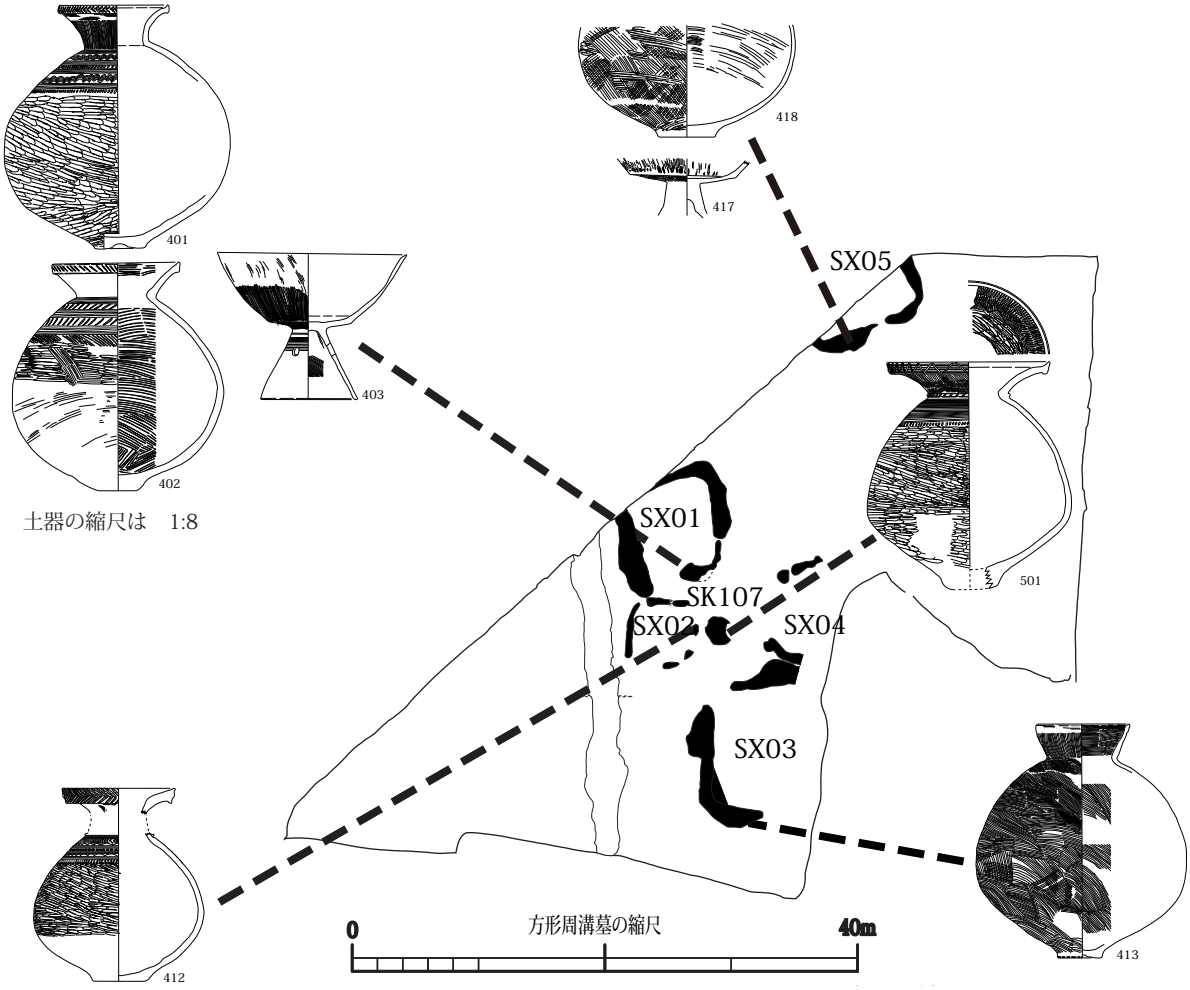






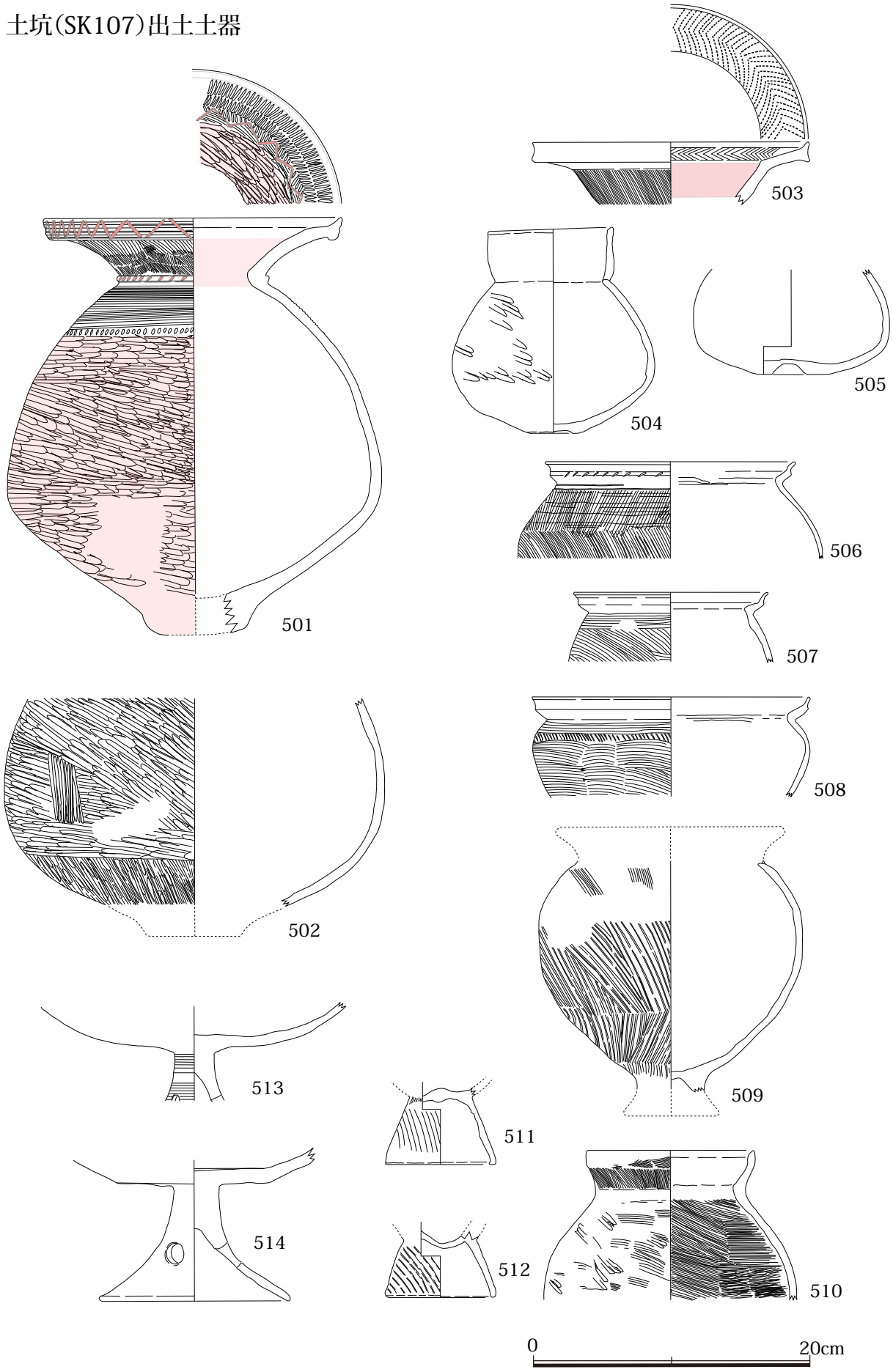
図版１５　十宮古里遺跡出土
遺物実測図（１５）　1:4

0　20cm



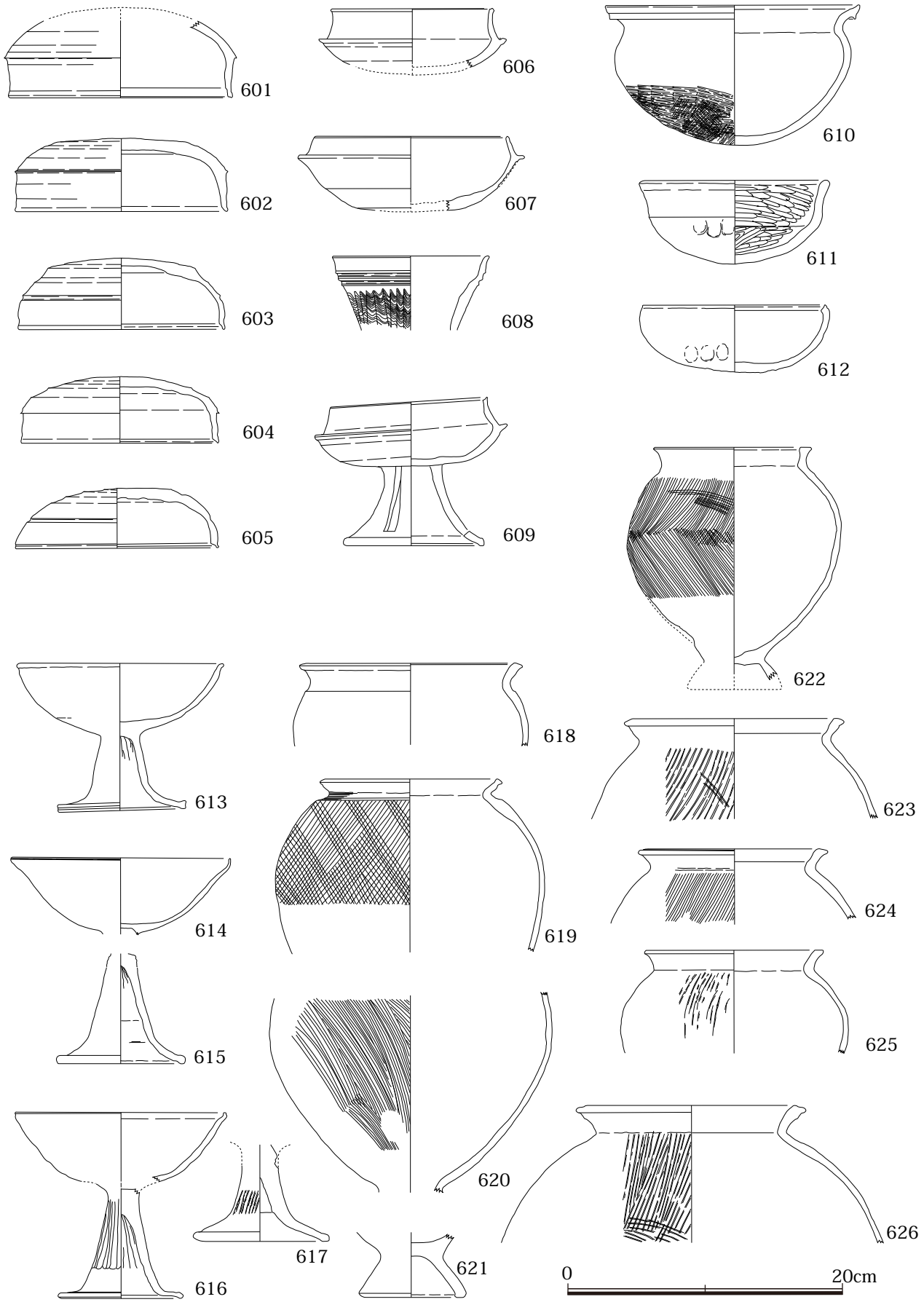
図版１６　方形周溝墓の土器出土地点（1:600）

土坑(SK107)出土土器



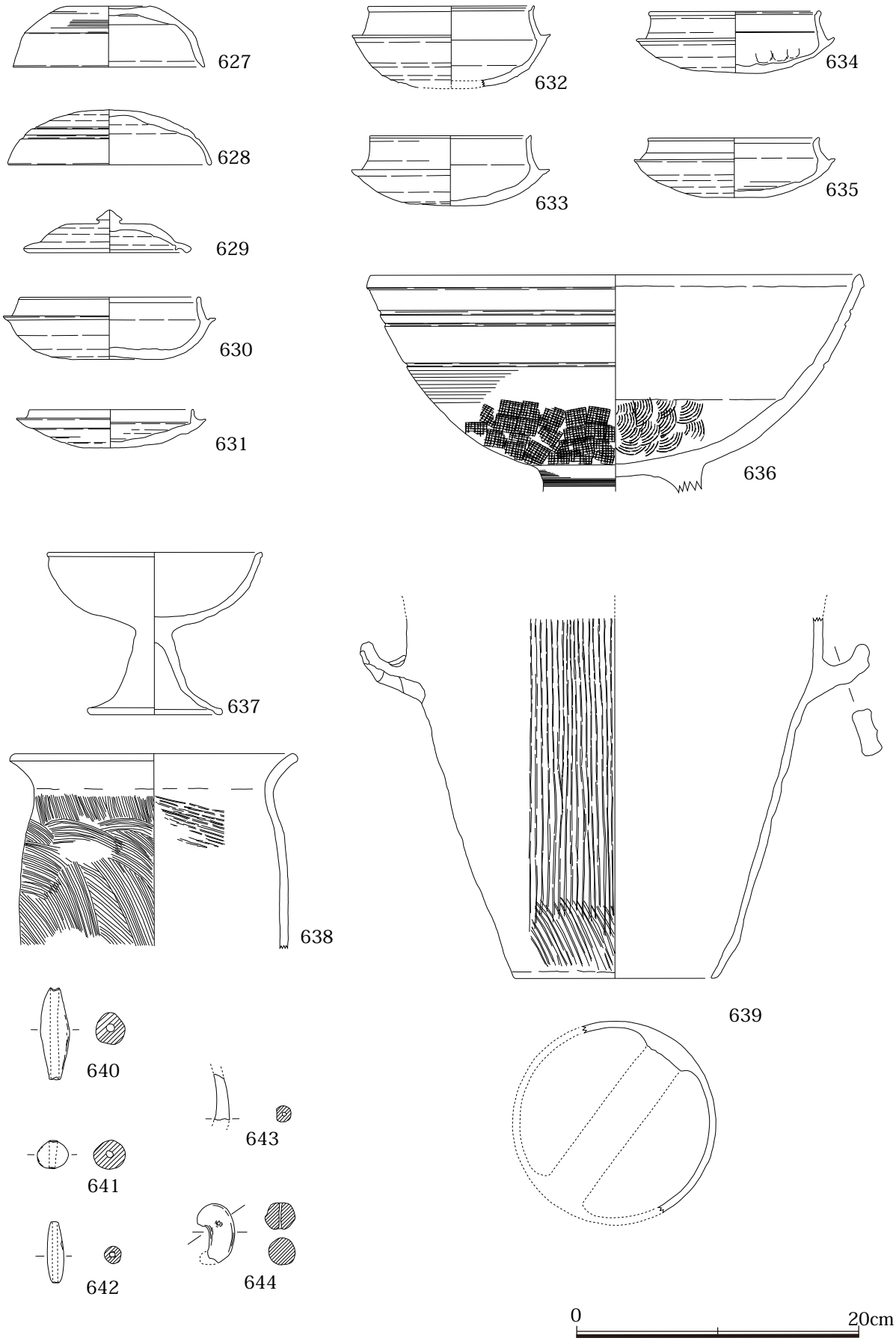
図版１７　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１６）　1:4

溝 (SD5) 出土を主とする古墳時代後期の土器 1



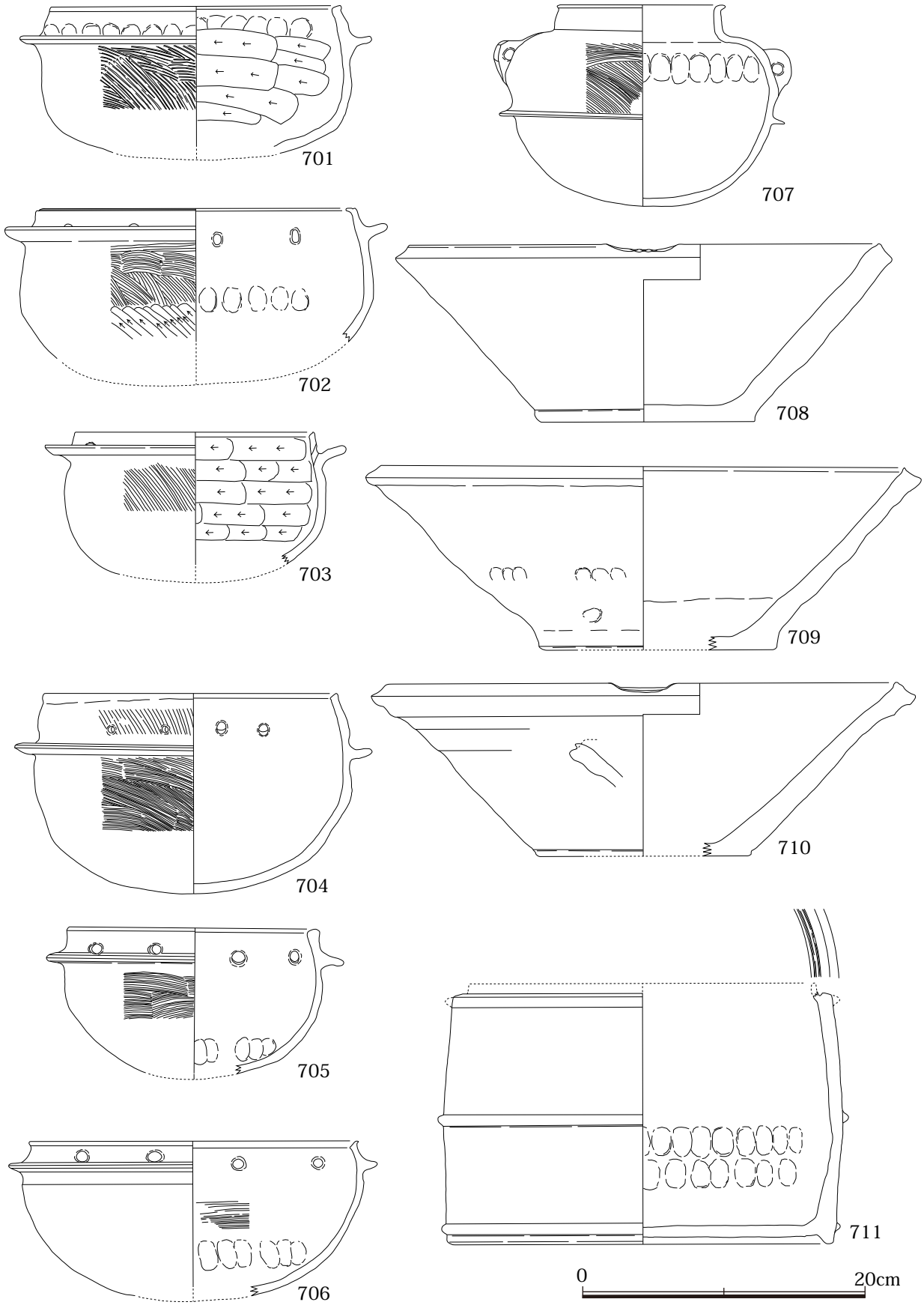
図版１８　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１７）　1:4

溝 (SD5) 出土を主とする古墳時代後期の土器２



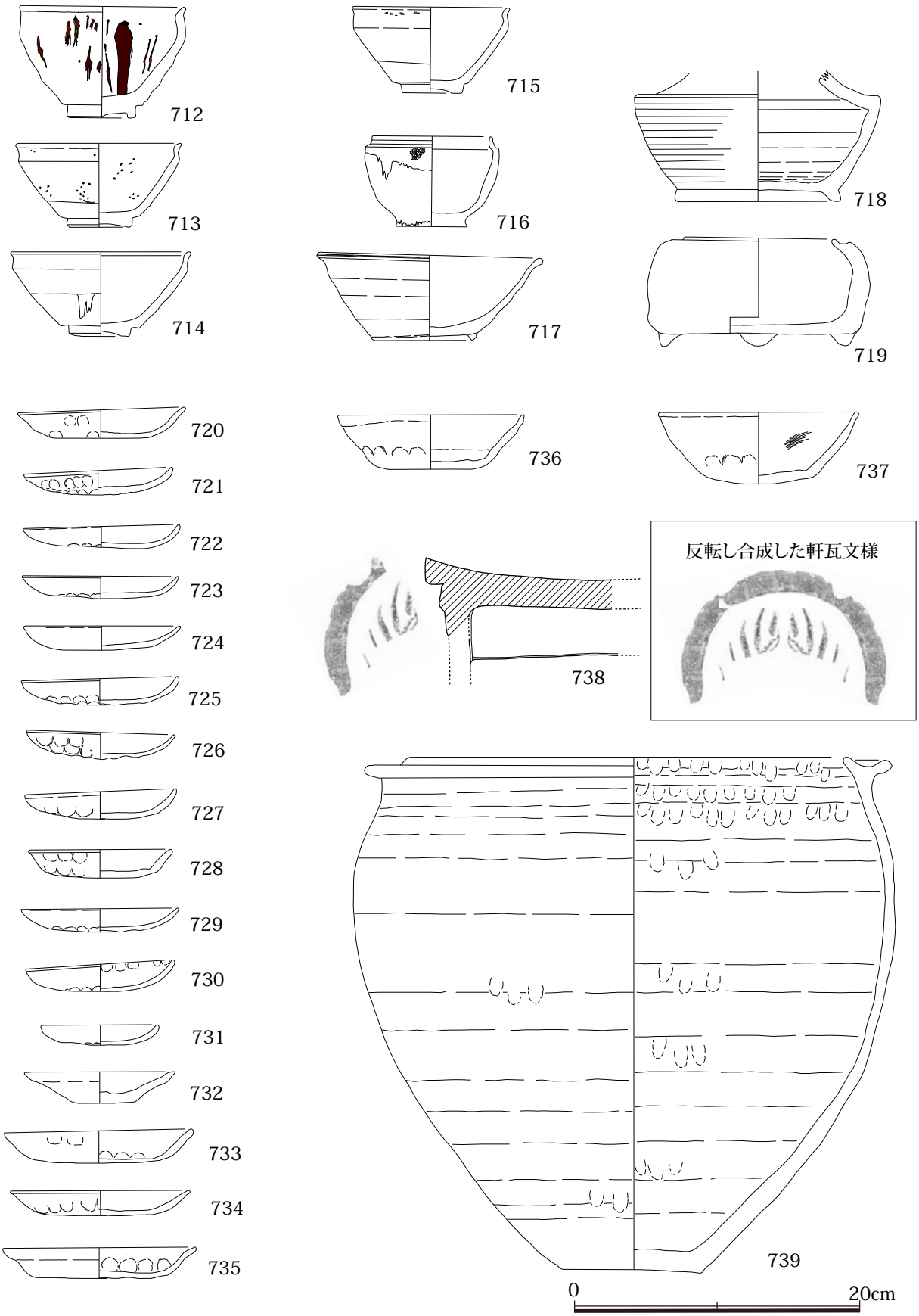
図版１９　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１８）　1:4

中世～近世の土器１

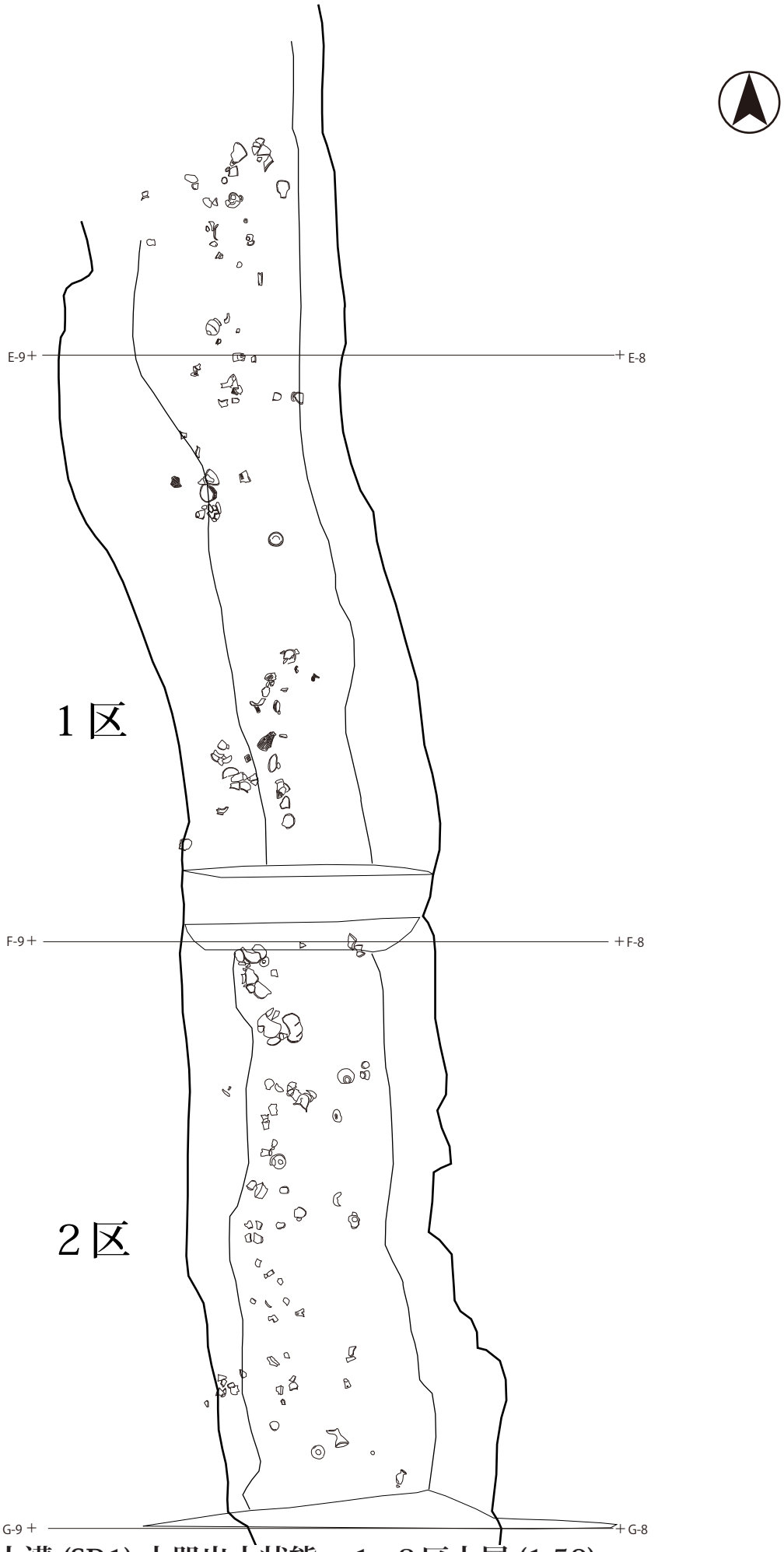


図版２０　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（１９）　1:4

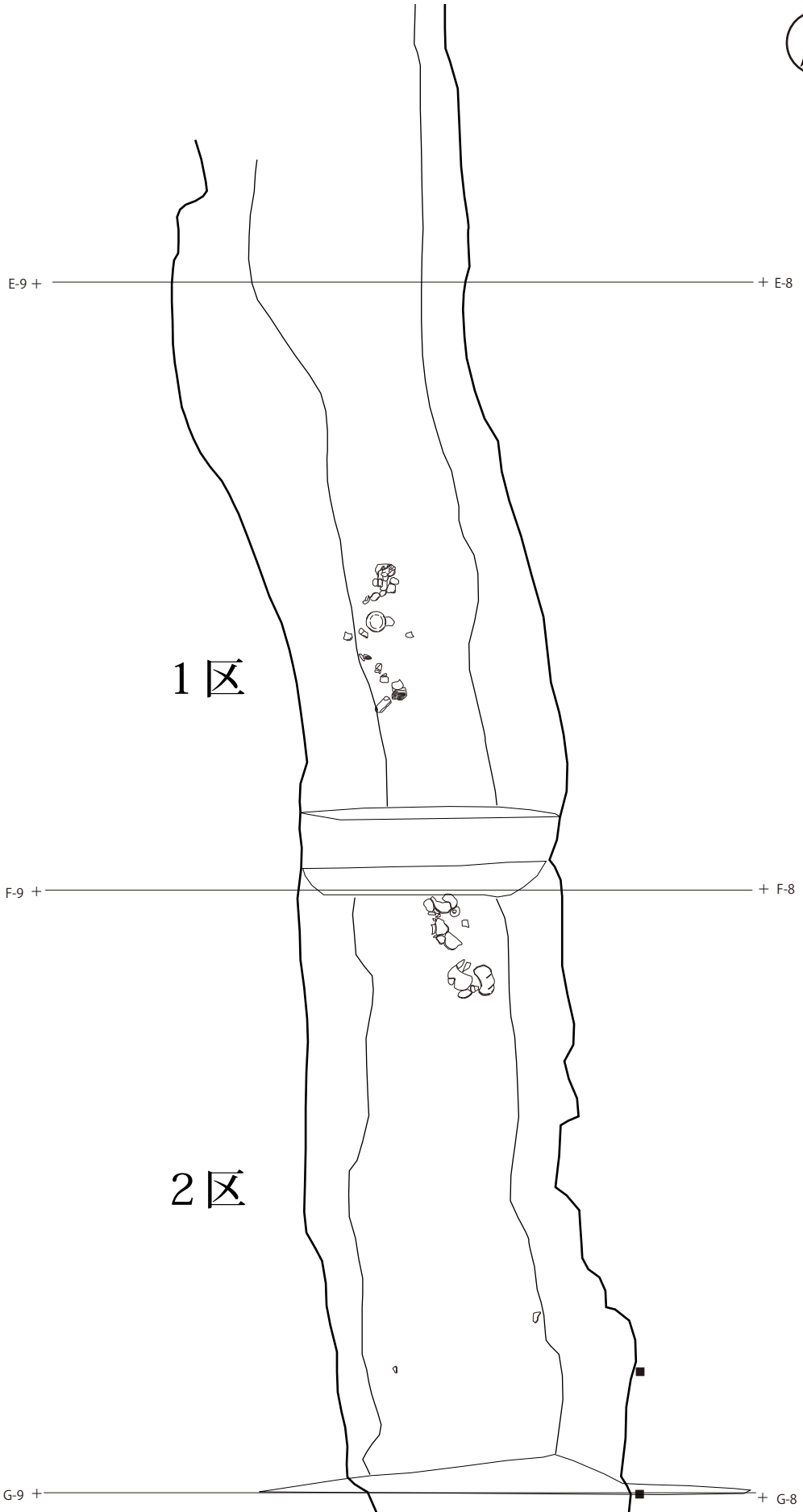
中世～近世の土器２



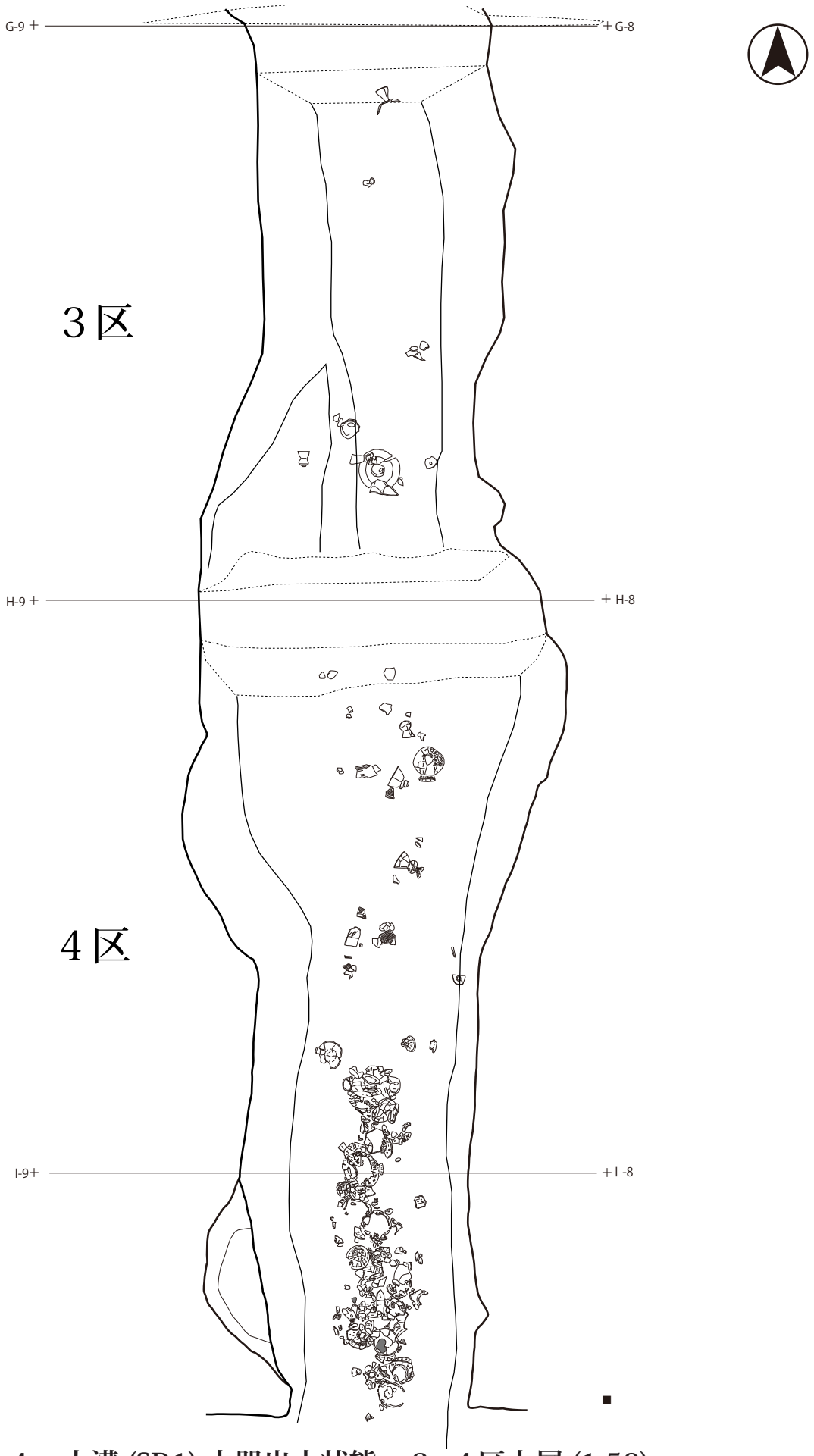
図版２１　十宮古里遺跡出土遺物　実測図（２０）　1:4（739 は 1:8）



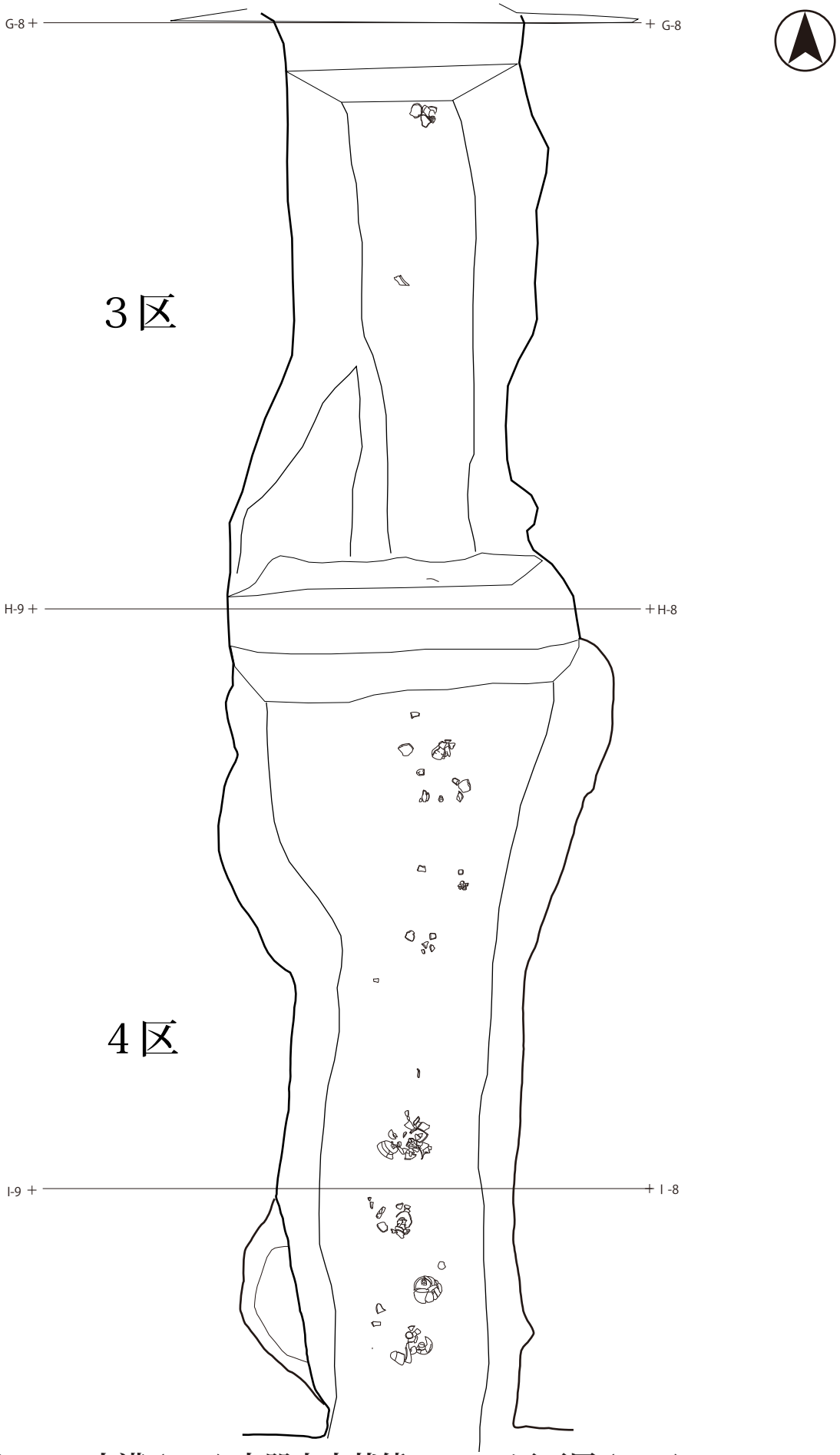
図版２２　大溝 (SD1) 土器出土状態　１，２区上層 (1:50)



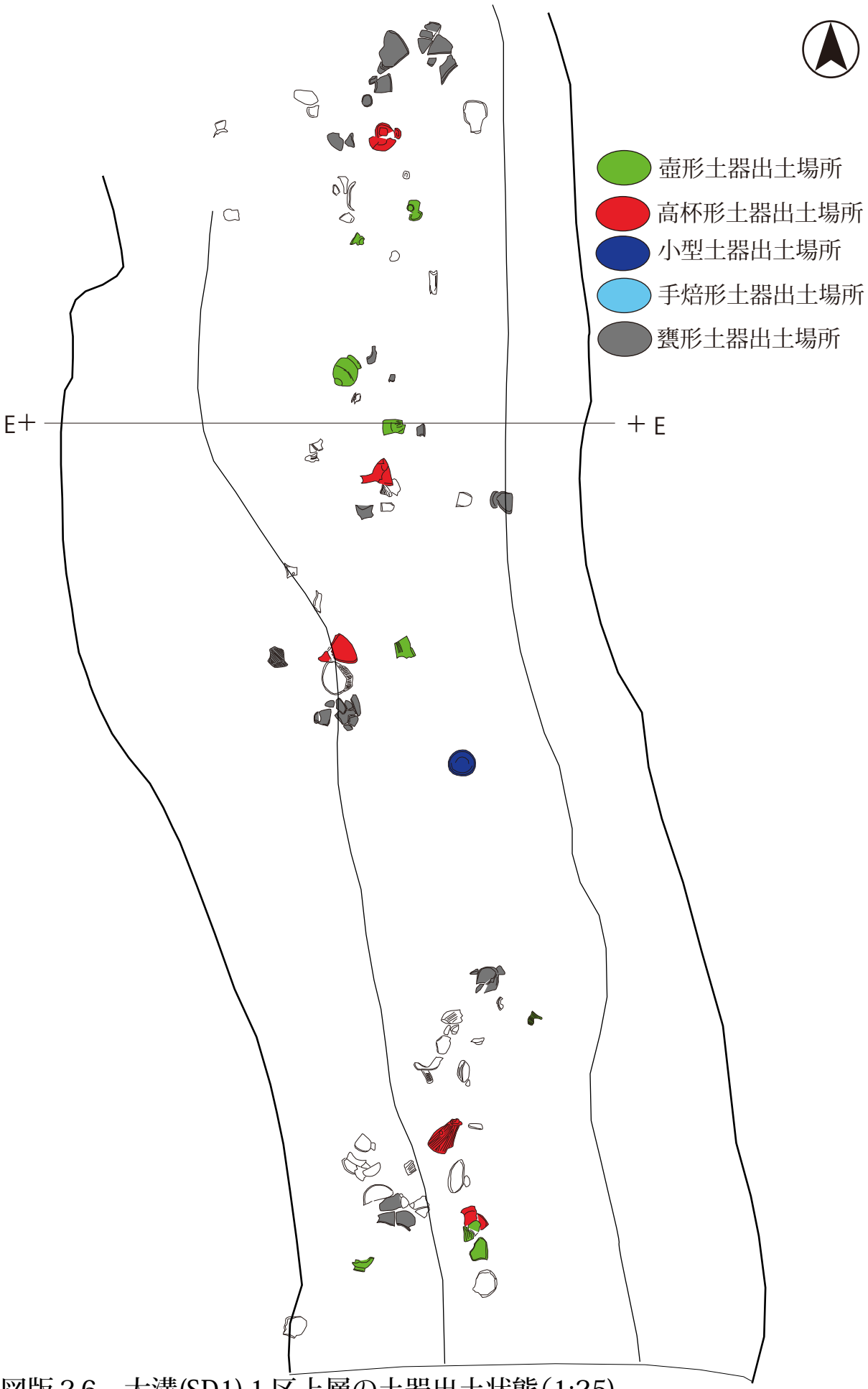
図版２３　大溝 (SD1) 土器出土状態　１，２区下層 (1:50)



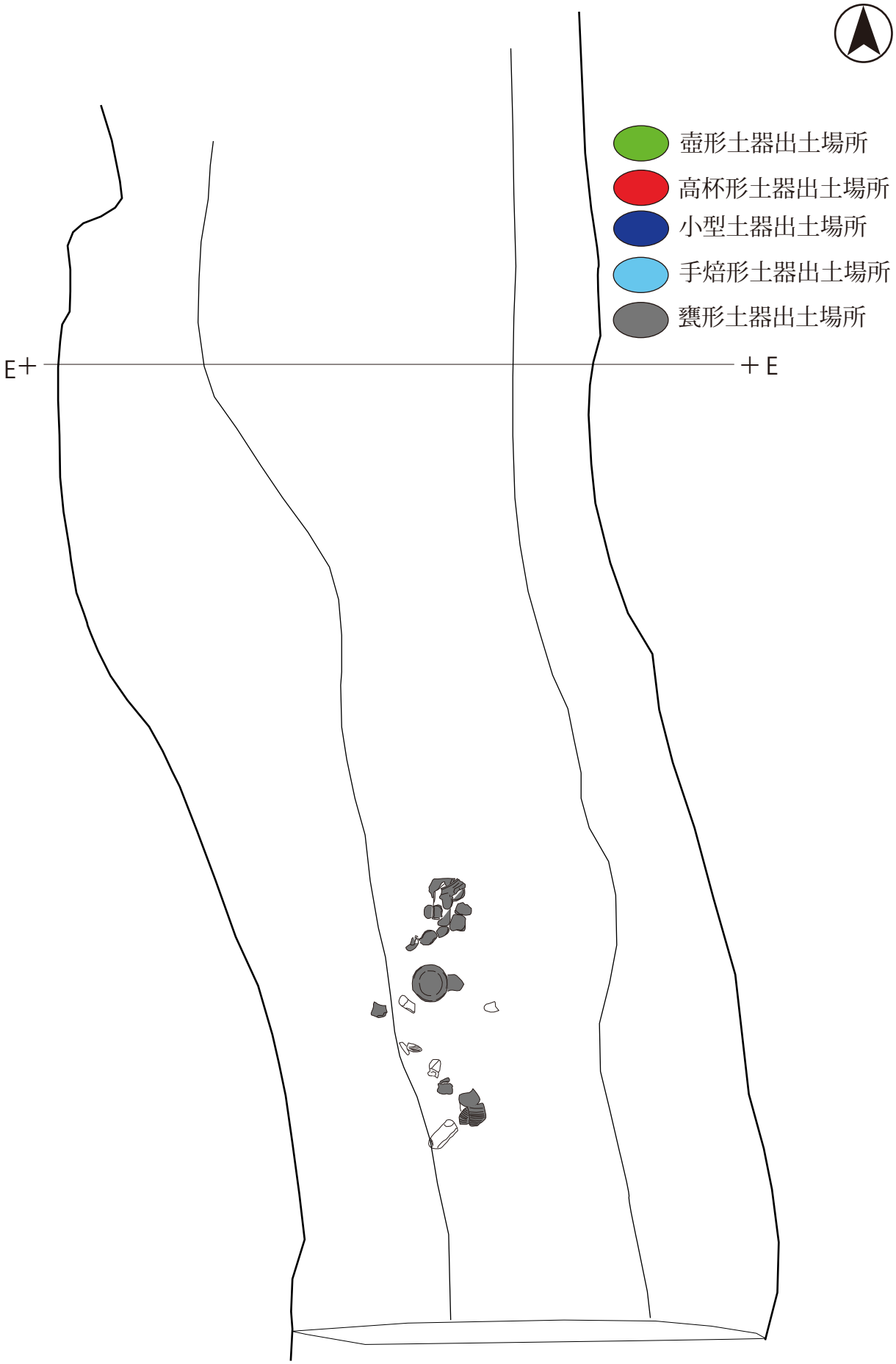
図版２４　大溝 (SD1) 土器出土状態　３，４区上層 (1:50)



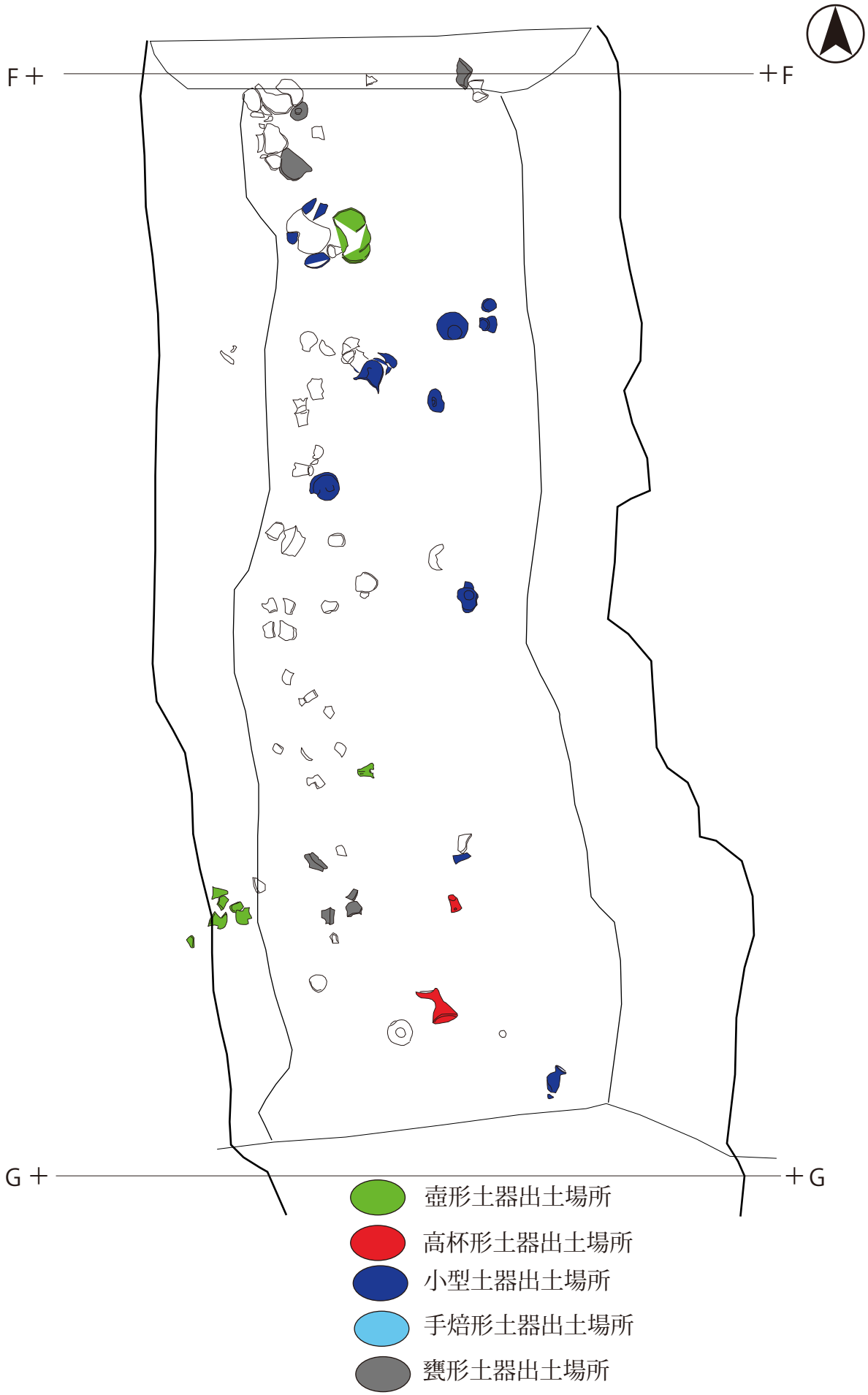
図版２５　大溝 (SD1) 土器出土状態　３，４区下層 (1:50)



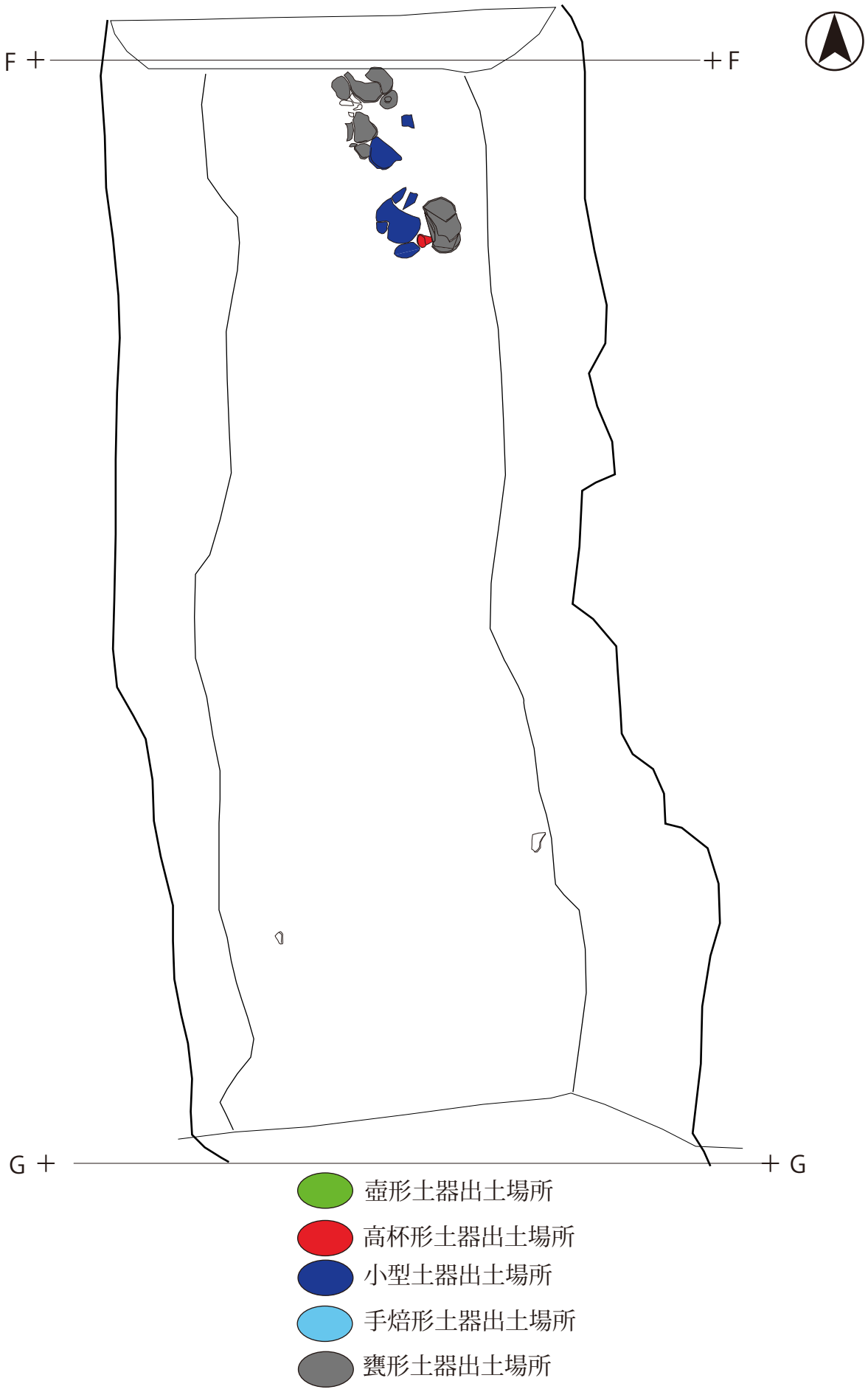
図版２６　大溝(SD1) １区上層の土器出土状態（1:25)



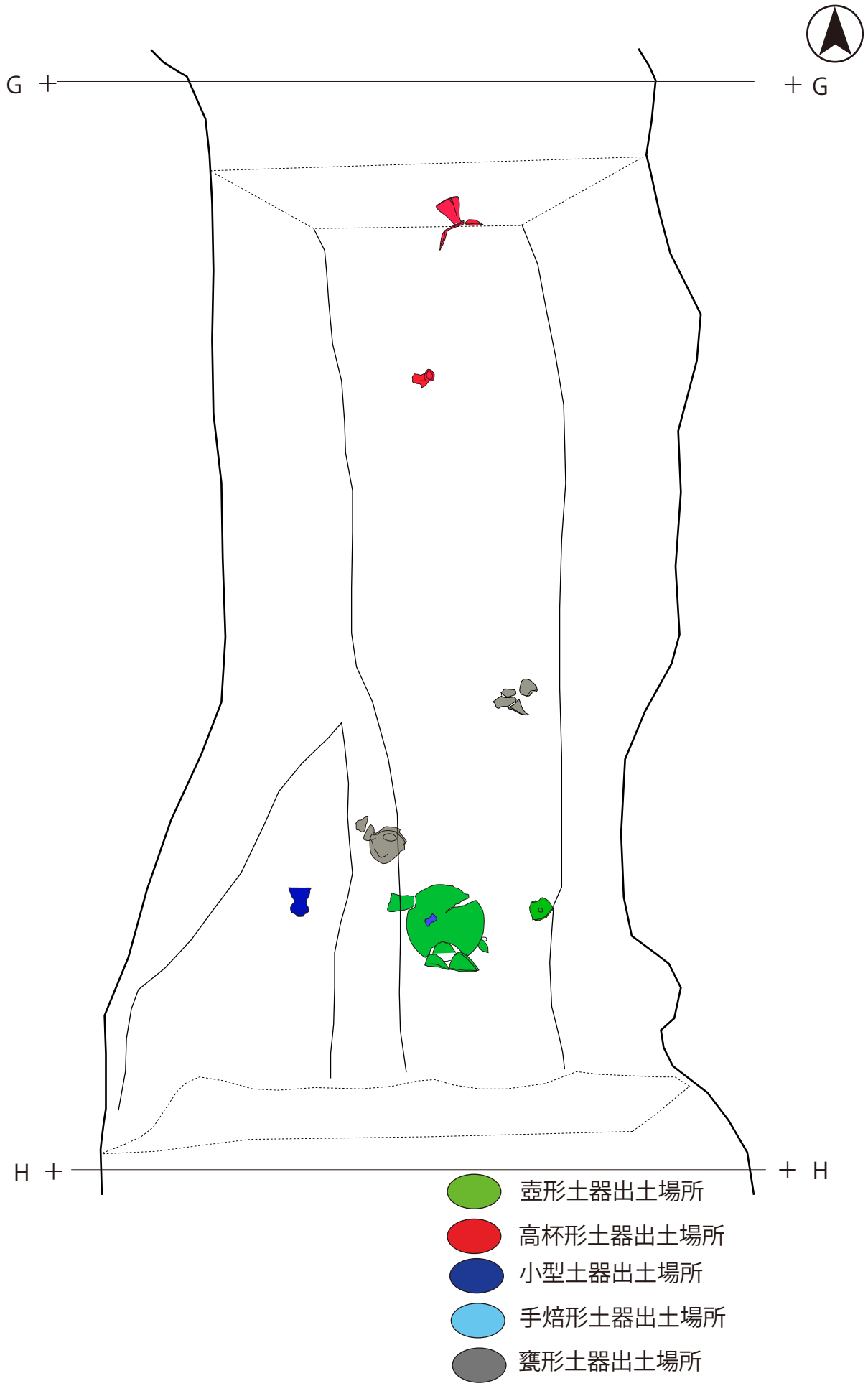
図版２７　大溝(SD1)1区下層の土器出土状態(1:25)



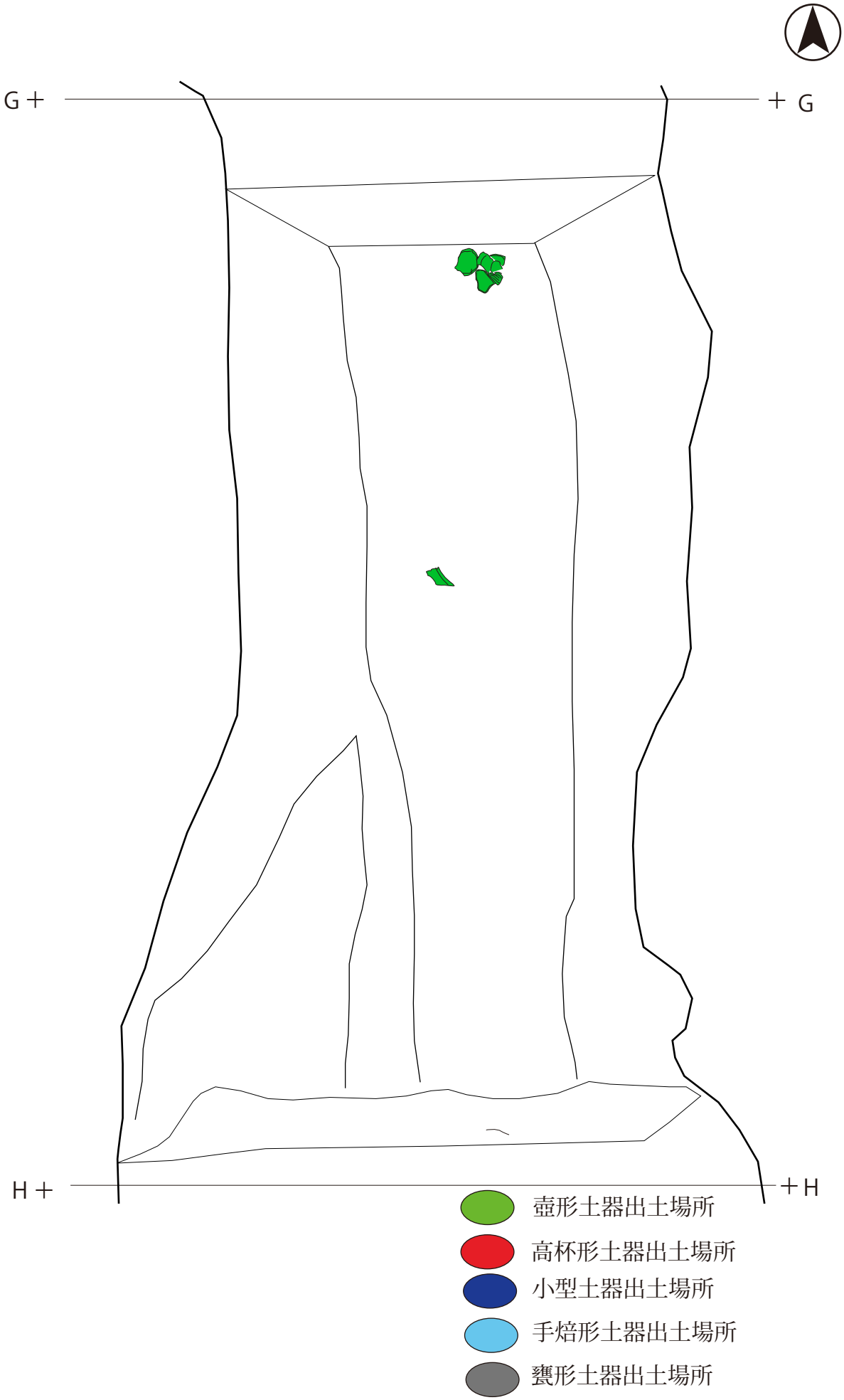
図版２８　大溝(SD1)2区上層の土器出土状態(1:25)



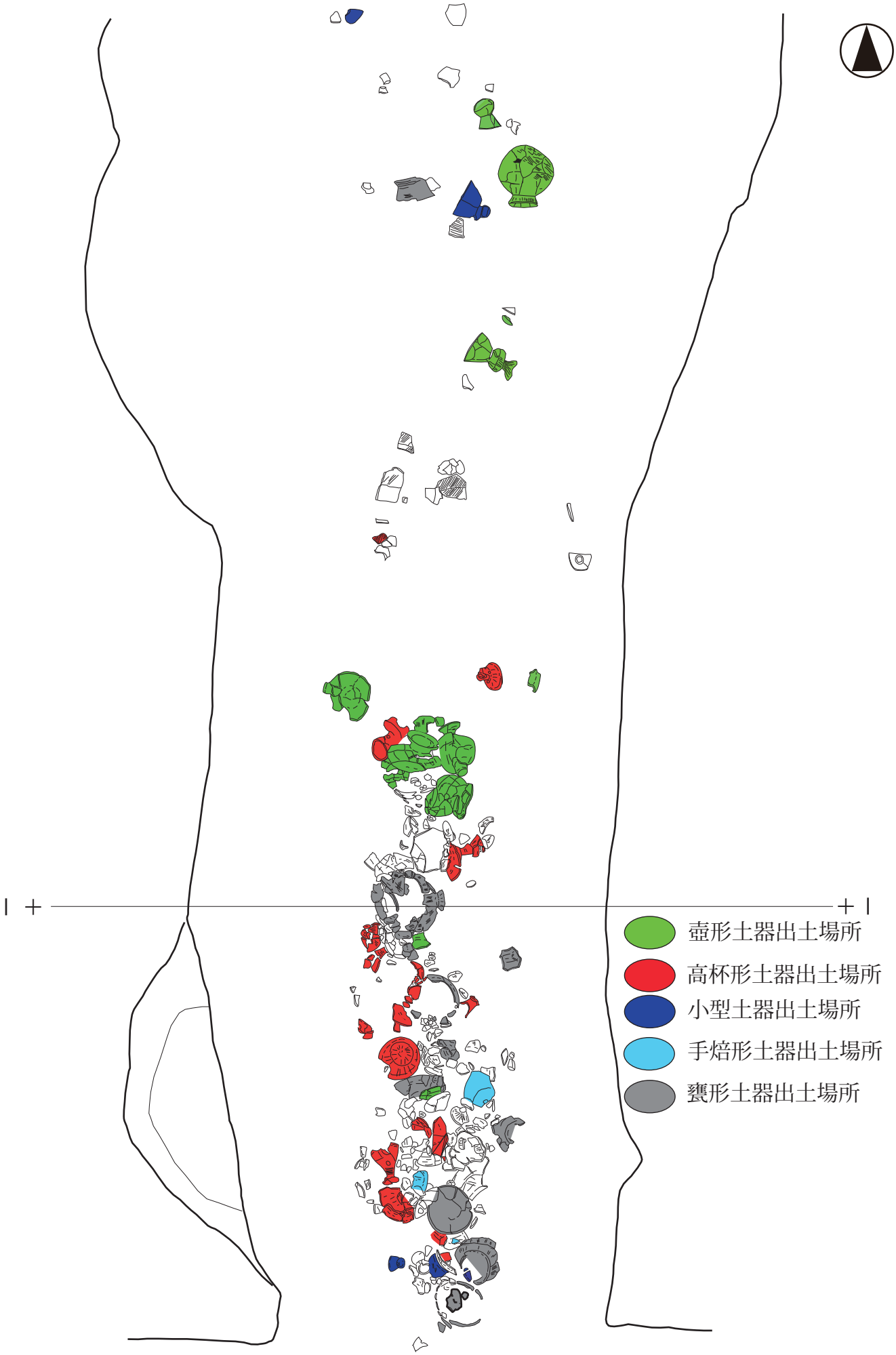
図版２９　大溝(SD1)2区下層土器出土状態(1:25)



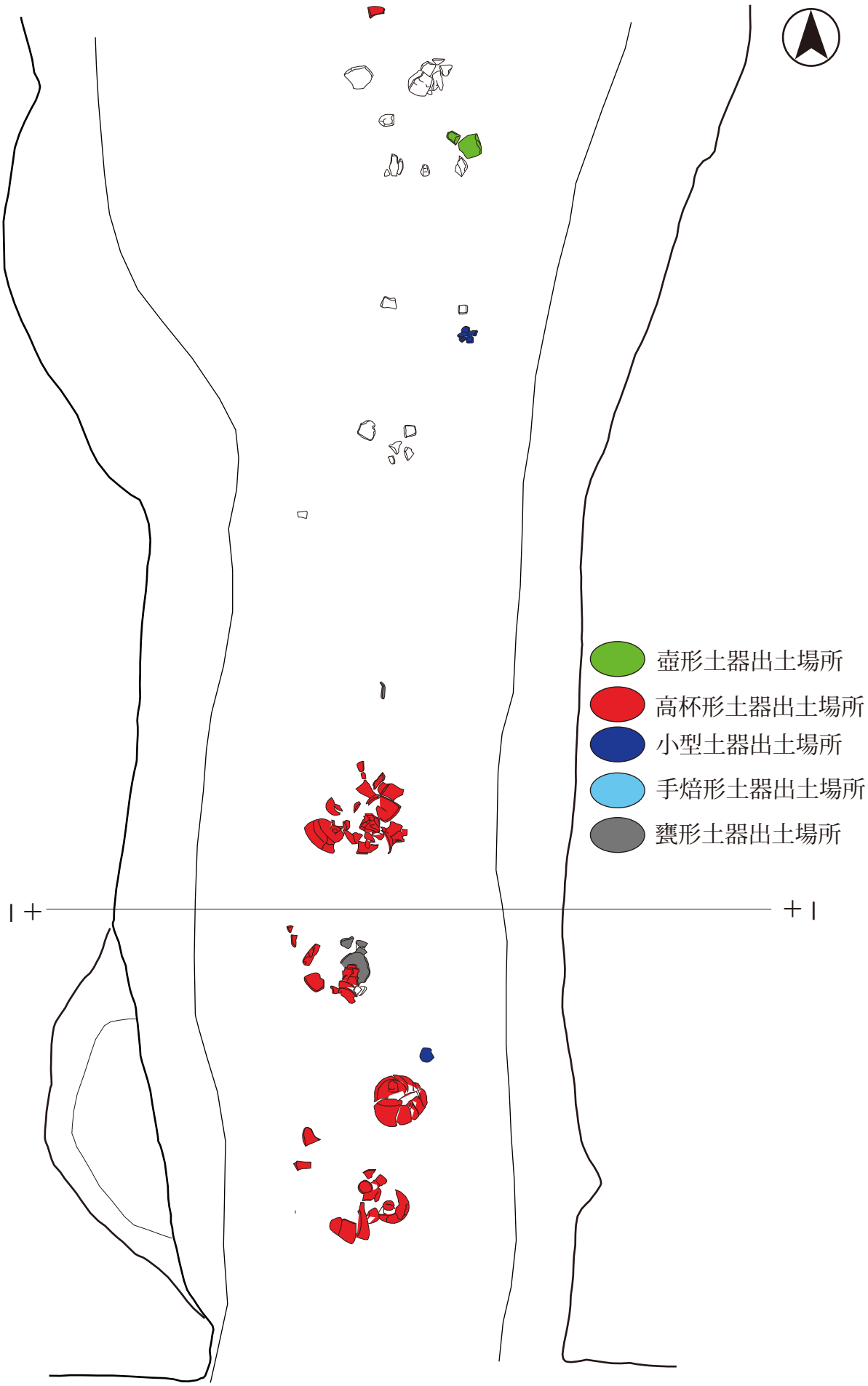
図版３０　大溝(SD1)3区上層の土器出土状態(1:25)



図版31　大溝(SD1)3区下層の土器出土状態（1:25)



図版 32　大溝 (SD1) 4 区上層の土器出土状態 (1:25)



図版33　大溝(SD1)4区下層の土器出土状態(1:25)

	遺構名	出土遺物	時期	規模 長さ	規模 幅	規模 深さ	平面形	主軸	地区	備　考・出土物
大 溝	SD1	古式土師器	弥生末～古墳初	25m 以上	2.2 ～ 3.4m	50 ～ 76cm	南北に直線状	NS ～ N10W	E9 ～ J9	ほぼ南北に直線状。北から南に流れる
掘立柱建物	SB1	不明	不明	Pit A：52 × 50cm	柱痕：27 × 22cm	深：38cm		西側柱列：N11W	A2	柱穴が他の遺構より大きく深い。
			（推定：弥生末～古墳初）	Pit B：59 × 72cm	柱痕：36 × 32cm	深：35cm	柱間：2.62m	南側柱列：E12N		大溝 (SD1) と同時期と考える
				Pit C：82 × 62cm	柱痕：36 × 28cm	深：60cm				
方形周溝墓	SX01	古式土師器	弥生末～古墳初	溝内：6.5 × 7.0m	0.6 ～ 1.9m	9 ～ 40cm	A 1 又は A 2	1 か 2 隅切れ	D7 ～ F8	溝は共有しない
				溝外：9.5 × 8.5m						広口壺，高杯など出土 (401 ～ 403)
	SX02	古式土師器	弥生末～古墳初	溝内：4.6 × 4.4m	0.5 ～ 0.6 m	8 ～ 16cm	A 1 又は A 2	1 か 2 隅切れ	F8 ～ G8	溝は共有しない。四隅切れのようだが削平により切断
				溝外：5.4 × 6.0m						パレス壺出土 (412)
	SX03	古式土師器	弥生末～古墳初	溝内：？× 12.0m	1.0 ～ 2.1m	10 ～ 40cm	B 型	中央陸橋型	G6 ～ I7	溝は共有しない
				溝外：？× 15.0m						広口壺出土 (413)
	SX04	なし	弥生末～古墳初	溝内：？× 7.0m	0.7 ～ 1.4m	10 ～ 15cm	B 型	中央陸橋型	F6 ～ G6	溝は共有しない
				溝外：？× 8.5m						
	SX05	古式土師器	弥生末～古墳初	溝内：8.5 ×？ m	0.5 ～ 1.5m	6 ～ 12cm	B 型	中央陸橋型	A4 ～ B6	溝は共有しない
				溝外：10.5 ×？ m						広口壺出土 (418)
土坑	SK107	古式土師器	弥生末～古墳初	2.1m	2.1m	30cm	楕円形		F7 ～ G7	土器多数出土（パレス，甕，甕，高杯），土坑は浅い
	SK16	古式土師器	弥生末～古墳初	2.1m	2.1m	67cm	方形		I12	高杯 (305)
	SK118	古式土師器	弥生末～古墳初	1.5m	0.8m	15cm	楕円形		I8	脚付短頸壺 (306)
	SK142	古式土師器	弥生末～古墳初	1.1m	0.7m	10cm	楕円形		D5	小型鉢 (308)
	SK198	古式土師器	弥生末～古墳初	0.5m	0.5m	13cm	円形		G11	小型壺 (307)
	SK219	古式土師器	弥生末～古墳初	0.4m	0.4m	22cm	円形		G10	壺胴部 (303)
溝	SD5	須恵・土師	古墳後期	8.5m	0.55 ～ 0.65m	16 ～ 41cm			F8 ～ G8	南北の溝（土坑か？）　遺物多い
土坑	SK11	須恵器	古墳後期	1.5m	0.8m	46cm			G8	SD5 の中の土坑 (633)　中世土器の流入もある
	SK18	須恵器	古墳後期	1.0m	2.5m 以上	15cm			H11	
	SK31	須恵器	古墳後期	1.2m	0.8m	13cm			H11	635
竪穴住居	SH1	須恵器	古墳後期	5.8m	4.7m	5 ～ 10cm	面積（27.3m2）		I7 ～ J8	須恵器小片出土
井戸	SK77	土師皿	中世	2.9m	2.4m	90 ～ 102cm	円形		E7	土師皿・土師鉢
井戸	SK79		中世	2.5m	2.4m	140 ～ 154cm	円形		F7	土師皿 (731)
	SK117	土師鉢	中世	5.5m	2.8m	35cm	長方形		A2 ～ B2	小型鉢 (737)
	P99		中世	1.8m	1.6m	30cm	円形		C4	
	SK82		中世	9.4m	4.8m	20cm	長方形		C7 ～ D6	
	SK102	羽釜	中世	6.4m	2.8m	30cm	楕円形		C3 ～ C4	羽釜 (703)
	SK83	土師皿	中世	4m 以上	？	15cm	？		B6 ～ C6	土師皿 (732)
井戸	SK84	天目茶碗	中世	1.8m	2.0m	120 ～ 150cm	楕円形		C5	天目茶碗 (715,716)
井戸	SK85	天目茶碗	中世	1.6m	2.3m	20cm	楕円形		C5 ～ C6	天目茶碗 (713)
	SK23	擂鉢	中世	1.7m	1.5m	70cm	楕円形		F10	片口擂鉢（635）

第 1 表　　主な遺構一覧表

地区名	遺構種別		層位等	確認日（1993年 月 日）	出土遺物	備考
	Pit	1				
	Pit	2		1215	弥生土器・土師器	
	Pit	3				
	Pit	4		0901	土師器・須恵器	
	Pit	5		0901	土師器	
	Pit	6				
	Pit	7		0902	土師器	
	Pit	8		0901	土師器	
	Pit	9				
	Pit	10		0901	土師器・須恵器・灰釉陶器・土錘・羽釜	
	Pit	11		0901	弥生土器・土師器？	
	Pit	12		1012	土師器	
	Pit	13		091	土師器	
	Pit	14				
	Pit	15		0901	土師器	
	Pit	16				
	Pit	17		0901/1013	弥生土器・土師器・須恵器	
	Pit	18		0901/1012	弥生土器・土師器	
	Pit	19		0901	山茶碗・羽釜・土錘	
	Pit	20				
	Pit	21		1012	土師器	
	Pit	22		0901	土師器	
	Pit	23		1012	土師器	
	Pit	24		0901	土師器	
	Pit	25		0901	土師器	
	Pit	26		0901	土師器	
	Pit	27		0901	土師器	
	Pit	28				
	Pit	29				
	Pit	30		0901	弥生土器・土師器？	
	Pit	31		0902	土師器・山茶碗	
	Pit	32		0902	土師器	
	Pit	33				
	Pit	34		0902	弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器	
	Pit	35				
	Pit	36				
	Pit	37		1012	弥生土器	
	Pit	38		0902	弥生土器・土師器	奈良
	Pit	39		1018	弥生土器	
	Pit	40				
	Pit	41		0902	土師器	
	Pit	42		0902	土師器・灰釉陶器	
	Pit	43		0902	土師器	
	Pit	44		0902	土師器	
	Pit	45		1013	弥生土器	
	Pit	46		1014	弥生土器	
	Pit	47				
	Pit	48		0902	土師器・須恵器	
	Pit	49		0902	土師器？・須恵器	
	Pit	50		0902	土師器	
	Pit	51				
	Pit	52		0902	土師器・須恵器・製塩土器	
	Pit	53		0902	土師器	
	Pit	54		0902	土師器・須恵器	
	Pit	55		1006	土師器	
	Pit	56		0902	土師器	
	Pit	57		0902/1028	土師器．須恵器．灰釉陶器．鉄滓．釘．山茶碗．羽釜．常滑焼	
	Pit	58		0902	土師器	

第２表　報告外　遺構一覧表（１）

地区名	遺構種別		層位等	確認日（1993年 月 日）	出土遺物	備考
	Pit	59		0902	土師器・須恵器・羽釜	
	Pit	60		0902	弥生土器・須恵器	
	Pit	61		0902	土師器・灰釉陶器	
	Pit	62				
	Pit	63		0902	須恵器	
	Pit	64		0902	弥生土器	
	Pit	65		0902	土師器	
	Pit	66		0902	土師器	
	Pit	67		0902	土師器・須恵器	
	Pit	68		0902	土師器	
	Pit	69		0902	土師器	
	Pit	70				
	Pit	71		1012	弥生土器・土師器	
	Pit	72		1012	土師器・山茶碗	
	Pit	73				
	Pit	74				
	Pit	75				
	Pit	76				
	Pit	77				
	Pit	78				
	Pit	79		1012	弥生土器	
	Pit	80				
	Pit	81		1012	土師器	
	Pit	82		1018	弥生土器・鉄釘	
	Pit	83		1012	弥生土器・土師器・須恵器	
	Pit	84				
	Pit	85		1013	弥生土器・土師器	
	Pit	86				
	Pit	87		1013	土師器	
	Pit	88		1013	土師器	
	Pit	89		1013	土師器・山茶碗	
	Pit	90		1013	土師器	
	Pit	91		1013/1022	土師器・須恵器	
	Pit	92		1013	土師器	
	Pit	93		1013	土師器	
	Pit	94		1014	弥生土器・土師器	
	Pit	95		1014	刀子	
	Pit	96		10	土師器・山茶碗	
	Pit	97		1014	土師器	
	Pit	98		1014	土師器	
	Pit	99		1022	土師器	
	Pit	100		1018	土師器	
	Pit	101		1018/1104	弥生土器・土師器	
	Pit	102		1018	土師器・灰釉陶器	
	Pit	103		1018	土師器	
	Pit	104		1018	土師器	
	Pit	105			弥生土器・土師器・山茶碗・羽釜・天目茶碗・常滑焼	
	Pit	106		1020	土師器	
	Pit	107		1020	土師器	
	Pit	108		1022	土師器（宇田甕）・羽釜・木製品	
	Pit	109		1022/1023/1026	土師器・瓦質土器・常滑焼	
	Pit	110		1023/1027	須恵器・土師器・土師皿・羽釜・常滑焼・天目茶碗・古瀬戸	
	Pit	111		1023	須恵器・土師皿・羽釜・山茶碗・常滑焼・瀬戸	
	Pit	112		1023	土師器	
	Pit	113		1026/1101	土師器・須恵器・山茶碗・羽釜・常滑焼・瀬戸	
	Pit	114		1026	羽釜	
	Pit	115		1026	土師器	
	Pit	116		1104	弥生土器・土師器・羽釜	

第３表　報告外　遺構一覧表（２）

地区名	遺構種別		層位等	確認日（1993年　月　日）	出土遺物	備考
	SK	1		0920	弥生土器・土師器・羽釜	
F-9	SK	2		0920/0921/0924	土師器・須恵器	ハザマ
E-8	SK	3			弥生土器・土師器・須恵器	ハザマ
	SK	4		0920/0924	土師器・須恵器	
F-8	SK	5		0921/0924/0925	弥生土器・須恵器・土師器	
	SK	6		0920	土師器	
F8・G8	SK	7		0924	土師器・須恵器・山茶碗・瀬戸	古代～中世混じる
G-9	SK	8		0920/0925	弥生土器・土師器・須恵器	S字-宇田
	SK	9		0920/0925	土師器	
	SK	10		0920/0925	土師器・須恵器・山茶碗・羽釜・常滑焼・瀬戸	15世紀～
I/G-8	SK	11		0920/0921/0925	弥生土器・土師器・須恵器・白磁・鉄釘	
G-8	SK	12		0920/0924/0925	土師器	まとまりなし
	SK	13		0925	土師器・須恵器・灰釉陶器	まとまりなし
	SK	14		0920	土師器・須恵器・灰釉陶器	まとまりなし
	SK	15		0930	土師器	
	SK	16			弥生土器・土師器・須恵器・土師器皿・山茶碗・常滑焼	5世紀・8世紀・中世混じる
	SK	17			土師器・須恵器	5世紀
	SK	18			土師器・須恵器	5～6世紀
	SK	19		0920/0924/0925	土師器・須恵器・山茶碗・土師鍋	5～6世紀と中世混じる
	SK	20	E-9	0921	弥生土器・須恵器・土師器・山茶碗	不明
	SK	21		0921	土師器	不明
	SK	22		0921/0930	土師器	不明
	SK	23		0921/0924/1014	常滑焼・瀬戸・天目茶碗・土師皿・土師茶釜・染付・白磁・灰釉陶器・青磁・信楽焼・須恵器	中世後半～近世
	SK	24		1127	弥生土器	弥生
	SK	25	H-8	0924	土師器・常滑焼・鉄	中世
	SK	26		0924	土師器・山茶碗・瓦	不明
	SK	27		0924	土師器	不明
	SK	28		0924	土師器	S字　4～5世紀
	SK	29	H-12	0924	土師器	S字　4～5世紀
	SK	30	H-12	0924	土師器	不明
	SK	31	H-11	0924/0928	土師器・須恵器	6世紀
	SK	32		0924	弥生土器・瀬戸・常滑焼	15～16世紀
	SK	33		0925	土師器	不明
	SK	34	I-11	0927	土師器	不明
	SK	35	I-9	0928	弥生土器・土師器・須恵器・山茶碗	布留　4世紀
	SK	36		0928	土師器・須恵器	不明
	SK	37				
	SK	38				
	SK	39		1117	土師器	不明
	SK	40		0929	土師器	不明
	SK	41				
	SK	42				
	SK	43	J-9	0929	土師器	不明
	SK	44	I-6	0929	土師器・土師皿・羽釜	15世紀後半
	SK	45	G-11	0930	土師器・須恵器	不明
	SK	46				
	SK	47		0930	土師器	不明
	SK	48		0930	土師器・須恵器	不明
	SK	49		0930	土師器	不明
	SK	50		0930	土師器	不明
	SK	51		1001	土師器・須恵器	4～5世紀
	SK	52		1001	土師	不明
	SK	53	E-8	1001	土師器・山茶碗	不明
	SK	54		1004	土師器・須恵器・瀬戸	ハザマ
	SK	55		1001	土師器	不明
	SK	56				
	SK	57	E-8	1001	土師器・山茶碗	不明

第4表　報告外　遺構一覧表（3）

地区名	遺構種別		層位等	確認日（1993年 月 日）	出土遺物	備考
	SK	58	E-8	1001/1004	土師器	ハザマ
	SK	59	E-8	1001	土師器	不明
	SK	60	E-8	1001	土師器	不明
	SK	61	E-8	1001/1004	須恵器・土師器	不明
	SK	62		1004	土師皿	中世
	SK	63		1004	土師器	不明
	SK	64	I-12	1004	弥生土器・土師器	不明
	SK	65		1004	土師器	不明
	SK	66	E-9	1001	土師器	8 世紀
	SK	67				
	SK	68				
	SK	69				
	SK	70				
	SK	71				
	SK	72				
	SK	73				
	SK	74				
	SK	75				
	SK	76				
	SK	77			土師皿・羽釜・山茶碗・常滑焼・灰釉陶器・染付・土錘・須恵器・弥生土器・青磁・土師器・弥生土器	15 ～ 16 世紀
	SK	78		1005	土師器・常滑焼・山茶碗	15 ～ 16 世紀
	SK	79			土師皿・羽釜・須恵器・常滑焼・瀬戸・山茶碗・灰釉陶器・須恵器	5 世紀と中世混じる
	SK	80		1007	土師器 or 弥生土器・土師器・山茶碗	不明
	SK	81		1007/1020	土師器・常滑焼・須恵器	不明
	SK	82		1007/1020/1105	土師器・須恵器・常滑焼・山茶碗・瀬戸・灰釉陶器・天目茶碗・清郷甕・羽釜・硯・土錘	15 ～ 16 世 紀・8 世紀混ざる
	SK	83		1023/1105	土師器・須恵器・土師皿・常滑焼・羽釜・山茶碗・瀬戸	15 ～ 16 世紀
	SK	84		1007/1013	土師皿・羽釜・灰釉陶器・土師器・山茶碗・茶釜	11 世紀
	SK	85			土師器・羽釜・茶釜・常滑焼・青磁・山茶碗・須恵器	15 ～ 16 世紀
	SK	86				
	SK	87		1004/1007/1014	土師器・常滑焼・青磁・山茶碗・須恵器	15 ～ 16 世紀
	SK	88		1007	土師器	不明
	SK	89		1023	常滑焼	不明
	SK	90		1007	須恵器・土師器	不明
	SK	91		1007	土師器	不明
	SK	92		1007	土師器	不明
	SK	93		1007	土師器・須恵器・山茶碗・常滑焼	不明
	SK	94		1015	土師器	不明
	SK	95		1015	土師器	不明
	SK	96				
	SK	97		1015	弥生土器・土師器	不明
	SK	98		1015	土師器	不明　S 字
	SK	99		1015	土師器	
	SK	100				
	SK	101				
	SK	102		1019/1020/1028	土師器・土師皿・羽釜・須恵器・瀬戸・常滑焼・天目茶碗・灰釉陶器	15 ～ 16 世紀
	SK	103		1019	土師器・須恵器・山茶碗・常滑焼・瀬戸・灰釉陶器	15 ～ 16 世紀
	SK	104		1020	磁器・瓦	現代
	SK	105		1028/1116	土師器・須恵器・灰釉陶器	不明
	SK	106		1126	土師器	4 ～ 5 世紀
	SK	107		1104	土師器・須恵器・弥生土器・陶器	4 ～ 5 世紀
	SK	108				
	SK	109				
	SK	110				
	SK	111				
	SK	112		1104	土師器・須恵器	不明
	SK	113		1106	土師器・須恵器	不明
	SK	114		1110	土師器	不明
	SK	115		11--	土師器・須恵器・天目茶碗・瀬戸・常滑焼・山茶碗	中～近世

第 5 表　報告外　遺構一覧表（4）

地区名	遺構種別		層位等	確認日（1993年　月　日）	出土遺物	備考
	SK	116		1112	土師器	不明
	SK	117		1113	土師器・瀬戸・常滑焼・山茶碗	中～近世
	SK	118		1116	土師器	不明
	SK	119				
	SK	120				
	SK	121				
	SK	122		1116	土師器・須恵器・瀬戸	古墳
	SK	123		1116	土師器	不明
	SK	124		1116	土師器・須恵器・常滑焼・瀬戸・山茶碗	不明
	SK	125		1116	土師器・須恵器・山茶碗・常滑焼・土玉	中～近世
	SK	126		1116	土師器	4～5世紀
	SK	127	A-1・2	1122	瀬戸・常滑焼・山茶碗・天目茶碗・土師器	15～16世紀
	SK	128		1122	土師器・天目茶碗	15～16世紀
	SK	129				
	SK	130	A-1	1122	土師器・須恵器・瀬戸	不明
	SK	131		1122	土師器・須恵器	不明
	SK	132		1122	土師器・常滑焼	15～16世紀
	SK	133		1122	土師器	不明
	SK	134		1122	土師器	不明
	SK	135		1122	土師器	不明
	SK	136				
	SK	137				
	SK	138		1122	土師器	不明
	SK	139		1122	土師器	不明
	SK	140		1122	常滑焼・山茶碗・灰釉陶器・弥生土器・須恵器・土師器・瀬戸・染付	15～16世紀
	SK	141		1122	土師器・染付	不明
	SK	142	D-5	1127	弥生土器・土師器・須恵器	4～5世紀
	SK	143				
	SK	144				
	SK	145				
	SK	146				
	SK	147				
	SK	148				
	SK	149				
	SK	150		1126	土師器・山茶碗	不明
	SK	151		1130	土師器	不明
	SK	152		1126	土師器・須恵器・天目茶碗	不明
	SK	153				
	SK	154		1126	土師器	不明
	SK	155		1126	土師器	不明
	SK	156		1126	土師器	不明
	SK	157		1126	土師器	不明
	SK	158		1126	土師器	不明
	SK	159		1126	土師器	不明
	SK	160		1126	土師器	不明
	SK	161		1126	土師器	4～5世紀
	SK	162		1126	土師器	不明
	SK	163		1126	弥生土器 or 土師器	不明
	SK	164				
	SK	165				
	SK	166				
	SK	167				
	SK	168				
	SK	169				
	SK	170		1126	弥生土器・土師器	不明
	SK	171		1126	土師器	不明
	SK	172		1127	土師器	不明
	SK	173		1127	土師器	不明

第6表　報告外　遺構一覧表（5）

地区名	遺構種別		層位等	確認日（1993年 月 日）	出土遺物	備考
	SK	174		1127	土師器・須恵器	不明
	SK	175		1127	弥生土器・土師器	不明
	SK	176		1127	常滑焼・瀬戸・土師器	15～16世紀
	SK	177		1127	土師器	不明
	SK	178		1127	土師器	不明
	SK	179		1127	土師器・須恵器	5世紀
	SK	180		1127	土師器	不明
	SK	181		1127	土師器	不明
	SK	182		1127	土師器	不明
	SK	183		1127	土師器	不明
	SK	184		1127	土師器	不明
	SK	185		1127	土師器	不明
	SK	186		1127	土師器	不明
	SK	187		1127	土師器	不明
	SK	188		1127	土師器	不明
	SK	189		1127	土師器	不明
	SK	190		1127	土師器	不明
	SK	191		1127	土師器	不明
	SK	192		1130	土師器	不明
	SK	193		1130	土師器	不明
	SK	194		1130	土師器	不明
	SK	195		1130	土師器	不明
	SK	196		1130	土師器・須恵器	不明
	SK	197		1130	土師器	不明
	SK	198		1130	土師器	5世紀
	SK	199				
	SK	200		1130	土師器	不明
	SK	201		1130	土師器	不明
	SK	202		1130	土師器	不明
	SK	203		1130	土師器	不明
	SK	204		1130	土師器	不明
	SK	205		1130	土師器	不明
	SK	206		1130	土師器・須恵器・山茶碗・天目茶碗	不明
	SK	207		1130	弥生土器・土師器・須恵器	5世紀か
	SK	208		1130	土師器	不明
	SK	209		1130	土師器・陶器	不明
	SK	210	K-13	1130	土師器・陶器・磁器・瓦	現代
	SK	211		1130	土師器	不明
	SK	212		1130	土師器・須恵器	不明
	SK	213		1130	土師器・須恵器	不明
	SK	214		1130	土師器・瓦	中世 or 近世
	SK	215		1130	土師器・山茶碗・天目茶碗	不明
	SK	216		1130	土師器	不明
	SK	217		1130	土師器	不明
	SK	218		1130	土師器	4～5世紀
	SK	219		1130	土師器・弥生土器・天目茶碗	不明
	SK	220		1202	土師器	不明
	SK	221		1202	土師器	不明
	SK	222		1202	土師器	土師器
	SK	223		1202	土師器・須恵器・山茶碗・灰釉陶器・製塩土器・羽釜	中世
	SK	224		1202	土師器	
	SK	225		1202	土師器	
	SK	226		1202	土師器	
	SK	227		1202	土師器	
	SK	228		1202	土師器	
	SK	229		1202	土師器	
	SK	230		1202	土師器・須恵器・山茶碗・瀬戸	15～16世紀
	SK	231		1202	土師器・須恵器	不明

第7表　報告外　遺構一覧表（6）

地区名	遺構種別		層位等	確認日（1993年　月　日）	出土遺物	備考
	SK	232		1202	土師器	不明
	SK	233		1202	土師器	不明
	SK	234		1202	土師器・須恵器	不明
	SK	235		1202	土師器・天目茶碗	中世
	SK	236		1202	土師器	不明
	SK	237		1202	土師器	不明
	SK	238		1202	土師器	不明
	SK	239		1202	土師器	不明
	SK	240		1202	土師器	不明
	SK	241		1202	土師器	不明
	SK	242		1213	弥生土器・土師器	不明
	SK	243		1213	土師器	不明
	SK	244				
	SK	245		1213	土師器	不明
	SK	246				
	SK	247		1215	土師器・羽釜	中世
	中世土坑		E-9	0918	山茶碗・常滑焼	
	SK	23		0923	常滑焼・白磁・羽釜・弥生土器	中世後半～近世
	SE	1				中世
	SE	16		1215		中世

第８表　報告外　遺構一覧表（７）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項	破損の特徴	打撃部分
1	62	古式土師	壷		SD1	4区	13.5	5.3	27.8	密	橙	5YR6/8	ほぼ完	外上半：横　下半：縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ、内：ﾊｹ	口縁端６本１組の縦篦描き沈線　1ヶ所	下半部煤付着	頸部で破損	
2	7	古式土師	壷		SD1	4区	14.5	6.3	31.0	密	橙	5YR6/8	ほぼ完	外上半　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ 内　ﾊｹ	下半のﾍﾗﾐｶﾞｷ少ない		頸部で破損	胴部打撃痕
3	5	古式土師	壷		SD1	4区	15.4	推 6.0	30.5	密	黄橙	7.5YR7/8	10/12	外全面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		ﾍﾗﾐｶﾞｷは胴中央で中断	頸部で破損	
4	76	古式土師	壷		SD1	4区	15.3	4.8	24.8	密	橙	7.5YR6/6	ほぼ完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ雑でﾊｹ多く残る		口縁上端は面を作る		口縁部打撃痕
5	144	古式土師	壷		SD1	2区	15.2			密	橙	5YR6/6	口縁　7/12	外　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ 内　横ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
6	142	古式土師	壷		SD1	4区	14.0			密	橙	7.5YR7/6	上半　10/12	ﾊｹ仕上		頸部は粗い刷毛 胴上半は普通刷毛		
7	59	古式土師	壷		SD1	3区	11.6	6.0	23.5	密	灰白	10YR8/1	ほぼ完	刷毛		細かい刷毛 対象位置に黒斑と煤	頸部で破損	
8	141	古式土師	壷		SD1	4区	14.2			密	橙	5YR7/8	口頸　8/12	粗い刷毛				
9	88	古式土師	壷	ﾊﾟﾚｽ壺	SD1	3区	35.0			密	浅黄橙	10YR8/4	口頸は完	巨大なﾊﾟﾚｽ 全面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	凸帯＋直線＋刺突	口縁　円形貼り付け２個１組を６ヶ所		
10	280	古式土師	壺		SD1	4区	-	5.8	推 30	密	明赤褐	5YR5/6	9/12	外　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内　ﾊｹ	頸部に貼り付け凸帯	底部外面石多い 内面胴部石多い		
11	156	古式土師	壷		SD1	3区	15.0			密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁ほぼ完	櫛描文とﾍﾗﾐｶﾞｷ	波線、直線	波線は鋭角的な変化		
12	146	古式土師	壷		SD1	1区	15.0			密	橙	5YR6/6	口縁　1/12	沈線＋円形浮文	直線＋刺突　口縁端は細い直線	円形浮文は２個１組		
13	151	古式土師	壷		SD1	4区	13.8			密	明赤褐	5YR5/8	口縁　1/12	頸部　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	口縁端＋頸部　刺突			
14	145	古式土師	壷		SD1	4区	17.0			やや粗	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁　5/12	表面荒れ激しい	凹線文＋竹管文	竹管文は周回		
15	155	古式土師	壷		SD1	1区	17.0			密	にぶい橙	5YR7/4	口縁　2/12		凸帯			
16	154	古式土師	壷		SD1	1区	17.0			密	にぶい橙	5YR7/4	口縁　2/12		凸帯と刺突文			
17	153	古式土師	壺		SD 1	2区				密	橙	5YR7/6	頸部 1/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	凸帯			
18	137	古式土師	壷		SD1	3区	19.5			密	にぶい黄褐	10YR5/3	口縁　7/12	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	頸部に貼り付け凸帯	突帯は２条かも		
19	147	古式土師	壷		SD1	1区	18.0			密	橙	7.5YR7/6	口縁　1/12	凸帯貼り付け　ﾅﾃﾞ		ﾍﾗﾐｶﾞｷの痕跡		
20	152	古式土師	壷		SD1	4区	頸径：5.6			密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁　1/12	小型で指頭痕あり				
21	150	古式土師	壷		SD1	4区	14.0			密	褐	7.5YR4/3	口縁　1/12	刷毛仕上				
22	149	古式土師	壷		SD1	4区	13.0			密	明赤褐	2.5YR5/8	口縁　1/12	粘土帯積み上げ痕				
23	138	古式土師	壷		SD1	1区	17.9			密	橙	5YR6/8	口縁　完	外　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内　ﾍﾗﾐｶﾞｷ　僅かにﾊｹ痕残る		滑らかなﾍﾗﾐｶﾞｷ		
24	143	古式土師	壷		SD1	2区	14.2			密	明赤褐	5YR5/8	口縁　10/12	外　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	口縁端に篦描き沈線１条	ﾍﾗﾐｶﾞｷ下地の刷毛痕を消しきれていない		
25	148	古式土師	壷		SD1	1区	14.0			やや粗	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁　1/12	上下に拡張した口縁 磨滅激しい				
26	281	古式土師	壺		SD1	3区		5.0	現 15.8	密	橙	5YR6/6	9/12	外　ﾍﾗﾐｶﾞｷ＋ﾀﾀｷ状の太い刷毛				
27	223	古式土師	壷	底部	SD 1	2区		4.7		密	黄橙	7.5YR7/8	底部　完	刷毛				
28	218	古式土師	壷	底部	SD 1	1区		5		密	明黄橙	10YR6/6	底部　完	しっかりした底		底部が異常に赤い 顔料の塗りか？		
29	221	古式土師	壷	底部のみ	SD 1	4区		4.7		密	明褐	7.5YR5/6	底部　完	刷毛仕上				
30	236	古式土師	壷有孔	底部のみ	SD1	3区		5.3		密	灰白	2.5Y7/1	底部　完	細かい刷毛		焼成前　底部穿孔		
31	224	古式土師	壷	底部	SD 1	1区		3.9		密	にぶい黄橙	10YR7/4	底部　完	刷毛				
32	222	古式土師	壷	底部	SD 1	1区		5.1		密	にぶい黄橙	10YR6/4	底部　完	ﾅﾅﾒﾍﾗﾐｶﾞｷ				
33	219	古式土師	壷	底部	SD 1	1区		5.5		密	灰白	10YR8/1	底部　完	厚い底部				
34	54	古式土師	甕		SD1	1区	14.1	3.4	22.2	密	橙	7.5YR7/6	10/12	外＋口縁内面 縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内下面　ﾊｹ				
35	38	古式土師	甕		SD1	4区	13.2	3.9	18.0	密	暗灰黄	2.5Y4/2	ほぼ完	外＋口縁内面 縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内下面　ﾊｹ		ﾍﾗﾐｶﾞｷの下に刷毛痕残る	頸部で破損	
36	37	古式土師	甕	小型	SD1	1区	推 8.6	4.3	13.5	密	灰白	10YR8/2	口縁 4/12 他完	外上半　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ 下半　横ﾍﾗﾐｶﾞｷ				口縁 8/12 欠
38	157	古式土師	甕		SD1	2区	13.6			密	明褐	7.5YR5/6	口縁　5/12	刷毛仕上		波状の落書き様文様あり		
37	158	古式土師	甕		SD1	2区	14.0			密	赤褐	5YR4/8	口縁　4/12		口縁下　２条の沈線	２条沈線は半載竹管		
39	264	古式土師	甕		SD1	1区				密	黄褐	10YR5/8	胴　9/12	縦　完全ﾍﾗﾐｶﾞｷ	胴部に３段の貝殻連弧文	美しく磨かれた壷		
40	61	古式土師	甕		SD1	4区	15.4	4.1	20.4	密	明赤褐	2.5YR5/8	ほぼ完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		肌荒れでﾐｶﾞｷ不鮮明	頸部で破損	
41	108	古式土師	壷	直口壺	SD1	1区	13.5	5.7	15.8	密	黄橙	10YR7/8	ほぼ完			ススの付着なし 上げ底		

第９表　出土遺物観察表（１）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	底径	器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項	破損の特徴	打撃部分
42	107	古式土師	壷	内彎脚付壺	SD1	4区	16.0	10.9	22.5	密	黄橙	10YR8/6	ほぼ完	全面ﾍﾗﾐｶﾞｷ（表面滑らか）	ﾍﾗﾐｶﾞｷの下に格子状ﾀﾀｷ痕あり	脚部に叩き状の格子目痕あり		
43	87	古式土師	壷	外来	I7～9	4区	18.4			密	にぶい橙	7.5YR7/4	上半 5/12	粗い刷毛	棒状貼り付け４ヶ所６条の櫛描直線	駿河～関東の土器非縄文、非赤彩		
44	77	古式土師	蓋		F8	1区	16.5	(8.0)	4.9	軟	橙	5YR6/8	6/12	表面剥離				
45	166	古式土師	手焙		P62（1区）	4区	18.0	推4.5	20.0	密	灰白	10YR8/2	6/12	刷毛調整	直線＋刺突で飾る	内部天井　指頭圧痕。口縁受口Ｓ字状。		
46	279	古式土師	手焙			4区	14			密	にぶい橙	7.5YR7/4	2/12	刷毛調整		多量に１～５mmの小石　受口口縁		
47	278	古式土師	手焙		SD1	4区	14			密	にぶい橙	7.5YR6/6	1/12			金雲母、小石少々含む　受口口縁		
48	277	古式土師	手焙		SD1	4区				密	にぶい橙	7.5YR6/6	1/12	刷毛調整	頸部沈線３条	金雲母、くの字口縁		
49	276	古式土師	手焙		SD1	4区				密	にぶい橙	7.5YR6/6	3/12	刷毛調整	刺突文	金雲母，小石少々含む		
50	63	古式土師	甕		SD1	1区	18.1		現26.5	密	明赤褐	5YR5/8	台欠他はほぼ完	粗い刷毛			下半，台部欠	
51	234	古式土師	甕		SD1	1区		7.8		密	橙	5YR6/6	底部　完	刷毛仕上		小石少量　焼けた痕跡無		
52	78	古式土師	甕		SD1	1区	19.5	推7.0	推26.0	密	浅黄橙	7.5YR8/3	6/12　台欠	刷毛仕上				
53	195	古式土師	甕		SD1	1区	17.0		くの字	密	橙	7.5YR6/6	上半　9/12	刷毛		楕円口縁		
54	203	古式土師	甕		SD1	1区	18.5		くの字	密	灰白	7.5YR8/2	3/12	横刷毛		上半部までスス付着		
55	32	古式土師	甕		SD1	4区	21.6		推　33	密	にぶい黄橙	10YR7/4	7/12	粗い刷毛		極めて重い甕		
56	300	古式土師	甕		SD1	4区	20.5.		推30.5	密	にぶい橙	7.5YR7/4	6/12	刷毛	頸部外側に補強粘土，外胴部指頭圧痕	スス付着		
57	199	古式土師	甕		SD1	2区	18.4		くの字	密	橙	5YR6/8	3/12	細かい刷毛	接合痕を残す	体上半までスス付着		
58	209	古式土師	甕		SD 1	1区	16		くの字	密	にぶい橙	7.5YR6/4	2/12	太い刷毛（板目か）				
59	288	古式土師	甕		SD1	1区	30.0			密	橙	5YR6/8	5/12	きれいに調整された滑らかな甕		スス汚れなし		
60	201	古式土師	甕		SD1	1区	15.0		くの字	密	にぶい橙	5YR6/4	3/12	細かい刷毛	内部：粗いﾅﾅﾒ～ﾖｺﾅﾅ 外部：縦～ﾅﾅﾒﾅ	口縁下で接合		
61	208	古式土師	甕		SD 1	3区	16.2		くの字	密	にぶい黄橙	10YR7/4	2/12	叩き類似刷毛		刷毛は腰のある原体		
62	202	古式土師	甕		SD1	4区	15.0		くの字	密	橙	2.5YR6/8	6/12	細かい刷毛	接合痕	スス付着なし		
63	284	古式土師	甕	？	SD1	4区				やや粗	浅黄橙	10YR8/4	胴部　完	刷毛目	上半　スス 下半　剥落	薄く軽い甕		
64	194	古式土師	甕		SD1	1区	15.8		くの字	密	にぶい黄橙	10YR7/4	上半　11/12	刷毛仕上		楕円口縁		
65	227	古式土師	甕		SD1	1区		7.2		密	にぶい黄橙	10YR7/3	底部　完	刷毛		内部石多し　外部は殆どない		
66	301	古式土師	甕		SD1	4区	14.0			密	にぶい黄橙	10YR7/4	8/12	楕円口縁	スス付着	外胴部指頭圧痕，楕円の程度は小		
67	233	古式土師	甕		SD1	2区		7		密	にぶい黄褐	10YR5/3	底部　完	ﾅﾃﾞ		スス付着なし		
68	286	古式土師	甕	楕円	SD1	4区	17.0			密	にぶい黄橙	10YR6/3	上半　完	楕円口縁	スス激しい 口縁部が楕円形	薄く軽い甕 器壁２～4mm		
69	228	古式土師	甕	台部のみ	SD1	4区		7.8		密	にぶい黄褐	10YR5/6	底部　完	粗い刷毛		外部石多し 内部は少量		
70	81	古式土師	甕		SD1	1区	15.3	推7.0	推18.6	密	にぶい黄褐	10YR4/3	台欠他 9/12	刷毛仕上	中位スス付着 下半は加熱による剥がれ	器壁厚い		
71	200	古式土師	甕		SD1	1区	15.2		くの字	密	橙	7.5YR6/6	3/12	細かい刷毛				
72	193	古式土師	甕	楕円か？	SD1	4区	15.0		くの字	密	にぶい黄橙	10YR7/3	上半　8/12	接合痕残る				
73	206	古式土師	甕		SD1	4区	14.2		くの字	密	黄橙	7.5YR7/8	4/12	粗い刷毛				
74	210	古式土師	甕		SD 1	2区	11		くの字	密	橙	5YR6/6	4/12	太い刷毛（板目か）→叩き状				
75	192	古式土師	甕		SD1	4区	20.0		くの字	密	黄褐	10YR5/8	3/12	刷毛仕上　口縁下ナデ				
76	226	古式土師	甕		SD1	1区		7.6		密	浅黄橙	10YR8/3	底部　完	刷毛		内、外共に石多し		
77	205	古式土師	甕		SD1	1区	17		くの字	密	にぶい褐	10YR5/4	2/12	雑なつくり				
78	231	古式土師	甕		SD1	1区		6.5		密	明赤褐	5YR5/6	底部　完	粗い刷毛		煤等の汚れなし		
79	230	古式土師	甕		SD1	4区		7.4		密	明黄褐	10YR 6 / 6	底部　完	台部が長い		煤等の汚れなし		
80	232	古式土師	甕		SD1	1区		7.6		密	にぶい黄褐	10YR4/3	底部　完			外部石少量		
81	229	古式土師	甕	台部	SD1	2区		10.4		密	にぶい赤褐	2.5YR4/4	底部　完					
82	241	古式土師	壷	有孔	SD1	1区		2.7		密	明褐	7.5YR5/6	底部　5/12	粗い刷毛		焼成前　底部穿孔		

第１０表　出土遺物観察表（２）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	底径	器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項	破損の特徴	打撃部分
83	239	古式土師	甕	有孔	SD1	2区		4.8		密	灰白	10YR8/1	底部　完			焼成前　底部穿孔		
84	237	古式土師	甕	有孔	SD1	2区		4.6		密	にぶい褐	7.5YR5/4	底部　完	細かい刷毛		焼成前　底部穿孔		
85	64	古式土師	甕		SD1	4区	17.1	33.1	9.3	密	黄橙	7.5YR8/8	ほぼ完	細かい刷毛	直線＋刺突　刺突は中空束を重ねた原体	軽い甕である 95と同じ	頸部で破損	
86	211	古式土師	甕		SD 1	2区	14.6		受け口	密	にぶい黄橙	10YR6/4	3/12	細い刷毛＋刺突	刺突文	上半までスス付着		
87	215	古式土師	甕		SD 1	2区	12		受け口	密	にぶい黄橙	10YR 6 / 4	6/12	細い縦刷毛	刺突文　2ヶ所			
88	212	古式土師	甕		SD 1	2区	14.6		受け口	密	浅黄橙	10YR8/3	4/12	刷毛＋刺突	刺突文			
89	49	古式土師	甕		SD1	2区	17.9		受け口	密	にぶい赤褐	5YR4/4	11/12　台欠	刷毛	頸部に刺突文	下半　焼けによる剥がれ、赤変		
90	283	古式土師	甕	S字風	SD1	2区				密	にぶい黄橙	10YR7/4	5/12	細かい刷毛	頸部　貝殻刺突文	スス全面付着		
91	48	古式土師	甕		SD1	2区	16.0		推　20	密	灰褐	7.5YR4/2	10/12　台欠	刷毛	棒状刺突は4個づつが2ヶ所	スス多量に付着 頸部棒状工具押付け	普通の破損	胴部中心に破損
92	213	古式土師	甕		SD 1	3区	15.8		受け口	密	明赤褐	5YR5/8	2/12	太い刷毛	口縁下、箆で押さえたあと			
93	214	古式土師	甕		SD 1	4区	13.6		受け口	密	明赤褐	10YR 6 / 8	3/12	細かい刷毛		全面スス付着		
94	196	古式土師	甕		SD1	2区	12.0		受け口	密	浅黄橙	10YR8/4	上半　5/12	刷毛				
95	33	古式土師	甕	S字祖形	SD1	4区	17.8	7.3	26.8	密	灰白	10YR8/1	7/12	器壁薄い	部分的に波、刺突文	S字と同手法 軽い甕	普通の破損	口縁3/12欠
96	204	古式土師	甕		SD1	2区	14		くの字	密	橙	7.5YR6/6	5/12	外面指頭痕				
97	30	古式土師	甕		SD 1	3区	16.5	3.0	16.5	密	浅黄橙	7.5YR8/3	6/12	太い刷毛		叩き甕類似（模倣か）		
98	197	古式土師	甕	楕円	SD1	1区	13.6		受け口	やや粗	黄橙	10YR8/6	上半　8/12	叩き状の刷毛		叩き甕類似（模倣か）		
99	15	古式土師	有孔鉢	有孔鉢	SD1	2区	17.6	5.3	10.5	密	にぶい黄橙	10YR6/4	ほぼ完	小石を多く含む粗製鉢		焼成前穿孔		
100	282	古式土師	鉢	粗製鉢	SD1	2区	14.0			やや粗	灰白	7.5YR8/2	8/12	雑な作りの粗製鉢		接着痕残る		
101	225	古式土師	鉢	U字型把手	SD 1	2区				密	橙	7.5YR6/6	把手　8/12	ラフなつくり	嶋貫，阿形等に類例	鉢のU字把手部分		
102	29	古式土師	甕	叩き甕	SD1	2区	14.4	3.5	15.0	密	褐	10YR4/4	9/12	叩き甕	頸部下にハケメ	ﾁｮｺﾚｰﾄ色　搬入品 角閃石	普通の破損	胴部2/12欠
103	55	古式土師	甕	叩き甕	SD1	1区	15.5	4.7	23.0	密	にぶい褐	7.5YR6/3	ほぼ完	叩き甕	叩きの間にハケメ残る	搬入品	普通の破損	胴部一部欠
104	56	古式土師	甕	叩き甕	SD1	4区	13.9	4.4	21.9	密	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁2/12 他6/12	叩き甕	胴下部交互叩き	搬入品か？		口縁11/12, 胴部1/2欠
105	207	古式土師	甕	叩き甕	SD1	1区	16.4		くの字	密	浅黄橙	10YR8/3	5/12	叩き甕	頸部ハケメ	叩き太い		
106	66	古式土師	甕	叩き甕	SD1	4区	15.7	7.6	25.0	密	浅黄橙	10YR8/4	ほぼ完	台付叩き甕	頸部ハケメ痕残る胴下部交互叩き	胴中央に突帯あり	普通の破損	胴部2箇所欠
107	40	古式土師	甕	叩き甕	SD1	4区	16.3	最大胴19.5	現存19.0	密	浅黄橙	7.5YR8/4	底欠　他完	台付叩き甕	頸部下ハケメ多い		台部以外普通の破損	台部欠
108	235	古式土師	甕		SD1	1区		8.5		密	黄橙	10YR8/6	底部　完	叩き甕台部	台部外ハケメ　台内部　ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ			
109	109	古式土師	甕	叩き甕	SD1	1区	21.6	12.3	37.4	密	明褐	7.5YR5/6	ほぼ完	台付叩き甕	口縁下ヘラで叩き痕を一部消す　胴中央ハケメ	大型台付叩き甕		
110	305	古式土師	甕	叩き大甕	J9	4区				密	浅黄橙	10YR8/3	3/12	叩き甕頸胴部	ハケメ多用 あまりにも大きい	スス付着しており，煮炊きに使用		
111	52	古式土師	高杯		SD1	4区	23.7	14.6	26.7	密	浅黄橙	10YR8/3	6/12　脚完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	透し孔：1段3孔		
112	53	古式土師	高杯		SD1	4区	22.2	14.4	23.7	密	橙	2.5YR6/8	ほぼ完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	透し孔：1段3孔	脚部に細片化痕あり	
113	112	古式土師	高杯		SD1	4区	23.8	15.0	25.4	密	黄橙	7.5YR7/8	ほぼ完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ 内面状態悪し	櫛描横線	透し孔：2段4孔（上1　下3）		
114	14	古式土師	高杯		SD1	1区	24.0	14.0	23.5	密	橙	5YR7/6	脚半欠 他は完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	脚赤彩	透し孔：1段3孔		
115	26	古式土師	高杯		SD1	4区	24.5	14.2	23.6	密	灰黄褐	10YR5/2	杯5/12 脚完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	透し孔：1段3孔		杯部6/12欠 脚ほぼ完
116	51	古式土師	高杯	上3 下1	SD1	4区	22.8	14.3	25.5	密	灰黄褐	10YR6/2	ほぼ完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	透し孔2段　4孔（上3、下1）	脚と杯中央に打撃痕	
117	80	古式土師	高杯		SD1	4区	24.0	13.0	21.3	密	浅黄橙	7.5YR8/3	7/12	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	透し孔：1段3孔		
118	10	古式土師	高杯		SD1	4区	23.1	14.3	23.7	密	黄橙	7.5YR7/8	ほぼ完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線　2帯　脚に格子状の叩き	透し孔：2段4孔（上1　下3）		打撃痕3ヶ所
119	27	古式土師	高杯		SD1	3区	22.4	13.3	22.5	密	黄橙	7.5YR7/8	杯8/12 脚完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：1段3孔		杯部8/12欠 脚ほぼ完
120	6	古式土師	高杯		SD1	4区	21.0	14.3	21.4	密	灰白	7.5YR8/1	ほぼ完	杯内　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	6条横線2帯	透し孔：2段4孔（上1　下3）	杯接合部（普通）	口縁1/12
121	24	古式土師	高杯		SD1	4区	18.6			密	灰白	10YR8/2	脚下半欠 他は完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：1段3孔	脚裾なし	口縁3/12欠
122	65	古式土師	高杯		SD1	4区	25.5	13.8	21.0	やや粗	灰白	10YR8/1	ほぼ完	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線　2帯	透し孔：1段3孔		杯部1/12欠 脚ほぼ完
123	84	古式土師	高杯		SD1	4区	25.5	14.1	23.5	密	浅黄橙	10YR8/3	9/12	杯内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ やや手抜きと荒れ	櫛描横線	透し孔：1段3孔		口縁2/12欠 脚4/12欠

第１１表　出土遺物観察表（３）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項	破損の特徴	打撃部分
124	9	古式土師	高杯		SD1	1区	22.0	13.5	20.8	密	黄橙	7.5YR7/8	ほぼ完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ 部分的に刷毛痕残る	部分的にﾊｹ痕残る	透し孔：1段3孔		杯 2/12 脚 1/12 欠
125	12	古式土師	高杯	杯のみ	SD1	1区	22.7			密	橙	5YR6/8	杯完 脚欠	ﾍﾗﾐｶﾞｷ				杯 3/12, 脚部なし
126	167	古式土師	高杯		SD1	1区		14.6		密	浅黄橙	7.5YR8/4	脚 9/12	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：1段3孔		
127	31	古式土師	高杯		SD1	2区	22.0			密	橙	7.5YR6/6	杯 8/12 脚下半欠	縦刷毛	櫛描横線	透し孔：1段3孔		
128	163	古式土師	高杯	杯のみ	SD1	3,4区	22.2			密	灰白	10YR8/2	杯 ほぼ完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
129	160	古式土師	高杯		SD1	1区		14.6		密	橙	7.5YR6/6	脚 完全	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、3孔、櫛描横線	櫛横線6条3帯	透し孔：1段3孔		
130	19	古式土師	高杯	杯のみ	SD1	4区	19.8			密	黄橙	10YR8/6	杯完 脚欠	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ見事		
131	159	古式土師	高杯	脚のみ	SD1	2区		13.6		密	灰白	10YR8/2	脚 完全	外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ		文様も孔もなし		
132	172	古式土師	高杯		SD1	3区	25.0			密	にぶい黄橙	10YR7/4	杯 4/12 脚 1/3 欠	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	刷毛痕が残る		
133	173	古式土師	高杯	脚のみ	SD1	4区		13.3		密	明赤褐	5YR5/6	脚部 5/12	刷毛仕上	櫛描横線	透し孔：2段6孔（上3 下3）		
134	79	古式土師	高杯		SD1	1区	16.2	9.8	13.6	密	明赤褐	5YR5/8	ほぼ完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	透し孔：1段3孔		
135	164	古式土師	高杯	杯のみ	SD1	1区				密	褐灰	10YR4/1	杯下部完全	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ				
136	265	古式土師	高杯		SD1	1区		12.4		密	にぶい褐	7.5YR5/4	脚 10/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		小石を多く含むが滑らか		
137	28	古式土師	高杯	椀形	SD1	4区	18.6	13.5	17.0	密	赤褐	2.5YR4/6	杯 8/12 脚 8/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：1段3孔		脚の 1/2 欠
138	34	古式土師	高杯	椀形	F8	1区	21.2	14.0	25.6	密	明赤褐	5YR5/8	脚 6/12 他完	短いﾍﾗﾐｶﾞｷ 杯内面に指頭圧痕		透し孔：1段3孔		杯，脚の一部欠
139	70	古式土師	高杯	椀形	SD1	4区	12.2	12.5	14.0	密	にぶい黄	2.5Y6/3	ほぼ完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線痕跡	透し孔：1段3孔		
140	169	古式土師	高杯	椀形	SD1	4区	14.0			密	にぶい黄橙	10YR7/3	脚 欠 杯 6/12	全面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	稜がない高杯	透し孔：1段3孔		
141	170	古式土師	高杯	椀形	SD1	4区	12.6	11.0	推 12.0	密	橙	5YR6/8	杯 1/12 脚 10/12	全面ﾍﾗﾐｶﾞｷ	稜がない高杯	透し孔なし		
142	3	古式土師	高杯	ﾜｲﾝｸﾞﾗｽ	F8	1区	8.8		推 15.0	密	橙	5YR7/6	脚部欠け	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ 杯下面は横ﾍﾗﾐｶﾞｷ		胴部に煤		
143	161	古式土師	高杯	脚のみ	SD1	4区		14.2		密	橙	7.5YR6/8	脚 完全	杯・脚接合法がわかる	横線5条3帯	透し孔：1段3孔		
144	162	古式土師	高杯	脚のみ	SD1	3,4区		15.8		密	浅黄橙	10YR8/3	脚部 完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：2段4孔（上1 下3）		
145	185	古式土師	高杯		SD1	2区				密	灰白	10YR8/2	脚 6/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：2段4孔（上1 下3）		
146	189	古式土師	高杯	筒状脚古式	SD1	4区				密	にぶい黄橙	10YR6/4	脚 6/12	櫛描横線4段	7本歯で4段 重ねるところもある	透し孔：2段4孔（上1 下3）		
147	188	古式土師	高杯		SD1	2区				密	にぶい黄橙	10YR6/4	脚 6/12	精美な櫛描直線文		透し孔：1段3孔		
148	216	古式土師	高杯		SD1	2区				密	暗灰黄	2.5Y4/2	脚 6/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：1段3孔		
149	190	古式土師	高杯		SD1	4区				密	褐	10YR4/4	脚 6/12	丁寧なつくり		透し孔？		
150	174	古式土師	高杯	脚のみ	SD1	3区		16.4		密	浅黄橙	7.5YR8/4	脚部 4/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	直線的に終わる山中期の脚		
151	186	古式土師	高杯	筒状脚古式	SD1	4区				密	浅黄橙	10YR8/4	脚 6/12	高い脚、孔の位置		孔あるが個数？		
152	191	古式土師	高杯	筒状脚古式	SD1	4区				密	にぶい黄橙	10YR7/2	脚 6/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷと櫛描		透し孔：2段4孔（上1 下3）		
153	187	古式土師	高杯		SD1	2区				密	浅黄橙	10YR8/4	脚 6/12	櫛＋ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛5本歯で4帯	孔あるが個数？		
154	175	古式土師	高杯		SD1	1,3区	推 24	15.0	推 22	密	橙	7.5YR7/6	口縁欠 残 6/12	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：1段3孔		
155	255	古式土師	小型壷		SD1	4区	8.6			密	明黄褐	10YR6/6	3/12	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ		丁寧に仕上げた小壷		
156	248	古式土師	小型壷	小型	SD1	4区	8.4			密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁 5/12	内外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ		金雲母を含む		
157	242	古式土師	小型壷	小型	SD1	4区		3.8		密	橙	7.5YR6/8	口縁欠 他は完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		ﾍﾗﾐｶﾞｷは下から上に一度で行っている		
158	243	古式土師	小型壷	小型	SD1	4区		3.5		密	橙	7.5YR6/8	胴部 6/12	刷毛仕上				
159	245	古式土師	小型壷	小型	SD1	1区	6	4	7.5	密	橙	5YR6/8	10/12	底部持ち上げ				
160	246	古式土師	小型壷	小型	SD1	4区		2.8		やや粗	浅黄橙	10YR8/4	口縁欠 他は 9/12	表面剥離		表面状態最悪		
161	259	古式土師	小型壷	小型	SD1	1区				密	橙	7.5YR6/6	胴 4/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
162	75	古式土師	小型壷	小型	SD1	4区	（胴 10.0）	3.8	現 8.0	密	橙	7.5YR6/6	口縁欠 他は完	刷毛仕上				
163	74	古式土師	小型壷	小型壷	SD1	2区	（胴 12.4）	3.8	現 9.1	密	橙	7.5YR7/6	口縁欠 他は完	縦位 2段ﾍﾗﾐｶﾞｷ		内面、接合痕残る		
164	247	古式土師	小型壷	小型	SD1	1区		4.6		密	赤褐	2.5YR4/8	口縁欠 他 6/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		SD1の中で1区、3区、南ｾｸｼｮﾝとバラバラに出土		

第１２表　出土遺物観察表（４）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項	破損の特徴	打撃部分
165	252	古式土師	小型脚付壺	小型壺	SD1	2区		胴径：11.7		密	橙	5YR6/8	口縁,脚欠他は完	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ		ﾍﾗﾐｶﾞｷでツルツル		
166	267	古式土師	小型土器底	底部のみ	SD1	4区		4.3		密	にぶい赤褐	5YR4/3	底部　完					
167	249	古式土師	小型土器底	小型	SD1	4区		4.5		密	明褐	7.5YR5/6	底部　完	滑らかな器壁		煤付着		
168	254	古式土師	小型台部	小型壺脚台	SD1	2区		6.5		密	明黄褐	10YR7/6	脚部　完	ﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ、刷毛		裾広がりの台　丁寧な作りと形態から壺の脚部		
169	266	古式土師	小型土器底		SD1	1区		3.2		密	にぶい黄橙	10YR6/3	底部　完					
170	238	古式土師	小型土器底部穿孔	有孔	SD1	4区		3.8		密	にぶい黄橙	10YR6/4	底部　完	粗い刷毛		焼成前　底部穿孔		
171	261	古式土師	小型壺	小型	SD1	1区				密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁　3/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
172	262	古式土師	小型壺	小型	SD1	4区				密	にぶい黄橙	10YR7/3	頚部　3/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ痕跡	頚部に凸帯	石多い		
173	257	古式土師	小型台部	小型壺脚台	SD1	2区		7.6		密	灰白	2.5Y8/2	脚部　完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		石殆どなし		
174	258	古式土師	小型台部	台部のみ		4区		5.5		密	淡赤橙	2.5YR7/3	台部　完					
175	260	古式土師	小型壺下半	小型		4区		5.4		密	橙	7.5YR7/6	胴下部　完	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ		ツルツル　所々に窕の突き刺し、細い横線などあり		
176	35	古式土師	小型特殊壺	小型	SD1	4区	8.1	4.7	14.3	密	橙	5YR6/6	口縁 1/12 他完	器壁薄く，丁寧な縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷは途中で止めず一気に磨く	良く磨いておりﾐｶﾞｷすらよくわからない	胴部打撃痕	
177	20	古式土師	小型特殊壺	小型	SD1	3区	9.9	3.7	13.2	密	橙	7.5YR7/6	完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	特異な形状	焼きが硬い		
178	43	古式土師	小型特殊鉢	小型	SD1	3区	10.2	3.0	9.1	密	橙	5YR6/6	10/12	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ	口縁大きく広がる特異形	薄い器壁で滑々	2～3か所打撃痕	
179	244	古式土師	小型鉢	小型		4区	8.8		（推）8.5	密	明黄褐	10YR7/6	胴部　4/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		石押し付け処理		
180	250	古式土師	小型鉢		SD1	2,4区		3		密	明赤褐	2.5YR5/8	底部　完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		小石少ない		
181	83	古式土師	小型鉢	小型	SD1	4区	11.2	4.9	7.6	密	黄橙	10YR8/3	ほぼ完	羽状刷毛	内部ヘラ削り	厚手で重い		
182	23	古式土師	小型特殊甕	小型甕	SD1	2区	14.3	7.3	17.7	密	黄橙	7.5YR7/8	ほぼ完	口縁　内外ﾅﾃﾞ		器壁薄く台部楕円	口縁部破損	
183	263	古式土師	小型壺	小型	SD1	1区	12	4.4	推 14.0	密	黄橙	7.5YR7/8	口縁　2/12 胴　完	硬い　ﾍﾗﾐｶﾞｷ	小さな赤い石（ﾁｬｰﾄか）含む	非常に硬い土器故意に割ったもの	底部に打撃	底部打ち欠き
184	22	古式土師	小型壺	小型鉢	SD1	2区	10.5	4.9	13.0	密	橙	7.5YR7/6	ほぼ完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		硬く丁寧な仕上	頚部で破損	
185	82	古式土師	小型鉢	小型鉢	SD1	2区	14.0	3.5	8.0	軟	にぶい黄橙	10YR7/4	ほぼ完	表面剥離	内・外面に赤い点（弁柄・朱・ﾁｬｰﾄ・柘榴石）			
186	17	古式土師	小型鉢	小型	SD1	4区	13.0	3.7	6.0	密	橙	7.5YR6/6	ほぼ完	刷毛仕上				
187	42	古式土師	小型鉢	ﾐﾆﾁｭｱ	SD1	4区	7.5	3.3	4.7	密	橙	5YR7/6	完			口縁に端面をもつ		
188	57	古式土師	小型甕	ﾐﾆﾁｭｱ	SD1	4区	5.7	推 2.4	推　6	密	灰白	10YR8/2	7/12　台欠	小型ながら大型の特徴を模倣	櫛描刺突、直線、波文	5本1組の櫛歯		
189	111	古式土師	小型壺	ﾐﾆﾁｭｱ	SD1	2区	2.1	丸	3.6	密	黄橙	10YR8/8	完	手捏ね		表面凸凹		
190	58	古式土師	小型鉢	ﾐﾆﾁｭｱ	SD1	4区	3.5	2.5	3.7	密	暗赤褐	2.5YR3/6	9/12	手捏ね		表面凸凹		
191	41	古式土師	小型壺	中型	SD1	1区	10.8	5.5	16.0	密	浅黄橙	10YR8/3	ほぼ完	刷毛とﾍﾗﾐｶﾞｷ	壺に煤付着	下半、スス　黒い		
192	67	古式土師	小型壺	中型	SD1	4区	10.3	5.6	14.6	密	浅黄橙	10YR8/3	6/12	ﾊｹ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	壺に煤付着	下半、スス痕残る	頚部で破損	
193	11	古式土師	小型短頚壺	小型鉢	SD1	2区	10.4	4.0	11.3	密	褐	7.5YR4/3	ほぼ完	刷毛仕上				口縁部5/12欠
194	113	古式土師	小型脚付短頚壺	小型	SD1	4区	7.3	2.7	9.8	密	明赤褐	2.5YR5/8	完	刷毛　表面荒れ				
195	256	古式土師	小型短頚壺	小型台付壺	SD1	4区	6.2	3	7.5	密	にぶい橙	7.5YR7/3	ほぼ完	刷毛仕上		表面剥落でざらつく		
196	71	古式土師	小型高杯	小型	SD1	4区	12.2	7.6	9.8	密	橙	2.5YR6/8	7/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	指頭圧痕　小石を多く含む	透し孔：1段3孔		杯口縁＆脚5/12欠
197	253	古式土師	小型高杯脚	脚のみ	SD1	1区				密	黒褐	10YR3/2	脚部　完	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線重複	ﾍﾗﾐｶﾞｷでツルツル		
198	168	古式土師	小型高杯	小型	SD1	1区	13.0			密	明赤褐	5YR5/6	脚　欠他は完	ﾅﾃﾞ＋ﾍﾗﾐｶﾞｷ	杯下部は全面スス付着	透し孔：1段3孔		
199	251	古式土師	小型高杯脚	脚のみ	SD1	1区		9.4		密	にぶい黄橙	10YR7/4	脚　完全	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ		小型ながら特徴を良く捉えている		
200	171	古式土師	小型高杯脚	脚のみ	SD1	2区		11.8		密	明黄褐	10YR7/6	脚　10/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	直線＋貝殻刺突	透し孔：1段3孔		
201	18	古式土師	小型壺	小型	J6	4区	推 6.5	3.7	推 13.5	密	橙	5YR7/6	口縁一部欠	粗製		器表粗で不明		
202	44	古式土師	小型甕	小型甕	SD1	1区	8.8	推 3.5	現存 9.5	密	橙	5YR7/8	底部欠他完	粗い刷毛		刷毛が羽状		
203	45	古式土師	小型甕	小型甕	SD1	2区	11.1	3.9	10.0	密	にぶい黄褐	10YR4/3	口縁 3/12 他完	太い刷毛		板目かも		
204	46	古式土師	小型甕	小型甕	SD1	2区	10.4		10.5	密	浅黄橙	10YR8/3	底欠　他完	太い刷毛		器体軽い	胴部打撃痕3～4か所	
205	21	古式土師	小型甕	小型甕	SD1	2区	8.7	推 9.0	推 4.7	密	浅黄橙	7.5YR8/3	底部欠	手捏ね		粗製で重い		

第１３表　出土遺物観察表（５）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	底径	器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項	破損の特徴	打撃部分
301 (3-1)	131	古式土師	壷	ﾊﾞﾚｽ壷	SK176	土　壙，ピット	推 25			密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁　3/12	表面粗れ	内面頸部赤彩	ﾊﾞﾚｽ壷口縁		
302	102	古式土師	壷		SK242	土　壙，ピット	15.0			密	灰白	10YR8/1	口縁　4/12		口縁，頸部刺突文	７個の単独竹管刺突文		
303	304	古式土師	壺		SK219	土　壙，ピット				密	橙	7.5YR6/6	4/12	壺胴部				
304	117	古式土師	甕	近江風	SK293	土　壙，ピット	18.0			密	灰白	10YR8/2	口縁　3/12		櫛描直線，波状文	波文に特徴		
305	50	古式土師	高杯		SK16	土　壙，ピット	22.7	12.0	18.7	密	黄褐	10YR5/6	8/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線	透し孔：１段３孔		
307	16	古式土師	小 型壷	小型	SK198	土　壙，ピット	9.9	5.0	10.5	密	にぶい黄橙	10YR6/4	6/12	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ	上半　横ﾍﾗﾐｶﾞｷ 下半　ﾅﾅﾒﾍﾗﾐｶﾞｷ			
306	73	古式土師	壷	脚付壺	SK118	土　壙，ピット	9.6	11.2	19.7	密	浅黄橙	7.5YR8/4	口 縁 6/12 他完	ﾊｹ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描横線＋７条の貝殻刺突文	200 の脚とそっくり		
308	68	古式土師	小 型鉢	小型	P116	土　壙，ピット	16.0	3.3	11.2	密	にぶい褐	7.5YR5/4	ほぼ完	櫛でハケのように仕上		煤付着		
351	2	古式土師	壷		E7 埋土	包含層	14.2	推 7.0	推 26.0	密	橙	7.5YR6/6	底欠け	胴部ﾍﾗﾐｶﾞｷを横，ﾅﾅﾒに	腰の弱い施文具による直線，波文	紐孔：片側のみ２孔	頸 部，底部で破損	
352	85	古式土師	壷	刷毛仕上	拡 張 包含層	包含層	16.7	7.5	28.1	や　や粗	淡橙	5YR8/4	6/12	刷毛仕上		粗雑な壺		
353	217	古式土師	壷	底部		包含層		5.4		密	橙	7.5YR6/6	3/12	丁寧なﾍﾗﾐｶﾞｷ 内面はﾊｹ		石含むがﾍﾗで沈め平滑に仕上げる		
354	271	古式土師	壷	ﾊﾞﾚｽ壷		包含層	21.3			密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁 5/12	櫛＋ﾍﾗﾐｶﾞｷ	棒状貼り付け４個４箇所	口縁：凹線状 頸部：刺突		
355	272	古式土師	壷	ﾊﾞﾚｽ壷		包含層	15			密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁 ほぼ完	竹管刺突で飾る	棒状貼り付けにも凹線状	口縁凹線状仕上		
356	274	古式土師	壷	ﾊﾞﾚｽ壷	E4 埋土	包含層	21			密	にぶい黄橙	10YR6/4	1/12	口縁外端面凹線＋赤彩	頸部内面赤彩と綾杉文			
357	140	古式土師	壷		東 トレンチ	包含層	20.8			密	灰白	2.5Y8/1	口縁 10/12		凹線文＋頸部凸帯	山中式のﾊﾞﾚｽ壷		
358	139	古式土師	壷			包含層	19.0			密	橙	5YR7/6	口縁 3/12	刺突文	口縁端面に刺突			
359	13	古式土師	高杯		J6	包含層	23.0			密	明赤褐	5YR5/8	7/12	内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		透し孔：１段３孔	杯に打撃痕	
360	182	古式土師	高杯			包含層	20.0			密	明赤褐	5YR5/8	杯 3/12	内外面　縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
361	39	古式土師	甕		G6	包含層	14.2	5.2	16.1	や　や粗	灰白	7.5YR8/2	10/12	縦刷毛		表面剥離		
362	86	古式土師	甕			包含層	17.0	推 6.2	推 17.0	密	浅黄橙	7.5YR8/4	台欠 他は完	刷毛仕上		全体的にスス付着 デベソの底部		
363	287	古式土師	甕	Ｓ字		包含層	14.0	推 9.0	推 27.0	密	にぶい黄橙	10YR7/3	4/12	細かく鋭い刷毛	細い横線文	薄く軽い甕 内部に指頭圧痕		

第１４表　出土遺物観察表（６）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項	破損の特徴	打撃部分
401	8	古式土師	壷		SX01		14.5	6.8	32.1	密	にぶい褐	7.5YR5/3	7/12	胴部　横・ﾅﾅﾒﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描直線・波文・刺突	ﾍﾗﾐｶﾞｷで滑らか	頸部で破損	
402	165	古式土師	壷		SX01		16.6	5.0	30.1	密	黄橙	7.5YR7/8	ほぼ完	刷毛を消しきれていないﾍﾗﾐｶﾞｷ	直線と刺突文の繰り返し	口縁と胴部の刺突文は施文具が異なる		
403	72	古式土師	高杯		SX01	埋土	24.8	12.8	19.2	密	橙	5YR6/8	8/12 脚は完	ﾊｹ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷが雑で刷毛痕多く残る	透し孔：１段３孔		
404	4	古式土師	高　杯（　椀形）	椀形	SX01		18.0	9.0	11.3	密	にぶい橙	7.5YR7/3	5/12	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
405	47	古式土師	甕		SX01	埋土	13.4		推　18	密	明褐	7.5YR5/6	7/12 台欠	太い刷毛（叩きに似た太い刷毛）		器壁厚い		
406	123	古式土師	甕		SX01	No.3	8.0			密	にぶい褐	7.5YR5/4	口縁　1/12	横刷毛	口縁外端面にスス底部は焼けている	受口口縁		
407	124	古式土師	甕		SX01	D-7	18.0			密	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁　1/12	刺突文	刺突	受口口縁		
408	128	古式土師	高杯		SX01					密	明赤褐	5YR5/8	杯脚接合部					
409	127	古式土師	甕		SX01	E7		4.3		密	明赤褐	5YR5/8	底部　完					
410	126	古式土師	甕		SX01	埋土		4.5		密	橙	7.5YR7/6	底部　完	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		上げ底		
411	125	古式土師	甕		SX01	埋土		8.4		密	赤褐	2.5YR4/8	台部　完	刷毛		甕の台部		
412	60	古式土師	壷	ﾊﾞﾚｽ壺	SX02	埋土	14.5	6.8	推 26.0	密	浅黄橙	10YR8/4	口縁 1/2 他は完	胴部　ﾍﾗﾐｶﾞｷ＋赤彩	刺突、山形、直線文で細かく飾る	貝殻文，円竹刺突 施文具は３種		口縁部 11/12 欠
413	1	古式土師	壷	直口壺	SX03		12.5	4.9	30.9	密	橙	7.5YR7/6	ほぼ完	全面刷毛			接合部（普通）	僅か
414	110	古式土師	小型壺	小型	SX03		2.5	3.0	推 4.5	密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁欠 他は完	手捏ね				
415	132	古式土師	甕	S 字 B	SX03		16.2			密	灰白	10YR8/1	口縁　6/12	羽状刷毛	僅かに横直線残る	S 字甕（混入の可能性あり）		
416	129	古式土師	壷		SX05	B5	16.0			密	淡橙	5YR8/3	口縁　3/12	口縁　上下拡張	端面は羽状刺突			
417	130	古式土師	高杯		SX05					密	赤	10R4/8	杯部　1/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
418	302	古式土師	壺		SX05			7.0		密	橙	7.5YR7/6	5/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷとﾊｹが混在する壺下部				
501	275	古式土師	壷	ﾊﾞﾚｽ壺	SK107	埋土	21.6	8.0	推 30.5	密	にぶい橙	7.5YR7/4	6/12	胴部　横ﾍﾗﾐｶﾞｷ＋赤彩	直線＋刺突で飾る	口縁端に箆描き 波状文＋赤彩	底部まで ﾊﾞﾗﾊﾞﾗ	故意に破砕
502	303	古式土師	壺		SK107	埋土				密	橙	5YR6/6	3/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
503	273	古式土師	壷	ﾊﾞﾚｽ壺	SK107		20			密	浅黄橙	7.5YR8/6	2/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ＋ﾅﾃﾞ	綾杉は貝殻腹縁施文	口縁～頸部　赤彩		
504	36	古式土師	甕		SK107		9.1	3.5	14.8	密	浅黄橙	10YR8/3	口 縁 6/12 他完	横ﾍﾗﾐｶﾞｷ		表面肌荒れ		
505	121	古式土師	甕		SK107			5.0		密	にぶい黄橙	10YR7/4	下半　7/12			表面肌荒れ		
506	114	古式土師	甕	S 字風	SK107		18.0			密	灰白	10YR8/1	口縁　2/12	彫りの深い櫛状工具	刺突	器壁薄い（3 ～ 4mm）		
507	115	古式土師	甕	S 字風	SK107		14.0			密	明赤褐	2.5YR5/8	口縁　2/12	粗いﾊｹ	７本の櫛状工具粗いハケメ	受け口		
508	116	古式土師	甕		SK107		20.0			密	灰白	10YR8/2	口縁　3/12	粗い刷毛		受け口		
509	285	古式土師	甕	？	SK107	埋土	推 16.5	推 7.0	推 21.0	密	橙	7.5YR7/6	4/12	粗い刷毛（ﾀﾀｷ状）		スス全面付着		
510	118	古式土師	壷		SK107		12.2			密	にぶい橙	7.5YR6/4	口頸　3/12	刷毛多用				
511	119	古式土師	甕		SK107			8.0		密	赤橙	10R6/8	台部　6/12	刷毛		下端　折り返し		
512	120	古式土師	甕		SK107			8.0		密	灰白	10YR8/2	台部　11/12	粗い刷毛		下端　折り返しなし		
513	104	古式土師	高杯		SK107					密	明赤褐	5YR5/8	1/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ		稜がない高杯		
514	103	古式土師	高杯		SK107	埋土				密	明赤褐	5YR5/8	3/12	表面肌荒れ		稜を持つが脚細い		

第１５表　出土遺物観察表（７）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	底径	器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項
601	408	須恵器	杯蓋		SD5		16.2		6.5	密	灰	5Y6/1	2/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
602	407	須恵器	杯蓋		SD5	ｾｸｼｮﾝ	15.4		5.3	密	黄灰	2.5Y5/1	4/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
603	406	須恵器	杯蓋		SD5		15.0		5.1	密	灰	N41	3/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
604	94	須恵器	杯蓋		SD5	ｾｸｼｮﾝ	14.4		推4.9	密	灰	N61	4/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
605	93	須恵器	杯蓋		SD5		14.7		4.4	密	灰	N61	11/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
606	404	須恵器	杯身		SD5	ｾｸｼｮﾝ	11.8		4.8	密	灰	7.5Y4/1	3/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
607	405	須恵器	杯身		SD5		14.0		5.5	密	灰白	10YR7/1	4/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
608	415	須恵器	ﾊｿｳ		SD5		11.4			密	黒	7.5Y2/1	6/12	ﾅﾃﾞ，内面自然釉	波状文	
609	95	須恵器	高杯		SD5	F8 埋土	11.3	10.2	10.5	密	黒	N21	9/12	回転ﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ		
610	508	須恵器	鉢		SD5		18.5	丸底	11.2	密	ｵﾘｰﾌﾞ黒	5Y3/1	ほぼ完	外底面:叩き使用　内側:灰（5Y4/1）	硬くて重い	
611	507	土師器	杯		SD5		14.8	丸底	6.1	密	赤	10R4/6	6/12	ﾍﾗﾐｶﾞｷ，内側：黒褐（7.5YR2/2）		関東系土師器
612	521	土師器	小型鉢			黒褐色土層	13.2	丸底	4.8	密	橙	7.5YR7/6	ほぼ完	指頭圧痕　内面：ﾅﾃﾞ		口縁を凹線状に仕上げる
613	422	土師器	高杯		ＳＤ１４（SD5）	埋土	15.0	9.2	10.7	密	赤褐	2.5YR4/8	ほぼ完	表面荒れ	脚下端沈線状	
614	90	土師器	高杯		SD5	黄褐色粘土層	16.0		５．５（杯）	密	明赤褐	2.5YR5/8	杯8/12 脚欠		口唇部に沈線１条	
615	91	土師器	高杯		SD5	埋土		8.4	７．９（脚）	密	赤褐	2.5YR4/8	脚ほぼ完	ﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ		
616	268	土師器	高杯		SD5	F8 埋土	15.4	9.0	推13.5	密	明赤褐	2.5YR5/6	繋ぎ部欠　他8/12	赤い石が入る		
617	269	土師器	高杯		SD5	ｾｸｼｮﾝ		9.8		密	褐	7.5YR4/4	脚　9/12	太い刷毛　脚下端ﾅﾃﾞ		
618	270	土師器	甕		SD5	埋土	16.0			密	橙	5YR6/8	2/12	表面荒れ		
619	423	土師器	甕	宇田型	SD5	埋土	13.0		受け口	密	橙	5YR7/6	10/12	太い斜格文		
620	69	土師器	甕	宇田型	SD5	F8		4.6	現14.0	密	灰白	10YR8/1	下半は完	櫛で描く粗い刷毛状痕		下半は煤付着
621	101	土師器	甕		SD5			7.8		密	明赤褐	2.5YR5/8	台　9/12			
622	89	土師器	甕	宇田型	SD5		11.5	推6.0	推18.0	密	橙	5YR6/6		粗い刷毛		
623	97	土師器	甕		SD5	埋土	16.0			密	灰褐	7.5YR4/2	1/12	口縁下　ﾅﾃﾞ		
624	98	土師器	甕		SD5	ｾｸｼｮﾝ	14.0			密	明赤褐	5YR5/6	1/12	粗い刷毛		
625	99	土師器	甕		SD5	黄褐色粘土層	13.0			密	明赤褐	2.5YR5/8	2/12	粗い刷毛		
626	100	土師器	甕		SD5	埋土	16.0			密	にぶい橙	5YR7/3	2/12	粗い刷毛		
627	411	須恵器	杯蓋		西ﾄﾚﾝﾁ	事前のﾄﾚﾝﾁ調査	13.6		4.3	密	灰	5Y6/	7/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
628	409	須恵器	杯蓋			拡張包含層	14.4		4.8	密	灰	N51	3/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
629	410	須恵器	杯蓋		P18		11.8		3.1	密	灰黄	2.5Y7/2	2/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
630	413	須恵器	杯身		SD9-B		12.6		4.4	密	灰	N51	10/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
631	412	須恵器	杯身		西ﾄﾚﾝﾁ	No.5	11.6		2.7	密	灰	N6/	完形	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
632	401	須恵器	杯身			包含層	11.8		5.8	密	褐灰	10YR4/1	2/16	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
633	403	須恵器	杯身		SK11	C-8 埋土	11.4		4.9	密	黄灰	2.5Y4/1	4/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
634	402	須恵器	杯身			包含層	13.1		4.4	密	褐灰	10YR6/1	5/12	指頭圧痕		
635	414	須恵器	杯身		SK23	埋土黄灰色粘土	12		4.2	密	灰	N6/	5/12	回転ﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ		
636	522	須恵器	器台		包含層	包含層	34.4			密	灰	10Y5/1	3/12	ﾅﾃﾞ＋叩き	沈線	内外で異なる叩き
637	96	土師器	高杯		SK72	D-5	15..1	9.5	11.5	密	暗赤褐	2.5YR3/6	8/12	ﾐｶﾞｷ		
639	421	土師器	甑					14.5		密	灰白	10YR8/1	5/12	粗い刷毛		
640	133	土製品	土錘		SK127		長6.5	径2.1	穴径0.55	密	浅黄橙	7.5YR8/4	完	石を多く含む		
641	134	土製品	土錘		SK175		長2.1	径2.2	穴径0.50	密	浅黄橙	10YR8/3	完			
642	534	土製品	土錘		I-11		4.4	1.2		密	にぶい褐	7.5YR5/4				
643	135	土製品	土錘		SK175		長3.2	径1.0	穴径0.30	密	極暗赤褐	5YR2/3	半欠	穴に鉄が付着（高師小僧か）		
644	535	玉	水晶製勾玉				現4.2	現2.1	穴径：1～2mm		やや黄色かかった透明		一端欠			濁りのある水晶

第１６表　出土遺物観察表（８）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	計測値 口径	底径	器高	胎土	色調	標準土色	残存率	調整技法の特徴	文様特記	特記事項
701	502	土師器	羽釜		SK230	上層暗褐色	20.4	丸底	10.8	密	灰ｵﾘｰﾌﾞ	5Y6/2	2/12	指ｵｻｴ＋ﾅﾃﾞﾘ		
702	513	土師器	羽釜		SK247		22.8	丸底	12.5	密			底欠他は完	大型羽釜		紐孔：４孔
703	503	土師器	羽釜		SK102		21.8	丸底	10.6	密	灰白	10YR8/2	9/12	ﾍﾗｹｽﾞﾘ		
704	536	土師器	羽釜		P105	淡褐色粘質土	20.7	丸底	14.2	密	灰白	10YR8/2	6/12			
705	515	土師器	羽釜		P105	埋土	17.8	丸底	10.7	密			6/12	小型羽釜		紐孔：４孔
706	514	土師器	羽釜		SD21		23.2	丸底	11.3	密				大型羽釜	大きさの割に軽い	紐孔：４孔
707	501	土師器	茶釜		SK223	下層粘土	10.8	丸底	14.2	密	浅黄橙	7.5YR8/4	5/12	指ｵｻｴ		
708	505	陶器	片口練鉢		SK23		35	15.5	12.5	密	黄橙	7.5YR8/8	8/12			信楽
709	506	陶器	練鉢		P109	埋土	39.2	16.8	13	密	明赤褐	5YR5/8	11/12 底抜け			常滑
710	504	陶器	片口練鉢		P109	埋土	38.6	14.6	12.2	密	黄橙	7.5YR8/8	6/12			信楽
711	512	瓦質土器	火鉢		P109		26.8	26.8	17.7	密	ｵﾘｰﾌﾞ黒	5Y3/1	7/12			瓦質の火鉢
712	518	磁器	天目		包含層	包含層	11.9	4.7	7.8	密	釉：黒	10YR1.7/1	6/12	素地：灰黄（2.5Y7/2）		釉薬使用
713	537	磁器	天目		SK85		11.6	4.5	6.8	密	釉：暗褐	7.5YR3/4	11/12	素地：にぶい赤褐（5YR4/3）		釉薬使用
714	538	磁器	天目		包含層	包含層	12.7	4.3	5.9	密	釉：黒	10YR1.7/1	5/12	素地:明褐（7.5YR5/6）		釉薬使用
715	516	磁器	天目		SK84-A	埋土	10.8	4.2	6	密	釉：褐	7.5YR4/3	5/12	素地：にぶい橙（5YR6/4）		釉薬使用
716	517	磁器	天目		SK84-A		8.4	5	6.3	密	釉：灰白	2.5Y8/2	6/12	素地:灰白（10YR8/1）		釉薬使用
717	511		山茶碗		包含層	包含層	15.8	7.3	6	密	灰白	2.5Y7/1	8/12		口縁の沈線	
718	520		？		P27	灰褐色粘質土		11.6		密	暗赤褐	10R3/3	上部欠下半完			
719	519		香炉？		SK127	A-2	10.2	13.8	7.6	密	赤褐	2.5YR4/6	6/12	３足	重量	
720	529	土師器	土師皿		SK77		11.7	7	2	密	灰白	7.5YR8/1	ほぼ完	指ｵｻｴ	79g	
721	528	土師器	土師皿		SK77		10.4	3	1.7	密	灰白	7.5YR8/1	ほぼ完	指ｵｻｴ	68	
722	526	土師器	土師皿		SK77		11	5	1.6	密	灰白	7.5YR8/1	ほぼ完	指ｵｻｴ	56	
723	525	土師器	土師皿		SK77		10.9	4.5	1.6	密	浅黄橙	7.5YR8/3	ほぼ完	指ｵｻｴ	65	
724	524	土師器	土師皿		SK77		11	4	1.7	密	灰白	7.5YR8/1	ほぼ完	指ｵｻｴ	68	
725	523	土師器	土師皿		SK77		11	4.5	1.8	密	灰白	7.5YR8/1	11/12	指ｵｻｴ	70	
726	541	土師器	土師皿		SK77	WS	10.4	4.5	1.9	密	灰白	10YR8/2	完	指ｵｻｴ	65	
727	540	土師器	土師皿		SK77	ES	10.6	4.5	1.9	密	灰白	7.5YR8/2	完	指ｵｻｴ	68	
728	539	土師器	土師皿		SK77	埋土	10.1	6	2	密	灰白	7.5YR8/1	完	指ｵｻｴ	43	
729	531	土師器	土師皿		SK77		11	3	1.6	密	灰白	7.5YR8/1	ほぼ完	指ｵｻｴ	67	
730	530	土師器	土師皿		SK77		10.4	4.5	1.9	密	灰白	7.5YR8/1	ほぼ完	指ｵｻｴ	67	
731	546	土師器	土師皿		SK79	灰褐色粘質土	8.3	3	1.4	密	灰白	7.5YR8/1	10/12	指ｵｻｴ	52	
732	533	土師器	土師皿		SK83		10.5	4.3	2.2	密	浅黄橙	7.5YR8/4	8/12	指ｵｻｴ	103	
733	532	土師器	土師皿		SK77		13.2	6	2.3	密	灰白	7.5YR8/1	10/12	指ｵｻｴ	130	
734	542	土師器	土師皿		SK77	ES	12.6	7	1.8	密	灰白	10YR8/2	完	指ｵｻｴ	120	
735	527	土師器	土師皿		SK77		13.5	10	2.2	密	灰白	7.5YR8/1	ほぼ完	指ｵｻｴ	104	
736	511	土師器	小型鉢		SK77		13	7.2	3.8	密	灰白	7.5YR8/1	3/12	指ｵｻｴ	－	
737	510	土師器	小型鉢		SK117	埋土	14	7.4	5	密	淡赤橙	2.5YR7/4	3/12	指ｵｻｴ	－	
738	600	瓦	金箔瓦	瓦						密	青灰	5PB6/1				
739	590	常滑	大型甕		？	？	61	19.7	71.5	密	にぶい橙	7.5ｙｒ7/4	ほぼ完	指ｵｻｴ		内面に有機物付着

第１７表　出土遺物観察表（９）

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	口縁	底部	遺構	地区	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	胎土	焼成度	色調	標準土色	残存率	体部内面	体部外上半	体部外下半	調整技法の特徴	文様特記	特記事項１	特記事項２	破損の特徴
1-2	289	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺		平底上げ底	G6 ﾎｶ	包含層		7.0		密	良好	灰白	7.5YR8/2	5/12	刷毛仕上	ﾍﾗﾐｶﾞｷ →赤彩	ﾍﾗﾐｶﾞｷ →赤彩	外：ﾍﾗﾐｶﾞｷ 内：ﾊｹ	櫛描直線 篦描波状文	篦描波文，上胴下半部赤彩	篦描き波形文に線上を赤彩	
1-3	296	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺	口縁拡張	?	I7,8,9 ﾎｶ	包含層	14.0			やや粗	軟質	灰白	10YR8/2	1/12		口唇部山形文を赤彩			口唇部 波状（山形）文を赤彩		篦描き波形文に線上を赤彩	
1-4	297	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺	口縁拡張	?	J9 SK43 ﾎｶ	包含層	20.0			密	良好	浅黄橙	7.5YR8/6	1/12		刷毛＋棒状貼り付け		ﾊｹ	口縁に棒状貼付３本	２次火熱か？煤付着		
1-5	299	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺		?	SD1，H9 ﾎｶ	１区				密	良好	灰白	10YR8/1	1/12	赤彩				凸帯	頸部内面を赤彩	内面のみ赤彩	
1-6	298	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺		?		包含層				密	良好	灰白	7.5YR8/1	1/12		赤彩			凸帯	頸部内外面を赤彩	内外面ともに赤彩	
1-7	293	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺	?	?	J６ G６ SK43 ﾎｶ	包含層				密	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	1/12	指押え				直線・波文（２段）・円形貼付	篦描波文を赤彩	篦描き波形文に線上を赤彩 山形文は２段	
1-8	292	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺	?	?	SD1 埋土ﾎｶ	１区				密	良好	明黄褐	10YR7/6	1/12	?	刷毛仕上	ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	貝殻刺突文	胴下半部を赤彩	底部 0295	
1-9	291	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺	?	?		包含層				密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2	2/12	?	ﾍﾗﾐｶﾞｷ→櫛文・赤彩	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	櫛描直線，貝殻刺突・波状文	胴下半部を赤彩	繊細な櫛描文 胴部下半は赤彩	
1-10	295	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺底	?	?	J6，G6，J9	包含層				密	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	1/12			赤彩	ﾊｹ，ﾍﾗﾐｶﾞｷ		底部外面を赤彩	底まで赤彩を施す	底部中央を破断
1-11	294	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺底	?	?	J6 ﾎｶ	包含層				密	良好	浅黄橙	10YR8/4	1/12	?		赤彩	下端 ﾊｹ		底部外面を赤彩	底まで赤彩を施す	
パレス	290	古式土師	壺	ﾊﾟﾚｽ壺底		平底凹	J6 ﾎｶ	包含層		6.2		密	良好	浅黄橙	10YR8/4	1/12	刷毛		ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	底部下面に木の葉痕あり			底部中央を破断

第１８表　出土遺物観察表（１０）　パレススタイル壺

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	口縁	底部	遺構	地区	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	胎土	焼成度	色調	標準土色	残存率	体部内面	体部外上半	体部外下半	調整技法の特徴	文様特記	特記事項１	特記事項２	破損の特徴
3-1	184	古式土師	高杯		端部三角状に突出	?	SD1	１区	23.8			密	良好	橙	7.5YR6/8	杯 1/12	ﾅﾅﾒﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾅﾒﾍﾗﾐｶﾞｷ		丁寧な ﾍﾗﾐｶﾞｷ		口縁端突出		
3-2	177	古式土師	高杯		端部三角状に突出	?	SD1	１区	28.0			密	良好	浅黄橙	7.5YR8/4	杯 2/12	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ		内面ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
3-3	179	古式土師	高杯		端部三角状に突出	?	SD1	４区	30.0			密	良好	明黄褐	10YR7/6	杯 1/12	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		外面ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
3-4	180	古式土師	高杯	杯のみ	端部三角状に突出	?	SD1	３区	27.8			密	良好	浅黄橙	10YR8/4	杯 1/12	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
3-5	176	古式土師	高杯		端部三角状に突出	?	SD1	４区	28.4			密	良好	褐	7.5YR4/4	杯 2/12	横ﾍﾗﾐｶﾞｷ			内面 横ﾍﾗﾐｶﾞｷ		口唇部に半截竹管の沈線２条		
3-6	178	古式土師	高杯		端部三角状に突出	?	SD1	２区	24.2			密	良好	橙	7.5YR6/8	杯 1/12	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		丁寧な ﾍﾗﾐｶﾞｷ		刷毛痕が所々残る		
3-7	181	古式土師	高杯			?	SD1	２区	24.2			密	良好	浅黄橙	7.5YR8/6	杯 2/12	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		ﾍﾗﾐｶﾞｷ				
3-8	183	古式土師	高杯			?	SD1	１区	28.0			密	良好	橙	7.5YR6/6	杯 2/12	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ	縦ﾍﾗﾐｶﾞｷ		ﾍﾗﾐｶﾞｷ		内面の稜は ﾍﾗﾐｶﾞｷで消す		

第１９表　出土遺物観察表（１１）　高杯

報告書番号	実測	質	器種	器種詳細	遺構	地区	色調	標準土色	残存率	胎土	体部内面	体部外上半	調整技法の特徴	特記事項１	器内面 色調	器内面 標準土色
2-1	321	古式土師	甕	叩き甕	SD1	4区　67	にぶい黄褐	10YR5/3	僅か	砂混ぜる	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ＋叩き　頸部に一部ﾊｹ	くの字の口縁部	口縁表裏赤い	にぶい黄褐	10YR5/3
2-2	322	古式土師	甕	叩き甕	SK107		黒褐	10YR3/1	僅か		右下がり刷毛	叩き	直口の口縁部	口縁上端面に平坦部5mmもつ	灰黄褐	10YR5/2
2-3	323	古式土師	甕	叩き甕	SD1	4区	黒褐	10YR3/2	僅か		叩き	胴部片			浅黄橙	10YR8/4
2-4	324	古式土師	甕	叩き甕	SD1	黒褐色質土埋土	にぶい黄褐	10YR4/3	僅か		右下がり粗い刷毛	叩きと刷毛混用（109と同じ）	胴部中央屈折部		浅黄橙	7.5YR8/6
2-5	325	古式土師	甕	叩き甕	SD1	1区　27	黒褐	7.5YR3/1	僅か		右下がり細かい刷毛	叩き	胴部叩き		橙	7.5YR6/6
2-6	326	古式土師	甕	叩き甕	SD1	1区	にぶい橙	7.5YR6/4	僅か		右下がり細かい刷毛	叩き	胴部叩き		黒	10YR1.7/1
2-7	327	古式土師	甕	叩き甕	SD1	4区　81	灰黄褐	10YR4/2	僅か		右下がり細かい刷毛	叩き	胴部叩き		灰黄褐	10YR4/2
2-8	328	古式土師	甕	叩き甕	SD1		明赤褐	5YR5/6	僅か	砂少量混ぜる	叩き / 刷毛（交互）		胴部叩き		赤褐	5YR4/6
2-9	329	古式土師	甕	叩き甕	SD1	1区	橙	7.5YR6/6	僅か	砂混ぜる	上半：右上がり叩き / 下半右下がり		胴部叩き		にぶい黄褐	10YR5/4
2-10	330	古式土師	甕	叩き甕	SD1	1区	にぶい褐	7.5YR5/4	僅か		右下がり細かい刷毛	叩き	胴部叩き		黒	10yr1.7/1

第２０表　出土遺物観察表（１２）　叩き甕

報告書番号	実測	分類	型式	口縁端形状	遺構	地区	色調	標準土色	器壁厚さ	器壁mm	口縁形態	口縁ナデ	口縁刺突の有無	口縁下ハケ（跳ね上げ）	横線（直線）の有無	頸胴部ハケ	頸胴部刺突の有無	刺突内刻目の有無	内面折り返し痕
4-1	1	a	近江型		SD1	4区	にぶい黄橙	10YR7/4	厚い	5	端面あり（5mm）	有	有	跳ね上げ	有	刷毛	有	無	有
4-2	3	a	近江型		SD1	4区	明褐	7.5YR5/6	やや薄い	＜5	端面あり（5mm）	有	有	細い刷毛	有	ﾅﾃﾞのみ	無	有	有
4-3	2	a	近江型		SD1	1区	にぶい黄橙	10YR6/3	厚い	5	端面あり（5mm）	有	有	跳ね上げ	有	右下がり（太い）	無	無	無
4-4	22	a	折衷型		SD1	1区	浅黄橙	10YR8/4	薄い	3～4	なだらかな傾斜面	有	無	無	無	無（外面から棒状ｵﾘｴ）	無	無	無
4-5	4	a	近江型		SD1	南ｾｸｼｮﾝ	にぶい黄褐	10YR5/3	やや薄い	＜5	端面あり（5mm）	？	全面刺突	跳ね上げ	？	右下がり（太い）	無	有	有
4-11	15	a '	折衷型	幅 3mm	SD1	南ｾｸｼｮﾝ	にぶい黄橙	10YR7/4	薄い	4	あり	？	有	？	無	？	有（丸い）	無	有
4-12	21	a '	折衷型		SD1	1区	明赤褐	5YR5/6	薄い	3～4	なだらかな傾斜面	有	有	右下り刷毛	無	右下がり	無	有	有
4-13	5	a '	折衷型	但し丸い	SD1	3区	明赤褐	5YR5/6	やや薄い	＜5	端面あり（5mm）	有	有	縦位刷毛	？	右下がり	有	有	有
4-14	23	a '	折衷型		SD1	1区	明赤褐	2.5YR5/8	薄い	3～4	なだらかな傾斜面	有	×	右下り刷毛	無	右下がり	無	無	接合面
4-21	24	b	U型		SD1	3区	橙	7.5YR7/6	厚い	5	なだらかな傾斜面	有	有	右下り刷毛	無	右下がり	有	有	接合面　有
4-22	11	b	U型	幅 2mm	SD1	4区	橙	7.5YR6/6	やや薄い	4	小さな端面	有	有	跳ね上げ	有	右下がり（太い）	有	無	有
4-23	13	b	U型		SD1	埋土	灰白	10YR8/2	やや薄い	上胴で薄くなる	なし	有	有	ナデ	無	？	有	有	有
4-24	25	b	U型		SD1	南ｾｸｼｮﾝ	浅黄橙	10YR8/3	厚い	5	丸い	？	×	右下り刷毛	無	右下がり	無	無	無
4-25	16	b '			SX107		灰黄褐	10YR5/2	薄い	4	なし	有	有	縦位刷毛	○（刷毛）	右下がり	無	有	有
4-31	6	c	O型	但し丸い	SD1	埋土	にぶい黄橙	10YR7/4	やや薄い	＜5	端面あり（5mm）	有	有	右下り刷毛	？	右下がり	無	有	無
4-32	33	c	O型		SD1	埋土	にぶい黄橙	10YR7/3	やや薄い	3～4	やや丸い平坦面あり	有	有	？	？	？	？	有	有
4-33	14	c	O型	幅 3mm	SD1	3区	浅黄橙	10YR8/3	やや薄い		あり	有	有	跳ね上げ	？	？	有	有	無
4-34	12	c	O型	幅 2mm+3mm	SD1	3区	にぶい褐	7.5YR6/3	やや薄い	4	2段端面	有	有	跳ね上げ	？	右下がり（細い）	？	無	無
4-35	7	c	O型	但し丸い	SD1	埋土	灰白	10YR8/2	やや薄い	胴部から急激に薄い	端面あり（5mm）	有	有	右下り刷毛	有	右下がり（太い）	有	無（押引き）	有
4-41	34	d	S型		SX107		灰白	10YR8/2	やや薄い	3	やや平坦面	有	有	細い縦	無	左下がり	無	無（押引き）	有
4-42	35	d	S型		SD1	埋土	灰白	10YR7/1	薄い	3	やや平坦面	有	有	縦	？	？	？	無（押引き）	有
4-43	31	d	S型		SD1	埋土	にぶい黄橙	10YR7/3	やや薄い	3～4	丸い	有	有	跳ね上げ	有	左下がり	刺突　刻目有	無（押引き）	有
4-44	32	d	S型		SD1	埋土	浅黄橙	10YR8/3	やや薄い	3～4	丸い	有	有	ﾅﾃﾞ	有	縦	無	無（押引き）	有
4-45	36	d	S型		SX107		浅黄橙	10YR8/3	やや薄い	3～4	やや平坦面	有	有	縦	有	左下がり	無	無（押引き）	有
4-46	37	d	S型		SD1	埋土	にぶい黄橙	10YR7/2	やや薄い	3～4	斜めの平坦面（先は丸い）	有	有	？	有	？	？	無（押引き）	有

第２１表　出土遺物観察表（１３）　受口甕

写 真 図 版

写真図版１　発掘調査後の航空写真と遺構図

発掘調査後の遺構測量図

縮尺 :1/400

写真図版２　発掘調査後の全体図

図版●　発掘調査時（学校屋上から撮影）　東から撮影

図版●　発掘調査時（校舎屋上から撮影）　北から撮影

写真図版３　弥生時代後期末～古墳時代初期の主な遺構

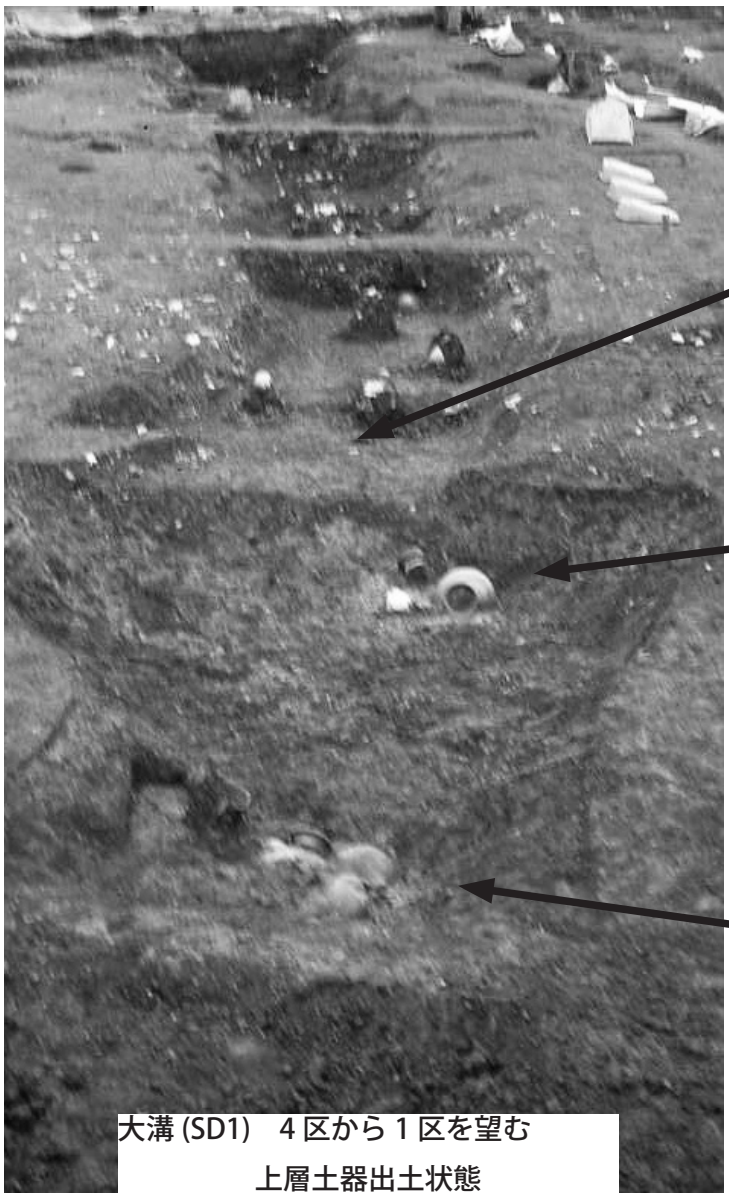
写真図版４　大溝 (SD1)　１区から４区，４区から１区を望む

大溝 (SD1)

１区から４区を望む

←上層　土器出土状態

土器取上げ後の状態→



大溝 (SD1)　４区から１区を望む

上層土器出土状態

写真図版５　大溝 (SD1)　全体及び３区，４区

大溝 (SD １) １区から４区を望む

（上層土器取り上げ前）

大溝 (SD １)　３区上層土器出土状態

大溝 (SD １)　４区から１区を望む

（上層土器取り上げ前）

遺跡西半部を望む

（大溝，方形周溝墓，SB1 等が見える）

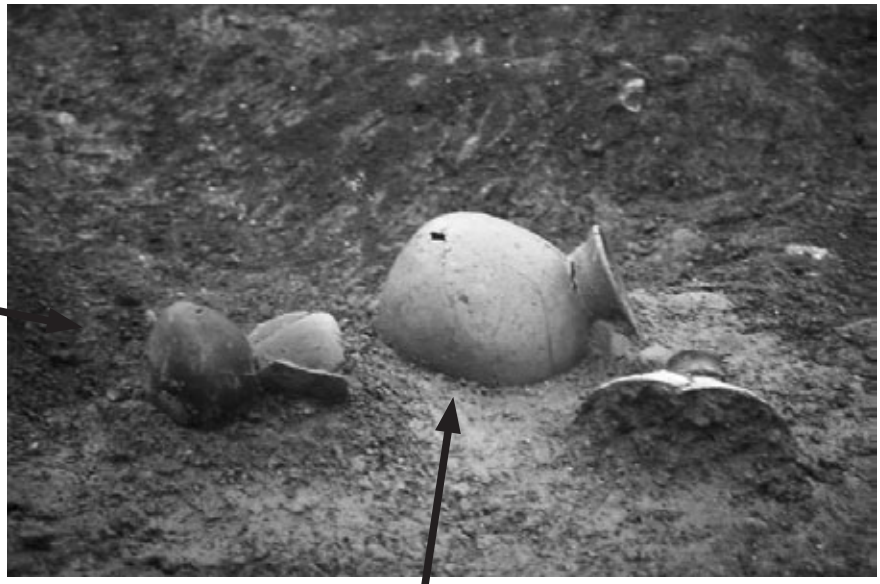
大溝 (SD1)　3，4 区の掘り下げ中

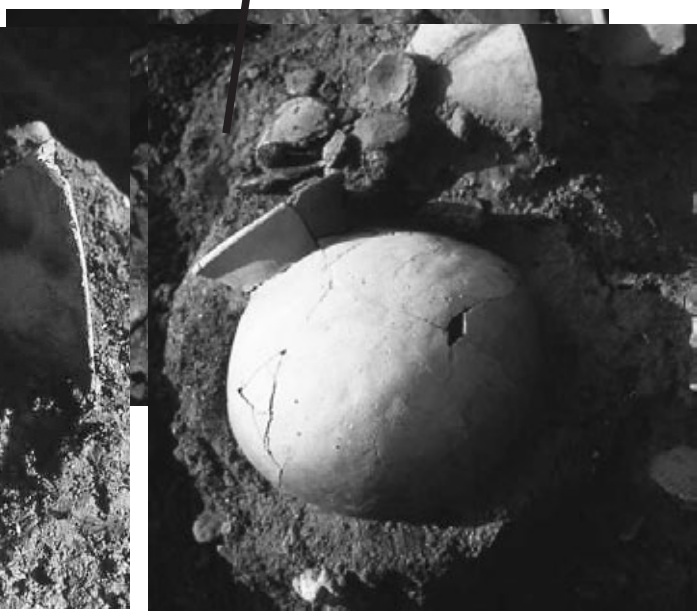
大溝 (SD1)　4 区の掘り下げ後

掘り下げ後の遺跡西半分を望む

写真図版６　大溝 (SD1)　３区，４区の土器出土状況

大溝 3 区南端の大型の壺





大溝４区北側の壺，瓢，脚付瓢出土状態

写真図版７　大溝 (SD1)　４区，包含層，SK118 の土器出土状況

大溝 (SD1)　４区南端　壺形土器集中出土場所（４枚）

包含層出土　パレス壺の口頸部

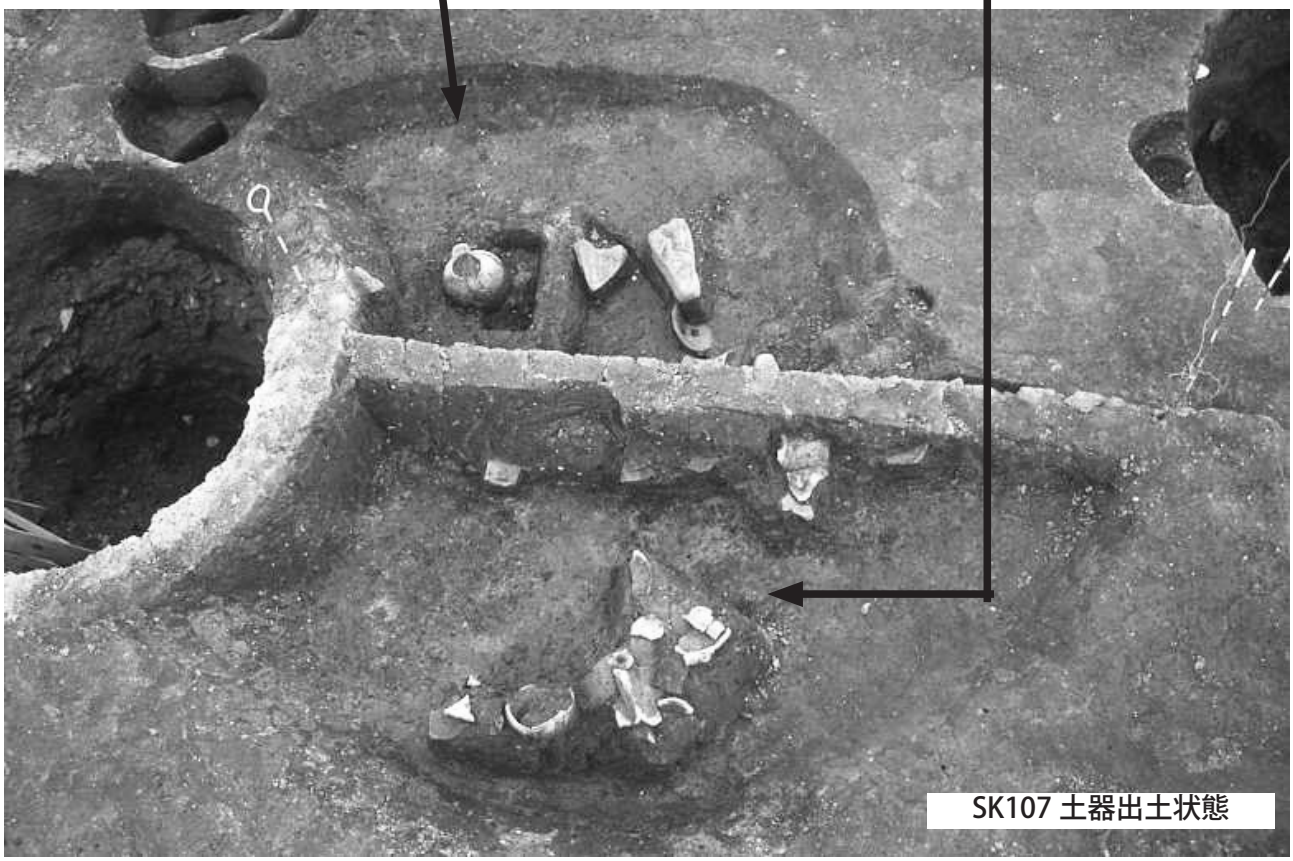
大溝 (SD1)　４区南端
甕形土器集中出土場所

SK118 出土脚付短頸壺

写真図版８　土坑 (SK107) の土器出土状況

瓢壺出土状態

瓢壺，甕など出土状態



SK107 土器出土状態

パレス壺　SK107 の上部から胴部と底部出土

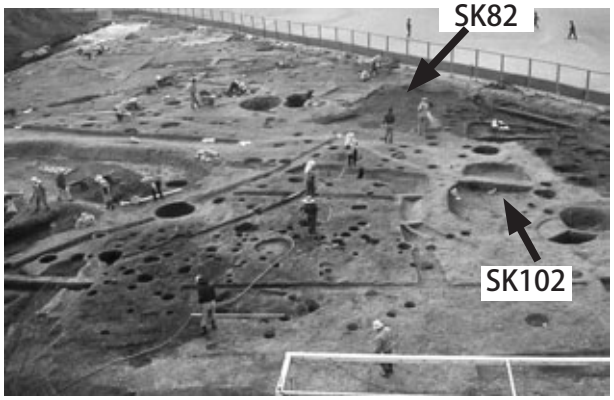
高杯の脚部出土

写真図版９　古墳時代後期，中・近世土器の遺構及び出土状況

須恵器出土状態

宇田甕出土状態

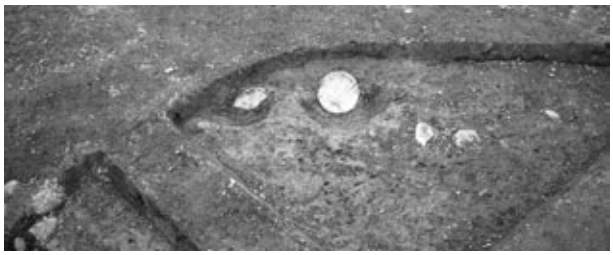
中世遺構



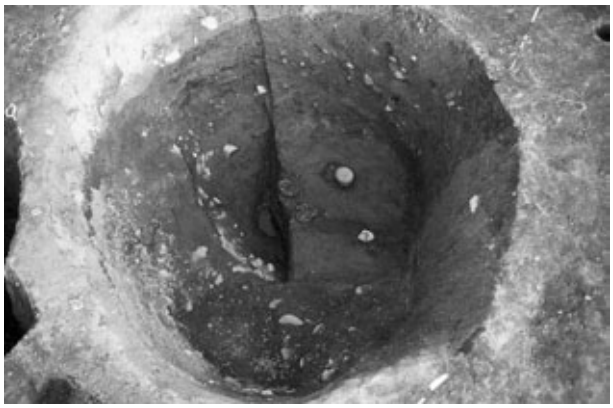
中世遺構

羽釜出土状態

中世遺構：SK77(井戸）



中世遺構：SK77(井戸）　堀り始め



中世遺構：SK77(井戸）底まで掘り下げ

中世遺構：SK77(井戸）底の土師皿出土状態

常滑の大甕出土状態

写真図版１０　大溝 (SD1) 出土土器 (1)

写真図版１１　大溝 (SD1) 出土土器 (2)

写真図版１２　大溝 (SD1) 出土土器 (3)

50

52

55

64

66

70

85

89

95

写真図版１３　大溝 (SD1) 出土土器 (4)

93

97

99

102

103

104

106

107

109

写真図版１４　大溝 (SD1) 出土土器 (5)

写真図版１５　大溝 (SD1) 出土土器 (6)

写真図版１６　大溝 (SD1) 出土土器 (7)

写真図版１７　大溝 (SD1) 出土土器 (8)

140

165

142

175

154

181

157

183

写真図版１８　大溝 (SD1) 出土土器 (9)

写真図版１９　大溝 (SD1) 出土土器 (10)

185

186

187

191

193

194

195

196

写真図版２０　大溝 (SD1) 出土土器 (11)

198

199

200

201

202

203

204

205

写真図版２１　方形周溝墓出土土器

401

405

402

412

403

413

404

写真図版２２　土坑 (SK107) 出土土器

501-3

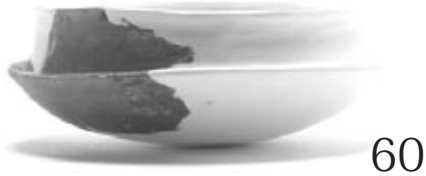
501-2

写真図版２３　包含層出土土器

写真図版２４　溝 (SD5) 等 出土土器 (1)

602

603


606

607

608

609

610

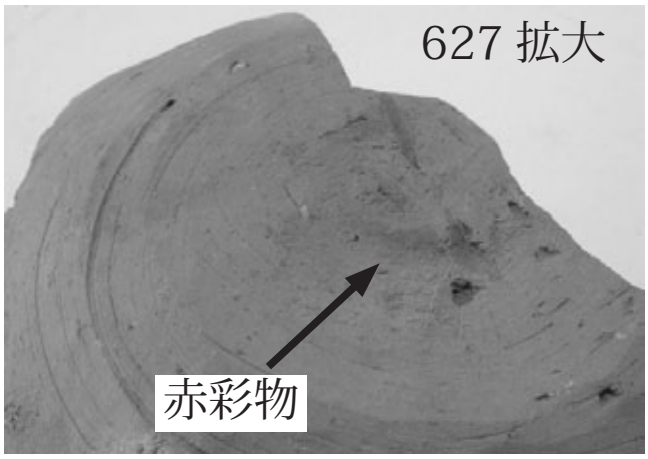
611

612

613

614

写真図版２５　溝 (SD5) 等 出土土器 (2)



写真図版２６　溝 (SD5) 等 出土土器 (3)

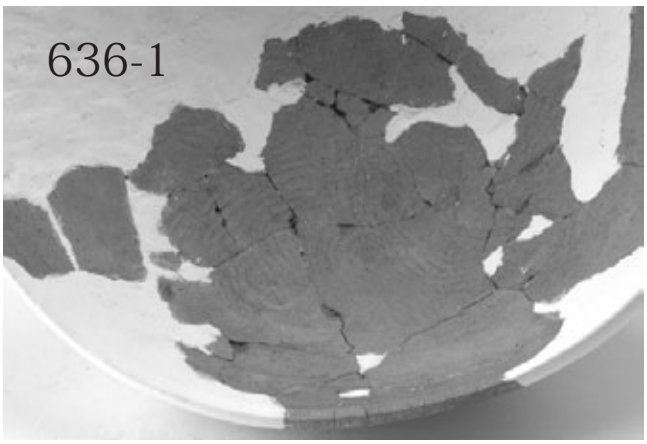
632

633

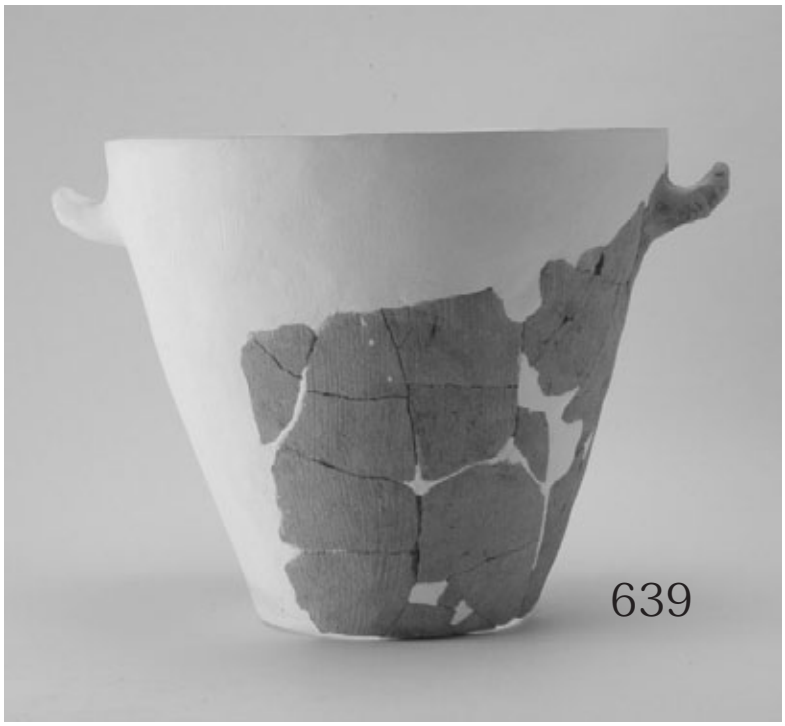
634

635

636


636-1

637


639

写真図版２７　中・近世出土土器 (1)

写真図版２８　中・近世出土土器 (2)

写真図版２９　中・近世出土土器 (3)

712

712-1

713

714

715

716

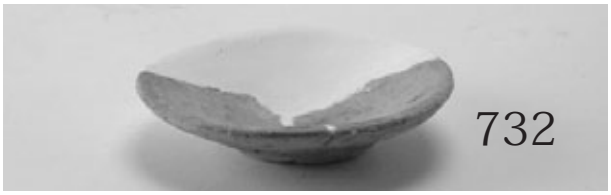
717

718

720

731

726


732

727

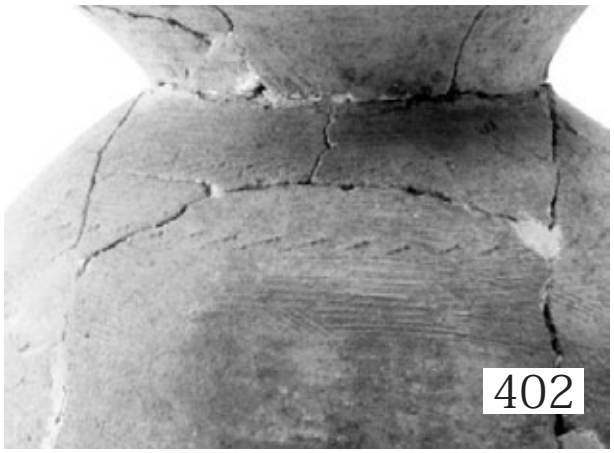
734

728

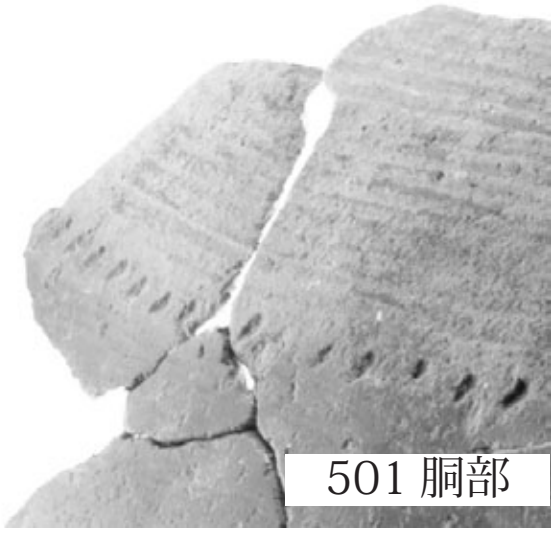
737

写真図版３０　文様：パレス壺，高杯脚，壺口縁部の文様

401


402

501 口縁


501 胴部

413

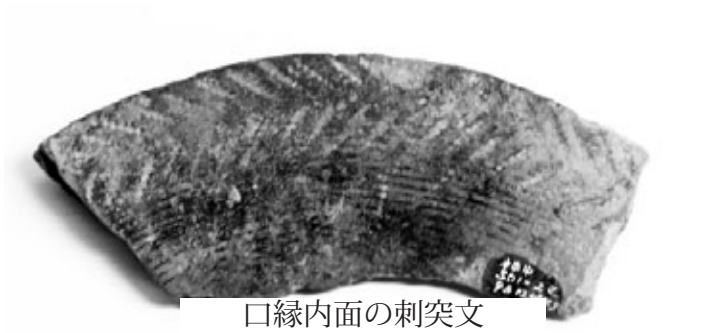
403

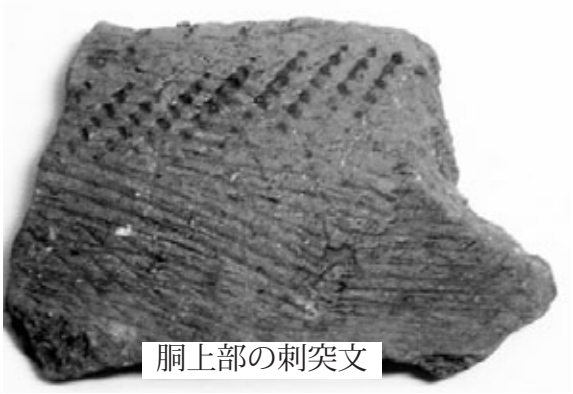
1

写真図版３１　文様：各種の刺突文

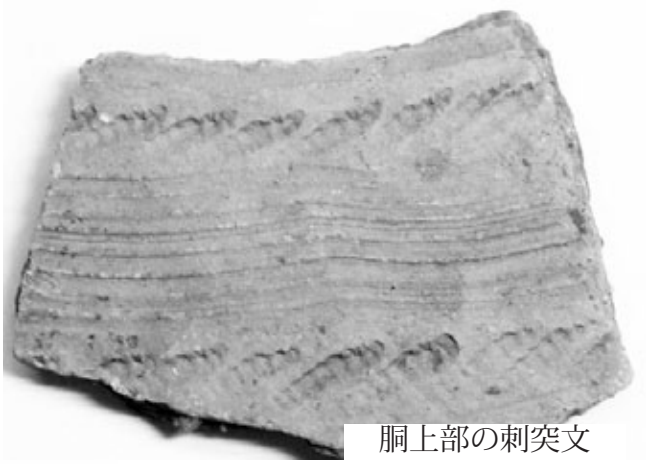
口縁内面の刺突文

胴上部の刺突文


口縁内面の刺突文


胴上部の刺突文

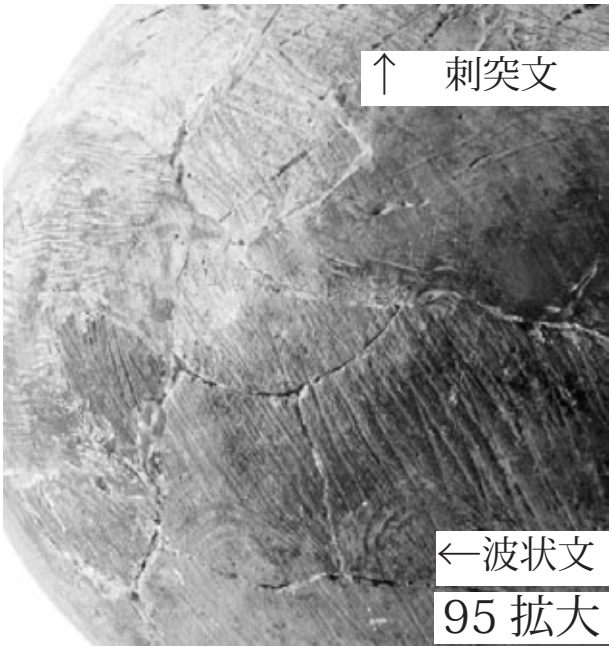
口縁平坦面の刺突文

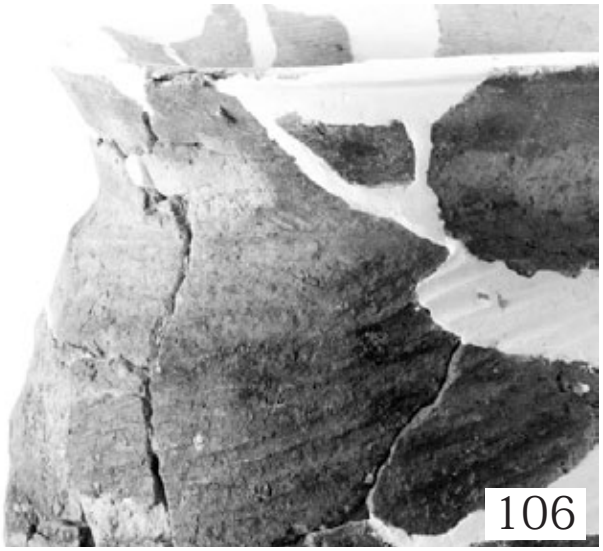

胴上部の刺突文

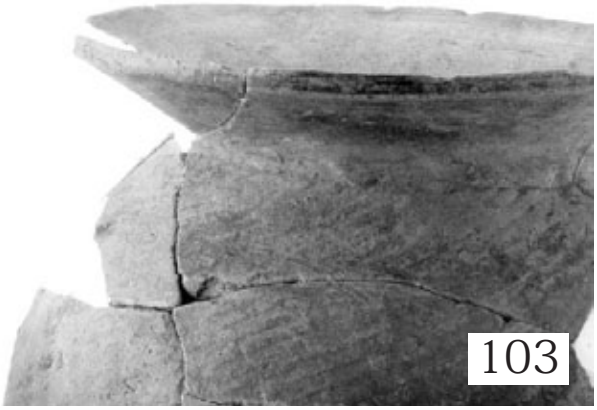
胴上部の貝殻刺突文

胴上部の刺突文

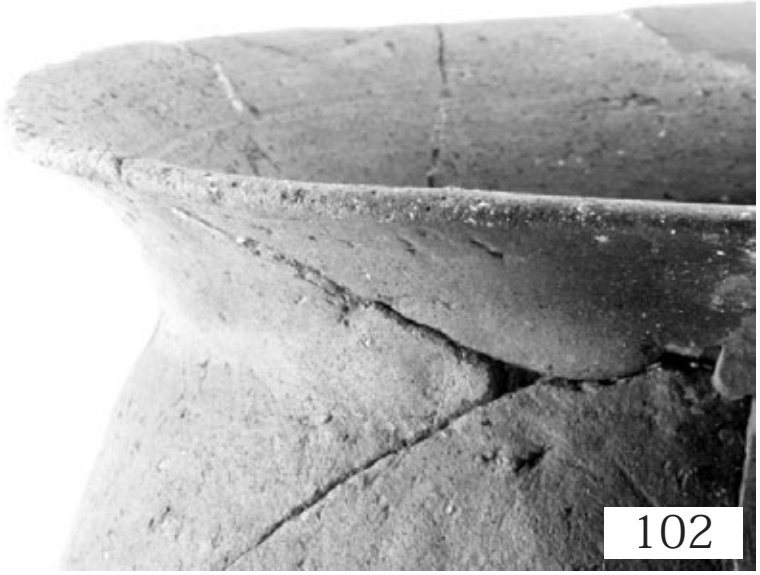
写真図版３２　甕の調整方法

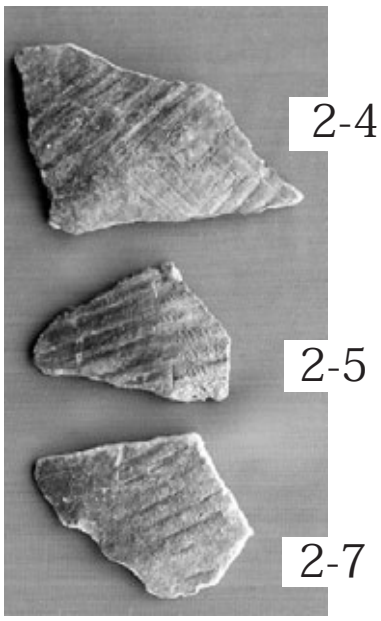


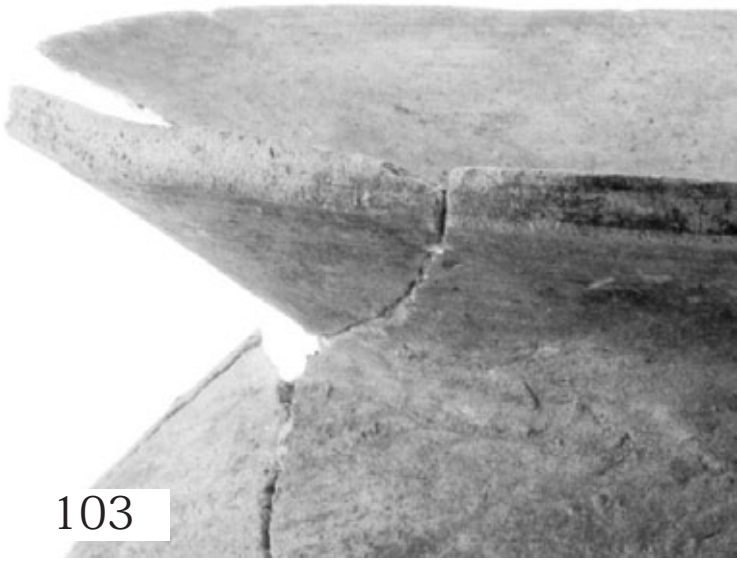


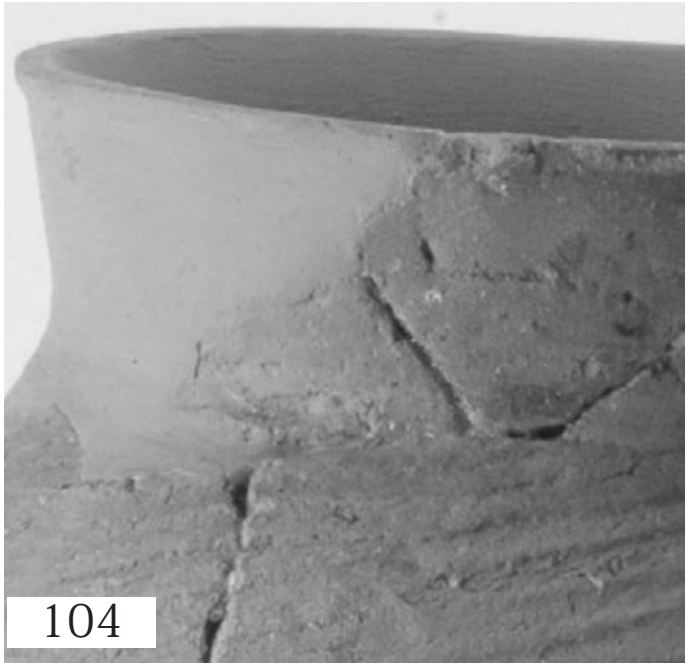


写真図版３３　叩き甕のいろいろ

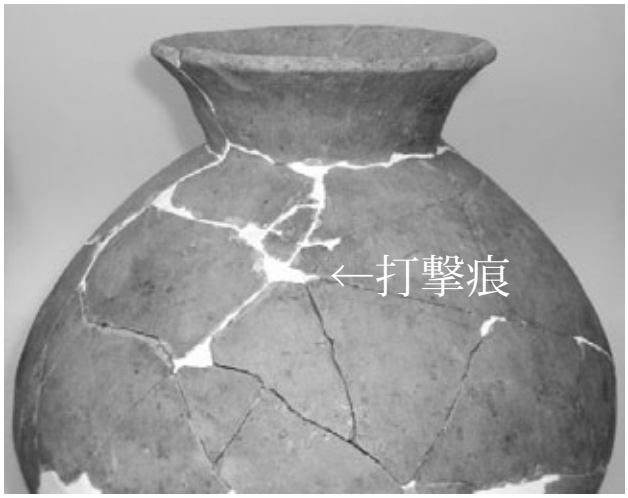


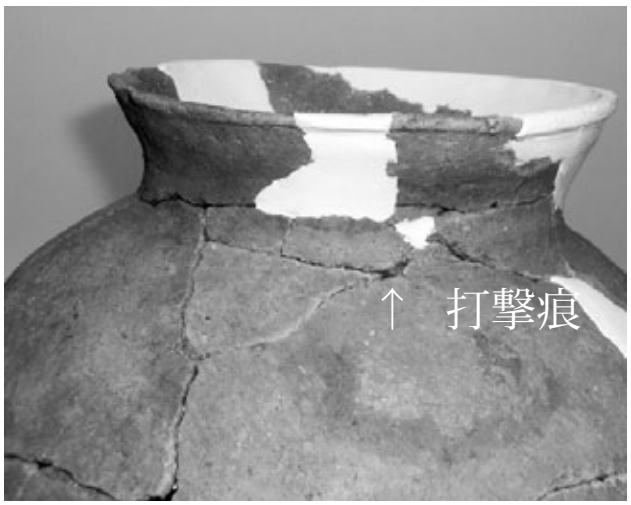


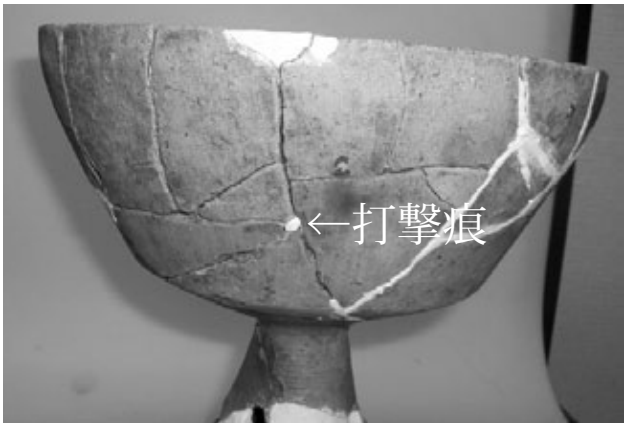


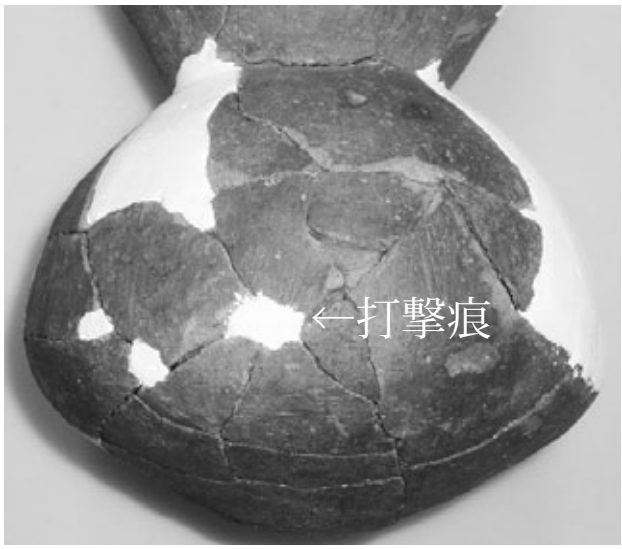


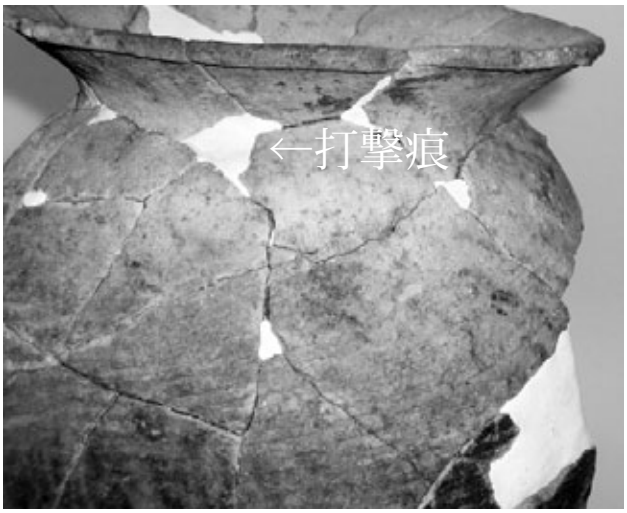
写真図版３４　土器の破砕，打撃痕

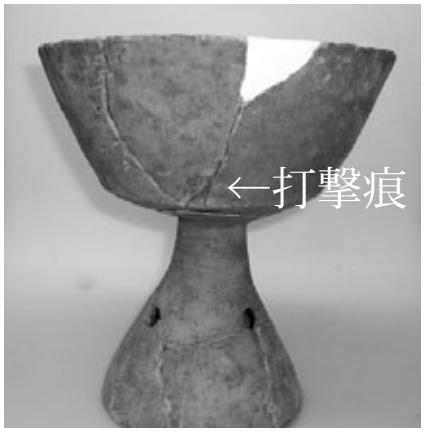












報　告　書　抄　録

ふりがな	とみやふるさといせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	十宮古里遺跡発掘調査報告
編著者名	伊藤 洋　藤原秀樹
編集機関	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館
所 在 地	〒 513-0013　三重県鈴鹿市国分町 224 番地 TEL　059（374）1994
発行年月日	西暦 2010 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
鈴鹿川中流域 河曲低地遺跡群 十宮古里遺跡 （神戸中学校遺跡）	三重県鈴鹿市 十宮四丁目1-1 字古里	24207	168	34° 53′ 11″	136° 34′ 44″	1993 年 8 月 23 日 ～ 1993 年 12 月 16 日	1,600㎡	学校グラウンド整備

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落 祭祀	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	独立棟持柱建物 大溝・溝 方形周溝墓 土坑 竪穴住居 井戸	弥生土器 土師器・須恵器 勾玉 緑釉陶器 灰釉陶器 山茶碗・常滑焼 瀬戸美濃系陶器 瓦	弥生時代後期～古墳時代初頭の 大溝・方形周溝墓群 古墳時代後期～江戸時代の集落

鈴鹿川中流域河曲低地遺跡群

十宮古里遺跡発掘調査報告

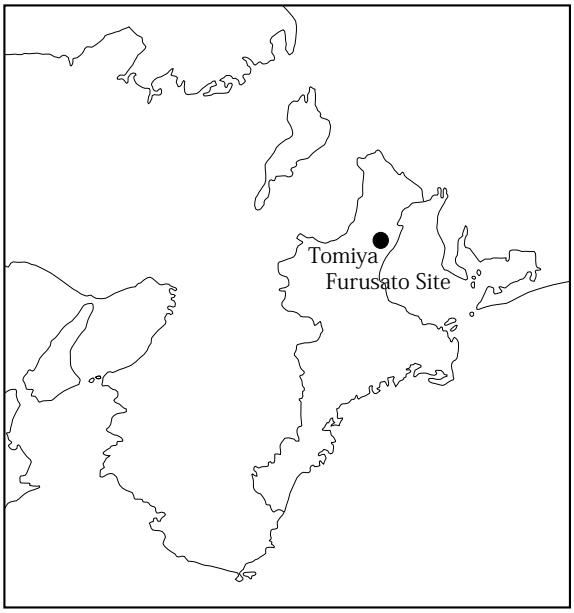
（旧 神戸中学校遺跡）

平成 22 年 3 月 31 日

編集：鈴鹿市考古博物館
発行　〒 513-0013　三重県鈴鹿市国分町 224
TEL059-374-1994 FAX059-374-0986
E-mail:kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL：http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/
印刷：株式会社 三ツ星

Site of Tomiya Furusato Excavation Report

Suzuka city, Mie pref., Japan



March, 2010

Suzuka Municipal Museum of Archaeology